

丹沢山麓  
山岳文化集

〈 中村純二先生講演記念特集 〉



日本山岳文化学会有志：共著

田中文夫：編集



< 表紙の写 眞 >

中村 純二 先生（93歳） 中村 あや 令夫人（88歳）

2017年7月23日 表丹沢 水無川 戸沢出合河原にて

## お礼のことば

中村純二

丹沢山麓、秦野戸川公園パークセンターやおおすみ山居、及び作活小屋に集い、四季の山野を愛でながらの心地良い集いが、このような形でまとめ上げられたことに、大変な驚きとともに、より深い喜びを感じています。

60年余前の南極観測と越冬から、海外の山々、日本の山々を歩き廻ってきました。さらに、田中文夫さんや岩楯岳一さん志帆さんご夫妻の活動も加え、その成果の一部がこのような著作にまとめられ、縁ある方々へお伝えできることは、まさに山岳文化の極みといえます。

老いて歩行が難しくなると、何気なく見過ごしてきた様々なことに気づき、今有ることの幸せを、しみじみと味わうことができます。山岳は、人類の生活にとって大きな役割を果たしています。生活のため、遊び楽しむため、自然や人生を探査・探求・分析・体系化するため、それらすべてを総合・統合して人間力を鍛えるためにと、生きる人々の舞台となっております。

かつて山は、神が宿る神聖な場として仰ぎ見、畏敬を覚え、覚りを得ていましたが、今では山上に立ちあがって下界を見下ろし、くまなく走り廻るフィールドと化してきました。しかし山岳の非日常性の中に秘められたさまざま要因は、そのことを意識に取り込むことによって文化の種は花を開き、実（作品）となってその姿を再認識することができます。さらに実は種となり、新たな花を咲き開かせます。丹沢山麓で秋にチューリップの球根を植え、春に7万本の咲き揃った花を觀賞したことで、循環代謝する生命の姿の変幻を見つめることができました。

本著『丹沢山麓山岳文化集』はその実りの一つとして、心ある方々の手にとっていただけましたら、この上ない喜びとなります。この集いに参加された多くの方々、参加できずともご支援くださった多くの方々に對し、深く深くお礼のことばを申し上げる次第です。

## 著者紹介

### < 中村純二、あや >

東京大学名誉教授（理学博士＝宇宙光学）

第1～3次南極観測隊員、第3次越冬隊員

東京大学スキー山岳部、元＝部長

日本山岳会、元＝副会長

日本山岳文化学会、現＝理事

日本山岳文化学会：夫婦会員

あや＝令夫人

### < 田中文夫 >

建築設備士（S61年新設国家資格、第1回試験・1番目合格）

1974年～1984年、ヒマラヤ登山隊長3回

日本山岳文化学会、元＝評議員（10年間）

総合人間学会：正会員

### < 岩楯岳一、志帆 >

(有)岩楯電設

日本山岳文化学会：夫婦会員

日本スカイランニング協会

同上監事＝岳一

同上国際委員会委員長＝志帆

2016年世界選手権日本代表＝志帆

## 田 中 文 夫

中村純二先生に初めてお目にかかったのは2003年3月8日、日本山岳文化学会設立総会とその後の懇親会でした。先生は理事、私は評議員として、設立と同時に参加します。11月には第1回目の大会があり、中村先生は「文化探索山行の奨め ～ 山を敬い畏れる心」を発表されました。私は高崎（旧姓＝鈴木）広子さんとの共同研究で「山岳文化環境（試論）」を発表します。それら論文は翌年11月発行された、『日本山岳文化学会論集 第1号（創刊号）』に掲載されています。さらに12月に入り、私は中村先生宛てに手紙を出しました。さっそく、先生は返信下さいました。これが中村先生と交流の始まりとなり、以来15年余に渡り、現在に至ります。交流の手紙は、A4版5cm厚のホルダー式ファイル3冊に収納してあります。私の雑学に目を通していただき、賛同意見やアドバイスを、その都度いただきました。

初めて先生のご自宅訪問をしたのは、5年後の2008年11月16日。高崎広子さんと一緒でした。山行をご一緒させていただいたのは、2011年4月30日の高尾山。

佐々木誉実さんが計画され、中村先生ご夫妻と橋本祐吾さん、そして私の5名で歩いていたところ、「ヒマラヤ登山隊が来た！」と、どこかから声が掛かり、びっくりします。確かに先生ご夫妻や私はヒマラヤを登っていましたが、右の写真から、どうして分かるというのでしょうか？



中村先生ご夫妻と高尾山を登る 2011.4.30

それはともかく、中村先生ご夫妻とご一緒できた、最初の山行でした。

2014年9月、私は生業としてきた設計事務所＝(株)システム・デザインの閉鎖登記を終え、晴れて“サンデー毎日”、自由な身となります(68歳)。その前年からは、健康登山で丹沢に還っていました。18歳で登山を始めた最初の山域が丹沢の沢登りでしたから、ちょうど50年振り、半世紀となります。復帰時は腰痛がひどく、白内障で文字がボヤケ、運動不足で太っていた体調は最悪。耳もジージーと絶えずセミが鳴き、体幹バ

ランスが悪く、左に傾く傾向がありました。それゆえに沢登りは止め、バリエーション尾根を歩きます。最初は、大倉から三ノ塔往復が精一杯。自分の体重を持ち上げるだけでも、筋肉と呼吸は悲鳴をあげます。そんな週末登山を繰り返していると、大汗かいた甲斐あって体重は 10kg 減り、腰痛の痛みにも耐えられるようになってきます。

そこでフッと目に止まったのが、大倉の「風の吊橋」たもとにあった真っ赤な屋外パラソルでした。パラソルの主は、日本庭園「おおすみ山居」。しかし幾度目にしても、一人でその門をくぐり、日本庭園に入る勇気が持てません。場違いな感がするからです。

ある日のこと、烏尾山山頂の山小屋、烏尾山荘でコーヒーを飲んでいるところに、老女が入ってこられました。老女は、足が攣ってしまったので、下山する近道を教えてほしいと、小屋の主・三木さんに尋ねます。三木さんは、烏尾尾根を教えました。すると老女は休む間もなく、烏尾尾根を下って行きました。

コーヒーを飲み終わった私は老女の後を追ひ、すぐに追いついたところで足の様子を訪ねます。大丈夫と言われますが、この尾根から大倉まで歩いたことはないと言われるので、「それではエスコートしましょう」と、大倉まで同行することにします。老女は私より 10 歳年上だと言われます。足の攣りも治まった様子で、無事に「風の吊橋」まで帰り着いた時、フッと思いつて「おおすみ山居」でお茶を飲んでいく提案をしてみます。エスコートのお礼もあるからと老女は承諾され、初めて「おおすみ山居」の門をくぐったのです。抹茶と生菓子を賞味し、庭園を鑑賞しながら休憩します。お住まいが鶴見ということで、帰りの電車もご一緒し、私は相鉄線の希望が丘で下車しました。

以来、こんにちに至るまで、表丹沢を周回した帰りには必ず、「おおすみ山居」でクールダウンすることにしています。今では、現行職員よりも古株となってしまいます。

ところで同行した老女との後日談があり、縁は繋がっていました。翌年、私は 900 世帯を上回る広域な町内会で、庶務の役を担当しました。町内会館出入口のカギを預けている、会館向かいの家人と話ははずみます。実はその家の娘さんの嫁ぎ先が鶴見ということから、さらに話は進みます。そして、その嫁ぎ先こそが、かの烏尾山老女の家であり、老女は姑さんに当たるのでした。そんなことから、丹沢山麓講演会の案内をしましたが、未だ再会には至っていません。縁とは・・・、不思議なものです！！

「おおすみ山居」は、京都・西翁院の「<sup>よどみせき</sup>淀看席」を参考に創られた茶室とされます。

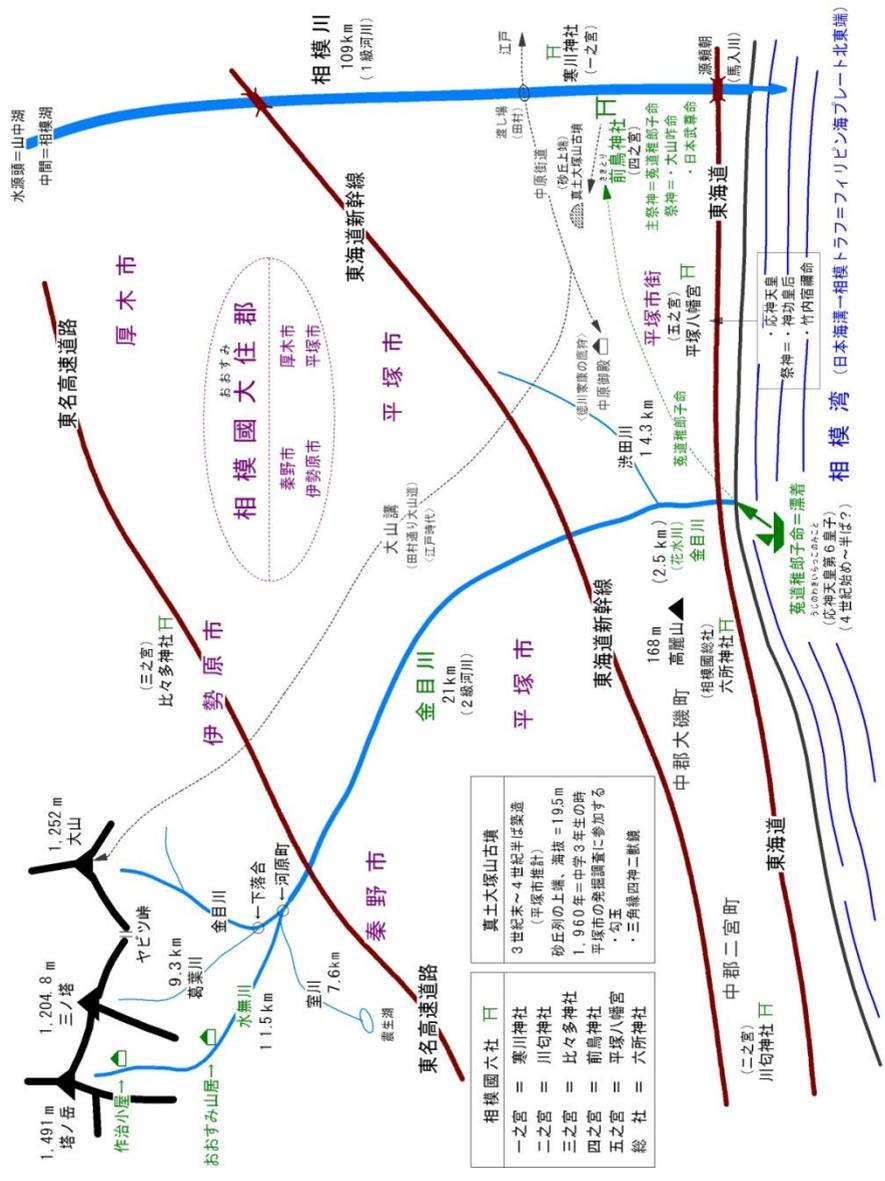
離れには独立した茶室があり、本格的なお茶会ができます。日本庭園の中には、水無川と葛葉川をイメージした二つの流れがあり、合流して水無川本流となる創作です。この水無川は下流で金目川となり、相模湾にそそぐ河口は花水川となります。後述、菟道稚郎子命うじのわかいらこのみことが漂着した場所が、この花水川河口であったとは思えない縁。

「おおすみ」の由来は地名にあります。この地の古くは、「大住郡」と呼ばれていました。「相模國大住郡」は今でいう、秦野市・伊勢原市・厚木市・平塚市を含み、表丹沢南東部から相模川に至る、広大な山裾平野を展開しています。私の出生地である平塚市（旧＝中郡大野町）四之宮には、古くから「前鳥神社」があります。「前鳥」の名の古くは「埼取」と記され、大住郡 14 郷の一つである「埼取郷」という記載は、平安時代に書かれた『倭名抄』にあったとされます。（大野誌）前鳥神社の祭神「菟道稚郎子命うじのわかいらこのみこと」は第 15 代応神天皇の第 6 皇子であり、本書に記す『雑学 日本文明物語』へと発展します。丹沢山麓水無川から花水川河口は、そこに漂着した菟道稚郎子命うじのわかいらこのみことの皇統からウバイド～シュメールへと還り、現世文明の世界展開と日本文明の位置づけ考察に至ります。さらに大切なことは、「淀看席」という意味です。“淀看”とは本流の大きな流れの淵に滞留する、小さな安定領域です。分子生物学者の福岡伸一氏は、「人間の身体とは、宇宙における分子の流れが淀んで個体となったもの」、と説明されます。次に採り上げる「作治小屋」も、水無川を遡り～下る～登山者の本流が、ホット一息留まれる場所、つまり“登山者が淀む場所”であったことを、私は半世紀後に気づいたのです。

「山居」は“山小屋”を意味することから、「おおすみ山居」と「作治小屋」は、同類な意味を帯びた「淀看席」であることが、半世紀後“老いた私の発見”となりました。

「作治小屋」はすでに 60 年前からありましたが、その存在を目にしても気づかないスルー状態、つまり登山の流れの中で、意識することのない風景の一片でしかありませんでした。丹沢の沢登りから、ヒマラヤ登山までを経た半世紀の熟成は、淀んで、見て、その意味を知る～場所、つまり人生の意味や人の英知に気づき、時空間を共にし、喜びを分かち合える“集い＝淀み”から、「丹沢山麓・山岳文化」の発見に至ったのです。

南極越冬でオーロラ観測をされ、カラフト犬＝タロ、ジロらと極地探索された“中村純二先生と奥様”を囲み、講演、講座の視聴から、餅つき・バーベキュー・京の味弁当を食し、お酒・ワイン・コーヒーを飲みながらの懇談記録、それが以下の頁となります。



水源頭＝山中湖  
中間＝相模湖

東名高速道路

伊勢原市

秦野市

厚木市

相模川

相模國大住郡

平塚市

平塚市

東海道新幹線

相模湾

厚木市

伊勢原市

秦野市

厚木市

相模川

相模國大住郡

平塚市

平塚市

東海道新幹線

相模湾

厚木市

伊勢原市

秦野市

厚木市

相模川

相模國大住郡

平塚市

平塚市

東海道新幹線

相模湾

厚木市

伊勢原市

秦野市

厚木市

相模川

相模國大住郡

平塚市

平塚市

東海道新幹線

相模湾

厚木市

伊勢原市

秦野市

厚木市

相模川

相模國大住郡

平塚市

平塚市

東海道新幹線

相模湾

厚木市

伊勢原市

秦野市

厚木市

相模川

相模國大住郡

平塚市

平塚市

東海道新幹線

相模湾

厚木市

伊勢原市

秦野市

厚木市

相模川

相模國大住郡

平塚市

平塚市

東海道新幹線

相模湾

厚木市

伊勢原市

秦野市

厚木市

相模川

相模國大住郡

平塚市

平塚市

東海道新幹線

相模湾

相模國六社	行
一之宮	寒川神社
二之宮	川句神社
三之宮	比々多神社
四之宮	前鳥神社
五之宮	平塚八幡宮
總社	六所神社

真工大塚山古墳
3世紀末～4世紀半ば築造 (平塚市推計)
砂丘期の上層、海拔＝19.5m
1,960年＝中学3年生の時 平塚市の発掘調査に参加する 、4王
、三角縁四神二獸鏡

香道稚師子命＝漂着  
カウチノシロノコ  
(応神天皇第6皇子)  
(4世紀始め～半ば?)

香道稚師子命  
祭神＝  
・天照天皇  
・神功皇后  
・竹内宿禰命

# 丹沢山麓 山岳文化集 <中村純二先生講演記念特集>

## < も く じ >

お礼のことば . . . . . 3

著 者 紹 介 . . . . . 4

プロローグ . . . . . 5

も く じ . . . . . 9

2014.02.19 第1回. 雪の日本庭園・おおすみ山居 . . . . . 11

2014.11.05 第2回. 紅葉のおおすみ山居とチューリップ球根植え . . . 13

2015.04.11 第3回. 幻のほうおう座流星群観測余話 . . . . . 15

講演—1. ほうおう座流星群観測余話＝講演 <中村純二> . . . 19

講演—2. 南極観測とオーロラ (第1次～第3次) <中村純二> . 34

・ 幻の第2次越冬隊 . . . . . 38

・ 第3次越冬隊とタロ、ジロ . . . . . 42

・ オーロラ観測 . . . . . 62

・ オーロラ分類と写真 . . . . . 67

・ 引用文献 . . . . . 75

丹沢山麓の声 . . . . . 76

謝 辞 <中村純二> . . . . . 80

2015.11.04 第4回. ポルトガル紀行とチューリップ球根植え . . . . . 81

講演. ポルトガル紀行 <中村純二>

2016.04.09 第5回. チューリップ鑑賞とヒマラヤ講演会 . . . . . 83

講演—1. ねパール・ヒマヤ P29南西壁登山 1978年 <田中文夫> . . 85

講演—2. スカイランニングとは <岩楯岳一、岩楯志帆> . . 138

講演—3. チャラクサ氷河探索の旅 1984年 <中村純二> . . 157

丹沢山麓の声 . . . . . 199



# 第1回. 雪の日本庭園・おおすみ山居

2014年2月19日＝ 田中文夫

大雪がもたらせた残雪の中、日本山岳文化学会有志が平日の「おおすみ山居」に集結しました。大雪の寒さで木々の芽吹き、開花は遅れ気味です。二週前とあまり変わらず、白梅の開花が遅れています。紅梅は五分咲き程度でしょうか。ロウバイの枝は、まだ黄色い蕾です。山居の休憩室入口には、4日前の大雪と風で折れてしまった「河津桜」の枝々が、大きな瓶に水差しされています。そのうちの数本を帰り際、おみやげにいただきました。

縁側で一列に向かい、温抹茶と梅をあしらった和菓子や自家製甘酒を舌で味わいながら、ガラス戸越しに雪景色の日本庭園を視線でも味わいます。真冬の平日、昼前の優雅で贅沢な時間です。

90歳の中村先生を筆頭に、85歳の奥様、70歳帯の日本山岳文化学会役員各氏（西本さん、佐々木さん、砂田さん、相原さん）、67歳の私、そして中村先生を車で送迎してくれた26歳になる私の次男坊という、山岳ならではの集いです。老若の違いがあっても、山と文化を語り合い、心通じるこの集いは、孤高の楽しみでない共に有ることの喜びを教えてください。過度な文明進化の時間に追われるのではなく、人と自然が「ともに有る」ことの文化を、楽しめるひと時です。

かつては第3次南極越冬隊でタロ、ジロとともに極地探査をされた中村先生。1970年代からヒマラヤ遠征を繰り返した面々も、それぞれ持病を抱えながら今も山に向かいます。根っから山が好きなのです。青春から老いに至る今でも、ロマンを求める心は不滅です。



中村あや様手製の茶碗で飲む抹茶と生菓子



白梅、紅梅、風の吊橋を背に、雪の庭園に並ぶ



抹茶を飲みながら雪の庭園を楽しむ

## 第2回. 紅葉のおおすみ山居とチューリップ球根植え

2014年11月5日＝ 田中文夫

先進社会を反映する高齢化現象は、わが学会も同じです。違うのは、会員諸氏が持病を抱えながらも積極的に動き、考え、活動しているところです。『好きこそもの上手なれ!』、好きなことに向かうと、みな少年・少女のときのような瞳の輝きになります。そんな晩秋に息抜きの日、丹沢山麓、大倉に集い、紅葉を鑑賞しながら「おおすみ山居」で抹茶と和菓子、甘酒と干菓子の味わいも楽しみながら、語らいます。

昼には石挽手打蕎麦の「ミニ会席蕎麦」を、「さか間」さんで味わいます。食事の前に中村先生から、1956年12月5日、南極観測船「宗谷」に乗り、インド洋上で発見した幻の流星群、「鳳凰座流星群」のお話を伺います。58年後の今年12月1日、ふたたび鳳凰座流星群が見られるというので、先生と奥様を含む観測隊が派遣され、NHKも同行取材するそうです。第一発見者となられた中村先生は御歳91歳、奥様も86歳になられます。年齢の重みは筋肉老化を招き、座位の作業が苦しくなります。食後のひと頑張り。今日から始まったチューリップの球根植えに挑戦！併せて750球（約1%）を植えました。

来年4月にはふたたび、チューリップ鑑賞会のリクエストが飛び交います。



中村純二先生

ご夫妻

1週間後のおおすみ山居



秋のおおすみ山居



戸川公園でのチューリップ球根植 ( 750 球を植える、7 万球の内の約 1%)



石挽手打蕎麦「さか間」さんの「ミニ会席蕎麦」

## 第3回. 幻のほうおう座流星群観測余話

2015年4月11日＝ 田中文夫

秋にチューリップの球根を植えると、その開花を見たくするのは必定です。ましてや7万本のチューリップともなれば、一層思いは強くなります。しかしながら、鑑賞するだけで一日を過ごすのも勿体なく、中村純二先生の貴重なお話と組み合わせたならば、有意義な一日を過ごすこととなります。日本初の南極観測や越冬、ヒマラヤ遠征体験等々、90歳を越された中村純二先生もまた、少しでも多くの方々にその体験を伝えたいご希望をお持ちでした。

時節よく前年（2014年12月1日）には、“幻のほうおう座流星群”が58年振りに再現されるという理論予測から、スペイン領のラ・パルマ島まで観測に出掛けられました。そして見事に再出現を確認され、「ほうおう座流星群」の呼称が正式に、彗星流星学会で承認されます。“幻”とされたわけは、第1次南極観測船「宗谷」がシンガポールを出港し、ケープタウンに向かっているインド洋上で、1956年12月5日、天空を真っ赤に染めるほどの流星群に遭遇し、それを観測された中村先生らの論文発表で、「ほうおう座流星群」と命名されました。理科年表にも明示されますが、その後一向に再現されないことから理科年表から削除され、“幻のほうおう座流星群”とされていたからです。

そのことを取材していたNHKは、今年（2015年1月15日夜）になってBSプレミアムで放映しました。しかし放映は編集される常から、中村先生が言わんとしたいことが上手く表現されていない・・・と言われます。それを聞いた私は、「それでは4月の秦野戸川公園でのチューリップ鑑賞に併せて、講演されてはいかがでしょう！！」と提案します。しかし「ほうおう座流星群」だけでは山岳関係者の興味も少なそうなことから、「宗谷」が目的としていた日本初の南極観測や越冬の話も加えていただくことにします。中村先生も意を良くされ、日本山岳文化学会有志の主催として、準備を始めます。

「日本南極観測隊 第1次～第3次の記録」では、日本初のオーロラ観測や、越冬のドラマとなった南極犬物語があります。幻となった第2次越冬隊が残置してきたカラフト犬15頭・・・、翌年第3次観測隊が行ってみると「タロ、ジロ」の2頭が生存。

その「タロ、ジロ」らを置き去りにしたのも、第3次越冬で「タロ、ジロ」と犬橋で南極探査されたのも、高倉健・主演映画「南極物語」の本当の主人公は、中村純二先生でありました。この真実は知らされることが少なく、“幻のほうおう座流星群”と併せてお話いただくことが最善と、お願いします。

丹沢の麓、秦野戸川公園で7万本のチューリップが満開の中、パークセンター2階での講演会を開きます。日本山岳文化学会会員と一般公募者53名の聴講参加者を得、盛況裡に実施しました。



10 : 30～13 : 00 自由参加

- ◆チューリップ 球根植え (無料)
- ◆周辺散策
- ◆さか間 (懐石蕎麦) ¥2,200-

13 : 00～15 : 00

- ◆中村先生講演会及び交流会 (無料)

パークセンター2階

15 : 00 現地解散 ～ 自由交流、散策



講演会場 (パークセンター2階)



秦野戸川公園チューリップ畑で日本山岳文化学会有志



中村純二先生、あや様（令夫人）



講演会場（パークセンター2階）

< 講演 もくじ >

ほうおう座流星群観測余話＝講演	19
NO.01 ～ NO.13	25
南極観測とオーロラ	34
NO.14 ～ NO.16	35
幻の第2次越冬隊	38
NO.17 ～ NO.19	39
第3次越冬隊とタロ、ジロ	42
NO.20 ～ NO.37	45
オーロラ観測	62
NO.38 ～ NO.41	63
オーロラの分類と写真	67
NO.42 ～ NO.49	69
引用文献	75

(sections-03 15 はじめに) より

私は東大スキー山岳部に属し、冬山登山の経験があった。専攻は物理でオーロラ(極光)と同じ化学的発光のスペクトルの研究をしていたので、1958年のIGY(国際南極観測年)にはぜひ参加し、「宗谷」船上の夜光観測と、越冬によるオーロラ観測を行いたいと思っていた。

# ほうおう座流星群観測余話 = 講演

中村純二

私中村は、我が国南極観測隊の夜光・極光観測隊員に選ばれ、第1次、第2次、第3次隊に参加した者です。観測船「宗谷」で昭和基地まで3度往復したわけですが、「宗谷」船上では夜光観測を行い、第3次に昭和基地で1年間越冬した時には、極光、すなわち「オーロラ」の観測を行いました。

月のない夜でも、空が晴れていれば星あかりにより、ある程度野道でも歩くことが出来ます。しかし全天の恒星の光を集めても、星あかりの三分の一しかなく、残りの三分の二は、夜光、すなわち夜間大気光によるものなのです。

オーロラも夜光も、光源は、地上100~120kmの電離層E層や、150~250kmのF層内の酸素原子であって、E層から出る黄緑色の光はオーロラ現象の固有なスペクトルなのでオーロラ緑線と呼ばれ、F層の赤い光は星霧でも見えることがあるので、星霧赤線と名付けられています。

ただ、オーロラと夜光では、発生原因や場所が異なります。オーロラは太陽から放出されるプラズマ粒子が地球の夜側に侵入し、両極地方の半径が緯度にして20度くらいオーロラ帯の夜空に明るく輝く現象であるのに対し、夜光は太陽からの紫外線が地球の昼側の中低緯度の電離層を暖め、そのエネルギーが夜まで酸素原子に蓄えられていて、眼には見えないが、星あかり程度の光を放出する現象なのです。

さて流星雨の話ですが、これは第1次観測の際、宗谷がシンガポールを出港してケープタウンに向かう途中、赤道を越えた三日後の1956年12月5日の夜、発生しました。場所は南緯10度、東経73度付近でした。

空はよく晴れていたなので、私は上部船橋で夜光観測を行っていましたが、19時から流星が幾つか流れ始めました。ちょうど渡辺兵力隊員が船橋に上がって来たので、「流れ星が流れた時は誰かが死んだのだという言い伝えがあるが、そうだとすれば今日は恐ろしい日だ」、などと話し合いながら眺めていました。科学者なら当然その数を数

えるべきであるのに、その時は、ただその眺めを楽しむばかりでした。

21時40分、突如として船橋付近は照明弾でも受けたように明るく輝きました。見上げるとスバルとペガサスのちょうど2等分線に沿って、長さが緯度にして20度くらいの青白い閃光が閃いていました。正に爆発的な大火球でした。この特大流星はやがて白から橙へと次第に色を変えると共に、幅も3度くらいに拡がり、上空で吹き荒れる秒速100mにも達する風によって、左右にくねくね曲がって星空の中を漂いはじめました。3分あまり経過すると褐色の星雲状となり、静かに消えて行きました。周囲は流星の嵐で、様々な色や長さの流星が飛び交い壮観でした。

この時になり、これは録数すべきであったと気づき数え始めた矢先、再び青白い大火球が東方オリオンの方向に出現、印度洋の波間に浮かぶ泡沫まで照らし出し、驚天動地の一瞬でありました。この頃には船内放送により、隊員や乗組員の大半は後甲板に集まっていたのですが、一同の発する歓声がどよめきとなって伝わってきました。

今回の火球も5分間くらい、色や幅を変えながら曲がりくねり、銀河のような姿になって星空の中に霞んでいきました。

こんな素晴らしい流星群は、素人であっても一応の記録を残さないわけには参りません。まず個々の流星の跡を延長して一点に交わる輻射点の測定ですが、私自身、南半球の星座を見るのは初めてですので、手元には小さな星座盤しかありません。輻射点付近の一等星フオーマルハウトはよく分かるのですが、近くの彫刻室座は星が小さくて形も定かではありません。その左の鳳凰座は、 $\alpha$ 星 $\beta$ 星はじめ全体の形もよく指摘できました。本当は彫刻室座かもしれませんが、鳳凰座のほうが確実と考え、『ほうおう座流星群』と名付けることにした次第です。

偶々、地磁気担当の小口高隊員が上がって来たので、10分毎の流星の計数を手伝ってもらふこととし、私は左舷側、彼は右舷側の計数を行いました。宗谷船員の下松航海士や関谷操舵員も星空が好きで、計数を実行しておられました。私の10分間当たりの録数結果は、11, 12, 8, 6, 4, 10でしたが、後に下松氏等の結果とも合わせて、1時間当たりの流星数は、20時に100個、21時に200個、22時に100個ということで落ちつきました。しかし21時30分頃には300個に達していただろうと私自身は思っ

います。

この流星群の名称については、次のような後日談もありました。

宗谷船内で発行している南極新聞に、翌 6 日付で私と関谷さんは熱帯の夜の流星雨の記事を投稿したのですが、永田武観測隊長は 8 日付の新聞に「5 日夜の流星雨は確かに見事だった。12 月初旬にはエンケ彗星が出現するので、今回遭遇した流星群はエンケ彗星の星塵によるものと思われる」との投稿をされました。私と小口隊員は、これは修正の必要があると考え、連名で 9 日付の新聞に「去る 5 日の流星群の輻射点は鳳凰座の周辺にあった。従って牡牛座を輻射点にもつエンケでないことは明らかで、恐らく未確認の流星雨だろう」と発表しておきました。これが後日、『幻のほうおう座流星群』と言われ、流星学会で問題になろうとは夢にもおもいませんでした。



第一次の予備観測から帰国して、私は東京天文台測光部の古畑正秋助教授を訪ね、夜光観測の報告かたがた流星雨の話をしたところ、先生は大変興味を示され、さっそく南半球の主な天文台に電話をかけ、未確認流星群についての問合せをされました。その結果、流星雨を見た人は何人かいましたが、輻射点や出現個数を数えた人間は一人もいないことが判明しました。

二人は関連する過去の彗星を、詳しく調べる必要に迫られた次第です。

先生はまず「ほうおう座流星群」の軌道要素を計算され、

$$\Omega = 73^\circ \quad q = 0.9995 \quad i = 12^\circ \quad \dots \dots \dots (1)$$

と求められました。これに近い彗星には、1819 年に出現したブランペイン彗星があり、その後行方不明となっているが、軌道要素は

$$\Omega = 77.4^\circ \quad q = 0.892 \quad i = 9.4^\circ \quad \dots \dots \dots (2)$$

であって、(1) と (2) は一致しないが、よく似ていることが判明しました。

古畑先生と私は連名で、1957 年 8 月発行の天文月報第 99 号に「1956 年 12 月 5 日、印度洋で観測された流星雨」という一文を発表し、最後に「これは少し疑わしいが『ほうおう座流星群』はブランペイン彗星の星座と関係しているかも知れない。」と、付言

しておきました。

この論文のため、1958 年以来、理科年表には『ほうおう座流星群』が、流星群の一員として掲載されることになりました。

ほうおう座流星群も、ブランペイン彗星も、軌道から計算すると 5.1 年毎に地球に近づくはずだというので、国立天文台の渡部潤一氏や佐藤幹哉氏、春日敏測氏等は、1980 年頃から、12 月 5 日前後には熱心に夢の流星群を追いかけ始め、渡部氏に至っては、南半球においても 12 月 4 日や 5 日の夜は熱心にほうおう座を中心に流星を探し求めましたが、全くの徒労となりました。

こんな事実もあったので、理科年表でも 1993 年から幻の流星群は削除されるに至りました。

ところが、2003 年になって、米国アリゾナで「2003WY25」という小惑星が発見され、米国人他が、「これはブランペイン彗星ではないか」と言い出したため、我国の流星研究者にも大問題となってきました。なぜなら当時ジャコビニ流星群が 1972 年に観測できなかった理由として、ダスト・トレイル理論が提出され、見えなかったわけを見事に説明していたからです。渡部氏等 3 名は「2003WY25」惑星がばらまいたと思われるダストの軌道を丹念に計算された結果、この小惑星とブランペイン彗星、並びに彗星によるダストの塊と『ほうおう座流星群』の軌道は全く一致し、特に 1956 年 12 月 5 日の出現時刻は、世界時の 14 時から 17 時頃である点まで一致しました。

このように、幻の流星群に遭遇して記録したのも日本人、流星起源の謎を解いたのも日本人という、感動的な状況となりました。

ただし 1956 年の輻射点は、計算値は赤経 4 度、赤緯 -42 度の「彫刻室座」となり、私が推定した輻射点とは 13 度も異なります。これに関しては、前述の通り、私が小さな星座盤しか持っていなかったために、10 度程度の誤差はあっても然るべきで、不一致も当然ということで収まりました。

ダスト・トレイル理論による軌道計算を将来に向かって進めると、2014 年 12 月 1 日の U.T.23 時から 2 時間余り、再び彫刻室座周辺を輻射点とする流星雨が、アフリカ

西海岸を中心に出現することが示されました。渡部さんや流星研究者、NHK取材班と共に、私共も、11月末にカナリア諸島、ラ・パルマ島のスペイン国立天文台に陣取り、幻と思われた『ほうおう座流星群』と58年ぶり、二度目の出現に再会と観測ができた次第です。



ラ・パルマ島で観測を行った翌日の夜、 $\alpha$ 星が二等星であるほうおう座もよく形がわかったので、私共は西隣の彫刻室座をたしかめようとしたのですが、月令10日の月も出ていたため、誰一人その形を確かめることはできませんでした。

ブランペイン彗星起源の流星雨の輻射点は、1956年に鳳凰座に近く、2014年には南の魚座とほうおう座に近かったのですが、正確には彫刻室座に属していました。2015年3月10日大阪で開かれた彗星流星学会では今回の流星群の名称も議論され、最終的に多くの人々に同定のやり易い「ほうおう座流星群」と名付けることが決まりました。

ダスト・トレイル理論に基づいて、今後の「ほうおう座流星群」を計算しますと、2019年にルアンダで出現することがわかりました。ただこの時には20世紀半ばに放出されたダスト・トレイルが地球と交わるので、流星数は多分1時間10ケ以内で、一般の鑑賞には向かないでしょうが、しかし天文学会では重要視されています。

彗星には一度しか出現しないものと、周期的に出現するものの二種類があります。一度きりのものは、再び宇宙の彼方に去るものか、惑星の仲間になるものかです。これに対して、周期性のあるものは、太陽を焦点とする楕円軌道を書いており、近日点付近では太陽からの熱を受けて氷結していた表面の隕石塵を放出し、それが太陽風で流されて彗星の尾になるのです。このため周期彗星は毎回少しずつ痩せ細り、最後には小惑星なるものと推察されていました。ところが今回、この仮説を実証する科学的根拠が得られ、科学の進歩の一例を示した結果となりました。そしてブランペイン彗星は、1956年、2014年、2019年のダスト・トレイルの姿を経て「2003WY25」という小惑星に変化することも判りました。

この過程を更に追究すれば、周期彗星がどのような時間的経過を辿るかも明らかにな

り、他の彗星や流星の変化にも適用できるでしょう。今や各国の彗星、流星研究者は、2019年の「ほうおう座流星群」の観測を楽しみに準備している状況です。



2015年1月15日、NHK BSプレミアムでは、22時から23時まで、コスミック・フロント編の「復活！ 幻の巨大流星群」が放映されました。この時点で流星群の名称は、未だ正式に決まっていませんでした。



【パワーポイント画面と講演 2015.4.11】

## 【NO-01】



カナリア諸島 テネリフエ島の火山 「ティデ」 3,770m

これはラ・パルマ島から眺めたコニーデ式火山「ティデ」の姿で、富士山と形も高さもよく似ている。

スペインにはピレネー山脈やシェラ・ネバタ山脈など3000m級の山脈もあるが、標高では「ティデ」(3,770m)がスペイン最高峰である。

【NO-02】 ラ・パルマ島の頂上に連なる直径 4km の火口壁の一部



【NO-03】 外輪山火口にかかった虹



【NO-04】 ラ・パルマ島外輪山の最高点ロケ・デ・ロス・ムチャーチョス 2,426m



【NO-05】

植物は亜熱帯性のものが大部分で、木の実をつけている大きな灌木もあった。



【NO-06】



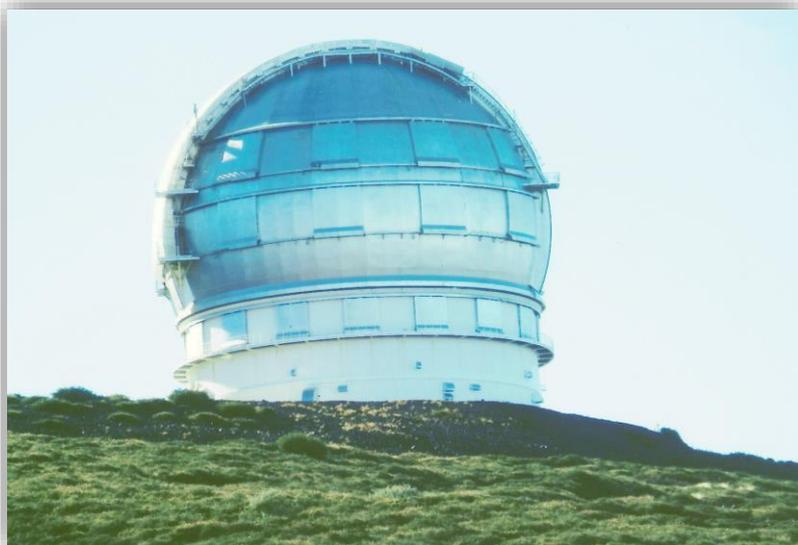
外輪山外周の斜面には草原が広がり、西側一帯はヨーロッパ各国からの天体観測所が点在しています。

アメリカのハワイ、マウイ島のような天体望遠鏡群の基地ともいえ、ロケ・デ・ロス・ムチャーチョス天体観測所と呼ばれている。

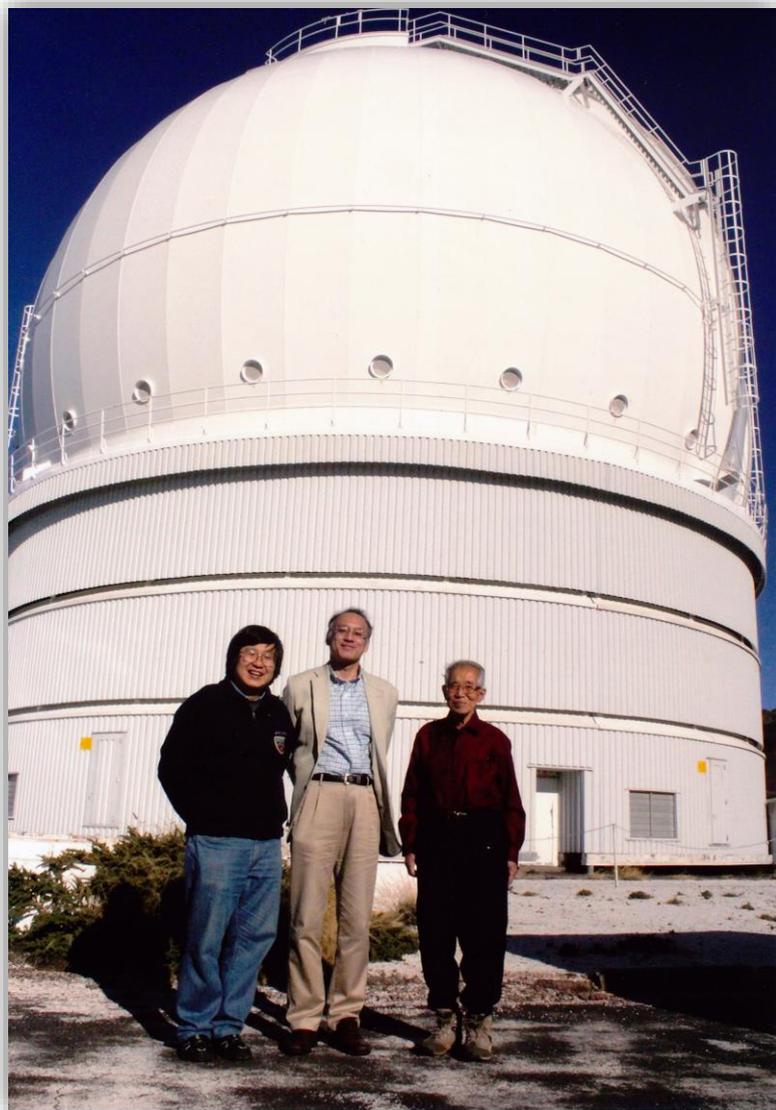
【NO-07】 左のドームはドイツ、右のドームはスペイン・イタリアの大ドーム。



【NO-08】 スペイン・イタリアの大ドーム



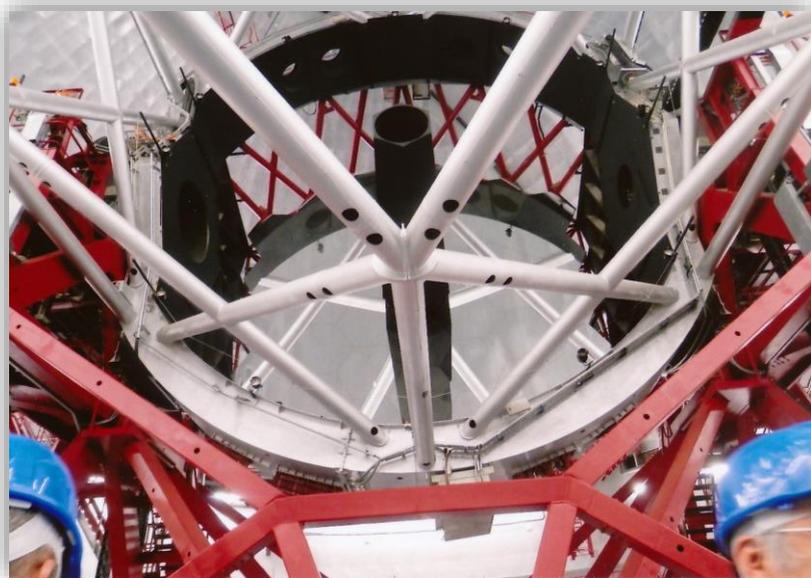
【NO-09】



スペイン・イタリアの大ドーム前にて

左＝佐藤幹哉      中＝渡部潤一      右＝中村純二

【NO-10】



スペイン・イタリアの大ドームの中。

直径 10.4m の凹面鏡。

【NO-11】 ロケ・デ・ロス・ムチャーチョス天体観測所の中村夫妻。



【NO-12】 大西洋方面に現れた日没後の夕焼け。



【NO-13-1】 ほうおう座流星群 (2014.12.02、 00:36) ※ 撮影=佐藤幹哉



【NO-13-2】 同上部分拡大写真 流星痕は明るく、速度は緩やかだった。



# 南極観測とオーロラ



## 日本南極観測隊 第1次～第3次の記録 1956年～1959年



(sections-03)より

オーロラは太陽から放出される電子とプロトンから成る太陽風が、地球磁場の影響で、北極と南極上空のオーロラ帯に侵入し、電離層の E 層や F 層を励起して光らせる現象であるのに対し、夜光（夜間大気光）は太陽からの紫外線が、昼側地球の電離層 E、F 層を照射し、その励起エネルギーが、地球自転の夜まで蓄えられ続けているため、オーロラと全く同じ波長の化学的発光を行なう現象である。ただ光の強度は弱くて眼に見えないので、光電管と干渉フィルターを用いて測定する必要がある。それでも恒星のすべてから来る光より強く、いわゆる星明かりの 3 分の 2 程度は夜光が占めている。これまで夜光の明るさが、緯度とともにどのように変化するか測定されることがなかったので、今回「宗谷」船橋真上の上部船橋に、ジャイロ式光電受光器をセットし、空の晴れた夜には、オーロラと夜光でしか測定されない黄緑色のオーロラ輝線（波長 5577 ナノメートル）を観測することになった。



南氷洋を約1週間かけて通過する宗谷（第1次予備観測）

揺れの大きい時は、ローリング片舷69°、ピッチング30°であった。

写真はピッチングの際、船首を空中高く上げ、元に戻る際に海面を船体で叩いた瞬間。



(sections-03)より

1956年11月8日、隊員53名と船員77名が一体となった南極予備観測隊は、「海鷹丸」を随伴船とし、全国民の期待に応じて、松本満次船長指揮の下、晴海ふ頭を出港した。

出港の日まで、どの新聞面でも、文部省統合本部でも「観測船『宗谷』」と呼ばれていたが、厳正な海上保安庁の管轄下にあった『宗谷』は、航海中必ず「巡視船『宗谷』」と呼ばれ、すべての指令や情報が発せられ、船員の規律もそれに準じていた。



第1次観測の宗谷が1957年1月24日、海氷岸に接岸すると、さっそく皇帝ペンギン（高さ約1m）の群れが見物にやってきて、2～3日、私共を眺めていた。



(sections-03)より

砕氷船とは、全速力で海氷上に乗り上げ、100トンもの水を舷側のバルジを通して船尾から船首に送り、船首の自重で海氷を割った後、何艇身か後退し、船首の水を船尾に戻して再び全速力で海氷に向かって前進して海氷を割り進む船のことである。このため通常の船では、船底面の中心線または両側面線に沿って取り付けられるはずの、キールと称する揺れ止めの金具が全くなく、「宗谷」の底面もお椀のような形となっていて、当然横揺れであるローリングや縦揺れであるピッチングが大きいことは予想されていた。しかし、実状はそんな甘いものではなかった。波がほとんどなくとも、外洋で片舷30度程度の揺れは普通であり、外洋から静かな海峡に入った場合でも、1時間近くは片舷10度くらいの揺れが止まらなくて、周囲の船からも不審がられる実状であった。

【NO-16】

〈第 1 次予備観測隊〉



1957 年 1 月 29 日、西オングル島旗揚げ式をおこなったときのスナップ。

左＝西堀栄三郎（副隊長～越冬隊長）、中＝中村純二（極光・夜光）

右＝田英夫（報道）、 ※ 撮影＝林田重男（映画）



(sections-03)より

1957 年 1 月 29 日 20 時 52 分、隊と船の代表 27 名は西オングル島の N 基地に上陸第一歩を印し、日の丸の旗を揚げた上、20 時 57 分「昭和基地」の宣言を行った。この模様は渡辺兵力隊員によって「宗谷」に実況報告され、「宗谷」でも乾杯と万歳が行われた。ただし「宗谷」からの輸送を考えると、東オングル島西北の渡辺 W 基地のほうがはるかに便利だ。最終的に「昭和基地」は東オングル島の広い砂礫地に建設されることになった。この日以来 2 月 15 日まで、まさに 130 名一丸となつての雪上輸送と基地建設が行われた。

## 幻の第2次越冬隊

(手記-1)

1957(昭和32)年秋、宗谷で出航した第2次本観測隊は、12月末氷海に侵入したが、海氷は異常に厚く昭和基地に近づけなかった。そのため一旦外洋に出、アメリカの砕氷船バートン・アイランド号の先導により2月8日再侵入した。

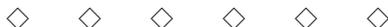
しかし、天候・氷状ともに厳しく、2月10日、橇<sup>そり</sup>付ビーバー機により、11名の第1次予備観測越冬隊員と3匹のカラフト犬を宗谷に収容するのがやっとだった。それでも何とか本観測隊を成功させたいと、2月12日気象の守田、機械の丸山、オーロラの中村の3名は昭和基地に飛んだ。ところが気象状況はますます悪化、バ号自体の氷海脱出も危うくなって来たので、14日には永田隊長から「一旦宗谷に帰って欲しい。一度外洋に出た後、天候の回復を待って再び侵入の計画だ」との通信が送られてきた。昭和基地には西堀越冬隊の残した食糧や燃料も十分あり、最小限度の観測機材も携えて来ている。最悪の場合3名による越冬も可能であり、カラフト犬も多数いるので、このまま越冬準備を続けたいと強く訴えた。

「幻の越冬隊」と呼ばれた所以<sup>ゆえん</sup>である。

正午頃隊長からは次のような最後通告が戻ってきた。「3名を収容して外洋に出るのはバ号艦長の至上命令であり、気象的にも空輸の可能性はあと一便しかない。カラフト犬は野犬化したり、共食いしたりしないよう、必ず鎖につないだまま帰船してほしい」。バ号艦長の至上命令とあれば、私共はこれに従うほかない。ビーバー機が来るまで2時間の間に、犬係だった私は次のように取り計らった。

生まれたばかりの仔犬8頭と母犬のシロは、何としても連れて帰る。150mくらい直線状に張られたロープに繋がれた牡犬15頭には、1頭あたり2ヶ月分の食料である身欠きニシン2俵ずつを与える。

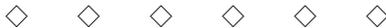
そのため、鎖に繋がれた各犬へ身欠きニシンを2俵ずつ運び、すべての俵をジャックナイフで切り開くのは大変で、犬たちの頭を撫でてやる暇もなく汗だくだった。





1958年2月13日、昭和基地における「幻の第2次越冬隊」

左＝中村純二（極光・夜光）、右＝丸山八郎（機械）、※ 撮影＝守田康太郎（気象）



（手記-2）

やがて最終便のビーバー機が到着したが、宗谷からは、間もなく風雪となるので一刻も早く飛び立つようにとの矢の催促だ。 シロと仔犬たちを載せると重量超過となったが、私物をおろし、森松整備士は不時着用の予備燃料・食料をおろし、辛うじて飛び立つことができた。



1958年2月14日、15頭のカラフト犬を鎖につないだまま、私共3名は昭和号で宗谷に戻った。その残されたカラフト犬たち。



(手記-3)

その時、鎖につながれていたカラフト犬は空に向かって一斉に吠え立て始めた。それはただの咆哮ほうこうではなく、悲しげな悲鳴にも似た甲高い吠え声であった。その声は58年近く経った今でも耳にこびりついて離れない。私共は基地上空を低空で一周したが、その間中、彼らは上を向いて吠え続けていた。



1958年2月14日、最終便の昭月号で接岸点の宗谷に戻って来た時の接岸点の様子。 (昭月号機上より丸山隊員撮影)



(手記-4)

宗谷は外洋に出た後、再三氷海への侵入を図ったが、天我に味方せず帰国期限は刻々と迫ってきた。犬たちを助けるため、ビーバー機で着陸し鎖を外した上、シロの尿や食料を上から撒きながら戻る計画や、安楽死させるため、ヒ素入りステーキを作る計画も話し合ったが、暴風雪の中では機が飛び立つことも不可能だった。

2月24日14時、宗谷は南極海に鈍い汽笛を3回鳴らし、全員犬たちへの沈痛な思いを抱いたまま、船首を北に向け帰国の途に着いた。

### 第3次越冬隊とタロ、ジロ

(手記-5)

その年の秋、今度こそその希望を持って第3次隊は南極に向け出港。

1月9日、宗谷は無事基地沖氷盤に接岸した。偵察に向かった第1便へりからは、基地周辺に黒い動物が2頭動いているとの、信じられないようなニュースが無電で宗谷に届いた。

さっそく第1次隊越冬隊員だった大塚と、犬係の北村が昭和基地まで飛んだ。北村はモクやクマではないかと考え、名前を呼んだが応えない。北村は一方の犬の前足の先が白いのを認め、ジロではないかと考え名前を呼んだところ、尻尾をちぎれんばかりに振って近寄り、飛びついてきた。それならばもう1頭は兄弟犬であるタロに違いないと考え、名前を呼んだところ、タロも尻尾をちぎれんばかりに振って近寄り、飛びついてきた。

人間と犬との関係は素晴らしく、よく名前も覚えていて感激の一瞬であった。1年間無人の基地で生き延びた間に、毛の長さは2cmから5cm位に伸び、モク等と間違えられるほど成長していたのである。

第3次越冬隊が成立した時、私は犬係を引き受けた。氷漬けになっていたカラフト犬の掘り起こしをおこなったところ、最初の鉄棒につながれていたゴロの遺体は板のようで軽く、45kgあった体重は26kgになっていた。次の棒にはジャックの名札の着いた首輪だけが残っていた。15頭の中、共食の跡もなく餓死していたのは7頭で、ほかの8頭は首輪だけであった。次第にやせ細って首輪が抜け、自由の身になった犬たちは、<sup>きすう</sup>帰趨本能に従って北海道を目指してあてもなく北に向い、氷海に消えたものと思われる。ただ、タロとジロの兄弟だけは、生後3ヶ月で宗谷に載せられてきたため、昭和基地を故郷と信じ、そこに踏み留まったのではなからうか。

ある日、タロとジロに好物のクジラ肉を与えたところ、彼らはこれをくわえたまま基地裏手の土手を越え、しばらくして戻って来た。さっそく彼らに気づかれぬよう土手裏に回ったところ、掘り起こしたばかりの砂地からは、先ほどの肉と共に多数のアザ

ラシの糞が出てきた。 彼らは無人越冬中、アザラシの糞を主食とし、これを蓄える知恵まで獲得していたことが実証された。

私は北村隊員と二人で小型犬いぬぞり櫓を作成し、タロ、ジロと新しく連れて来た仔犬のトチ、アクの4頭曳き犬櫓の訓練を始めた。そして11月、平山隊員と二人で未踏の白瀬河まで20日間の犬櫓旅行を実施した。タロ、ジロたちと一つになって露岩地帯を走り、地形・地磁気の調査もおこなったこの旅は、強い印象となって私の心に残っている。

この旅行中、タロとジロは大豆と鯉節の粉を練ったカラフト犬のための行動食（いわゆる西丸ペミカン）が好きでなく、3日目までは周囲にいるアザラシの糞を食べていた。

ところが4日目は冰山群の中に入り視界が全く効かず、アザラシもいなかった。タロとジロはこの夜、ついに人間の食料箱を襲い、サラミとチーズを食べてしまった。

翌朝、私はやむなくアザラシを探し出し、村田銃で無抵抗のアザラシを仕留めてしまった（当時は南極条約発効前で、自由にアザラシやトウゾクカモメを捕獲できた）。咽喉もとを撃たれたアザラシが地面に伏せようとする、タロは直ぐ首の後ろに噛み付き、ジロは尻尾を噛み付き協力して襲っていたが、私がジャックナイフで毛皮を裂き始めると、アクとトチまでやって来て、一生懸命に肉を食べ始めた。アザラシには全く申し訳なく、二人で手を合わせて黙祷した。アザラシはタロ達4頭の半月分の食糧になるが、彼らは餌のためなら10km程度を楽に往復して食べるので、最終キャンプ地が近い私共はアザラシの肉を携行せず、そのままにして行動を続けた。

帰途10日目にはこの付近でブリザードに遭遇し、2日間の停滞を余儀なくされたが、犬達にはアザラシがあり、私共には結構美味な西丸ペミカンが沢山残っていたのでそれらを食べ、ゆっくり沈殿生活を送ることができた。

第三次越冬隊には5匹のカラフト犬がいたため、一同犬たちと大変よく交流できた。雪上車で出掛ける時など、隊員はスキーを履いて雪上車からのロープで引っ張ってもらうが、カラフト犬は周りを自由に走りながらついてきた。我々がトウゾクカモメを村田銃で撃ち落とすと、彼らはそれを拾いに飛んで行った。その鳥を使って野外で焼き鳥をやる時には、彼らもともに味わうことができた。

ただ、前述の犬ゾリ旅行の後など、他の隊員がタロに餌を与えていても、私が戸外に出て行くと、ただちに私のそばにやって来て座り、撫でて欲しそうにした。他方旅行中、タロたちは食糧箱を開け、サラミやチーズを食べたことを隊員は知っていた。隊では食卓に着く場合、隊長以下年齢順に座り、自然に順位が決まっていた。カラフト犬も仲間に入れる話が出て、タロは6番目の荒金隊員と7番目の中村の間に入り、私の隣だが地位は上になった。ジロ以下仔犬たちは14番目の平山隊員の後ろに続いた。第三次越冬隊の記録は2008年になってようやく出版されたが、題名は『14人と5匹の越冬隊』という特殊な名称になっている。



【NO-20】

<第3次越冬隊>



1959年1月15日

第3次越冬隊が昭和基地に着いた時、無人の昭和基地で1年間生きていた**タロ**（奥）と**ジロ**（手前）



（手記-6）

タロとジロは昭和基地で行方不明になった“風連のクマ”の子で、北海道大学の犬飼哲夫教授と芳賀芳郎助手が、南極に行くカラフト犬を探している時に生まれ、大切に育てられた犬である。タロ、ジロの名前も、南極探検に出かけた白瀬隊のカラフト犬の中に、タロ、ジロの兄弟犬がいたので名けられた経緯がある。



胸毛と足先の毛が白いジロ（左）と、真っ黒いタロ（右）

（手記-7）



第3次越冬を終えた隊員は無事帰国したが、タロとジロはすっかり南極の自然に順応していたので、第4次隊とともにやってきた4頭のカラフト犬と生活させるのがいいと考え、昭和基地に残すことにした。しかしこの越冬中、ジロは病を得て死亡したので、タロだけは第5次夏隊とともに帰国させることになった。

日本に戻ったタロは北大の札幌植物園に入れられ、犬飼、芳賀両氏の温かい世話を受けることになった。子どもづくり、市民の人気者となって、幸せな余生を送った後、1970年8月眠るように天国に旅立った。年齢は15歳、人間でいえば90歳の長寿であった。タロとジロはいずれも剥製となり、タロは北大博物館のガラスケースに入り、ジロは上野の国立科学博物館内自然史館の2階に置かれている。しかし、仲の良かった兄弟犬であった以上、タロとジロの剥製は一緒にして、博物館に飾って欲しいものと考えている。

【NO-22】

〈第3次越冬隊〉



第3次越冬隊の昭和基地

左 = 居住棟

中央奥 = 観測棟

右 = 気象・通信棟

観測棟屋上の全天カメラは雪除けの赤い布袋で覆われている。



1959年

第3次越冬隊員14名は、飲料水にする氷を冰山から2トンほど取ってくるため、10日おき位に手空きの全隊員と雪上車で採取に出掛けた。勿論タロ、ジロたちも喜んでついて来た。私共の周りを先に走ったり、一緒に走ったりしていた。

(海氷は塩っぽく、陸上の積雪はブリザードで地上を飛ばされ砂や雲母を含み、飲料水にならなかった。)

【NO-24】

〈第3次越冬隊〉



5月7日～13日

オーロラ高度測定のため基地から南方40kmのシェッケ岬まで、中村、平山、川口は1週間程の橇旅行を行なった。

橇曳犬の訓練が出来ていないので、往復人曳橇の旅行だった。



(sections-03)より

昭和基地の北村隊員と通信で連絡しつつ、オーロラの同時2点観測を行った。この結果3晩にわたって、電離層のD層、E層、F層で光るさまざまな型のオーロラを、星空を背景に撮影し、球面三角法によってそれぞれのオーロラの高度を測定することができた。

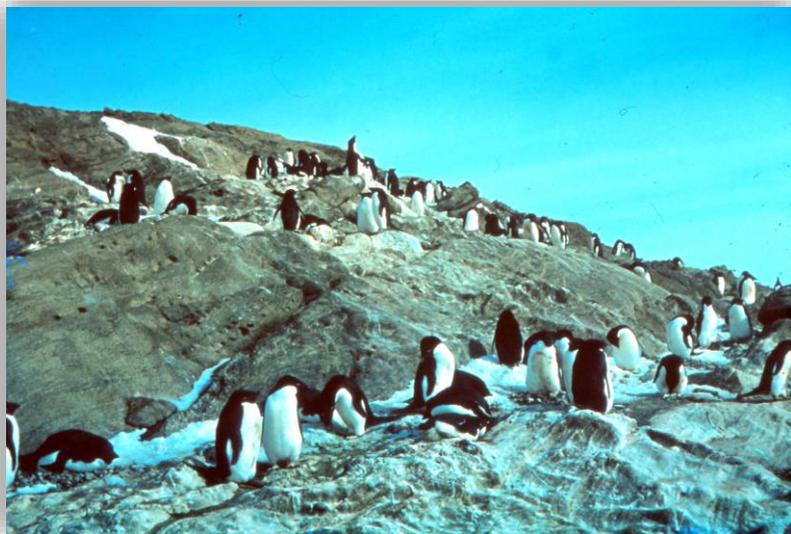
【NO-25】

〈第3次越冬隊〉



5月8日 晴

氷山の傍らを往く人曳櫓の川口隊員、平山隊員 ※ 撮影=中村



11月

オングル島西隅のオングル・カルベン島はアデリーペンギン（体長約60cm）のルッカリーなので、ペンギン数百羽の大群がやって来て一夫一婦の巣作り（小石を10ヶ程円形に並べたもの）が始まります。

【NO-27】 卵は必ず2個を産み、1個は「雄」、もう1個は「雌」となる。



【NO-28】 生まれたヒナは全身灰色の産毛で覆われ、口移しに餌を与えられる。





生後1週間程のヒナと親。

もう一頭の親は交代で海へ餌取りに出かけている。

この時期だけ親は神経質で、あまり近寄ると羽ばたいたりするので、少し離れた位置から撮影した。

【NO-30】

〈第3次越冬隊〉



ヒナが成長して産毛が抜ける頃になると、ヒナは集められ、泳ぎや餌取りの訓練を受ける。

その後1週間程で全員北の海へ還る。



アザラシは一夫多妻で、50頭ほどの雌を一頭の雄が連れている。

写真は雌アザラシと仔。



(sections-03)より

アザラシは体重 300kg 程度の哺乳類で、餌は海中で獲るが、何時間か後には必ず自分で作った直径 80cm くらいのアザラシ孔を通して海氷上に出て、呼吸をするとともに糞をしたり昼寝をしたりする。アザラシは一夫多妻であって、基地付近には一頭の雄と数十頭の雌と子供がいたので、量的にも彼らの糞はタロとジロー一年間の食料には十分であったと考えられる。ただしブリザードが一週間も続くような場合、糞は雪に埋もれたりして得難くなるので、食料を貯蔵する知恵まで彼らは獲得したものと推察される。



写真は雄アザラシ。 雌より一回り大きい。

(sections-03)より ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

アザラシは大きいので、とてもタロ、ジロに仕留めることはできない。しかし時にアザラシ孔が小さくなり、氷上に出た時傷だらけで瀕死になるアザラシもいる。中には死ぬアザラシもいる。タロ、ジロの食料貯蔵所にあった骨は、このようなアザラシの骨であったと考えられる。ともかくタロ、ジロは痩せ細った段階で首輪が抜けて自由の身となり、氷上に転がっているアザラシの糞を主食として一年間生きていたことは確かである。カラフト犬として飼われていた頃の主食である 鯧 <sup>にしん</sup> がアザラシの糞に変わったため、本来の動物性に变化し、魚は余り好まなくなったばかりか、私たちが野糞 <sup>のぐそ</sup> を行くとそれを喜んで食べるようになっていた。5月頃になるとトチやアクまで野糞に出かける隊員について来るので、私たちは野糞に出かける時、たとえば3頭ついて来た場合、用便中はマテ、スワレといて待たせておき、糞を3つに分けて30cmほど離れた場所に落とし、身繕いしてからヨシと声をかけると、3頭とも無事好物にありつけるという按配であった。



犬橇旅行、曳人は北村隊員。

曳犬はタロ、シロ、アク、ジロの4頭。

(手記-8)



タロの子孫の中には、ソリ曳きの先頭犬として、世界一過酷とも言われるユーコン河犬ゾリレースに出場して活躍中の犬もいる。 タロとジロは無人の昭和基地において、1年間動物性のアザラシの糞を食し、協力してこれ等を貯蔵する知恵まで出し、立派に越冬した上、カラフト犬の本領であるソリ曳きにおいても、先頭犬としての資質を十分持ち合わせていたのである。

(sections-03)より



ソリ曳きに必要な号令は、前に進めの「トウトウ」、右へ進めの「カイカイ」、左へ進めの「チョイチョイ」、止まれの「ブラーイ」の4種で、あとは「スワレ」「オアズケ」「ヨシ」「オテ」等である。

【NO-34】



11月20日～12月7日

中村、平山隊員により犬橇で奥氷河旅行

白瀬氷河入口の氷崖と春のツララ

【NO-35】



白瀬氷河は海水上約 40m 位、年間 500m 位の速度で流出する。

(sections-03)より



11月25日

氷河の右岸を進むと向かって左側岩壁の右側には、白瀬氷河の舌端が立ちはだかり、海水上約 40m の氷崖が、年間 500mの速さで下流に向かって移動しているようだ。時々ミシミシと音を立て、時には縁の一角が崩れ落ちることもあった。

【NO-36】

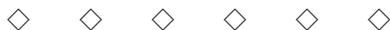


白瀬氷河入口のインステクレパーネ峰（470m）。

岩上に立つ中村（赤色破線円内）

※ 撮影＝平山隊員

（sections-03）より



11月26日、簡易テントを持った上で、二人はアンザイレンして（互いにロープで結び合っ）この辺りの最高峰インステクレパーネに向かった。写真は山麓から岩壁の肩を見上げたものである。フィヨルドの垂直な岩壁は300mくらいそそり立ち、右下には氷厚数百mくらいの白瀬氷河が流れていて素晴らしい眺めであった。

【NO-37】



白瀬氷河上流の奥氷河岳（270m）にて。

左＝ジロ 、 中＝中村 、 右＝タロ ※ 撮影＝平山隊員



（手記-9）

奥氷河岳 270m に着いたのは 16 時半。 気温-14.8℃、風は東北東毎秒 4m であった。

ここから未知の白瀬氷河源流を望むと、幅 10km のまま南南東方向へ一直線に 100km 近く伸び、源流は蒼氷が扇状に拡がって、そのまま真っ白な南極大陸に接している。 白瀬氷河源流は十分雪上車で東から西へ横断できそうな点が確かめられ、私共の旅の目的の一つが実行できた。 後年日本隊は大和山脈やドームふじ基地へ行くにも、このコースを利用した。

私共は地質や岩石磁気のサンプリング等を終えて、昭和基地に引き返した。

## オーロラ観測

(sections-03)より

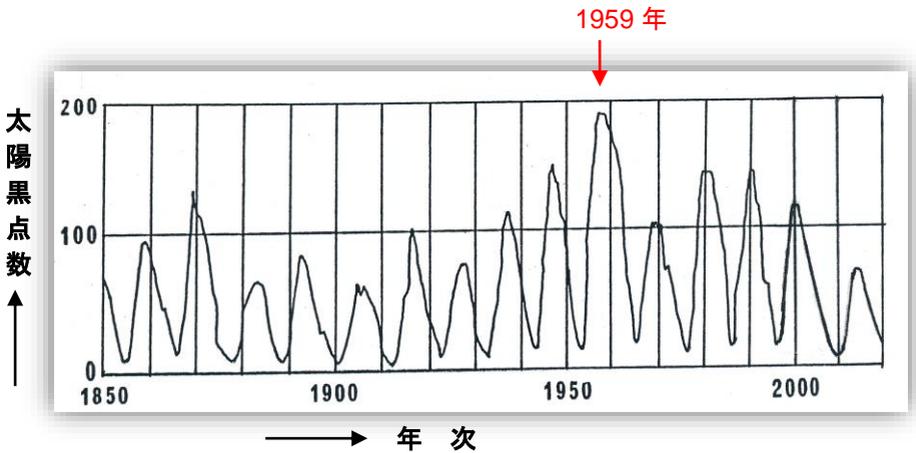
1959年2月中旬～10月中旬

2月中旬になると昭和基地にはオーロラが現れ始める。半年間は極地の夜が出現し続けるので、私たち、中村（オーロラ）をはじめ、北村（宇宙線）、小口（地磁気）、若井（電離層）、芳野（オーロラ電波）から成る超高層物理グループの隊員5名は、2月中旬から10月中旬まで、たとえブリザードのためオーロラが見えない夜であっても、昼夜逆転の生活を続けて欠測のないよう心掛けた。食事は、夜食は自分たちで作ったが、朝夕食は吉田長憲衣料隊員の手になるものを頂いた。この場合、明け方寝る前の朝食は少しお粗末に感じ、夕方起きた直後の夕食は逆に少し重過ぎたが、これらにもすぐ馴れ、多忙なので半年間はアツという間に過ぎ去った。

オーロラ観測は、①全天カメラ、②スペクトルを撮影するマイネル型分光器、③オーロラ緑線と背景の星空の光度を測定する光電受光器の3種類で行われたが、同時にステールカメラや16mmムービーによる撮影を行った。ムービーの場合、オーロラの光度が弱く、コマ落としを行って、1コマ当たり0.5秒ないし30秒の露出をとる必要があった。このため仰角目盛り付き方位盤の上に、カメラとともに3台のリレーを取り付けておいた。ところが、現地では白夜の季節が終わると次第に気温が低くなり、オーロラの出る前にムービーを屋外に持ち出し、光り始めとともにスイッチオンしてもリレーが働かない。急いでドライヤーを持ち出して暖めようとしてもドライヤーもスイッチオンできない。やむなくドライヤーを棟内に持ち込み作動させた上、そのままの状態ですぐ屋外に持ち出し、リレーを暖めたところ、ようやくムービーは動き始めた。しかしその時には、すでにオーロラ活動は止んでいたという失敗もあった。

オーロラの発光原因である太陽風の活動度は、太陽面に現れるウルフ黒点数によってほぼ知ることができる。【図—1】はその年変化を示したもので、太陽活動はほぼ11年周期で強弱を繰り返しているが、1959年のピークはここ100年ほどの中でも特に大きく高い。このため日本観測隊は、場所的にも年度的にも、オーロラ見物の特等席で観測できたという幸運に恵まれたのである。IGYの1958年に遅れること1年のポストIGYに日本観測隊は観測を行う羽目に至ったのであるが、太陽活動は大変激しく、大磁気嵐にも遭遇して、赤いオーロラを心ゆくまで観測することができた。

【NO-38】



【図—1】 【太陽黒点数の年変化】

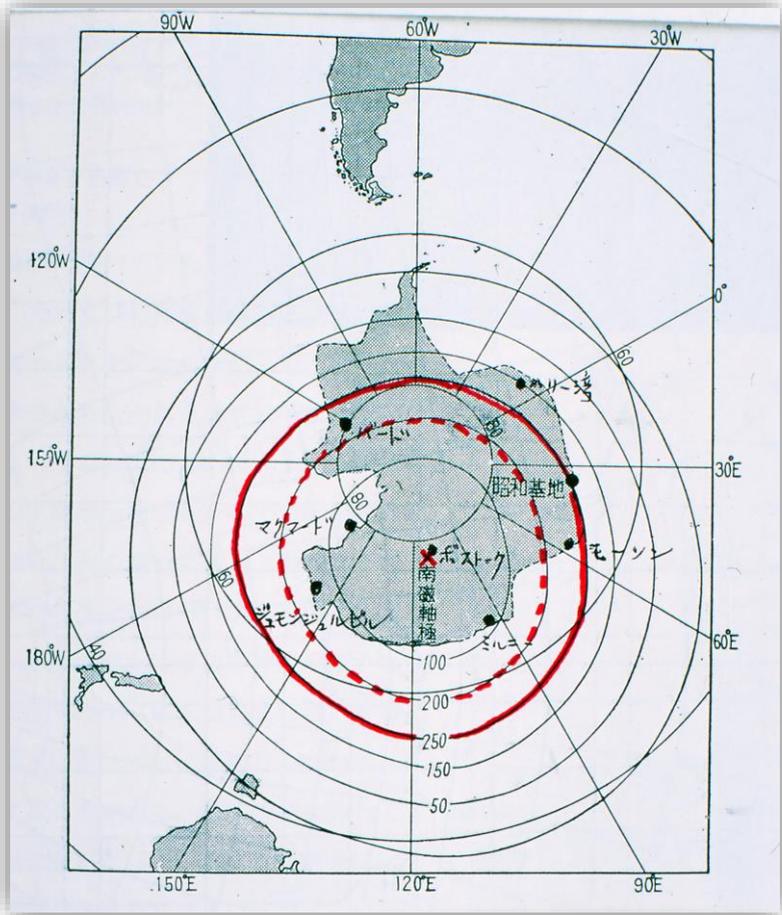
黒点数とオーロラ活動度は比例関係にあり、私共の越冬観測した  
1959年は、極めて太陽活動が激しかった年であったことが示される。



(sections-03)より

これらの見事なオーロラ活動を 16 mmムービー7 分間の記録としてまとめた「南極の神秘オーロラ」は、IGY では得られなかった激しいオーロラ活動の記録として、米国はじめ英仏やインドでも、本部を通じて借り出され大変好評であった。

【NO-39】

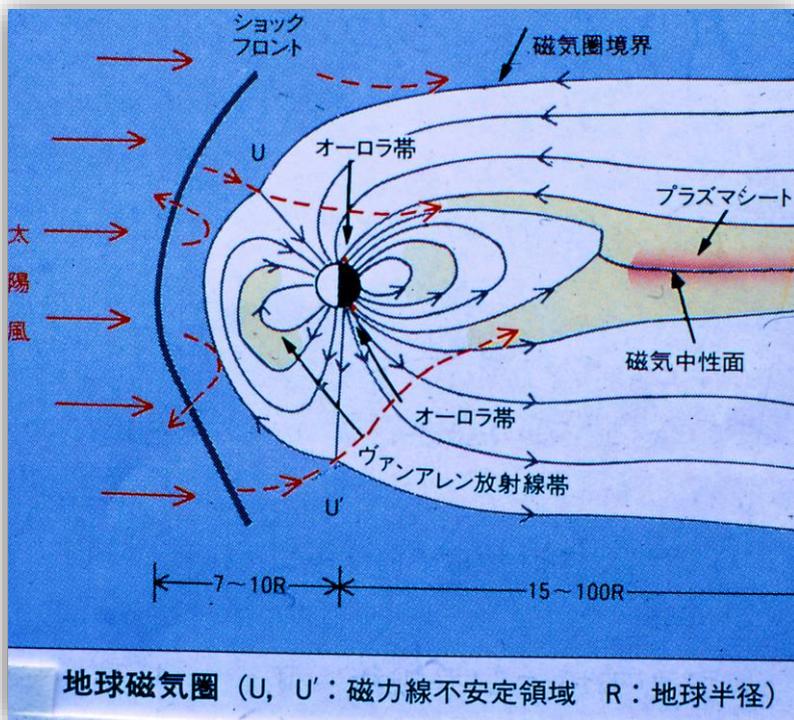


【南極におけるオーロラ帯】

昭和基地は 100%帯直下に位置している。

- ・ 赤色破線はオーロラ出現率 80%帯。
- ・ 赤色実線はオーロラ出現率 100%帯。

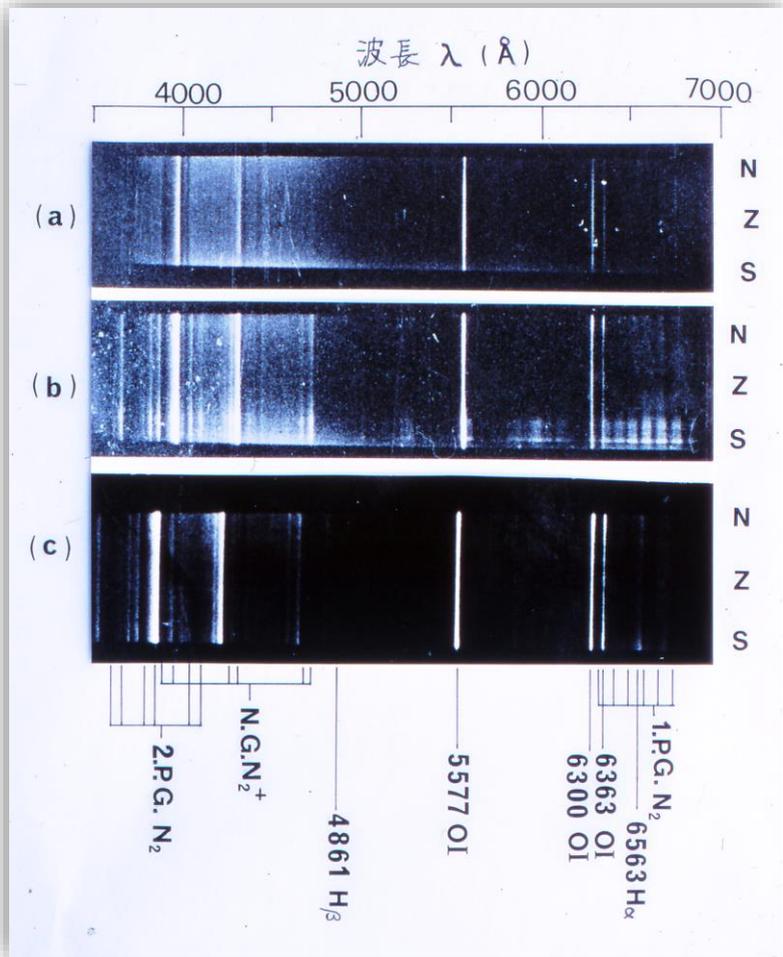
【NO-40】



【太陽風と地球の周りの磁力線模式図】

赤色破線は太陽からのプラズマ粒子流が一旦、地球夜側の磁気中性面に達した後、磁力線に沿って南北両極のオーロラ層 ( $\pm 80$ 度) 付近に侵入してくる様子が読み取れる。

【NO-41】



【オーロラスペクトル】

D 層 ; 鮮紅色の 1P. G. N<sub>2</sub>

E 層 ; 黄緑色の 5577 OI, N. G. N<sub>2</sub><sup>+</sup>, H $\alpha$ , H $\beta$

F 層 ; 赤色の 6300 及び 6363 OI, H $\alpha$ , H $\beta$

スペクトル右側の N, Z, S はそれぞれ昭和基地の北方、天頂、南方方向からのスペクトルであることを示している。

## オーロラの種類と写真

(手記-10)

オーロラは空に浮かぶ雲と同様、二度と同じ形や色のものが出現することはない。しかし雲が主に高度で分類できるように、オーロラも 3 種の電離層、D 層 (90~95km)、E 層 (100~120km)、F 層 (150~300km) で光を発する点を考えると、物理的に (a) 型、(b) 型、(c) 型の 3 種類に大別できることが判明した。

(a) 型は、地磁気がオーロラ帯で湾型変化を示す時、E 層の酸素原子 O の 5577 Å 黄緑色が光るもので、他に肉眼や写真への感度は悪いが、 $N_2^+$  の N, G, 帯スペクトルも光っている。

この現象は太陽風内の高速電子が、E 層内の磁力線に沿って侵入して来た時、その磁力線内の O が次々に光り、光の筋を作るのであるが、地球は自転しているので、これらの射線構造は次々に東から西に並び、カーテンのように見える。しかし E 層のような上空では秒速 100m に達する風が吹いているので、これらカーテンは揺れ動いたり、巻き上がったり、写真 [NO-43] のようなコロナ状に見えたりする。

(a) 型が現れると電離層の電子密度は大きくなるが、太陽宇宙線の強さはほとんど変わらない。写真の露出時間は 0.5 秒~5 秒位かかるので、その間射線構造は揺れ動き、眼ではよく眺められるが、写真にはよく写らないことも多い。

(a) 型オーロラは、オーロラ帯 100% 地帯で晴天ならば、必ず一晩の間に 10~30 分位の活動が数回見られる。

(b) 型は、地磁気が極磁気嵐を起こす夜出現するオーロラで、E 層の O 黄緑色の他、D 層の  $N_2$  1 P. G. の鮮紅色に光るのが特徴である。他に感度の低い  $N_2^+$  の N.G. や H の  $\alpha$  線や  $\beta$  線も出現するが、眼や写真では見分け難い。

肉眼では黄緑色カーテンの下の縁が鮮紅色に輝くので、大変美しく見栄えがあるが、写真では混合されて白色や橙色に見えるだけだ。

(b) 型が出現すると電離層 E 層の電子密度はブラック・アウトの状態となり測れな

くなる。太陽宇宙線の強度は上がり、オーロラ電波は波長が短くなる。

(c)型は、地磁気が大磁気嵐になった時出現するオーロラで、下層のOの6300Åと6363Åの赤色が光るのが特徴である。同時にHのH<sub>α</sub>、H<sub>β</sub>線も強く光り、同時にE層D層では(b)型も光っている。また地域として極地方のオーロラ帯だけでなく、中緯度の日本、中華民国、米国や欧州等、広範囲に出現する。ただし日本では北方の地平線上にF層の赤いオーロラだけが見え、E層のオーロラは北の地平線より下になって出現しない場合が大部分である。

藤原定家は『明月記』で京都に出現した日のことを記し「赤気体」と名付けている。同じ日にローマにも出現したが、ローマの人々は大火事と間違えたことが記録されている。

(c)型は太陽活動が盛んな11年周期のピークの時にしか現れないので、赤いオーロラは大体11年毎に出現すると考えてよい。

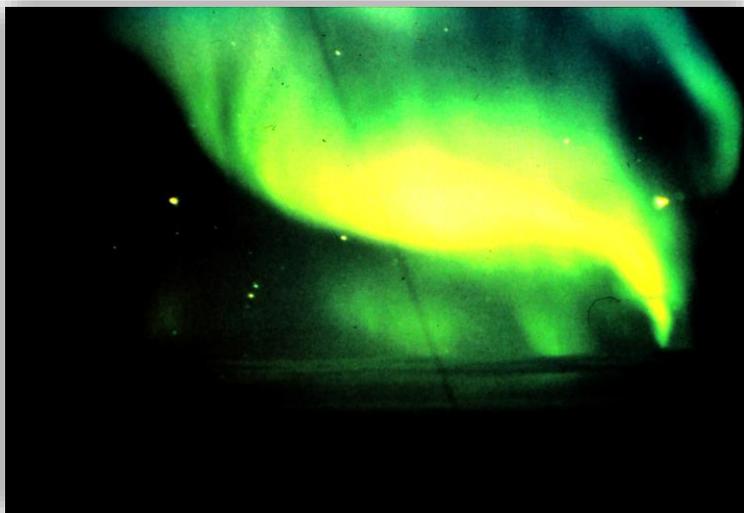
この時電離層はF層もブラック・アウトとなって測れず、太陽宇宙線もフォーブッシュ効果を起こし、却って数値が不安定に下がることもあった。オーロラ電波も大変乱れた。

前述のように下層で光るOの6300Åと6363Åは、太陽風内の高速電子がOに衝突した後112秒経過しないと、禁制線であるためのOは発光しない。この間に上空の風や拡散効果のためO原子は様々な方向に移動し、射線構造が現れず、面状に光るのが特徴である。

しかしこの面状の赤いオーロラは、特に1959年のように太陽活動が極めて大きい場合、昭和基地では一晩中出現し、しかも赤色が時間と共に明るさを変えたり、場所的にも複雑に移動したりして、光の交響楽でも見ているような素晴らしい眺めであった。



【NO-42】 (a) 型



E層の黄緑色カーテン状射線構造を持つオーロラ

【NO-43】 (a) 型 E層の黄緑色コロナ状オーロラ



オーロラ等の地域では、天頂近くに磁気天頂が存在し、磁力線はこれを中心に放射状に伸びているので、この方向を見ればオーロラは必ずコロナ状に見える。

【NO-44】 (b) 型



黄緑色カーテンの下の縁が<sup>へり</sup>D層の鮮紅色に輝いているオーロラ

【NO-45】 (b) 型



ラセン状に巻き上がり、激しく動く、下の縁が<sup>へり</sup>鮮紅色のオーロラ。

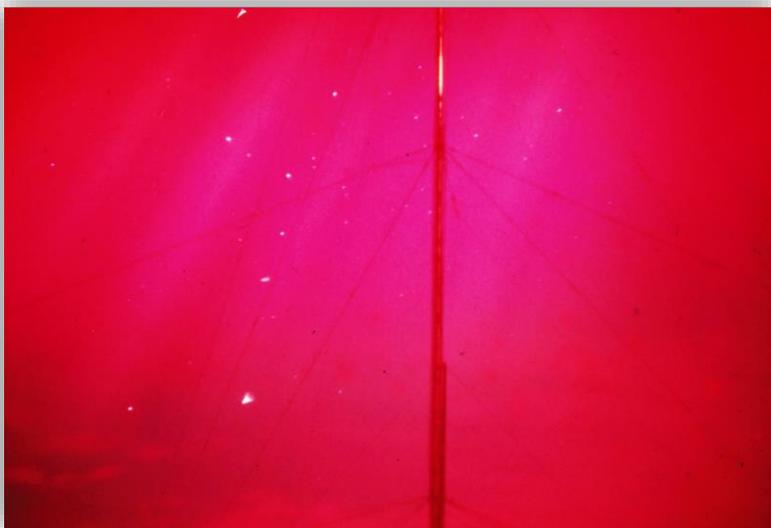
E層の黄緑色とD層の鮮紅色を混合して撮影されているので、下の縁は<sup>へり</sup>橙色がかっているだけだが、肉眼では黄緑色の射線と、下の縁の<sup>へり</sup>鮮紅色の揺れ動く様がよく認められた。

【NO-46】 (bc) 型



E層の射線構造を持つ黄緑色とF層の面状赤いオーロラが重なり、  
E層のオーロラは白く撮影されている。

【NO-47】 (c) 型



昭和基地の通信棟の背後に出現した真っ赤な面状オーロラ

【NO-48】 (c) 型

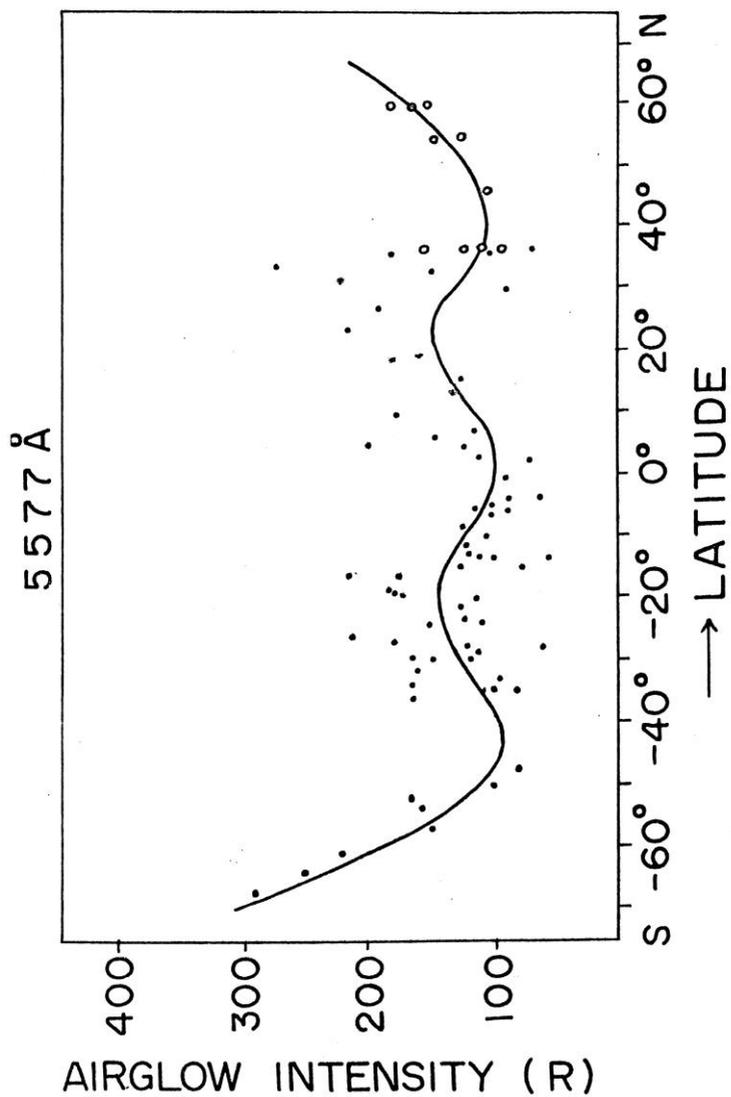


激しい磁気嵐の時、一週間余り昭和基地の夜空に出現した赤いオーロラ。

(b) 型のカーテン状オーロラも出現し、白いカーテン状に揺れ動き、赤色も時間空間的に明るさを変化させるほか、赤色の色合いまで様々に変化して素晴らしいオーロラであった。

しかし当時の電波は電離層と地上とで反射させる方式の短波通信だったので、どこの局とも交信は 10 日間程全く途絶した。

【NO-49】 < 夜光の緯度効果 >



【夜光の地球緯度による強度変化】

(手記-11)

- 黒丸点は第 1～6 次の観測船「宗谷」による結果。
- 白丸点は 1967 年東大アラスカ学術登山隊がアラスカ登山を行なった時、日本とアラスカ間の往復「伊勢春丸」船上で観測を行なった結果。

※ 測定者＝中村純二、松田治

夜光はオーロラと全く同じ光を電離層が発する現象で、季節変化や緯度変化もあるので、観測点のバラツキは大きいですが、実線のように地磁気緯度南北 23 度位で少し上昇した後、再び下がり、南北オーロラ帯に近付くと急激に上昇している。

この傾向は電離層 E 層の電子密度の緯度効果と略同様であることが判った。

一方、日本～南極間では第 3～6 次の「宗谷」で F 層の発する O 6300 Å 及び 6363 Å の夜光緯度効果も測定され、やはり電離層 F 層の電子密度の緯度効果と同様であることも判った。

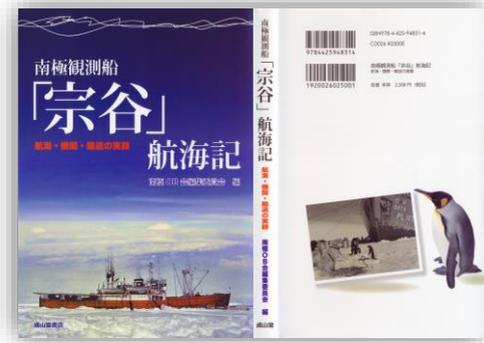
※ 測定者＝中村強（東京天文台）

このように地球周囲の電離層やヴァンアレン帯は地磁気と太陽風との相互作用で発生したことも窺われ、世界では初めての成果となり、米国の地球電磁気学会誌にも報告された。



## 引用文献

### 南極観測船「宗谷」航海記



ISBN978-4-425-94831-4 C0026

初版発行 : 2014年12月28日

編者 : 南極OB会 編集委員会

発行所 : 株式会社 成山堂書店

※ 中村純二先生執筆箇所を部分引用

### ほうおう座流星群観測余話 と 第1～3次南極物語

発行 : 2015年11月4日

著者 : 中村純二

編集制作 : 日本山岳文化学会有志

頒布 : 非売品

※ 国立国会図書館 : 蔵書



# 丹沢山麓の声

## 【会員の方から】

### ◆ S・S

昨日はお疲れさまでした。盛会で何よりでした。  
早速の見事な写真、ありがとうございます。  
チューリップをバックに皆さん満足そうに写っており、思い出になります。  
また機会がありましたらよろしくお願い致します。

### ◆ H・Y

中村先生の「ほうおう座流星群・観測余話」講演会準備から実施まで、盛況に  
終えられ、大変ご苦労さまでした。先生には長時間の講話、聴衆の皆さんは聞き入  
り、一体となっていました。  
いつも綺麗にまとめられた写真版、ありがとうございました。

### ◆ O・T

今日は大変お世話になりました。  
小島烏水の日本アルプスを読むと雷鳥を食べた話など出てきますが、中村先生の話  
では皇帝ペンギンを食べた秘話もあり、貴重な一日を体験させていただきました。  
また、たくさんの写真を早速お送りいただきありがとうございます。厚くお礼申  
し上げます。

### ◆ A・M

早速のごあいさつと写真も添えていただき、お濼いに没頭中、おさそいありがと  
うございました。おかげさまで文化的なときをすごせました。あらためて御礼申し  
上げます。

## 【会員関係者の方から】

### ◆ N・R

この度は素晴らしい自然の中の講演会に参加させていただき有難うございま

した。流星や南極の宗谷等初めての話もあり楽しい会でした。又今日は目の覚めるような美しいチューリップの写真と共にご丁寧なお手紙をいただき、本当に有難うございます。早速子供や孫達に渡します。喜ぶことと思います。

◆ K・S

中村純二先生の、ほうおう座流星群講演会に参加させていただきました。

このたびは素敵な集会風景の御ハガキを頂き・・・山岳文化学会の知性の誠を拝し、中村先生も何と立派な方々と交流されているのかと、先生の幸せを拝見した想いがありました。

一つの物事を直ぐに忘れてしまう世間にあつて 58 年間も心に温めて、ついに新しい知性を開花させる中村先生を拝見いたしますと、大学でわずか 3～4 年で論文を作成し、それで生涯を飯の耕地とする時代や、論証も定かでないような事を最先端とする視点の、どこかの大学者の司る国家研究所のような日本科学の在り方はゾツとする魔界ですけれども、若き研究者時代の知の種子を心の耕土に播いて 58 年間も育成された、中村先生の存在は、私は小・中学校の教科書に科学者の鑑として 100 年も 200 年も記して、日本の知性の根にして欲しいくらいです。

「宗谷」 にしましても太平洋戦争末期、機銃どころか小銃一つ持たぬ輸送船団旗艦として、私の故郷の沖で米潜に襲われ、他の船を全て失いながら山田湾に入港後、任務としてただ 1 隻で運を天に任せて出航していった故郷の伝説を想いながら、すばらしい時間をすごしました。 (注) 山田湾←岩手県

【追記＝田中】 K先生は受付番号 9 番だったのですが、そのプリントを他の方に持って行かれ、代わりに 10 番のプリントを受け取って講演会にのぞまれました。ところが、中村先生サイン入り本 『南極観測船「宗谷」航海記』 のダーツは 10 番に当たり、K先生のものとなりました。前記の縁から、ダーツは最適な方の中の。さらに中村先生のサイン 「南極にオーロラを求めて」 に感銘され、秦野から新宿までの小田急線はアツという間に過ぎたそうです。

◆ K・S

良い講演会ができて、良かったですね。

日本山岳文化学会の株も上がるのではないのでしょうか。

田中さんの献身的な準備の賜物と思います。

チューリップをバックにした集合写真はとても良いですね。佐々木さん達と一献を交えることができなかつたのが、残念でしたが、お疲れ様でした。ゆっくり休んで下さい。

(その2)

田中さんからの講演会資料が届きました。

御礼状拝読して、田中さんの文才に改めて感心しました。それに素晴らしい集合写真、名簿、講演会チラシ。宣伝マンとしても、捨てたもんじゃありません。改めて只者ではないことに気づかされました。

労を惜しまない田中さんの誠意がにじみ出ています。ありがとうございました。落ち着かれましたら、佐々木さんなどとの懇親会の機会を是非つくってください。

◆ O・T

初めてお会いする人ばかりだったのですが、楽しく過ごさせていただきありがとうございました。

講演に参加して、一度はオーロラを生で見てみたいと痛感致しました。

また、機会があれば参加したいと思いますので、よろしくお願い致します。

◆ K・T

先日は貴重なお話を伺う機会をつくっていただきましてありがとうございました。この手の講演はもう何年も接する機会がありませんでしたし、内容も大変貴重で有意義なものでした。またこのような機会がありましたら声を掛けて下さい。

まずはお礼まで。

◆ K・Y

先日は講演会にお誘いいただきありがとうございました。

楽しいお話を聞かせていただき嬉しく思っています。

少し天気が悪かったのですが公園のチューリップも美しく、有意義な一日を過ごすことができました。

## 【一般公募の方から】

### ◆ Y・M

中村先生がご高齢にかかわらず、とうとうと講演され、素晴らしい方です。実際に南極で越冬された方のお話をうかがうことは、本当に興味深く、面白かったです。

山岳会（メール文そのまま）の皆様企画、大変だったでしょう。

ありがとうございました。これからも、活躍されますよう。

添付の写真も、楽しみました。ご丁寧にありますありがとうございます。

### ◆ K・M

興味深いお話で楽しかったので、2時間も短く感じられました。

家に帰って中1の息子に、タローとジローの話の一部を話したら、“へエ〜”と聞いていましたよ。

### ◆ W・M & W・M

妻はオーロラの話しまではちょっと寝てました。多分仕事の疲れが出たのだらうと思います。

私は前半の話に大変興味があり、夢中で聞いておりました。

ブランペイン彗星とほうおう彗星は同じものだということを、証明されたということなのでしょうか？

それよりも私には、田中さんの中村先生や我々参加者への気配りが十分に感じられました。中村先生は田中さんを信頼して、田中さんは中村先生を尊敬している事が十分に感じられました。お話しよりも、むしろそちらの方が私には心地好いものに感じられ、頼もしくなりました。

## 謝 辞

2015年、春の丹沢山麓、おおすみ山居の抹茶賞味や戸川公園チューリップ鑑賞に併せ、「ほうおう座流星群観測余話」のお話を引き受けましたところ、日本山岳文化学会有志の方々も主催者側としてお世話をいただき、思いがけなくチューリップ7万本が満開の秦野戸川公園パークセンターにおいて、立派な講演会を開くことができ感謝に耐えません。

ご聴講いただきました53名の方々には、後日感想文などをお寄せいただきました他、神奈川県立秦野戸川公園々長他パークセンターの皆様や、おおすみ山居の皆様にも大変お世話になりました。

心から御礼申し上げます。



2015年9月 自宅にて

### 中村 純二 理学博士（宇宙光学）

東京大学名誉教授

第1～3次南極観測隊員

元＝東京大学スキー山岳部長

元＝日本山岳会副会長

現＝日本山岳文化学会理事

### 中村 あや （令夫人）

東京芸術大学卒

一緒に海外登山・探査へ

## 第4回. ポルトガル紀行とチューリップ球根植え

2015年11月4日＝中村純二

澄み渡る秋晴れの中、日本山岳文化学会会員有志とその関係者の方々が集い、秦野戸川公園チューリップ球根植えのイベントに参加しました。

山岳文化の裾野はこの戸川公園のように穏やかで広く、しかし高嶺の頂きは宇宙に飛び出す地球の突端の厳しい自然環境にあります。そこでの活動

のいずれもが人生の大切な一駒一駒の舞台であり、活動によって得られた英知の種は、チューリップ球根のように年を越えて花咲かせます。

中村先生が南極越冬や世界の山岳を体験して得られた貴重な英知の種は、必ずや次なる世代に引き継がれて花を咲かせることでしょう。

体験を経て得た人類英知の種まきは、年を越し、春を迎えて咲くチューリップのように、世代を越え一輪一輪の文化となって作品の花が咲きます。

田中・記

(スライド投射により、映像の電子データ変換は無し)



ポルトガル紀行講演中の中村先生  
スライド投射操作の奥様



聴講風景





「石挽手打蕎麦＝さか間」で「ミニ懐石ソバ」を賞味



山々をバックに  
チューリップ球根植え風景



## 第5回. チューリップ鑑賞とヒマラヤ講演会

2016年4月9日＝ 田中文夫

2016年、暖冬といわれつつも寒暖が激しい今年、昨秋に植えたチューリップの開花が早まるのではないかと・・・と、一同気をもんでいました。ところが実にドンピシャリ、見事なチューリップの開花と残桜、加えて穏やかな陽気と晴天に恵まれました。講演会も午前と午後に分け、合間の昼食は日本庭園「おおすみ山居」での仕出し弁当と抹茶の飲食、持参の方々は園花に囲まれた飲食と、「登山」がもたらす自由な意思への尊重を心掛けます。

午前の部では、田中会員の「**ネパールヒマラヤ P29 南西壁登山**」、岩楯会員の「**スカイ・ランニングとは**」と、新・旧2題の講演をおこないました。

講演のメインは午後の部、中村先生による「**チャラクサ氷河探索の旅**」です。1984年、東京大学スキー山岳部が初登頂したカラコルム・ヒマラヤ「**K7**」登山と周辺氷河調査に、総隊長ご夫妻として参加された貴重なお話しをしていただきました。



神奈川県立秦野戸川公園チューリップ畑



会 員 有 志



満開のソメイヨシノ

↓  
著書贈呈のクジ引と当選者↓



受 付



聴 講 会 場



おきな草

講演—1

ネパール・ヒマラヤ **P 2 9 南西壁登山**

1978年

講演者 : 田 中 文 夫

隊の名称 : P 2 9 南西壁登山隊

〈P 2 9 南西壁登山報告書〉

P29 South West Wall Expedition 1978

主 催 : ツラギの会 (ツラギ=氷河の名前)  
P 2 9 南西壁を登る目的で集まった  
山岳会 (横浜山岳協会へ所属)

隊 長 : 田 中 文 夫

隊 員 : 10 名 (隊長含む、男=8、女=2)

リエゾンオフィサー : 1 名 (ガンゾ・ヤム・ライ=警察出向)

シェルパ : 4 名 (サダー=ペヌリ・シェルパ)

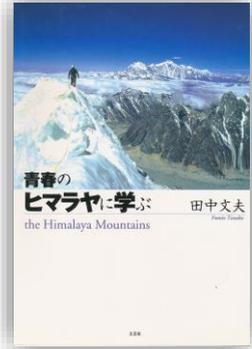
そ の 他 : 5 名 (コック、キッチンボーイ、  
メイルランナー、ローカルポーター)

ポーター : 165 名

予 算 : 12,000,000 円 (全額個人負担) + 寄付・支援金=200,000 円

※ 個人負担金1人=120万円は、当時の大卒初年度年収相当

※ 登山収束後の残余金は、平等額を個人返し、残金=0



〈青春のヒマラヤに学ぶ〉

2001年1月1日 出版、文芸社

ISBN4-8355-1085-2-C-0095

講演風景



# ネパール・ヒマラヤ P29南西壁登山



## ツラギの会P29南西壁登山隊

隊長：田中文夫

## マナスル3山は日本隊が初登頂

マナスル (8163m) P29 (7871m) ヒマルチュリ (7893m)

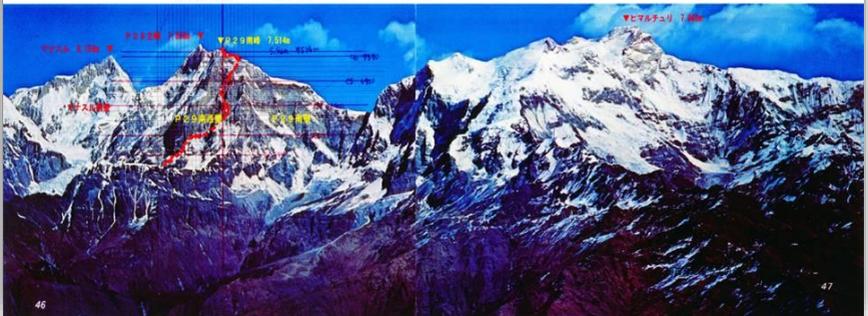
日本山岳会  
1956年

大阪大学  
1970年

慶応大学  
1960年

以降、山の高さは1978年当時の古いデータのままとします。

(←目盛り100m) 『空から見たヒマラヤ』 : NHK取材班・著 : 1978年6月1日 発行 : 日本放送協会



# マナスル と P29



ネパール・ヒマラヤ P29主峰 (7,835m)

**P29南西壁** (南峰 7,514m)

**1974年**  
**横浜山岳協会**

(申請上の隊長)

※古川純一総指揮の  
アルパインガイド協会と

アマプロ問題 (山岳展望17号)  
1973年発行



**1978年**  
**ツラギの会**

(隊長)

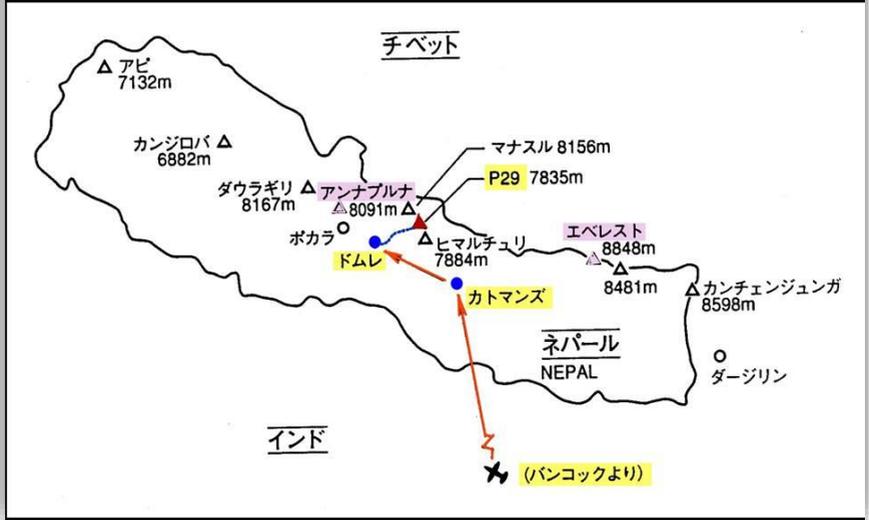
※3隊員死亡事故

『青春のヒマラヤに学ぶ』

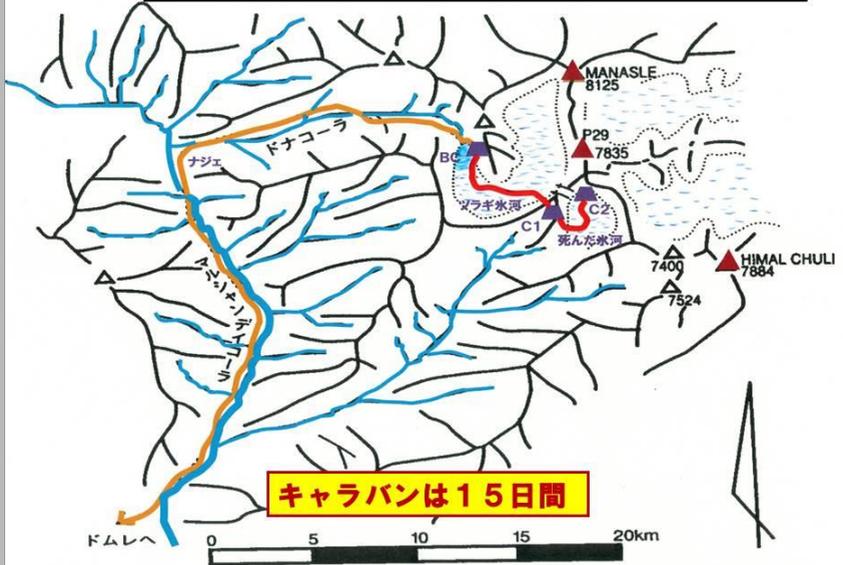
2001.1.1発行 (文芸社)



# ネパール・ヒマラヤ



## マナスル3山 と キャラバンルート 概念図



# 1978年代 ヒマラヤ登山のテーマ

- ① 組織による事業の時代は終わった (文明的)
  - ・ 適者選抜～ (弱肉・強食) 相対的
- ② 意思ある個人が自己表現する時代 (文化的)
  - ・ 自主参加～ (個性の違い) 相補的

- ・ 目的 : P29南西壁からの初登攀・南峰初登頂
  - ・ 自主参加 : 個としての夢や希望の表現 → 自由
  - ・ 自己負担 : 一人 = 120万円 (当時大卒の年収)
  - ・ 自己責任 : 基本としての自己責任
  - ・ 運営 : (要素)メンバーシップ : 意思  
(機能)リーダーシップ : 個と組織
- <相補性原理で目標達成を目指す>

1. 隊の名称 邦名 P29南西壁登山隊  
英名 P29 South West Wall Expedition, 1978
2. 主催 ヲラギの会 (横浜山岳協会加盟)
3. 後援 横浜山岳協会 (10万円の寄付金)  
神奈川新聞社 (名義後援)  
TVKテレビ (名義後援)
4. 目的 P29南西壁より南峰 (7514m) の初登頂
5. 隊の構成
 

	隊長	1名	田中文夫	32歳
	副隊長	1名	白石巳之助	37歳
	隊員	8名	牛沢守	31歳 (死亡)
			御園生久義	29歳
			遠藤ケイ子	30歳 (看護師)
			栗林富子	30歳
			万実久次	29歳 (死亡)
			柏森一夫	26歳
			津山孝義	25歳
			高橋義文	25歳 (死亡)
			上村英子	31歳

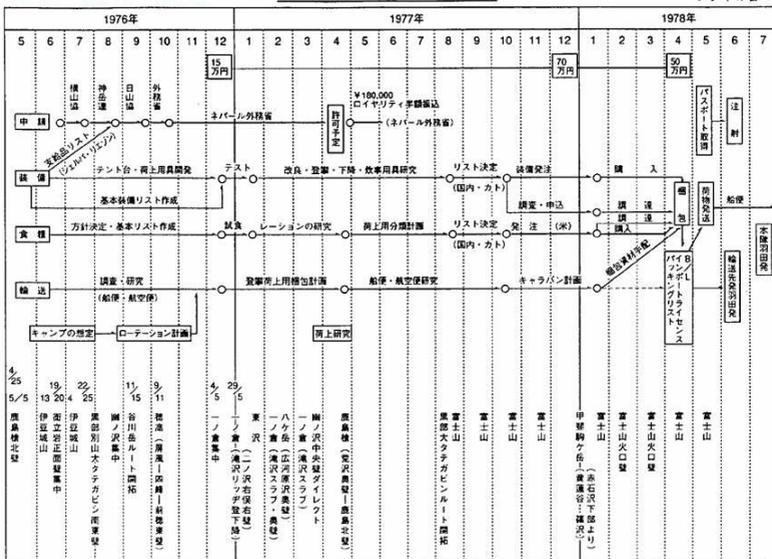
カトマンズ涉外留守本部 (東京) 富田栄吉、和田好弘、村松徳夫
6. リエゾンオフィサー 1名 Gunjaman RAI 34歳 (警察出向)
7. シェルパメンバー (高所) = 4名、コック = 1名、キッチンボーイ = 1名
9. ローカルポーター = 2名、BCまでのポーター = 165名

**[予算]** 総額 = 12,200,000 円  
**[収入]** 隊員負担金 = 1,200,000 × 10 = 12,000,000 円  
 寄付金 = 200,000 円 (横浜山岳協会、某1社)  
**[支出]** 国内費用 = 7,600,000 円  
 食糧費 (500,000-)、装備費 (2,844,000-)  
 輸送費 (木柙梱包船便5t = 2,800,000-)  
 保険料 (50,000 × 10 = 500,000-) 1人50万円  
 (3名死亡隊員ご遺族へ、各50万円返却)  
 医薬品、記録用品、事務費、雑費、予備費  
 国外費用 = 4,600,000 円  
 登山料 (300,000-)、通関税 (220,000-)  
 輸送費 (イント陸送、キャラバン・ポーター = 1,210,000-)  
 人件費 (シェルパ等 = 700,000-)  
 現地購入食料・装備費 (1,200,000-)  
 滞在費 (460,000-) 手数料、雑費、予備費等  
**[決算]** 遭難死亡事故による混乱で出納整理できず  
 保険金返却、装備売却後の残金は等分して隊員返却、**残金 = 0**

**[国内 準備パート図]**

P29 Exp. 準備スケジュール

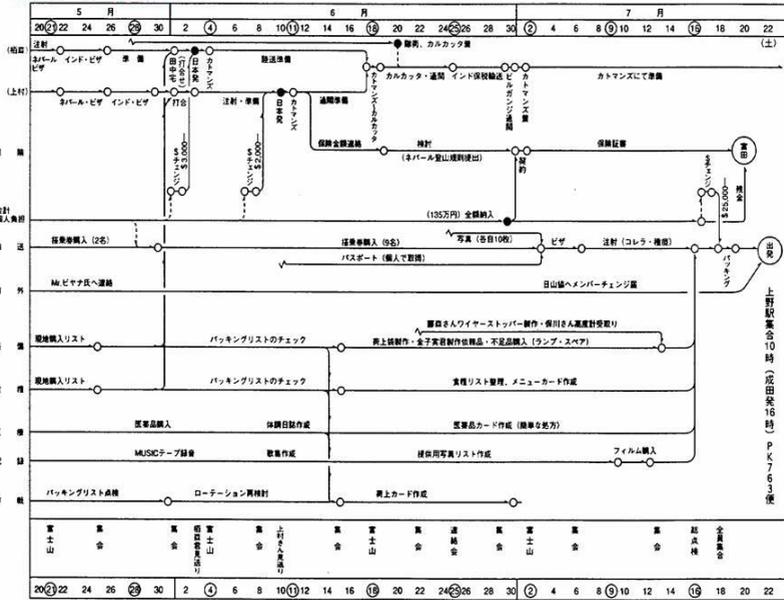
ツラギの会



**【国外 準備パート図】**

**P29 EXP. 1978 SCHEDULE**

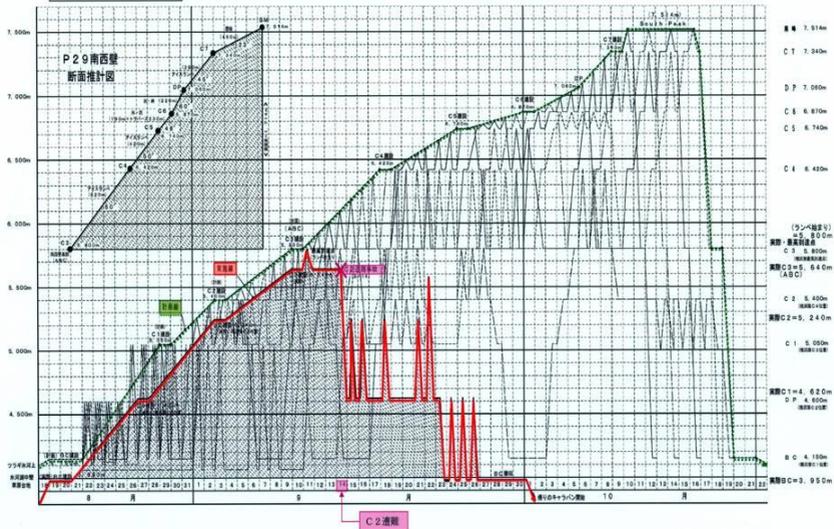
ツラギの会



**登攀ローテーション計画 と 実際の進捗 (赤線)**

P 29 南西壁 登攀計画と実際

計画線と実際のとの高度のずれは、高度計の表示値の精度による。C 3 建設までは、計画とほとんど同じであった。



# P29南西壁断面図 と 登攀キャンプ計画



位置	高度表		キャンプ
	feet	m	
a	13,120	4,000	BC
b	13,600	4,145	-
c	15,050	4,587	C1
d	17,000	5,181	C2
e	19,500	5,944	C3
f	21,000	6,401	C4
g	22,500	6,858	C5
h	24,000	7,315	C6
i	24,652	7,514	南峰頂上
j	25,706	7,836	主峰頂上

地図計測スケール: one inch to one mile

区間	水平距離		高度差		傾斜	登攀距離	キャンプ位置 (計測)
	m	feet	m	度分			
a-b	6.5	4,358	480	145 1' 55"	4,394	BC	→
b-c	5.2	3,487	1,450	442 7' 15"	3,536		→ C1
c-d	5.0	3,353	1,950	594 10' 5"	3,394	C1	→ C2
d-e	1.6	1,073	2,500	763 35' 25"	1,318	C2	→ C3
e-f	0.4	0,268	1,500	457 59' 40"	529	C3	→ (C4)
f-g	0.4	0,268	1,500	457 59' 40"	529	(C4)	→ (C5)
g-h	0.4	0,268	1,500	457 59' 40"	529	(C5)	→ (C6)
h-i	0.4	0,268	652	199 36' 35"	334	(C6)	→ 南峰頂上
i-j	2.6	1,743	1,054	321 10' 30"	1,762	南峰頂上	→ 主峰頂上
TOTAL							
		南峰頂上	13,343		3,514		14,563 to south summit
		主峰頂上	15,086		3,836		16,325 to main summit

## 事前説明会

2017年6月25日 (新宿)

厳しい岩壁であり、成功は50%と説明

参加しない (知らない) 人ほど、  
後で文句を言う!

※ 共産党機関紙「赤旗」の記者が取材

(ポラロイドカメラ写真)



出発前説明会  
6月25日



# 飛行機から見えるヒマラヤ（雲のよう）

〈ヒマラヤの山並 ↓〉

〈雲 ↑〉

〈飛行機〉

# カトマンズ・トリブバン空港

B-727 イエティ号



# カトマンズ市街

人・車・排ガス・埃の街



ニューロード



アッサンバザール

# 船便（木枠組）で送った登山隊荷物（5t）

横浜→（船）→カルカッタ→（インド国内陸送）→ネパール



# シェルパ族の安全祈願

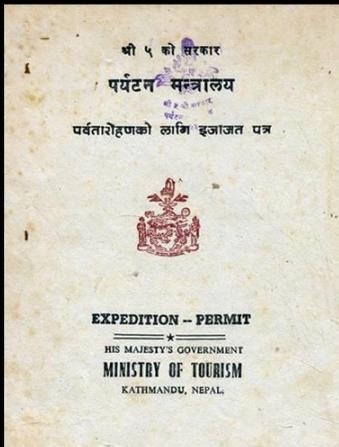
<カタ> かけてもらう隊員達



## 登山料(30万円)を全額支払い

登山許可証(パーミッション)を取得

山名=Peak 29 (Dakura) 7514M



## キャラバン出発前の荷物渡し

一人ひとり名簿に登録、タグとタバコ3本をわたす



## 若い夫婦のポーター

胸にカートンボックスNOのタグ



**キャラバン開始(ポーター)**  
一日約10Km×15日間=150kmの道のり



**バツティ(茶店)の中**  
ミルクティー(紅茶)一杯2ルピー(約34円)はゲストプライス



## 子供は学校へ行く前に一仕事



## 川を渡るポーターの列



## 渡渉する女性ポーター



## 竹やぶがある山間の村人 (チェットリ族?)



## 異なった部族の母子 (マガール族?)



## 35Kg を運ぶポーター達 プラスチックダンボールは破れず雨にも強く燃料にもなる





スイスの援助で出来た  
吊橋を渡る  
(橋のたもとは大麻草)

## キャラバン中に見えるマナスル3山

▼マナスル ▼P29 ▼ヒマルチュリ

(1974年横浜山岳協会隊の写真)



## ポーターへの賃金支払い

一日18ルピー(306円)

支払っているそばからナイケ(世話役)はピンハネ



## チャパティをつくるコック

三点に石を置けば釜戸ができる



## キャラバン中の食事風景

日本から持参するカレールーは最高な贅沢！



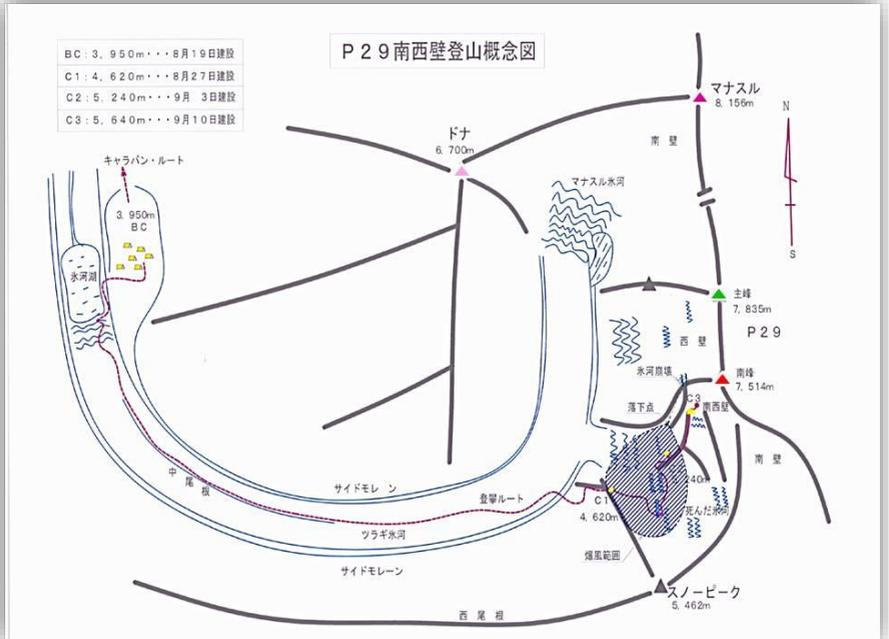
## 山間の村の姉妹

ピュアーな澄んだ瞳が印象的！





丸太で梯子を組み岩場を通過  
 ポーターの荷物はロープで吊り上げ  
 (砂糖2箱を谷へ落す)



## お花畑にベースキャンプ設営 (3,950m)



## モンスーンで霧のベースキャンプ 毎日午後から明け方まで雨が降る



## ベースキャンプのキッチン食堂

ニワトリ(卵)、ヤギ(肉) は放し飼い  
コック、キッチンボーイ がいつでもお湯が沸している



## BCからC1への荷揚げ

一人約20Kg、C1へは約1.5t(75人分)





ツラギ氷河と  
P29西壁、南西壁

C1への荷揚げは、一日往復  
16kmのロングコース

ツラギ氷河から見上げる P29西壁  
▼7,835m 高度差≒3,800m



ツラギ氷河から見上げる マナスル南西壁  
8,156m▼(高度差≒4,000m)



氷河の上に 小川がサラサラ！  
(春) 日射がなくなると流れも止まる  
(秋) はモレーンの土砂で茶褐色

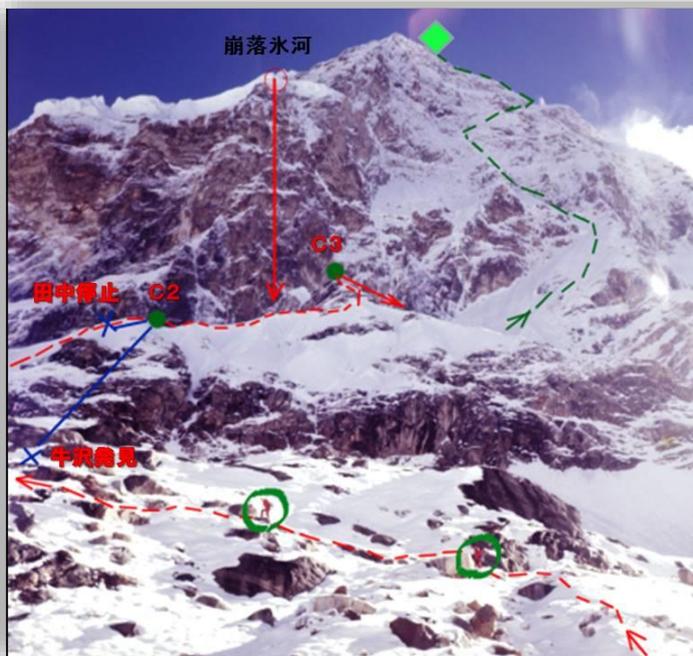


# 氷河の末端は氷河湖

水面からの高さ≒50m



死んだ氷河とP29南西壁  
▼高度差≒2,800m



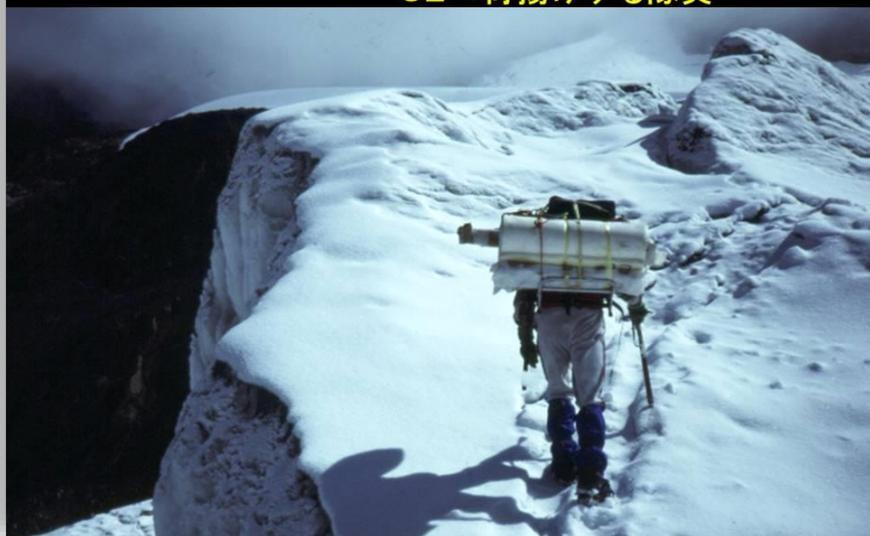
◆ 南峰 7,514m  
 標高差 2,800m  
 P29 南西壁の全景

## 氷河はクレバスを迂回しながら登る 雪で隠れたクレバス(ヒドンクレバス)に注意



# 氷河のクレバスと荷揚げ

C2へ荷揚げする隊員



南西壁

クレバスの弱点、弱点を  
つないでジグザクに登る

## 氷河のクレバスを迂回する



## C2直下の氷壁を登る

春の横浜隊写真 → 秋のツラギ隊は氷の上に薄雪が被る



## C2～C3間、急峻な氷の尾根を登る

▼左側：西壁

▼右側：南西壁



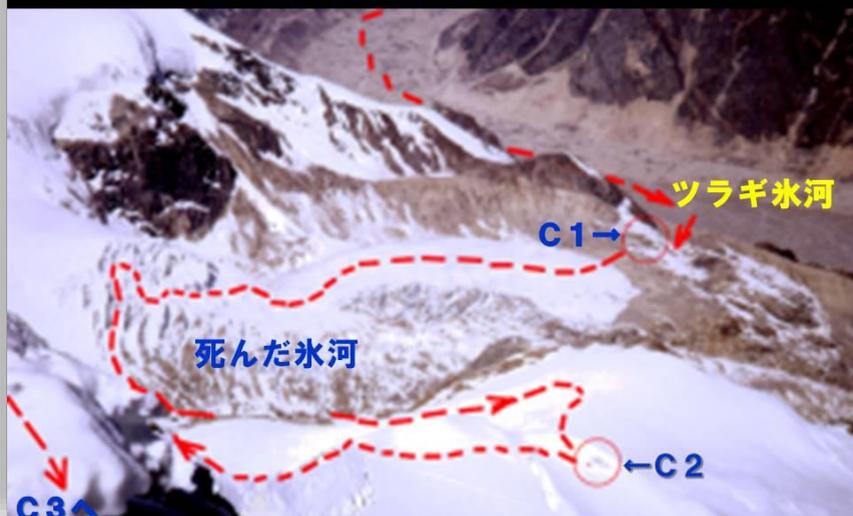
## 垂直の岩場は ワイヤー梯子

トップはもちろん自力で岩を登る



## 足元を見下ろすと！氷河

氷河からの高度差≒1,400m



## 登りながら、右を見ると！

▼ヒマルチュリ 7,884m



登りながら、左を見ると！

ドナ 6,700m ▼

P29西壁側 ▼



はるか遠くには・・・

▼ 8,000mのアンナプルナ連峰



**5,000mの雲海の上は快晴！**  
アンナプルナ連峰に沈む太陽



**高度6,000m氷の尾根を登る2隊員**  
酸素分圧が1/2となり、呼吸は苦しい



## 氷の尾根にトプロープをのぼす

隊長として先頭でルート工作



## 大岩壁に向かってトップを登る

初めて印す足跡に気分は高揚!!!



**トップは緊張と高揚が入り混じる！**

崩落した西壁氷河の部分 ▼ 高度差 ≒ 1,000m

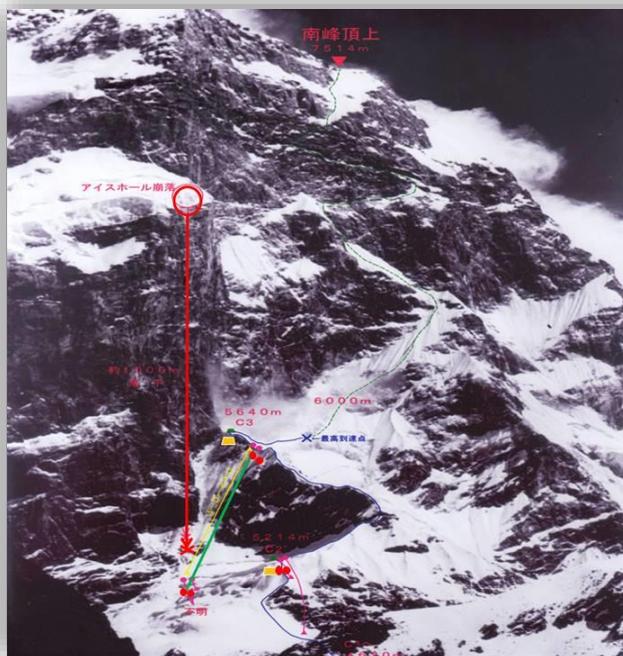


**6,000m 大岩壁直下**

▼ セカンドを登るサーダー(シェルパ頭)



# 氷河から2,000m 登る 傾斜60° 南西壁の始まり ▼



西壁のアイスホールが崩落  
3隊員が死亡  
内一人は現在も行方不明



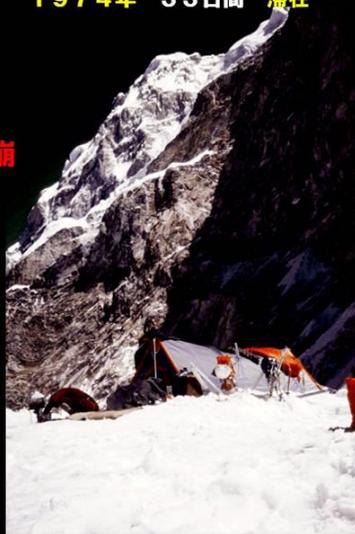
5, 240m  
氷河台地

横浜山岳協会隊=C4

1974年 33日間 滞在

ツラギの会隊=C2

1978年 9日目(9/14) → 氷河崩落雪崩



高橋隊員の捜索

しかし……

発見できず！

(ポラロイドカメラ写真)



高橋捜索

## 第2キャンプ下台地に2隊員

(ポラロイドカメラ写真)

▼ 石積みの埋葬



## 2隊員の埋葬地 (C2下の台地)



## ベースキャンプに遭難碑 サンテンバ・シェルパ作 <ラマ教徒>



## ベースキャンプで追悼





ポーターの病気(腸閉塞)でヘリ要請  
ご遺族訪ネ情報が重なり  
ポーターと隊長カトマンズへ飛行  
再度ヘリを飛ばして↓遺品を回収  
隊長⇨一時帰国⇨遺品引渡と説明  
(ふたたびカトマンズへ戻り、本隊と合流)  
個人的登山隊のベストな対応を図る



帰国後の合同追悼会(東京)



口頭報告と手書き報告書配布



状況報告資料展示



支援の方々

## かつてのヒマラヤ登山は → **総合力**

外交、輸出入、為替、交渉力、判断力、英語力、登攀力

現代は**お金**で解決 . . . **経験**が身につかない！

### 外交交渉

- ・ 外務省(許可申請)、ネパール政府登山規則

### 輸出入

- ・ 国際船便、インド国内陸送、通関、関税

### 為替

- ・ 差益、差損 (USドル、ルピー、バーツ、円)  
バンクレート、ブラックマーケット

### 交渉力

- ・ネパール政府観光省 (リエゾンオフィサー同行)
- ・現地雇用 (シェルパ、ポーター)、現地購入

## かつてのヒマラヤ登山は → 外交交渉 交渉は自主努力が不可欠

### 外務省

- ・日本隊は外務省を通して登山許可を申請・取得する
- ・ネパール政府の登山規則による

### 日本大使館

- ・ネパール政府と日本外務省との連絡役

### ネパール政府観光省

- ・ネパール国内での登山活動に関連する全ての権限

### 登山隊

- ・全ての報告はネパール政府を通しておこなう
- ・そのため、リエゾン・オフサーが同行する
- ・報告は全て英語（登山中、英語で夢を見る）

## 外務省と日本大使館の役割

### 外務省（領事第2課）

- ① 登山許可申請の窓口
- ② 日本国内関係者への遭難事故公式連絡

### 日本大使館（在・ネパール）

- ① 登山中における現金の一時預かり（非公式）
- ② ネパール政府発表関連事項（遭難事故報告等）を  
本国へ打電（事前の協議事項が無視された）
- ③ ネパール政府発行の死亡証明書を翻訳し、  
日本国として死亡翻訳証明書を発行（除籍に使用）

## 遭難確率の高いヒマラヤ登山に対して ＜緊急時への事前対応＞

### 外務省・日本大使館

- ・外交手続きと儀礼程度にとどめる（期待しない）

### 登山隊の自主対策（事前準備が不可欠）

- ・緊急連絡方法の確立（軸となる手配者を特定）  
体制、無線、出動・待機のサイン、ヘリ着陸マークの確認
- ・緊急輸送手段の確保と医療機関の特定  
ヘリコプター、人力、（車）
- ・緊急用資金の確保と預託  
生命保険加入一人50万円（掛金一人5万円）遭難対策用  
ヘリコプター・フライト費用\$3,000を預託（ヒマラヤンジャーニー）

## 遭難事故後の報告

- ・ネパール政府 → 英文報告書提出（写真付）
  - ・日本大使館 → 和文報告書提出
  - ・ご遺族 → 遠征途中で隊長一時帰国  
遺品の引渡し、状況説明  
保険金返却（一人50万円）  
命日前後に訪問（10年間）
  - ・その他関係者 → 帰国直後に合同追悼会  
手書き報告書配布
- 20年後の報告 → 「青春のヒマラヤに学ぶ」出版

## 現代ヒマラヤ登山が **高所遠足** といわれるゆえん

- 1) **エージェント**に対価を支払ってマネジメントをゆだね、登山者は**単純行為者**となった
- 2) そのことは、登山者の**人間力形成**へのチャンスを失い、登山のもたらす**文化的価値**を低下させている
- 3) **商業化**(ツアー登山等)は、有名場所に集中し、山岳に**日常性**を持ち込み、山岳の**非日常的体験の場**を失わせ、人間総合力を弱めている

## では！ どうすればよいか・・・

- 1) **非日常的山岳環境の確保**  
非日常環境(冒険・探検)保全区域に、日常環境(日常生活)を持ち込まない(**非日常的環境確保**)
- 2) **受益者負担の原則**
  - ・環境利用料(例＝登山税)
  - ・入場料、施設利用料(水・トイレ・宿泊)
- 3) **環境(山岳)文化の啓蒙**
  - ・日常生活と非日常生活を意識して切り替える
  - ・環境(山岳)文化を普及(**意識**)させる

# 自己責任

< 責任には・・・負える **限界** がある >

**負える責任**(限界) : **相対的限界**(復元可能)  
・リスク・マネージメント

**負えない責任**(限界) : **絶対的限界**(復元不可能)  
・死・破壊・喪失・etc  
・クライシス・マネージメント

**冒険・探検する時は責任の限界を意識し、  
出来る時、できる事の最善を尽くす** ←出来ない事の方が多い

**もし失敗した時  
リーダーは**

- 適切な批判には耳を傾ける
- ・ **不適切な批判は無視する**
  - ・ 合理的・論理的に検証し次に生かす
  - ・ **時を得る(心の沈静)**

## 人生はいつも山登り

- ・ **山頂** = その時々**の目標**
- ・ **荷物** = その時々**に背負っている責任**
- ・ **登山** = **自然に逆らって(不条理)目標を目指す**  
だから当然、危険と背中合わせ！・・・ 逆説の美学

- ◆ **楽しみ**は後からやってくる ← **だから最初は苦しい**
- ◆ **一つの目標**が終わると、**次の目標**が見える
- ◆ **究極の目標** → 実は「・・・ **何もない**」

**だれも人生の予知はできず、  
苦しくもあり、また楽しくもある**

# 地球温暖化によるヒマラヤ氷河湖の拡大

ツラギ氷河湖の拡大比較報道写真 (朝日新聞 2007. 12. 25)

## 1978年のツラギ氷河湖



29年前

1978年にこの巨大な氷河湖が撮影された。ツラギ氷河の縮小が確認できる。

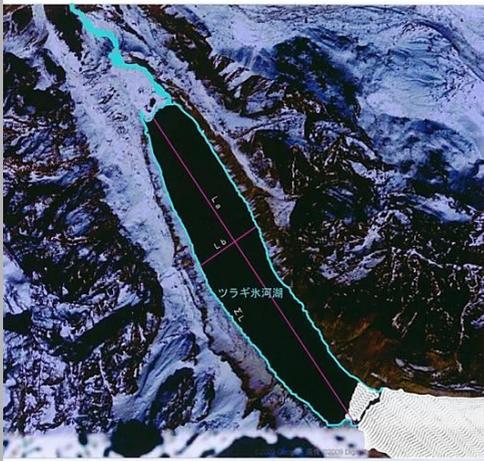
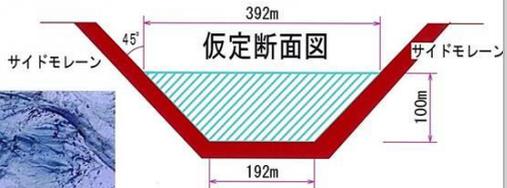
## 2007年 ツラギ氷河湖は約2倍



1978年 ツラギの会 (横浜山岳協会) P29 南西壁登山隊ルート

- 1978年8~9月登攀ルート : ツラギの会 (隊長: 田中文夫)
  - 員上、キャンプ (3, 950m)
  - ▲ BC ベースキャンプ (3, 950m)
  - ▲ C1 第1 キャンプ (4, 620m)
- 作図: 田中文夫

## ツラギ氷河湖 : 2009年 : Googleより



### 推計データ

面積	: A ≅ 0.964 [km <sup>2</sup> ]
	〈東京ドームの20倍〉
周囲の長さ	: ΣL ≅ 6.033 [km]
直線の長さ	: La ≅ 2.460 [km]
最大の幅員	: Lb ≅ 470 [m]
平均の幅員	: Lb ≅ 392 [m]
深さ	: 不明 (想定≅100m)
推定断面積	: D ≅ 29,200 [m <sup>3</sup> ]
推定保水量	: ΣW ≅ 71.832 [Mt]
	〈東京ドーム58個分〉
湖面の標高	: H ≅ 4,060 [m]
NAJEの標高 (麓の部落)	: h ≅ 2,200 [m]

## 氷河湖貯水量による 発電量の推計

### 【その1】単純計算の例 → 氷河湖位置エネルギーによる発電能力

- ・ 湖面標高=4,060 m、下流のナジェ部落との標高差=2,200 mとして
- ・ ドナコーラの水量=20 m<sup>3</sup>/s、発電機効率=0.7とすると、

① 発生電力量=9.8×2,200×20×0.7 ≒ 301[Mw] ≒ **30万Kw**  
・ 原発1基=100万Kwとすれば、その 1/3 に相当

② 年間発生電力量 = 301×24×365 ≒ 2.63 [Twh/年]

### 【その2】下流に小水力発電所を設ける例 → 1か所当たり発電量

- ・ 取水口と発電機の標高差=100 mとして
- ・ 導入間の水量=1 m<sup>3</sup>/s (500φ、V=5m)、発電機効率=0.7とすると、

① 発生電力量=9.8×100×1×0.7 ≒ **686 Kw**  
・ 1家族=3 Kwとすれば、268 家族に相当

② 年間発生電力量 = 680×24×365 ≒ 6.0 [Gwh/年]

**1,978~P29南西壁登山**



**29年後**



**2,007年のネパール風景**



2007年6月

# 既存の 水力発電所

カトマンズ郊外 → KHOPASI



1956年(51年前)  
ソ連援助で設置の  
ダム式水力発電所  
800kw × 3基  
= 2,400kw



現在 : 800kw

<1基のみ運転中>

発電電圧: 6,300 v

送電電圧: 11,000 v

配電電圧: 1,100 v

受電電圧: 415 v

220 v



# 世界の情報へ コンタクト



▲ホテルのロビー ▼郊外の住居 ▼郊外の村 ▲尾根筋の家



# ガパンは日本と同じ価格

1リットル Rs70 ⇔ ¥140

▼それでもGスタンドに群がる

12階建  
高層ビルの建設▼



# 政府援助によるトイレ普及

▼古都の民家用トイレ

村の茶店のトイレ▼



2004年 聖隷浜松病院で心臓手術  
三尖弁閉鎖症 ～ 明美ちゃん基金(産経新聞提唱)  
その後の **ウジラ** さん家族 ⇐ 2007年

奔走した ▼加藤(田近)真知子 さん(カナダ移住の秋田美人)

ヒラ ウルミラ マンジラ **ウジラ** ▼



**田植えは** → かつて日本の風景



## カトマンス郊外の田園風景



長時間のご静聴  
誠にありがとうございました

ネパールヒマラヤ **P29南西壁登山**

秦野戸川公園パークセンター

2016年4月9日

ツラギの会 P29南西壁登山隊長＝田中 文夫  
日本山岳文化学会 会員

## 講演—2

# スカイランニングとは

講演者：岩橋 岳一

岩橋 志帆

講演内容：トレールランニング（略称＝トレラン）は知られていますが、スカイランニングはまだ知られていません。

すでに日本スカイランニング協会は設立されており、世界大会へ出場しています。

今回は、スカイランニングの概要説明をしました。



スカイランニングマガジン



岩橋志帆さん



講演風景

# スカイランニングとは？

スピード登山

Fast  
&  
Light



- ①スカイランニングスタイルについて
- ②スカイランニングレースについて
- ③競技団体とその活動内容について
- ④山岳文化としてのスカイランニング

## ①スカイランニングスタイルについて



## スピード登山(Fast & Light)形態

～より軽い装備でより速く駆け登り・駆け下る～

## スカイランニングのフィールド

標高2000m以上の高所山岳

標高差のある急峻な登山道

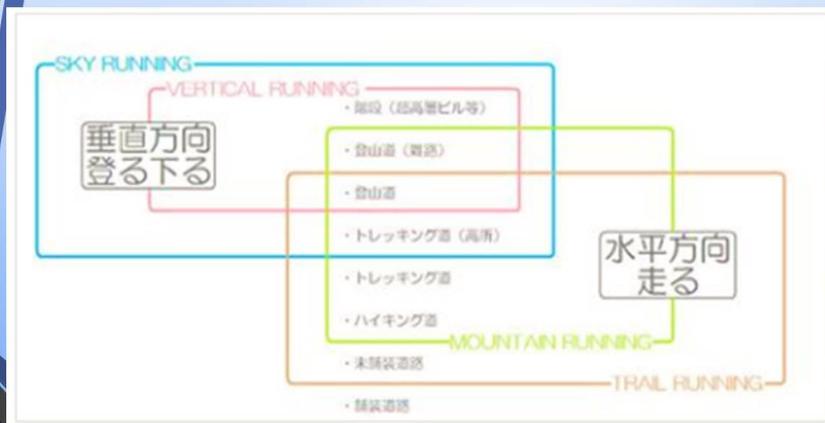
歩く、走る、跳ぶ、滑る、攀じ登る

垂直方向のマインド

## トレイルランニング

山野・未舗装路などを走り廻る  
必ずしもピークハントにはこだわらない

## スカイランニングの概念図



## スカイランニングが生まれた背景

その昔...

山岳民族は生活手段として山岳を駆け巡っていた。

## 100年前. . .

1903年 イギリス・ベンネイビス山での登山競争

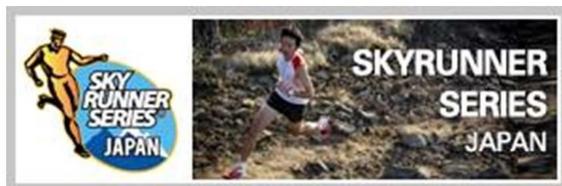
1913年 富士登山競争が始まる

## 20年前. . .

イタリアのアルピニストたちが追求した  
登山スタイル（ファスト&ライト）が  
スカイランニングの始まり

## ②スカイランニングレースの紹介

- レースの種目
- 海外のレース状況
- 国内のレース状況



## 主なスカイランニングレースの種目

- パーティカル
- スカイレース
- スカイマラソン
- ウルトラスカイマラソン

## バーティカル

- 標高差 1 0 0 0 m 以上
- 距離 5 k m 未満
- 平均斜度 2 5 % 以上の  
斜面を駆け登るレース



## スカイレース

- 距離 2 0 k m 以上
- 累積標高差 1 2 0 0 m 以上



## スカイマラソン

- 距離が30 km以上
- 累積標高差が2000 m以上



## ウルTRASカイマラソン

- 距離50 km以上
- 累積標高2500 m以上



## 海外のスカイレース

### SKY

- April 30 - [Yading Skyrun](#) - 29 km, Sichuan - China
- May 22 - [Maratón Alpina Zegama-Aizkorri](#) - 42 km, Zegama - Spain
- June 26 - [Livigno Outdoor Race Experience](#) - 30 km, Livigno - Italy
- July 17 - [Dolomites SkyRace®](#) - 22 km, Canazei - Italy
- July 31 - [SkyRace® Coma Pedrosa](#) - 22 km, Andorra
- August 20 - [Matterhorn Ultraks 46K](#) - Zermatt - Switzerland
- September 3 - [The Rut 25K](#) - Big Sky Montana - USA
- October 15 - [Limone Extreme SkyRace®](#) - 23 km, Limone sul Garda - Italy

## EXTREME

August 7 - [Tromsø SkyRace®](#) - 50km, Tromsø - Norway  
August 28 - [Kima Trophy](#) - 50 km, Valmasino - Italy  
September 18 - [Salomon Glen Coe Skyline](#) - 53 km, Glen Coe - Scotland

## ULTRA

May 7 - [Transvulcania Ultramarathon](#) - 75 km, La Palma - Spain  
June 4 - [Ultra SkyMarathon® Madeira](#) - 55 km, Madeira - Portugal  
July 10 - [High Trail Vanoise](#) - 68 km, Val d'Isère - France  
September 4 - [The Rut 50K](#) - Big Sky, Montana - USA  
September 24 - [Salomon Ultra Pirineu](#) - 110 km, Bagà - Spain

## VK

May 5 - [Kilómetro Vertical Transvulcania Binter](#) - La Palma - Spain  
June 24 - [Santa Caterina Vertical Kilometer](#) - Sondrio - Italy  
July 8 - [Kilomètre Vertical Face De Bellegarde](#) - Val d' Isère - France  
July 15 - [Dolomites Vertical Kilometer®](#) - Canazei - Italy  
August 5 - [Blaman Vertical](#) - Tromsø - Norway  
September 2 - [Lone Peak Vertical Kilometer®](#) - Big Sky, Montana - USA  
October 14 - [Limone Extreme Vertical Kilometer®](#) - Limone sul Garda - Italy

## 国内のスカイランニングレース

スカイランナー・ジャパン・シリーズ (SJS)

### SKY

5/21 経ヶ岳パーティカルリミット

(Kyogatake Vertical Limit) 21km ±1650m 長野県

6/12 菅平スカイライントレイルランレース

(Sugadaira Skyline Trailrun Race) 44km ±2500m 長野県

7/3 びわ湖バレイスカイレース

(Biwako Valley SkyRace®) 20km ±2000m 滋賀県

9/4 蔵王スカイレース

(Zao SkyRace®) 20km ±1400m 山形県

10/23 西米良スカイランニングクエスト

(Nishimera Skyrunning Quest) 38km ±3000m 宮崎県

## VERTICAL

- 5/3 上田バーティカルレース  
(Ueda Vertical Race) 5km + 1000m 長野県
- 6/4 Mt.Awa Vertical Kilometer® 5km + 1100m 新潟県
- 7/2 びわ湖バレイバーティカルレース  
(Biwako Valley Vertical Race) 4km + 900m 滋賀県
- 9/3 蔵王バーティカルレース  
(Zao Vertical Race) 4.6km + 900m 山形県
- 10/16 尾瀬岩鞍バーティカルキロメートル  
(Oze Iwakura Vertical Kilometer®) 5km + 1000m 群馬県

## 日本選手権 (Japan Championships)

- 5/3 YOUTH : 上田バーティカルレース  
(Ueda Vertical Race) 5km + 1000m 長野県
- 9/3 VERTICAL : 蔵王バーティカルレース  
(Zao Vertical Race) 4.6km + 900m 山形県
- 9/4 SKY : 蔵王スカイレース  
(Zao SkyRace®) 20km ± 1400m 山形県
- 10/22 ULTRA : モントレイル志賀高原エクストリームトレイル  
(Montrail Shiga-Kogen Extreme Trail) 60km ± 3000m 長野県

### ジャパンカップ (Japan Cup)

7/22 富士登山競走 (Fuji Mountain Race) 21km + 3000m 山梨県



## ③ スカイランニングの競技団体とその活動について



## ISF（国際スカイランニング連盟）



- ・ 2008年、高地スポーツ競技組織（FSA）の後継組織として設立
- ・ 国際スカイランニング及びそれに類した山岳スポーツ活動の統治と管理
- ・ 競技会のルールと基準の確立と維持
- ・ 競技者の育成、スカイランニングの普及・発展活動
- ・ 各国の競技団体やオーガナイザーに対し活動の権限を与える

## J S A （日本スカイランニング協会）



## J S A の活動内容

- ・レース活を通じてスカイランニングの普及
- ・環境マナー、安全面の啓発活動
- ・次世代を担う子供たち（ジュニア）の育成
- ・地域スポーツの発展・貢献

## JST（ジャパン・スカイランニング・チーム）

- ・ JST北海道
- ・ JST東北
- ・ JST北関東
- ・ JST南関東
- ・ JST甲信越
- ・ JST東海
- ・ JST北陸
- ・ JST近畿
- ・ JST中四国
- ・ JST九州

## JSTの目的

- ・ JSTアスリートが目指すものは競技力の向上だけではありません。JST登録者は実力・実績に関わらず全員「JSTアスリート」と位置づけられます。これは「スカイランニングを通して自分自身を高めていく」というJSTの発足時の理念がもたっています。山岳における知識や判断力、仲間との協調性、日常生活での自律性、企画力や実行力、強い故の謙虚さ・・・高める力は十人十色となりますが、いずれにせよ、スカイランニングを通して豊かな人間となることがJSTアスリートの目的となります。

## JSTメンバーによる清掃登山活動



### ④山岳文化としてのスカイランニグ

- 一般登山者との共生・共動
- 環境保全
- スカイランニグは山岳文化となりうるか？

講演者：中村純二（総隊長）

中村あや（調査隊員）

名称：東京大学スキー山岳部カラコルム学術登山隊 1984年

主催：東京大学運動会内 東京大学山の会

隊の構成：総隊長＝中村純二

隊長＝永田東一郎

隊員＝4名

医師＝1名

調査隊員＝中村あや

連絡将校＝陸軍大尉1名

目的：K7初登頂、チャラクサ氷河学術調査



中村先生

あや様



聴講者



講演会場

## 講演者紹介

# 中村純二 先生

東京大学名誉教授  
理学博士(宇宙光学)

\*\*\*\*\* 南極～山岳関係略歴 \*\*\*\*\*

第1次～第3次南極観測隊員 (第3次南極越冬隊員)  
東京大学スキー山岳部カラコルム学術登山隊1984総隊長  
東京大学スキー山岳部長  
日本山岳会 副会長  
現在 = 日本山岳文化学会 理事

カラコルム ヒマラヤ

## チャラクサ氷河 探索の旅

講演 = 中村純二 先生

2016年4月9日  
秦野戸川公園パークセンター

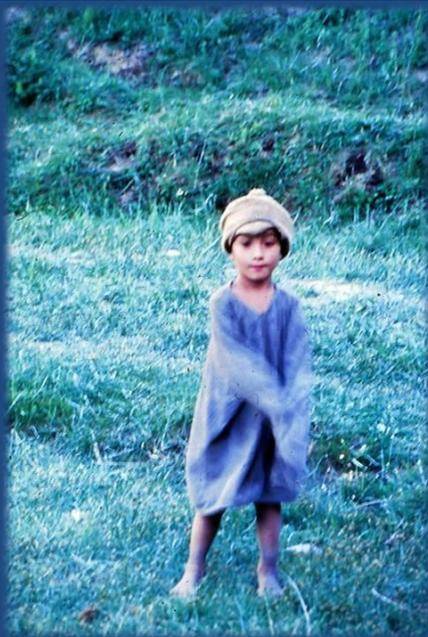
主催 = 日本山岳文化学会 有志

マツジャーブルム 7,821m



フーシェにて





フーシエにて

ヤク



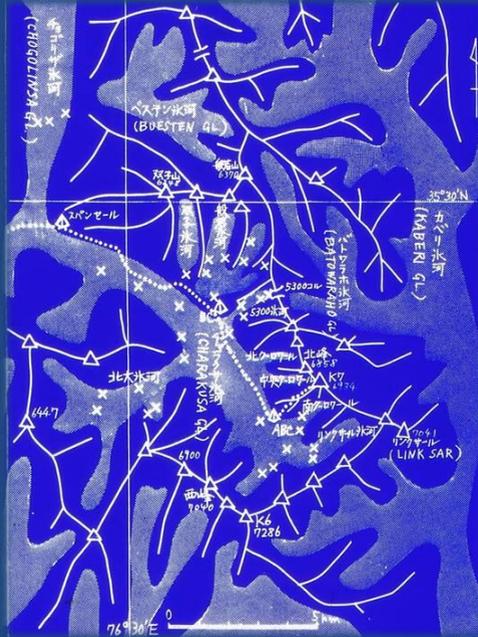
## チャラクサ氷河のアイスフォール



## ベースキャンプ (BC)



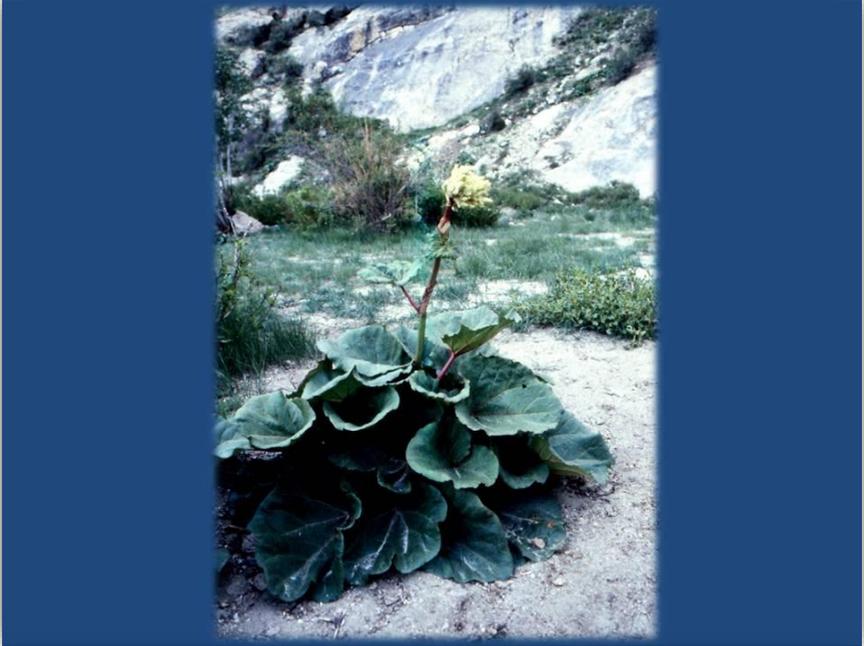
# チャラクサ氷河周辺図



ケシ

# サリックス (ヤナギ)





ヒロバヤナギラン

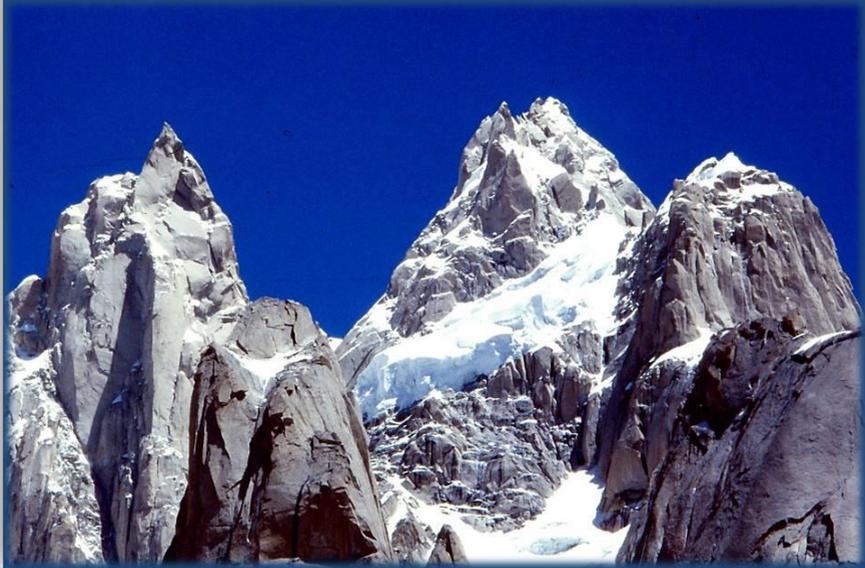


K7 北 稜

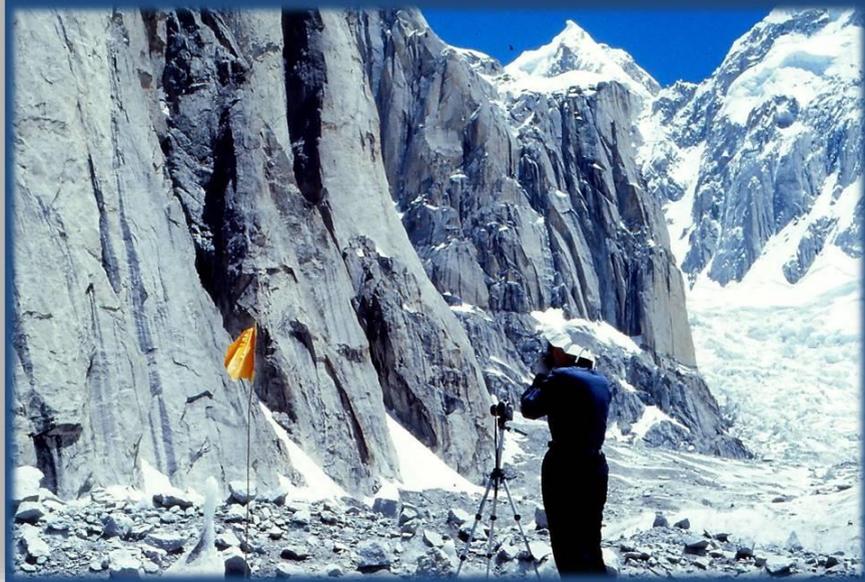


▼北 峰

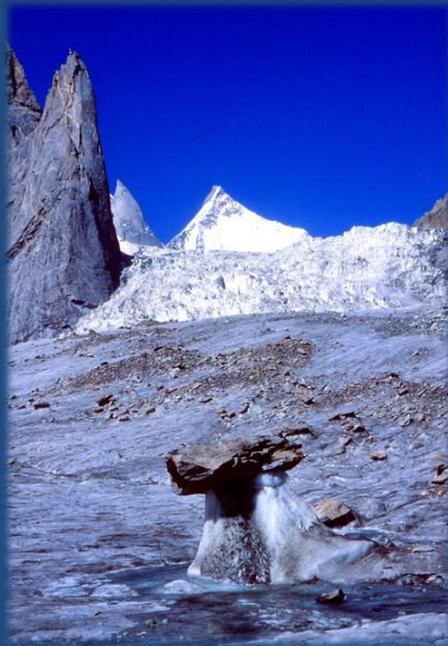
▼K7 6,934m



▼ 氷河調査基点「A」



# キノコ岩（モレーンによる）



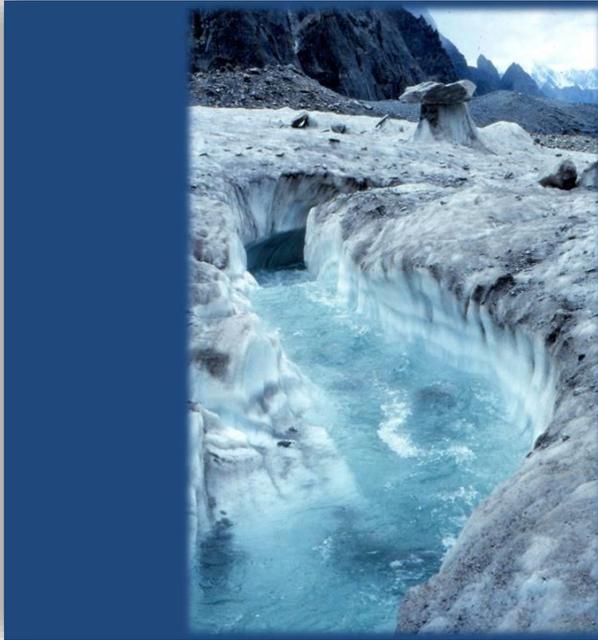
キノコ岩



キノコ岩

## 氷河湖





北大生が遭難死した水流  
(北大氷河)

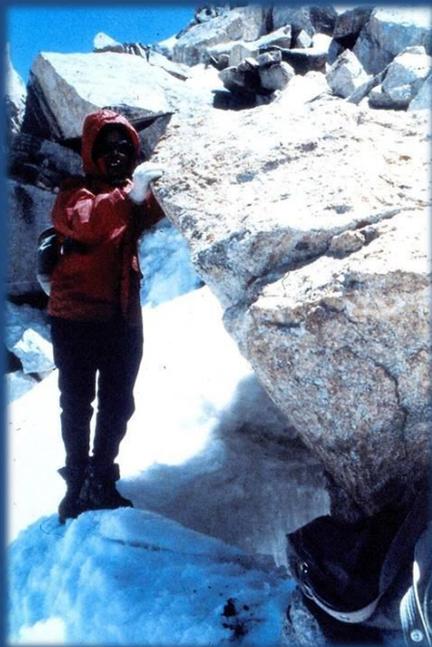
▼ 氷河調査基点「B」



## 般若の斜面



稜線に出る



稜線を登る



稜線にて (5500m)

稜線より バトワラホ峰 ▼



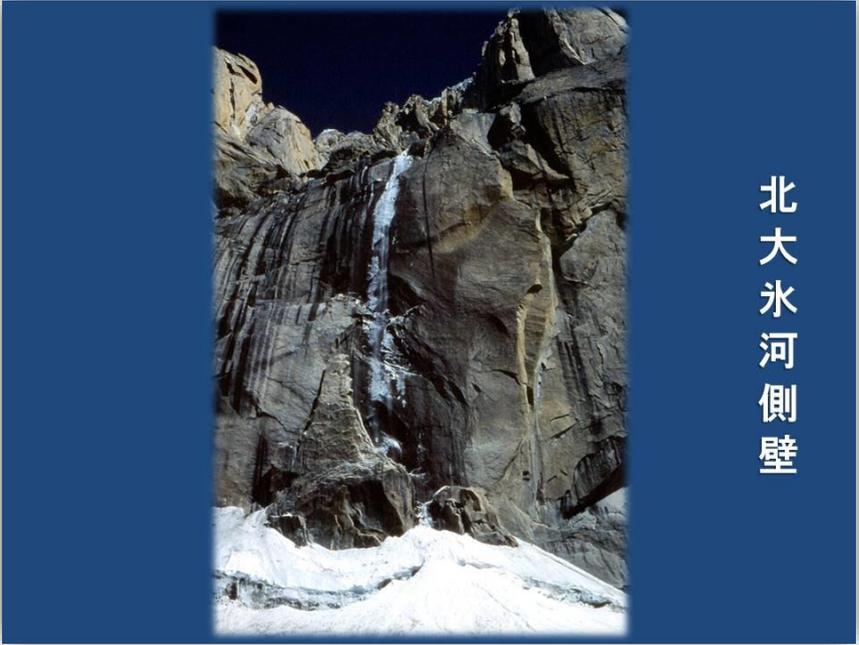
北大氷河入口



# 北大氷河を登る



北大氷河



北大氷河側壁



氷河のうねり

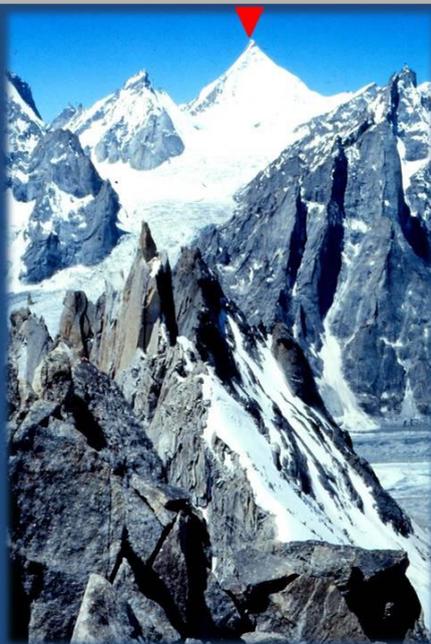
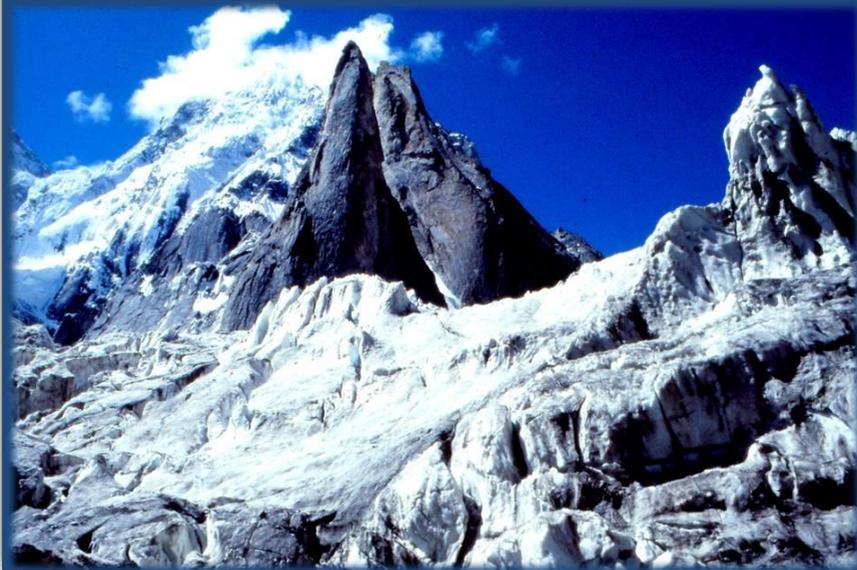
北大氷河にテント（4,750m）



北大氷河上部



# 北大氷河の針峰



北大峰  
(6447m)

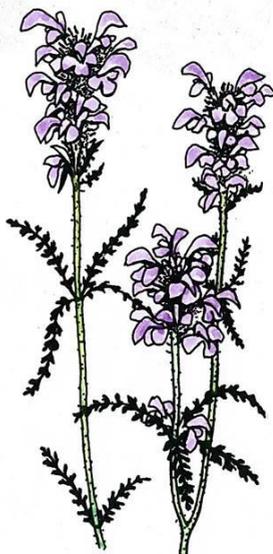
**スケッチー1**  
中村あや



紫がかった紅色の花  
【サクラソウ科】



現地名：セクルース  
【タデ科】  
酸味があり、煮てチャパ  
ティにのせて食べたり、  
飲み物にする。

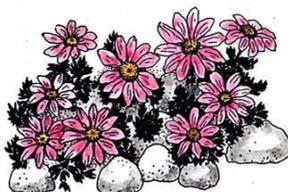


淡い紫色の花

**スケッチー2**  
中村あや



現地名：ミリー  
紫色の花



現地名：ピチャン  
ピンクの花



リクリス・マリロリザ  
マンテマの仲間

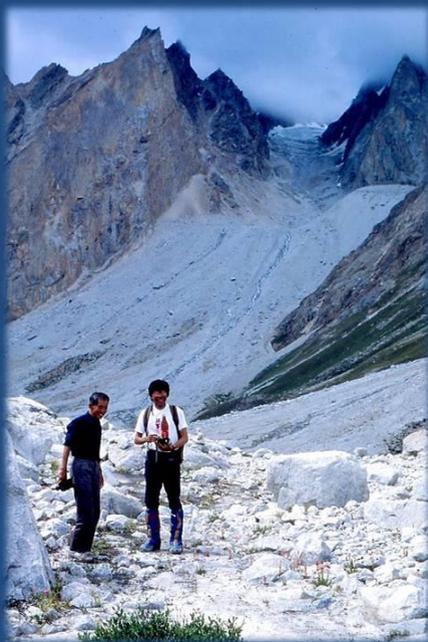
BC 付近の花



降雪の日のBC



# 雪の積もった朝



ABC(4650M)にて  
中村と千葉隊員

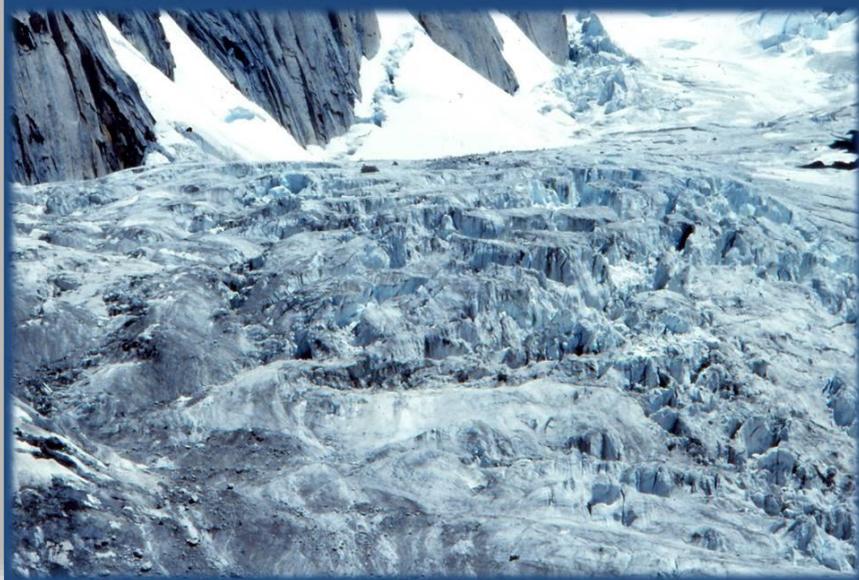
## フランス隊と2日間 チョゴリザ氷河を歩く



## チョゴリザ氷河入口



チョゴリザ氷河 アイスクォール



チョゴリザ氷河

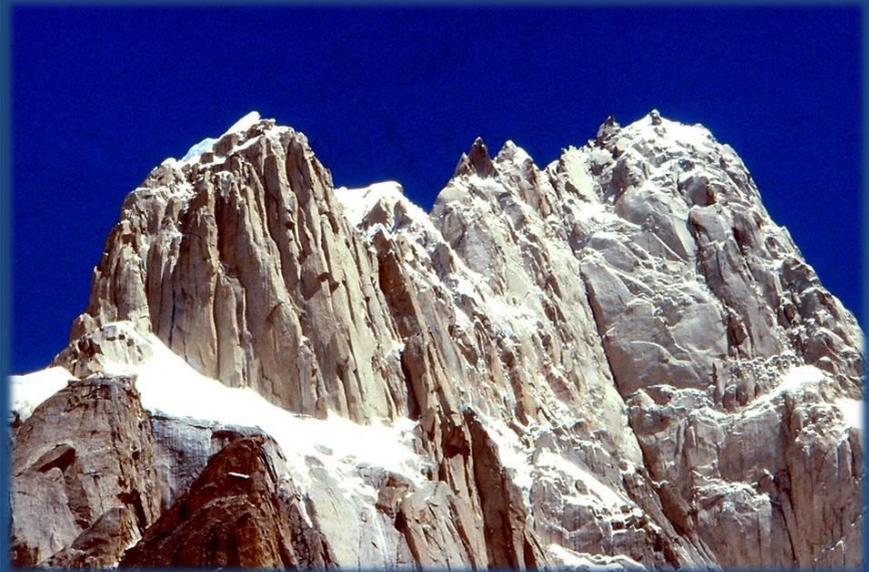
## チョゴリザ氷河 引返点 (4,000m)



## フランス隊遭難地からのヘリコプター

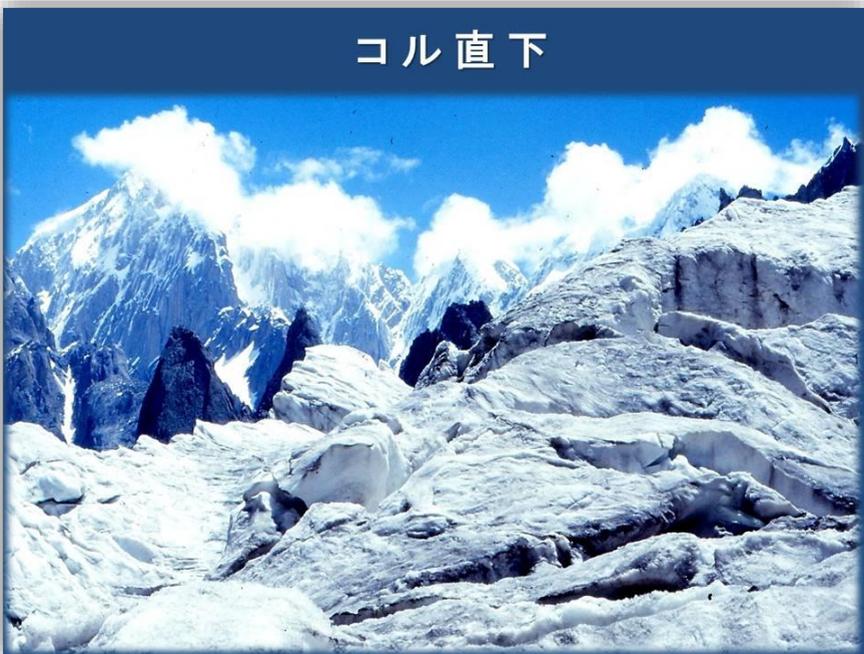
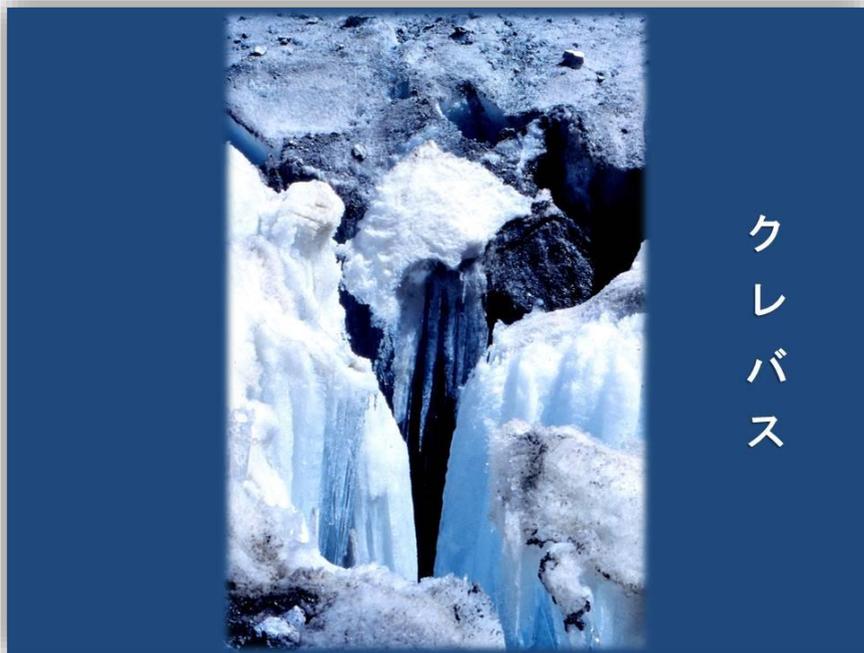


## K7 北稜



## 5,300m 氷河の登り





5, 300mのコルよりカベリ氷河を見下ろす  
(1982年 鳳翔山岳会隊のBC)



5, 300mのコルからバドワラホ稜線を見る





リンクサール氷河

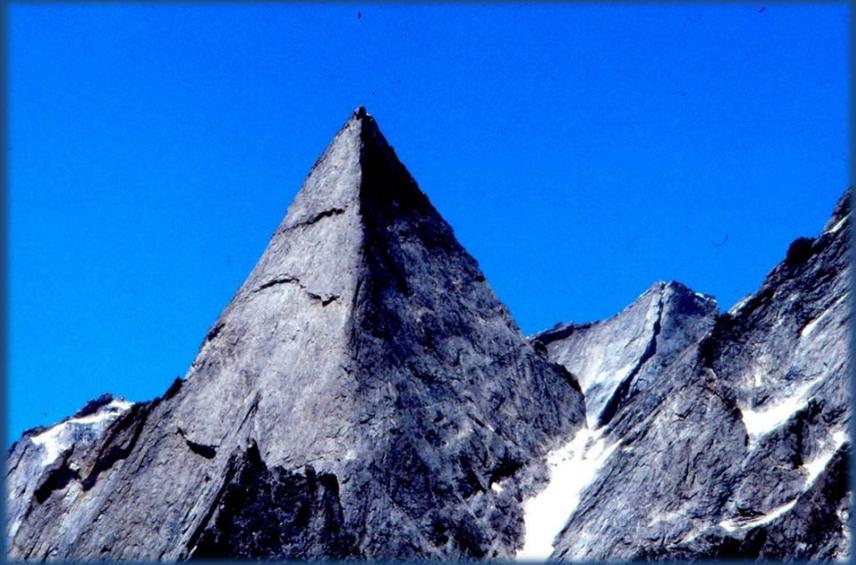


氷河上の川



側  
壁

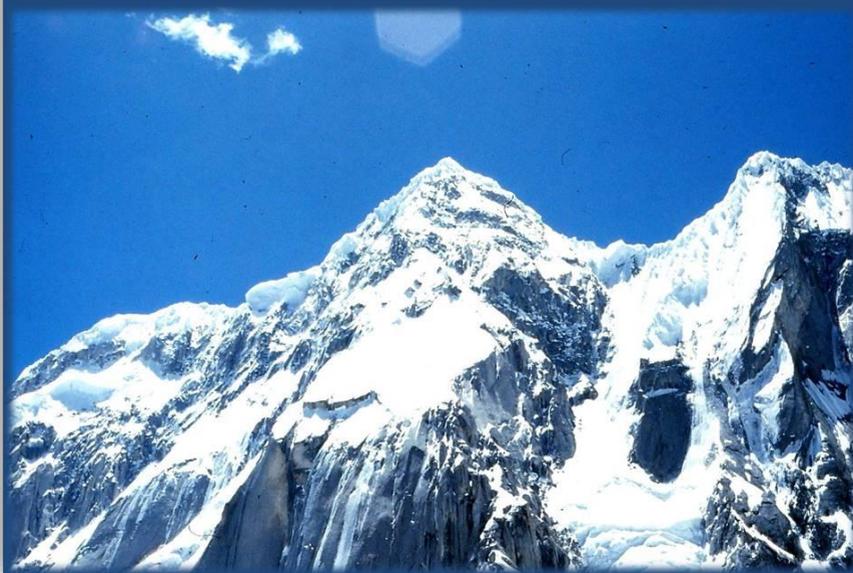
側 峰



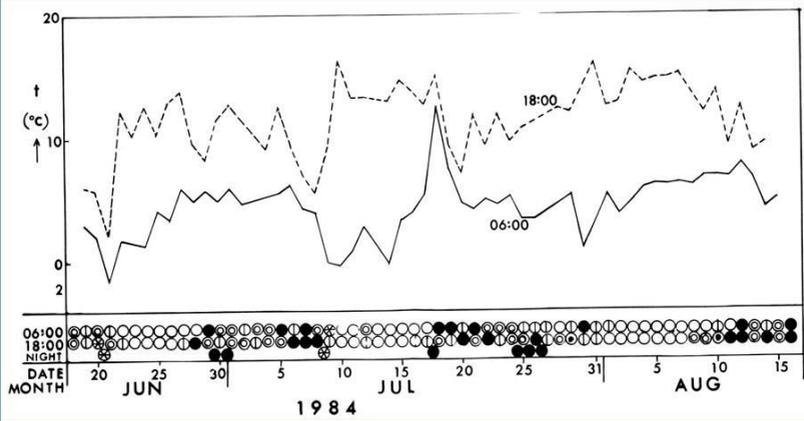
リンクサール 東南稜



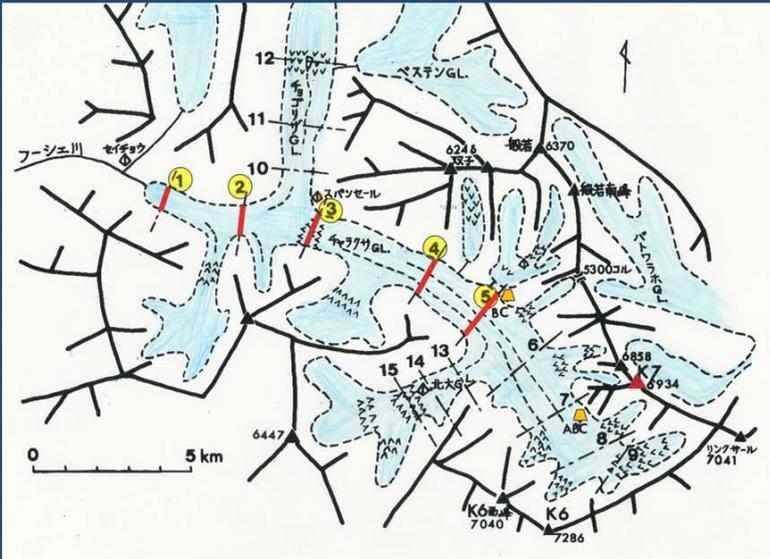
リンクサール ▼ (7,041 m)



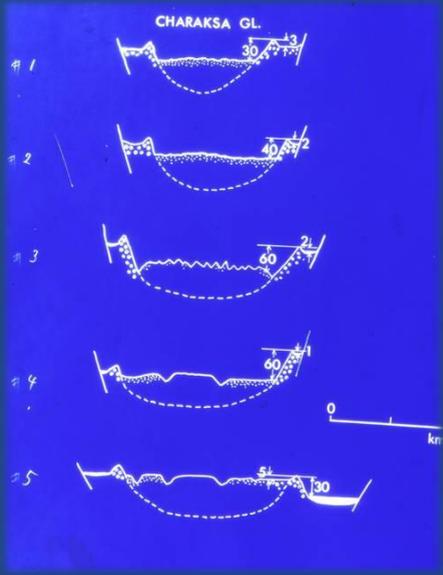
# 気温変化



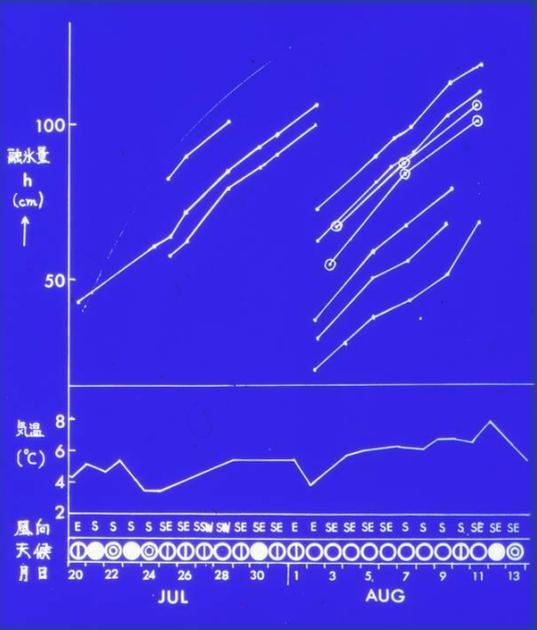
# チャラクサ氷河断面スケッチ位置と番号



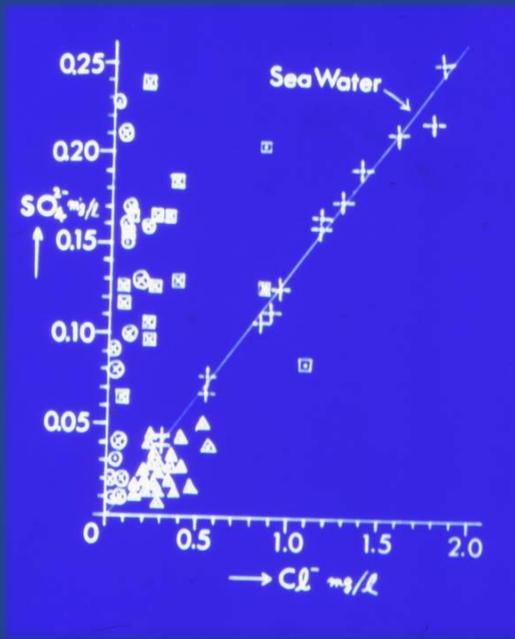
# チャラクサ氷河の断面略図



- ① 舌端 30m
- ② 下流 40m
- ③ アイスフォール 60m
- ④ 中流 60m
- ⑤ BC付近 30m



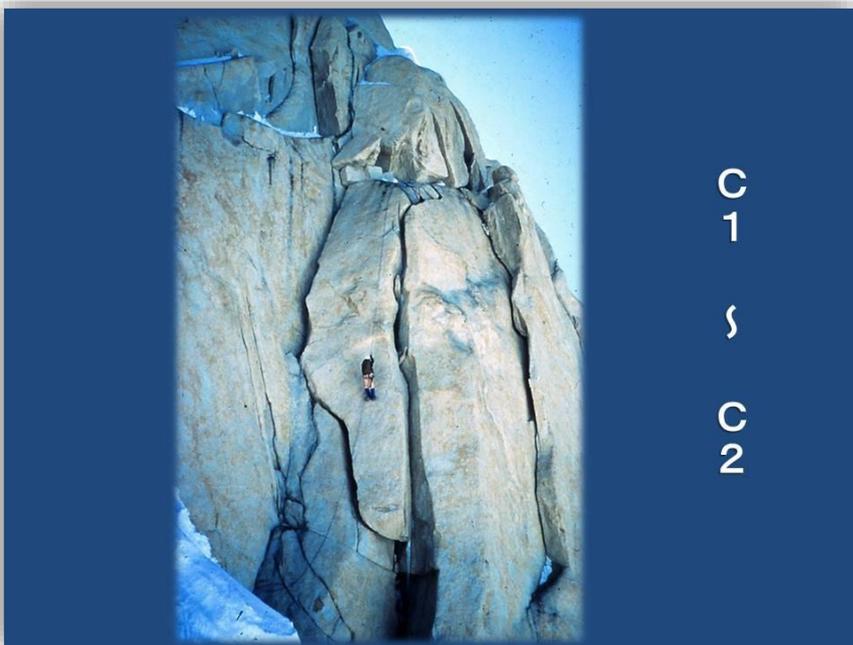
氷河表面の融解速度



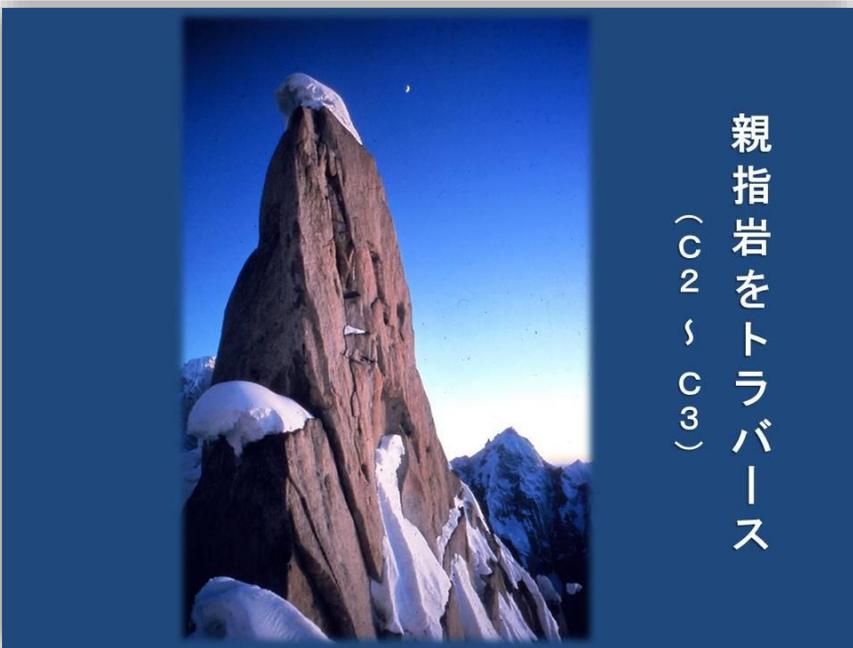
「氷試料」の科学分析結果



C  
1  
↘  
C  
2



C  
1  
、  
C  
2



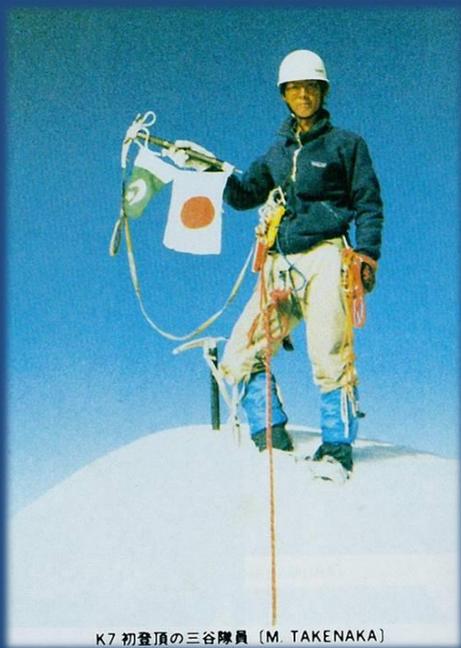
親  
指  
岩  
を  
ト  
ラ  
バ  
ー  
ス  
  
(C  
2  
、  
C  
3)



親指岩のヘツリ



C  
3  
↳  
C  
4



K7初登頂の三谷隊員  
(1964)

K7 初登頂の三谷隊員 (M. TAKENAKA)

C5～頂上よりK2(8,611m)とチョゴリザ(7,654m)



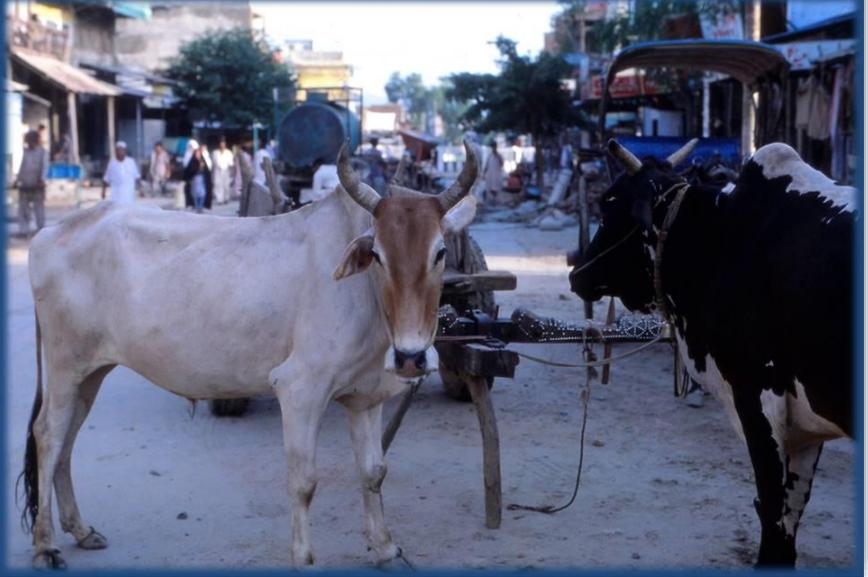
## タクティバイの仏教遺跡



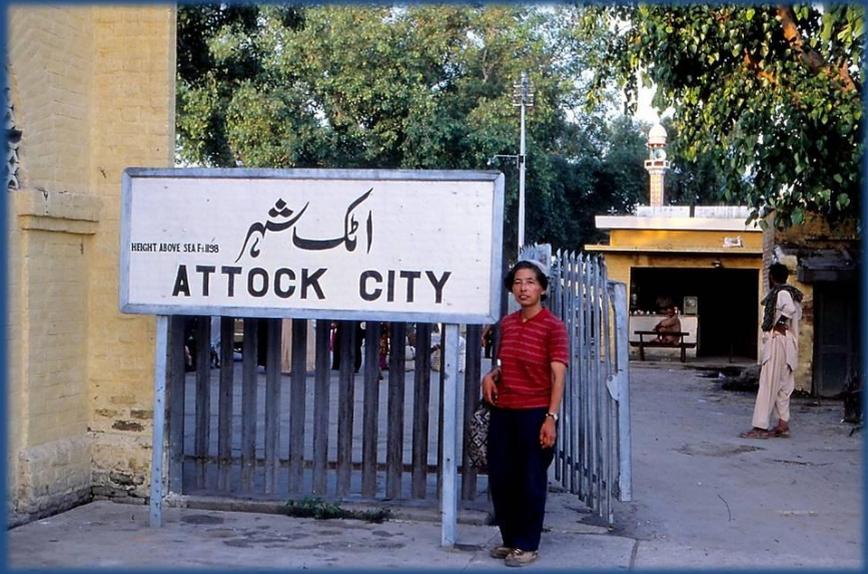
## イスラムにより頭を壊された仏像



# コブ牛



# アレキサンダーが到達したアトックシティー



## アトックシティーの馬車



## ラワルピンディの街角 羊の列

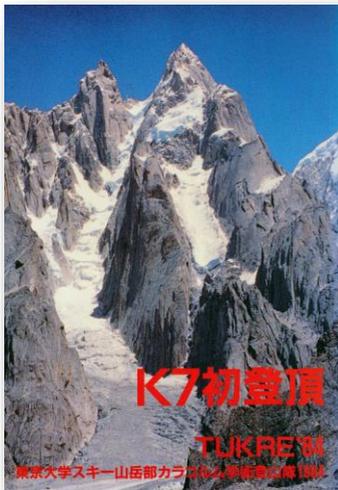


**ご 静 聴**

**ありがとうございました！**

**中 村 純 二**

日本山岳文化学会 有志  
2016. 4. 9



〈 K7初登頂 〉

東京大学スキー山岳部  
カラコルム学術登山隊

1987年3月20日

東京大学山の会＝発行

印刷＝正明堂・会津印刷所

(株)文秀社

非売品

## 丹 沢 山 麓 の 声

- ◎ 美しい花の中での素晴らしいお話や、おいしいお昼ご飯をいただき、楽しい一日を過ごすことができました。 (N・R)
- ◎ 講演に聞き入り、おおすみ山居の昼食、チューリップ園の散歩と、久々に自然の中の楽しいひとときでした。 (I・Y)
- ◎ チューリップが咲き乱れる、素敵な秦野戸川公園での講演会に参加させてもらい、とても良い一日を過ごさせていただき、ありがとうございました。満席の参加者があるとは思いませんでしたが、時節や場所や講演者などなどの企画が素晴らしかったと思います。また参加させていただきたいと思いますし、何かお手伝いでもありましたら、させていただきたいと思います。 (Y・T)
- ◎ “これが山岳文化だ” と教えられた一日でした。述べ 80 名の参加は初めてのことと思います。この労に敬意を表しながら、渋沢駅近くの居酒屋さんで、皆さんと歓談して帰りました。 (O・T)
- ◎ お天気も良く楽しい一日でした。伯父夫妻の相変わらず元気な様子を見ることができ、心強く思いました。帰りは水無川の兩岸の桜並木を堪能しました。ちょうど満開で、枝垂桜もソメイヨシノも本当に見事でした。母ともども、今後もよろしくお願ひ致します。 (W・R)
- ◎ いい陽気のなか、すばらしい時間をありがとうございました。沿道の景色を見ながら、歩いて帰宅しました (A・M)
- ◎ チューリップもソメイヨシノもオキナ草も、自生ではないけれど植物の生命力に心動かされます。日常を離れて心遊ばせた一日は忘れがたく、改めて感謝申し上げます。 (H・C)
- ◎ 私にとりまして未知な世界、楽しく興味深いことだらけでした。お年を召されてもお元気にご活躍されているわけが理解できた気が致します。 (A・M)
- ◎ 公園内の百花繚乱を満喫し、おおすみ山居での仕出弁当と抹茶に舌鼓をうち、意義のある講演会を拝聴し、心からお礼を申し上げます。

P29 南西壁登山での氷河崩落による3 隊員の死亡事故に接し、山の遭難のもつ「生と死」の不変の重さを痛感しました。

サン＝テグジュペリの「星の王子さま」のことは、「心で見なければ、本当のことは目に見えない」を心の奥底にとどめながら、原書の「Le Petit Prince」や、1987.11.21 岩波ホールでのフランス演劇を思いだしながら、その折のシナリオを再び手に取って懐かしく眺め、余韻を楽しみました。（T・T）

- ◎ 講演会の内容も素晴らしかったですし、お花も見頃を迎え、天気・気温も良く、散策日和で、とても充実した休日になりました。

たくさんの方の参加者で大盛況でしたね。準備やご手配、とてもお忙しかったことと思います。お昼の時間もとても充実していました。食事まで春を感じる演出に大満足でした。（I・K）

- ◎ 普通ではとても触れることができないお話を聞かせていただき、ありがとうございました。参加されていた方の多くは長年本格的な登山をされている人達だったのだと思いますが、一時そのような方達に混ざっていたことは新鮮でした。興味深かったスライドの中で、10 人の登山パーティに必要な装備が5 t にもなることや、今ではもっと高いのですが、シェルパ賃金の安さにも驚きました。

後からやってきた家内とチューリップを見た後で川向うまで行き、春の一日を楽しむことができました。（K・Y）

- ◎ きめ細かいご配慮で、みなさん大変満足してお帰りになりました。中村先生の K7 は初めて見る映像スライドもあって、とても面白く聞かせていただきました。田中さんの P29 の計画から収束までの話しも、とても良かったです。山を知らない人もヒマラヤ登山の一部を垣間見て、とても感動しておりました。（S・M）

- ◎ 講演会はとても盛況でしたね。中村先生ご夫妻のお元氣な姿を拝見して、いつも元気づけられる気が致します。

今通っている禅寺の庭の正面に“無功德”という石碑があります。田中さんの講演を聞いていて、禅のにおいを感じました。これからもこのような機会をつくらせていただけることを、楽しみにしております。（K・S）

- ◎ 田中さまの P29 南西壁、岩楯さまのスカイランニング、中村先生のチャラクサ氷河探索の旅と、それぞれ意義深いお話を聞け、とても良い機会でした。

穏やかな気候の丹沢の麓で、すてきな一日を過ごさせていただきましたこと、御礼申し上げます。 (K・K)

- ◎ 講演会では貴重なお話を聞くことができました。また、久しぶりに大倉から眺める新緑の山々に、ゆったり気分の日でした。おおすみ山居の昼食もおいしく、私の山の会でもまた訪れようと計画しております。 (I・Y)

- ◎ 過日は貴重な講演会にお声をかけて下さり、ありがとうございました。

中村先生のお話に、私はただ驚くばかりでした。正直、想像を超えています。氷河探索中に会った婚約カップルが亡くなったお話を、サラッとされていましたが、常に死と隣り合わせであることを自覚した上での行動、と認識しているからこそなんですね。 (A・M)

【注 記】 住まいの近くにあるネパール料理店で知り合った彼女。米国人と婚約中で、渡米のビザ待ち。インドに旅し、ヨガの講師トレーニング中で、山ガール族とは異なる、個性派の彼女です。 (田 中)

- ◎ (1) あのような場で、スカイランニングについて PR する機会を設けていただき、そして改めて田中さんの P29 や中村先生の氷河調査等のお話を聞けて、感謝しております。海外での登山経験や国内においても、冬山経験がない私らにとっては興味津々、関心・感嘆することばかりです。

また講演会を開催されることがありましたら、ぜひ拝聴させていただきたいと思えます。できることは少ないですが、お手伝いもさせて下さい。 (岩 楯)

(2) 私らも練習会やトレーニングだけでなく、座学を実施しようと計画しておりました。JST (日本スカイランニング協会) においては、アルピニストでもある O 氏に登攀に関する技術的講習や体験談を、また、メンバーにいる気象予報士には山の天候などを聞いておりました。しかし本格的なリスク・マネジメントとなると、P29 の遭難体験談は別格でした。JST アスリートは冒険心が強く、危険個所の通過も技量的な問題はありません。しかしその危険個所で滑落したときの対応・対策については、正直何も考えておりません。その辺も考慮して、今後の活

動につなげる機会になればと思いました。 （岩 楯）

【注 記】 講演では、リスク・マネジメントとクライシス・マネジメントの違いを述べたかったのですが、時間が足りなくてうまく伝わらなかったようです。

（田 中）

【お礼に代えて】 有志代表幹事＝田中文夫

皆様から“良かった”というたくさんのお声をいただき、会員有志も盛り上げて下さり、誠にありがとうございました。

(1) 「講演者との交流時間をもうけてほしかった」というお便りがありました。

中村先生ご講演の中で質問等の時間をもちましたが、何の質問もありませんでした。P29 南西壁登山、スカイランニングは持ち時間が短く、最初から質問・応答をおこなう想定はしませんでした。

講演冒頭に述べましたが、春うららの中、屋内よりも屋外の花園で交流が図れればと、首下式名札を用意した次第です。

(2) 名簿の氏名と、その方の山との関わり要項のみを記載した名簿を配布したかったのですが、個人情報保護の関係から、今回は見送りました。方法はあるのですが、大変面倒な手続きとなり、躊躇しています。



## 第6回. 作治小屋で囲炉裏を囲み交流と

### 中村先生講演会&チューリップ球根植え

2016年11月2～3日＝田中文夫

「今年に入ってから急激に歩けなくなった」と93歳になられた中村先生。そこで、車でアプローチできる作治小屋宿泊計画と、翌日の講演会をセットで企画。

11月2日の夜は盛り上がり、午前様の1時まで。もちろん先生ご夫妻は早々に休まれ、同時に自家発電からランタンの灯火に変わります。翌朝は餅つき。つきたての餅がのどにつかえないように、小さくちぎります。あんこ、納豆、きな粉、大根おろしをからめ、その美味しさにみな舌鼓をうちます。しばらくすると中村先生は、スーと眠るように奥様に寄りかかり、意識が遠のきます。救急車騒動の一幕が開きますが、数分後に意識を回復された先生のご意思で、講演会は予定通りとします。空身となった救急隊には「つきたて餅」を手土産とし、講演会準備隊は救急隊を追い越します。230画面に及ぶ『北海道の山・今昔』の講演会は何事もなかったように進み、早めに終了しました。半世紀にわたり、お二人で北海道の山々を巡られた映像に、聴講者は等しく感銘を受けます。昼食の後、奥様もご心労と宿泊の疲労が重なって体調を崩され、チューリップ球根植えはキャンセルして自宅休養へと直帰します。そして夜、「休養したら良くなったので、予定通り長野へ出掛けます」のお電話。まさにタロ、ジロと一緒に南極探検も果たされた「超人」でした。老いゆく姿の合間をご一緒できたことが、何より後進者の貴重な体験でした。老いゆく姿は隠すのではなく、自然のままに朽ち行く変化を、身をもって示された中村先生ご夫妻でした。



夜の懇談会





### 夜の懇談会



### 朝の餅つき



集 合 写 真



か  
ら  
み  
餅



救  
急  
隊  
の  
検  
診



講演

## 北海道の山・今昔

講演者：中村純二

中村あや

講演内容：北海道の山を60余年前から登られ、今日に至るお話し。



## 北海道の山・今昔

講演 = 中村純二 先生

2016年11月3日  
秦野戸川公園パークセンター

主催 = 日本山岳文化学会 有志

青函連絡船の頃

# 北海道の山

青函連絡船（青森港出港）

1985.08



かむいこたん  
**神居古潭** (神の集落を意味)

**1985.08**



**神居古潭の峡谷**

**1985.08**

(緑泥片岩は1億年以上)

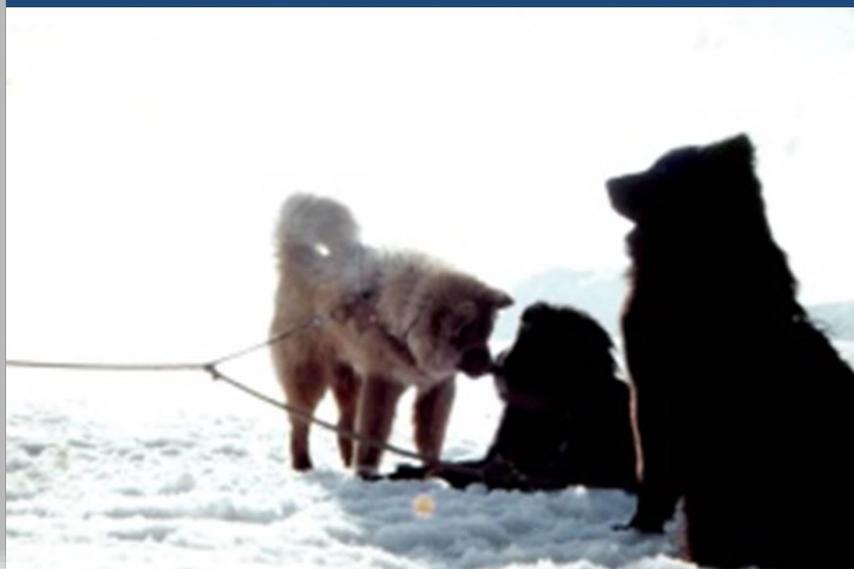


南極観測トウフツ湖訓練 1956.02

(朝日新聞社 組立ハウス)



樺太犬 (アンコとモク) 1956.02



トウフツ湖の夕暮れ 1956.02



(シュナイダースロープ)

前十勝岳

(1,760m)



1956.02

中立見  
中村

登別温泉 源泉 1997.05



登別温泉 (クマ牧場) 1997.05



襟裳岬全景 1997.05



襟裳岬の岩 1997.05



襟裳岬の牧場

1990.10



襟裳岬のキタキツネ

1990.10



アポイ岳 (810.6m)

1990.10



アポイ溪谷

1990.10



シラネアオイ

1990.10



アポイ岳 (810.6m) 山頂

1990.10



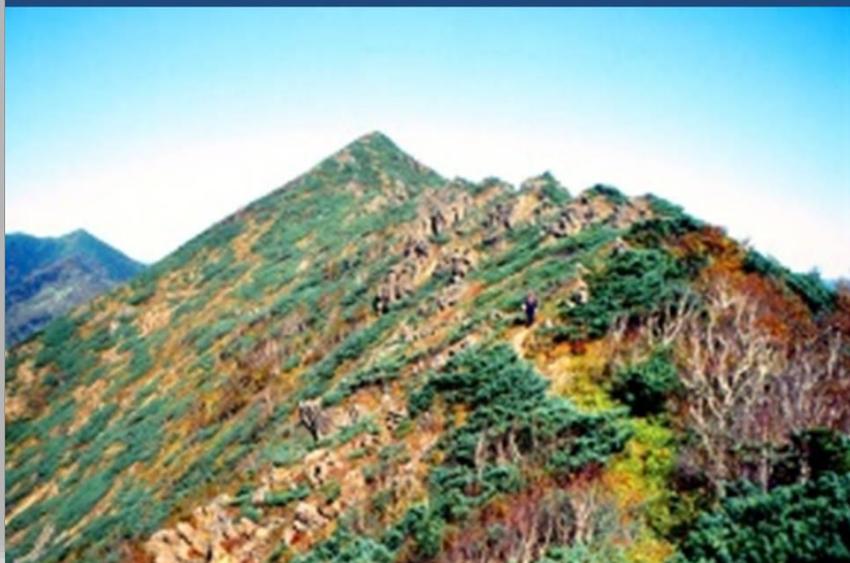
吉田岳 (825.1m) を望む

1990.10



吉田岳 (825.1m)

1990.10



吉田岳

(825.1m)

山頂



1990.10

霧多布岬の虹

1990.10



納沙布岬 1997.03



釧路湿原国立公園 1996.03



タンチョウヅル 1996.03



釧路湿原 1974.03



釧路湿原の流れ 1990.10



摩周湖 1974.05



屈斜路湖 1974.05



アトサヌプリ  
硫黄山 (512m) 1990.10



マツムシソウ 1990.10



コミヤマハンショウヅル 1990.06



オンネトー

1998.06



雌阿寒岳 小池

1998.06



雌阿寒岳火口と噴煙

1998.06



雌阿寒岳 (1,499m) 山頂

1998.06



ツガザクラ (斜里岳)

1998.06



斜里岳 (1,547m) 山頂

1998.06



網走 流水観測船 1997.03



流水原 (アザラシがいる) 1997.03



**トウフツ湖畔のトロッコ列車線路** 1997.03



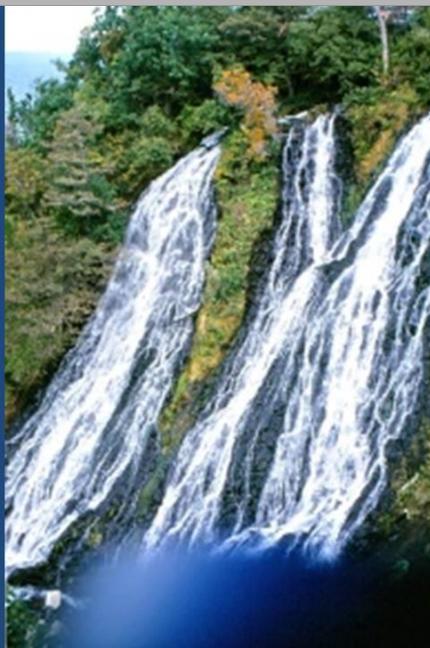
**ウトロ港** (夜は猛吹雪) 1989.03



知床半島 1989.03



オシンコシンの滝  
(双美の滝)



1990.10

羅 白 岳 (羅臼平より)

1990.10



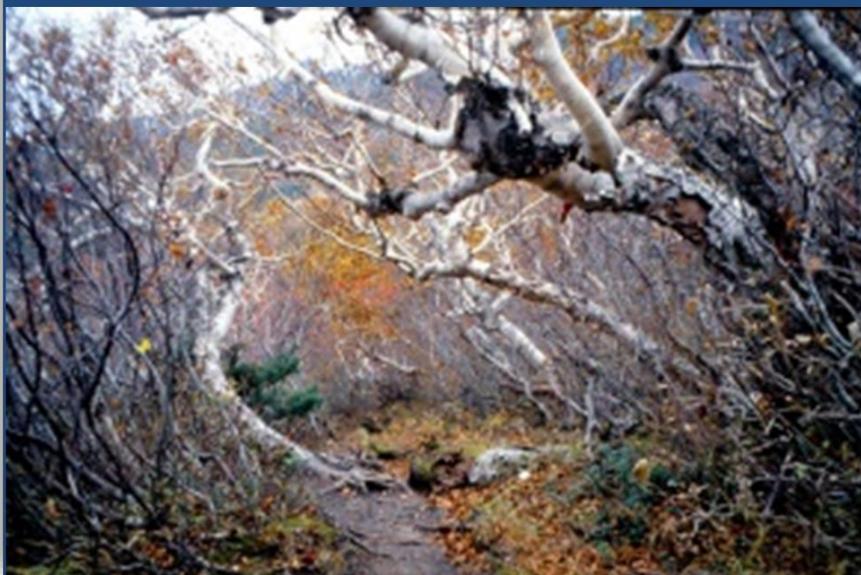
黄 菜

190.10



ダケカンバの林

1990.10



羅臼岳(1,661m)山頂

1990.10



おとふけ  
音更山 (1,932m)

1985.06



ユニ石狩岳斜面



1985.06

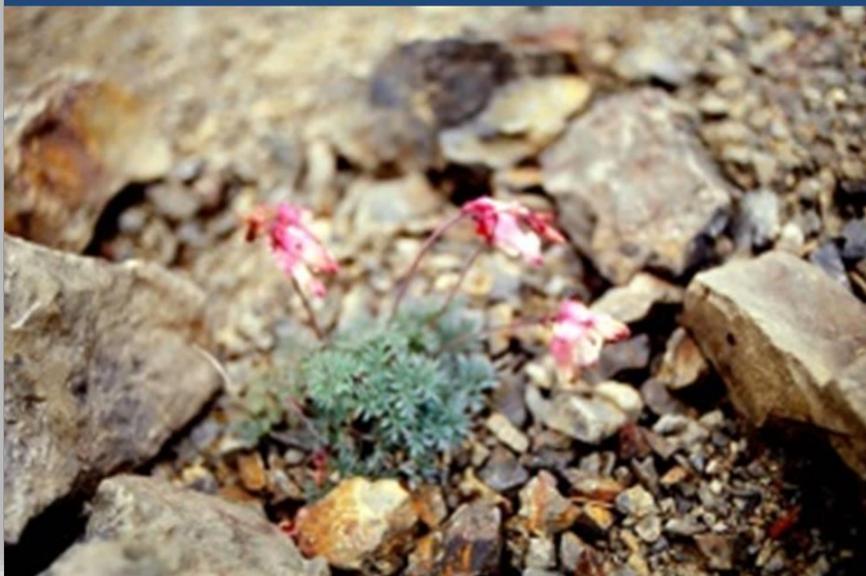
五色原

1985.06



コマクサ

1985.06



忠別岳 (1,963m) からの旭岳 (2,291m)

1985.06



トムラウシ山頂 (2,141m)

1985.07



# 高根ヶ原の道標

1985.07



# 美瑛岳

(2,052 m)



1985.07

**十勝岳 (2,077m) 大砲岩 1985.07**

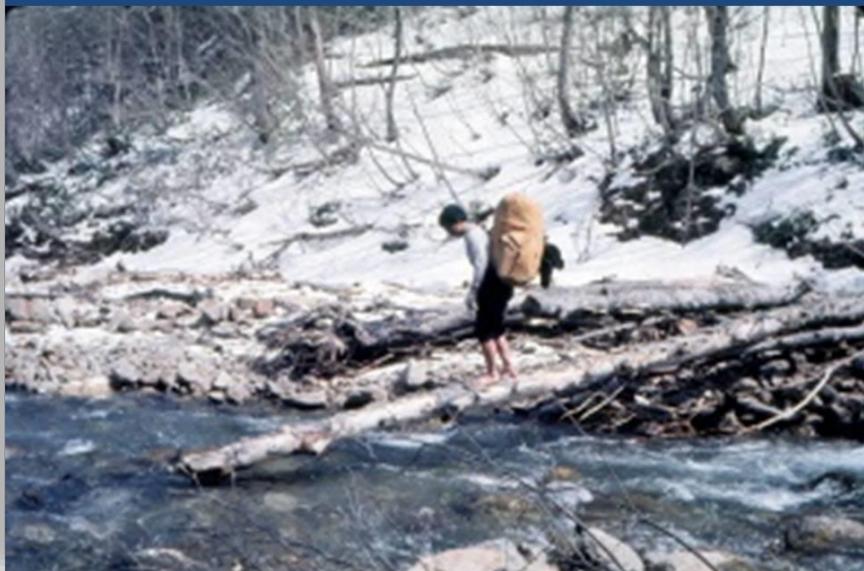


**札内川 林野庁山小屋 (500m) 1974.05**



札内川を遡る

1974.05



八ノ沢出合のテント

1974.05



コイカクシュサツナイ北稜

1974.05



コイカクシュサツナイ岳 (1,721m)

1974.05



**カムイエクウチカウシ山 (1,979m) 1974.05**



**ヤオロマップ山頂 (1,974.3m) から1839峰 1974.05**



1839峰 (1,842m)

1974.05



ヤオロ ~ コイカク 稜線の雪煙

1974.05



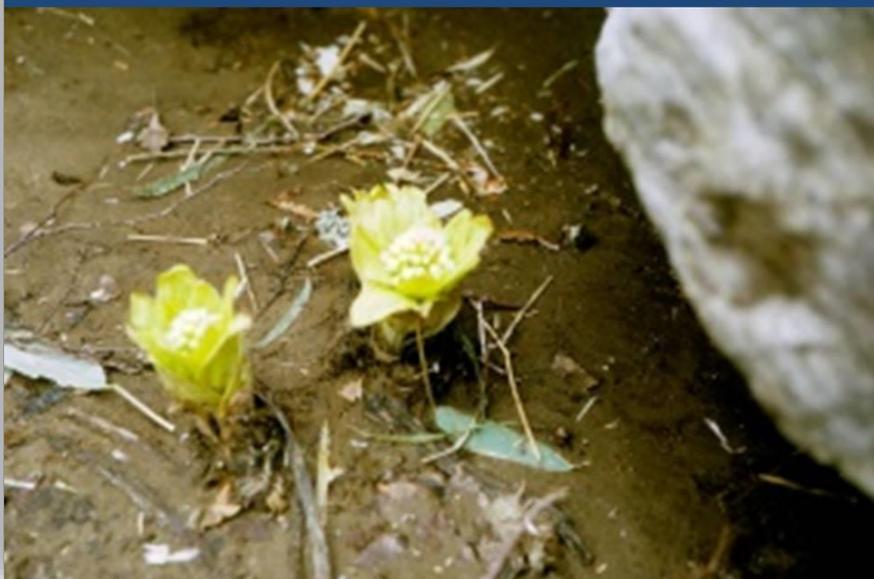
札内川

1974.05



フキノトウ

1974.05



幌尻岳 (2,052m)

1967.10



幌尻岳 (2,052m) 南西面

1967.10



幌尻岳 (2,052m) 山頂

1967.10



七ツ沼カール

1967.10



**セツ沼カール** (朝テントの前に熊の足跡) **1967.10**



**戸鳶別岳** (1,959m) **山頂** **1967.10**



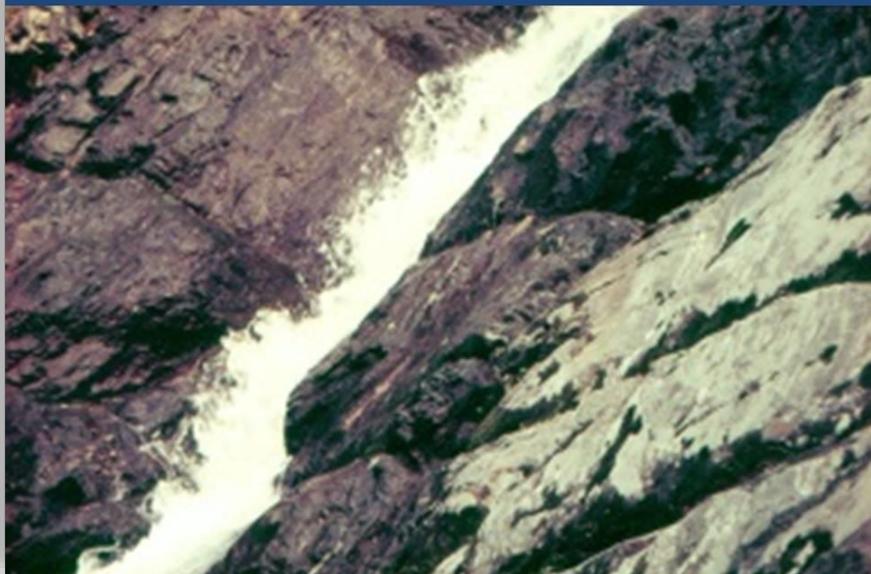
戸鳶別岳カールのテント  
(沢山の熊と同居)



1967.10

戸鳶別川を下り始める

1967.10



戸鳶別川テント①



1967.10

戸鳶別川上流



1967.10

戸鳶別川テント②

1967.10



沢  
下  
り



1967.10

戸鳶別川テント③の朝



1967.10

戸鳶別川下り

1967.10



ペテガリ岳取付尾根のテント

1971.05



ペテガリ岳 35kgのキスリング

1971.05



ペテガリ岳 2日目のキャンプ地 1971.05



ペテガリ岳(1,736m)を見上げる 1971.05



ペテガリ岳(1,736m) 山頂 1971.05



ペテガリ岳(1,736m) 雪稜 1971.05



中ノ岳

(1,519m)

山頂



1971.05

芦別岳 (1,726m)

1984.07



芦別前山



1984.07

芦別岳 (1726m) 山頂

1984.07



利尻岳 (1,721m)

1986.05



利尻岳の肩に着く

1986.05



利尻岳の稜線を行く

1986.05



利尻岳  
ローソク岩



1986.05

利尻岳頂上直下

1986.05



利尻岳北峰 (1,719m) 山頂

1986.05



利尻岳南峰 (1,721m) 山頂 1986.05



礼文島 地蔵岩 1993.06



礼文岳の滝



1993.06

礼文岳  
(490m)  
への登り



1993.06

**エゾカンゾウ** (ユリ科)

**1993.06**



**オオバナノエンレイソウ** (シュロソウ科)

**1993.06**



オオバユキザサ  
(ユリ科)



1993.06

チシマフウロ (フウロソウ科)

1993.06



**タカネシオガマ**(シオガマギク属) **1993.06**



**レブン**(エゾ) **ウスユキソウ**(キク科) **1993.06**



礼文島 スコトン岬

1993.06



最近の

北海道の山

松前海岸スケッチ(中村あや)

2012.06



白神岬道標(竜飛岬まで19.8km)

2012.06



白 神 岬

2012.06



シロウマアサツキ (ユリ科)

2012.06



大沼公園から (北海道) 駒ヶ岳 (1,131m) 2014.06



神威岬  
(積丹半島)



2012.07

積丹岬 女郎子岩(シララ姫) 2012.07



積丹岳登山口



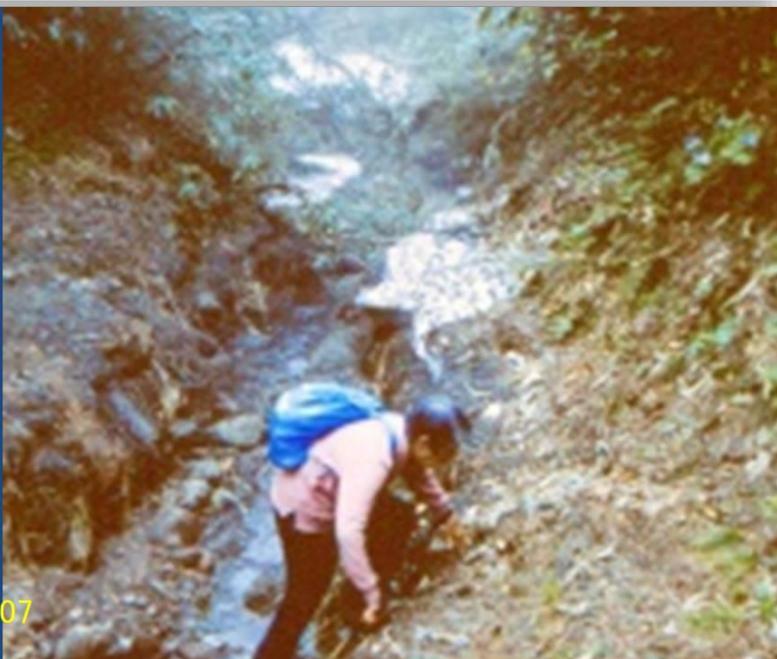
2012.07

大木  
(積丹岳)



2012.07

沢の残雪  
(積丹岳)



2012.07

ジギタリス  
(オオバコ科)



2012.07

ツバメオモト (ユリ科)

2012.07



風で曲がったダケカンバの林

2015.07



しゃこたんだけ

積丹岳 (1,255.3m) を望む

2012.07

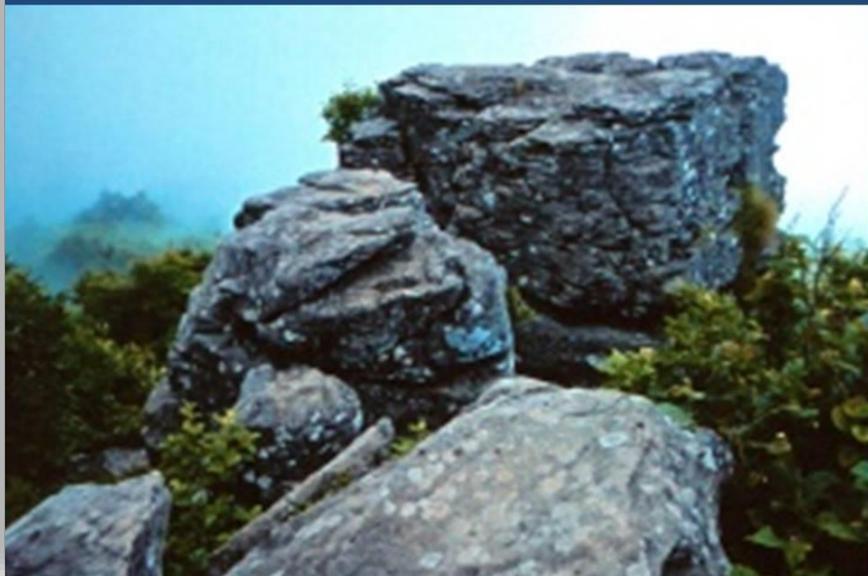


定山溪の滝



2012.07

塩谷丸山(629.2m)の頂稜 2012.07



塩谷丸山 (629.2m) 山頂

2012.07



クラーク博士像

さつぽろ羊ヶ丘展望台の



2012.07

てうりとう  
**天売島のオロロン号** 2014.06



**天売島 女郎子岩周辺**(オロロン鳥≒4万羽) 2014.06



オロロン鳥の巣を狙う カモメ 2014.06



ヒツジの群れ 2014.06



やきしり

焼尻島 オンコ(イチイ)の林

2014.06



やきしり

焼尻島 オンコ(イチイ)の幹

2014.06



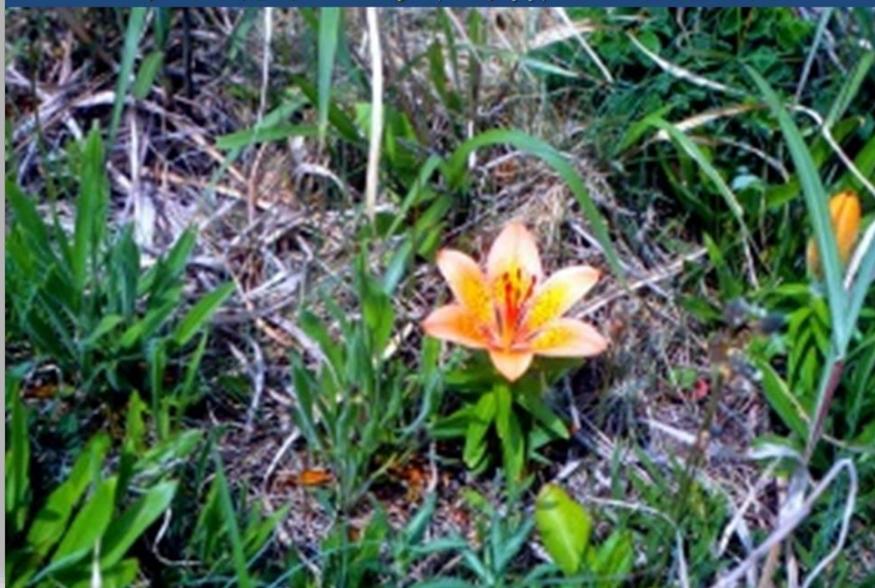
**マイズルソウ** (スズラン亜科)

**2014.06**



**エゾスカシユリ** (ユリ科)

**2014.06**



ホ  
オ  
ノ  
キ  
(モクレン科)



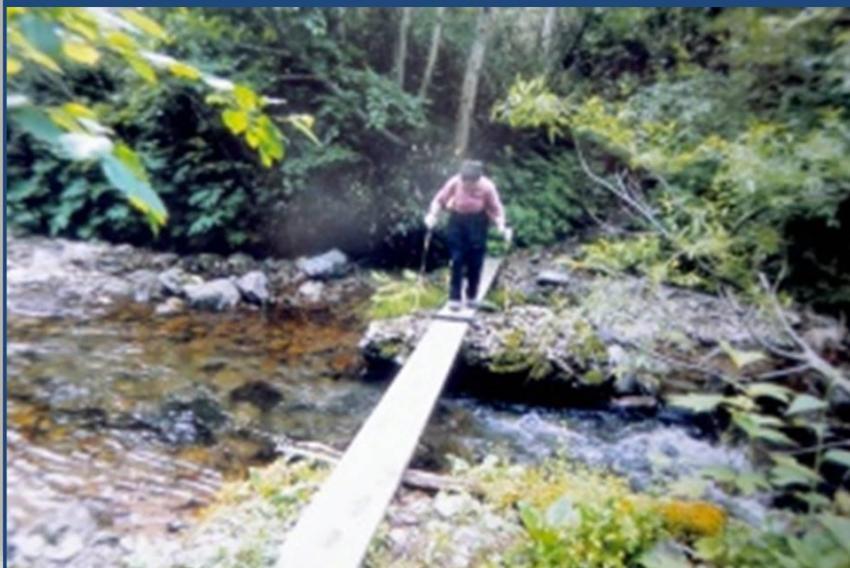
2012.07

天 塩 の 小 屋

2012.07



沢を渡る 2012.07



ゴゼンタチバナ (ミズキ科)



2012.07

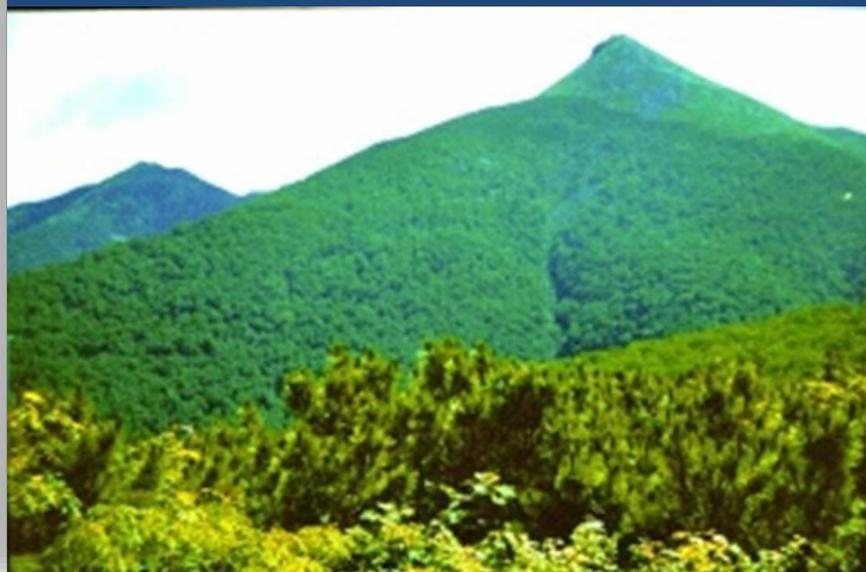
登路の残雪

2012.07



天塩岳 (1,558m)

2012.07



天 塩 岳 山 頂 近 く

2012.07



天 塩 岳 (1,557.6m) 山 頂

2012.07



層雲峡の流れ

2012.07



層雲峡の岩峰

2012.07



銀河の滝



2012.07

流星の滝



2012.07

知床沼山行  
羅臼の小屋



2012.07

昆布漁の船と海岸

2012.07



海岸を観音岩に向け歩く

2012.07



山路の尾根を登る

2012.07



青 池

2012.07



高 山 帯 の 登 り

2012.07



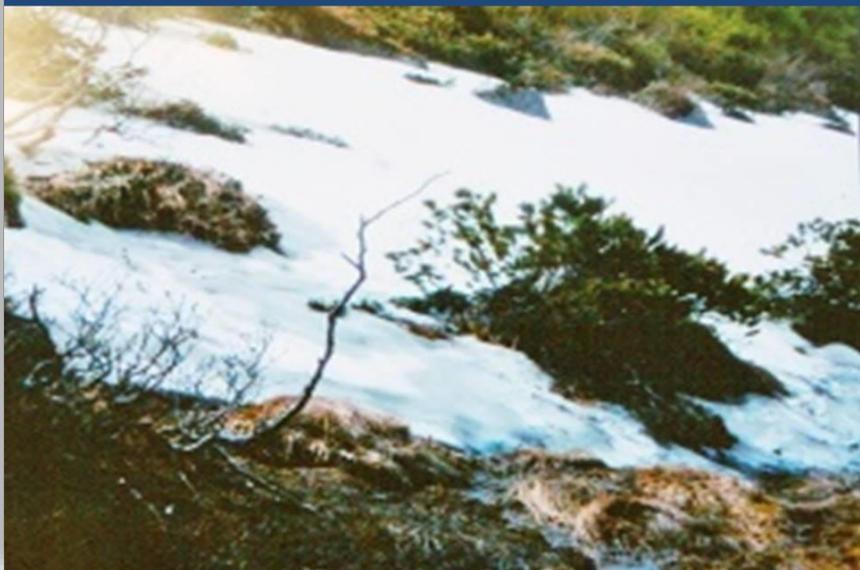
キャンプ地の朝

2012.07



知床岳の雪田地帯を通過

2012.07



知 床 沼

2012.07



知床沼 と 知床岳 (1,254m) 2012.07



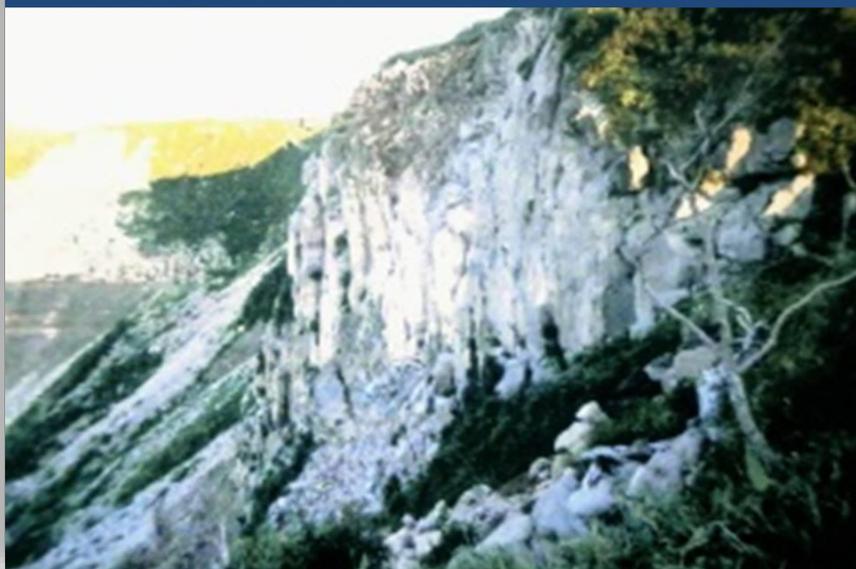
キタキツネ

2012.07



二日目キャンプの朝

2012.07



知床岳(1,254m)の観音岩

2012.07



観音岩を越える  
(中村あや)



2012.07

野付半島

2012.07



1839峰 (1,842m)

1974.05



水浸しの白樺林

2012.07



ハマナスの咲く原野

2012.07



ハマナスの花  
(バラ科)



2012.07

武佐岳  
(1,005.2m)  
小屋



2012.07

武佐岳小屋スケッチ  
(中村あや)



2012.07

武佐岳9合目

2012.07



武佐岳 (1,005.2m) 山頂

2012.07



根釧原野を一眺に見下ろす

2012.07



稚内駅（我が国最北端の鉄道）

2012.08



宗谷岬  
（我が国最北の岬）



2012.08

明治以来の海軍堡壘

2012.08



宗谷岬の原生林

2012.08



利尻島を船上から眺める

2014.06



おしどまりこう  
利尻島 鴛泊港とペシ岬の灯台

2014.06



ペシ岬登り口  
(小雨)



2014.06

鴛泊灯台 (昭和28年改築)

2014.06



灯高=76m  
15秒に1閃光  
光達距離=21海里  
初点灯=明治25年

ノコギリソウ (キク科)

2014.06



白い レブンアツモリソウ (ラン科)

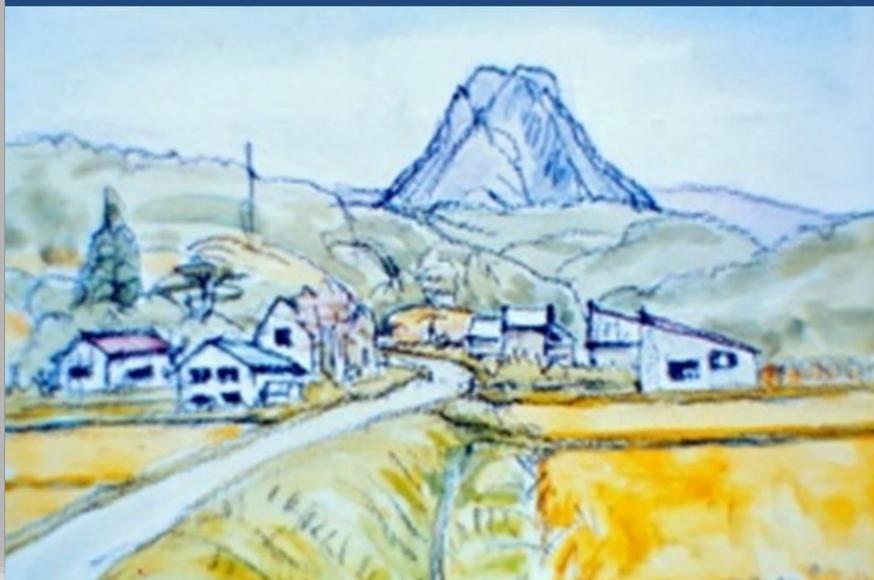
2014.06



**赤い レブンアツモリソウ (ラン科) 2014.06**



**浜益からの黄金山 (740m) 2001.09**



黄金山 左(北)の肩で小休止

2014.06



ダケカンバに覆われた黄金山

2014.06



**黄金山 (739.5m) 山頂**

**2014.06**



**有珠山 (737m) 西面が新しい大噴火口**

**2014.06**



**昭和新山(398m) 今も噴煙が盛ん 2014.06**



**洞爺湖祭り当日のコスプレ 2014.06**



しかりべつこ

**然別湖** (810m) 北海道最高の人造ダム

**2012.08**



最大深度 = 108m  
周囲長さ = 13.8km

白雲山登山口



2012.08

大  
木



2012.08

ナキウサギの岩塊(すき間で生活) 2012.08



白雲山  
(1,186 m)

山頂の雷雨



2012.08

オオウバユリ (ユリ科)  
東ヌプカウシヌプリ

(1,252.2 m)



2012.08

クルマユリ (ユリ科)

2012.08



大  
雪  
山  
(旭  
岳)

(2,290.9 m)

姿  
見  
の  
池

(1,600 m)



2012.07

姿見の池付近の噴煙

2012.07



大雪山9合目の稜線

2012.07



旭  
岳  
北海道の最高峰  
(2,290.9 m)



2012.07

姿見の池～沼ノ平散策 (裾合平1,690m) 2012.07



チングルマの大群落



2012.07

当麻岳～比布岳～北鎮岳～中岳

2012.07

2,076m

2,197m

2,244m

2,113m



エゾノツガザクラ (ツツジ科)



2014. 07

キバナシャクナゲ (ツツジ科)

2012.07



**アオノツガザクラ** (ツツジ科)

**2012.07**



**沼ノ平** (明治33年の噴火口跡)

**2012.07**



室蘭岳 (911.1m) 左 = 西稜、右 = 南稜 2012.08



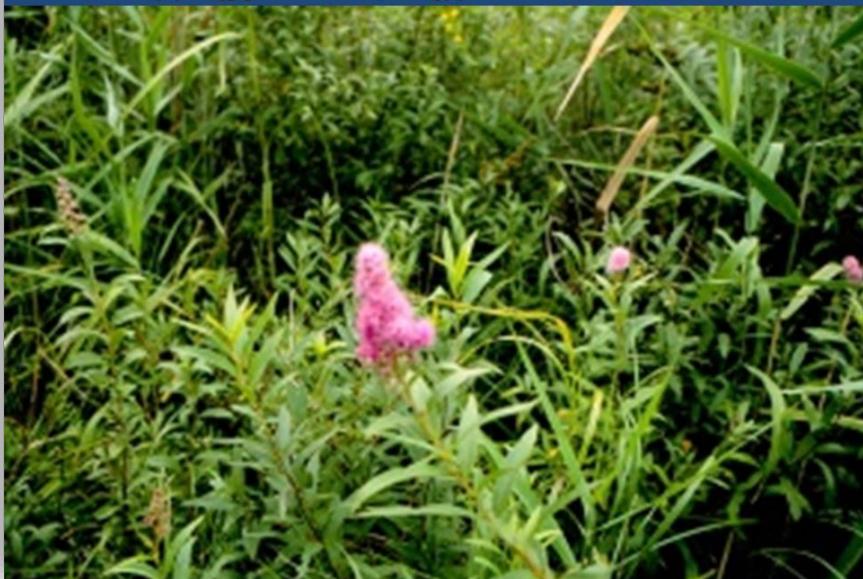
室蘭岳  
(西稜を登る)



2012.08

名前 = 不詳

2012.08



名前  
||  
不詳



2012.08

ハマナスの実



2012. 08

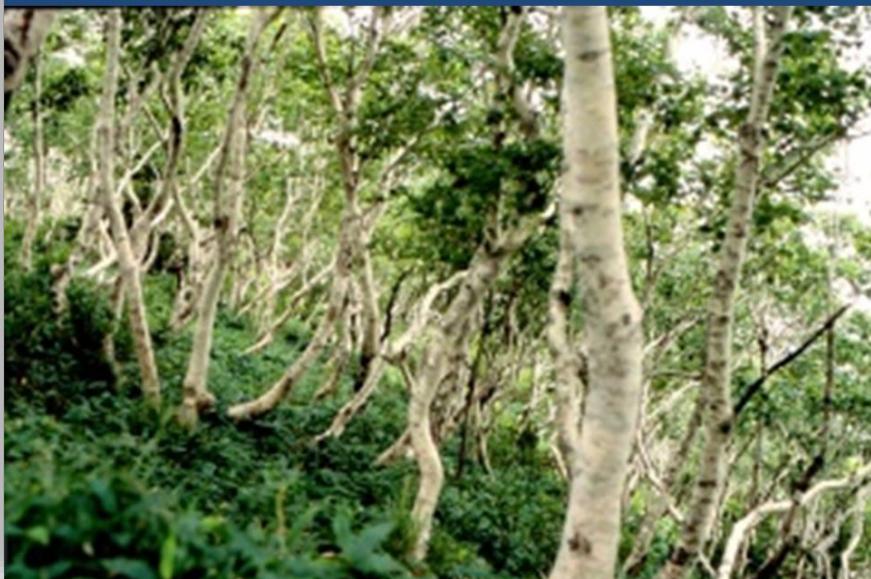
室蘭岳南稜  
登山口の神社



2012. 08

ダケカンバの林

2012.08

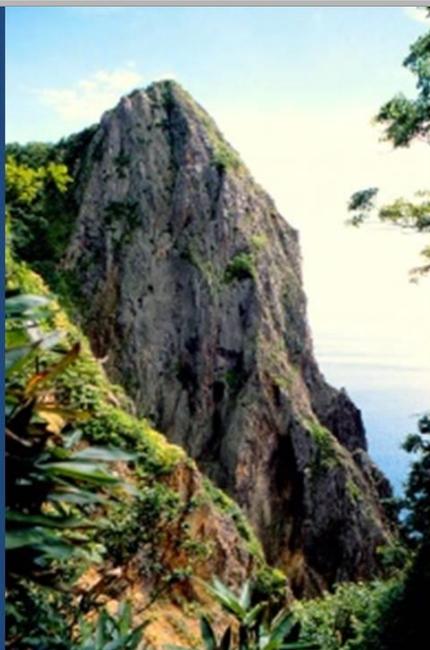


室蘭岳 (911.1m) 山頂

2012.08



室蘭海岸山肌の岩峰



2012.08

海岸山脈の照葉樹林

2012.08



屏風岩

2012.08



江差

にしんごてん  
鯨御殿

2012.08



かもめじま

へいしいわ

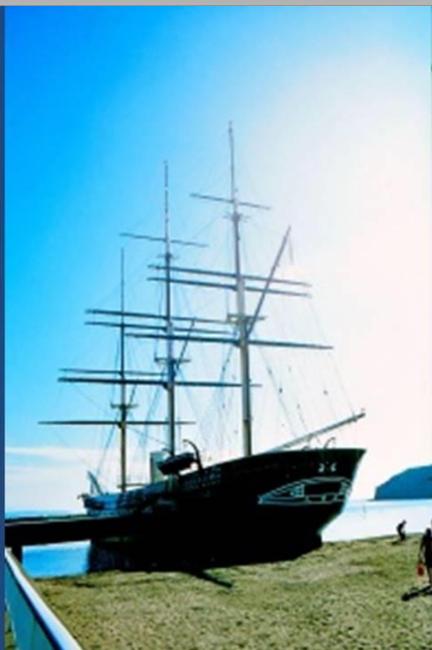
鷗島(江差町)の瓶子岩

2012.08



蝦夷地を占拠「蝦夷共和国」総裁となるが  
政府軍に敗北。釈放後は北海道開拓に尽力。

**箱館戦争**(明治元年〜2年)  
榎本武揚が「鷲ノ木」に上陸



沈没船6隻のうち  
引揚げ復元された一隻

2012.08

奥尻島のシンボル 鍋釣岩 (19.5m) 2012.08



3・11以前にも大津波に襲われて折れた  
奥尻島の慰霊碑



2012.08

奥尻島 **球島山** (369.3m)

**2012.08**



奥尻町字湯浜 **無縁島** (悲恋物語)

**2012.08**



函館 五稜郭

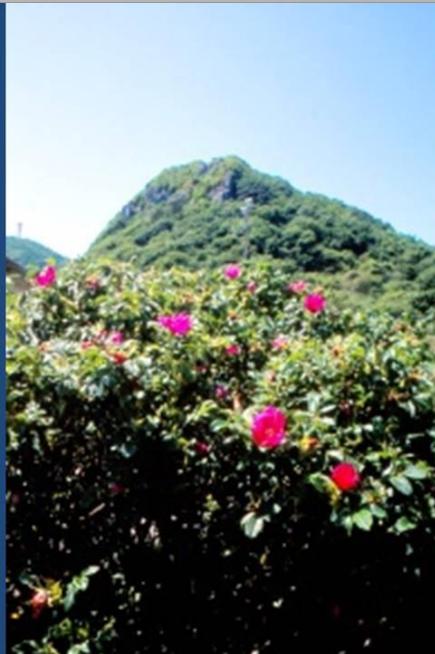
2012.06



函館山  
立待岬

ハマナス

たちまちみさき



2012.06

**ご 静 聴**

**ありがとうございました！**

**中 村 純 二**

日本山岳文化学会 有志

2016. 11. 3

## 丹沢山麓の声

- ◎ いつもご連絡いただき、ありがとうございます。盛況のご様子は、佐々木副会長からも伺いました。中村先生は今月末の大会でも口演発表されますが、ご体調等について運営側も充分注意したいと思います。 (日本山岳文化学会事務局長)
- ◎ 作治小屋で学会会員の方々といろいろなお話ができ、大変有意義でした。(K・M)
- ◎ 作治小屋で中村先生ご夫妻を交え、みなさんとの楽しい時を過ごさせていただきました。気がかりだった先生ご夫妻の健康状態につき、メールでお知らせいただき、まずは一安心しました。同時に、ご夫妻の超人ぶりには驚きの一言です。(K・S)
- ◎ 早々に丹沢イベントの写真等を送っていただき、ありがとうございます。うまく編集され、まとまっています。感服しました。中村先生もご回復され、上々至極に存じます。またイベントがありましたら、お知らせいただければ、嬉しいかぎりです。(Y・T)
- ◎ 中村先生ご夫妻は、お早い回復で安堵しました。超人というか、もう神ですね！驚きました。翌日からまたお出掛けされるとは……。講演会も年齢を感じさせない記憶力や話し方でしたが、行動力たるものスゴイですね。(I・K)
- ◎ 丹沢イベント、楽しかったです。中村先生は大丈夫でしたか？心配です。また何かのイベントがありましたら、お声を掛けて下さい。ありがとうございます。 (Y・T)
- ◎ 叔父夫婦がその後、北アルプス方面へ出掛けたとは、驚きました。母が翌日電話をかけたが不在だったと申しましたが、そういうわけだったのですね。田中さまからは、母にもお電話下さったとのこと、重ね重ねありがとうございます。新聞の記事は、私どもも見ました。未だ皆様に、何かと思い出していただき、本人もさぞ、張り合いがあることと思います。(W・R)
- ◎ 中村先生のご体調、問題なかったらよいのですが、二日間本当にありがとうございました。みなさん楽しい方たちで、おかげさまで初めてながら、とても楽しめました。南極のご本までいただき、中村先生にサインも頂戴いたしました。大切に読ま

させていただきます。中村先生のお話も大変興味深かったです。 (K・A)

◎ イベントはとても楽しむことができました。参加されている方々の雰囲気がとてもなごやかだったので、いろいろな方との会話を楽しむことができました。食事もお餅も大変おいしかったです。なんでもないようだけど、個性たっぷりに一人ひとりが主役だったのが分かりました。内容はともかく、またあることを期待しちやいました。心から感謝です。 (U・M)

◎ メールありがとうございます。朝日の記事も、楽しく読ませていただきました。 (N・T)

◎ 先日の「中村先生講演会 in 丹沢」では、大変お世話になりました。先生が調子を悪くされたことを心配しましたが、このメールで回復の上、北ア山麓で静養とのお知らせに、安堵しました。 (K・S)

◎ 編集した写真ありがとうございます。皆様のお名前も分かり、よかったです。6日の朝日新聞は、開いたときにすぐ見つけました。昼食時、先生奥様が取材を受けたとおっしゃっていました。その後、無事にお帰りになられたとのこと、何よりです。 (K・Y)

◎ 作治小屋で中村先生を囲む会は、大変楽しく、童心に還ったようでした。多くの山に係る人達と親睦を深めることができ、私にとっても大変貴重な時間となりました。その後、中村先生と奥様のご容態は、いかがでしょうか？お元気にされていることを、心からお祈りしております。 (S・M)

◎ 無事に講演会を終えることができ、本当によかったです。作治小屋の集合写真は、みなさんの笑顔が素晴らしい！！楽しかった時間が、みなさんの笑顔とともに、よみがえってきます。つきたて餅、サイコー！！ (T・H)

◎ まずは中村先生と奥様のご無事、何よりです。先生が横になられた瞬間はヒヤリとしましたが、回復され、安心するとともに、先生のご丈夫さには感心させられました。奥様は精神的にかなりお疲れになったのでしょうかね。

妻の母親も同じような症状で、何度も検査を受けていますが、未だ原因と治療方針が決まらず、悩んでいます。

田中さんの一連の対応は、お見事としか言いようがありません。自分だったら、

救急隊に押し切られていたと思います。本当の危機を乗り切ってきた方にしかできない判断と行動は、さすがのリーダーシップを感じました。まさに、頼もしいかぎりです。

妻が準備した料理を、皆さんが平らげて下さったことに対し、大喜びをしています。高崎さんには大変なご助力をいただきましたが、料理の腕は高崎さんの方が上だと、妻は申しております。

今まで経験の流れの中から、特別なことをしたわけではありませんが、津々木さんはじめ、作治小屋の方々のお力添えがあったればこそその成果だったと思います。皆さんに満足していただけたことは、私どもも嬉しいかぎりです。

昨年 10 月、田中さんや津々木さんたちと出会ってから、私たちの山環境や人間関係、思考が大きく変わりました。多くの人々との出会いに恵まれ、学会の皆様や作治小屋関係者の方々と交流の輪が広がってきました。今後ともよろしくお願ひ致します。 (岩 楯)

#### 【お礼に代えて】 有志代表幹事＝田中 文夫

皆様から“良かった”というたくさんのお声をいただき、会員有志も盛り上げて下さり、誠にありがとうございました。

42 名が参加され、お喜びのお声をいただきましたことにより、この度のイベントも成功裡に終えることができました。その報告のまとめは、メールやプリント郵送で参加者全員にお伝えしたところです。作治小屋での全員集合写真は、小泉さん撮影のものだけが上手く撮れ、その後は救急隊到着によって撮影することができなくなりました。

今回の宿泊企画は諸問題ありますが、早朝の「餅つき」は大成功で、盛り上がりました。ひとえに作治小屋皆様のご協力の賜物です。余談として、救急隊に「つきたて餅」のお土産など、山やならではの前代未聞な発想だったと思います。

中村先生突然のアクシデントもありましたが、皆様のご協力を得て、乗り越えることができました。できる人が、できる事を、できる範囲で、実践する（しかし、やりたくても、出来ない事の方が多い）。その統合で上手く乗り越える力となりました。適材がいて、適所で実力を発揮した、“総合力”でした。

中村先生と奥様のご様子及び経緯は、以下に掲載した「中村先生からのお便り」に、詳しく述べられています。

ここで省みることは、高齢者集団の宿泊をとまなうイベントで、さらなる配慮すべき諸点を見出したことです。そんなこと、“面倒だからやらない”のではなく、さらなる適材適所の確保、役割分担と統合力、配慮すべき諸点の追加となります。さらに大切なことは、予期せぬ事態でご迷惑をかけたとしても、“それは迷惑ではなく、あるべき自然な姿を丸ごと受け取る受容の心が大切”、ではないでしょうか。それを私は、“ヒマラヤ登山とその遭難死亡事故”、で学びました。

中村先生が意識を失われ、救急隊要請から到着後の心電図、血圧、脈拍、呼吸の諸測定・確認による、特別な異常はなしの確認までが「クライシス・マネジメント」。それ以降は「リスク・マネジメント」と意識の切り替えをおこなったのも、ヒマラヤ体験から導き出した「リーダー意識の実践」でした。その解説は拙著『登山の総合人間学』に記したところです。

新たなる発案として、【作治小屋愛好者山岳教室】が開講でき、山岳文化の普及を図れたら・・・、と思うのですが、それは今後の課題として残しておきます。

ご盛況、ありがとうございました。 (2016.11.11)

### 【中村先生からのお便り】

今回の秦野戸川公園における日本山岳文化学会有志の集いでは、私共心から感謝しております。

11月2日は小田急線ロマンスカーで秦野駅に着きましたところ、直ちに作治小屋の津々木さんが出迎えていただき、素晴らしい環境の小屋まで車を走らせて、直ちに屋内1階の特別個室に案内していただきました。

夕食は岩楯夫人の多様なスペシャルメニューでデザートを含め、ゆっくり、存分に味わうことができました。

その間のストーブや照明も完璧で、誠に楽しい一時いっときでした。参加者や小屋の方々の皆さまと自由にお話しでき、イタリア産のハムやスルメ、ノリ等々をいただき、22時頃にはゆっくりと個室に戻ることができました。トイレ寝室はよく整えられていて、朝

6時まで良く眠ることができました。

3日の朝は小雨でしたが、6時ころには青空も見えてきて、小屋からの眺めが素晴らしく、いつかもう一度歩いて作治小屋を訪ねてみたくなるほどでした。

朝食は何より好物のお餅です。6時半にはお餅がつきあがり、様々な味のからみ餅を存分に味わうことができ、幸せでした。ただ最後の餅入り味噌汁を食べたころ、すっかり身体が温まり、上着を早く脱げばよかったです。お餅をいただいたために、これまで何回も厚着の際に襲われたことのある、**脳貧血**を起こし、意識を失ってしまいました。幸い家内が隣にいたので、椅子に横たわりました。上原様には足をさすっていただきましたが、数分で意識を取り戻し、自分ではすっかり平常に戻った気持ちでいました。

皆さまにはご心配をおかけして、申し訳ありませんでした。

これで万事済んだと思っていたところへ、秦野消防署より救急車と消防車の2台が作治小屋に登って来て、大変驚きました。念のために血圧や心電図、呼吸数などを計測していただき、何ともなかったので、予定通りの行動をとりたいと考え、「**すでに気分まで回復し、体調も元通りなので、救急車には秦野に戻っていただいて結構です**」、との一文を記して、「**秦野の病院まで行ってみましょう**」との申し出をお断りした次第です。

秦野市救急隊の皆さまには、心から御礼申し上げたい気持ちです。

その後は、予定の通り行動できたと思います。

戸川公園パークセンター2階の講演会など、予定通り行えたのは、一重に皆さまのご尽力によるもので、大変ありがたく思っています。

お昼は一同「**さか間**」でスペシャルランチをいただいたのですが、この頃から今度は家内の右耳が変になり、相手の話が聴き取れなくなります。時々雑音まで聴こえる状態となりました。私どもには少し環境変化もあり、神経を使い過ぎて疲れたためと考え、チューリップ球根植えは失礼してこのまま自宅に戻り、休んだ方がいいのではないかと考えておりました。

そこに田中さんと、看護師教員でもある奥様がやってこられ、「**状況は直ちに耳鼻科へ行くほど切迫していないので、直ぐに帰宅して休むのが何よりです。それで治まれば明日以降の大町や鹿島部落へも行けるでしょう。翌日の朝になってもなお異常が続けば、午前中に耳鼻科の診察を受ければ良いのでは**」、と判断していただきましたので、すっ

かり安心してお言葉に甘え、そのまま奥様の車で、つつじヶ丘の自宅まで送っていただき、感激でした。

二人とも疲れていたので直ちに寝台に入り、夕食まで寝ましたところ、家内の耳は少し異常が残っただけで治まっており、急な処置をおこなわなくても三日間くらいは何ともなさそうな状態に回復します。夕食後は旅の準備を始め、4日～6日まで、予定通り大町へ出掛けることにしました。

中綱湖や鹿島部落、大谷原、大町博物館などを廻りましたが、幸い耳の方はたいした異常もなく、無事に旅は終わりました。

7日の朝、耳鼻科へ出掛けましたところ、耳垢が少し溜まっている程度で、異常はありませんとのことで、これまでもいただいていた飲み薬の処方だけで済みました。

全く安心して、美しい新雪の鹿島槍や爺ヶ岳、五竜岳見物の旅に出られたのも、皆様のおかげだったと喜んでいます。誠にありがとうございます。厚く御礼申し上げます。

さらに田中さんには、秦野消防署に対して中村名で贈り物とお礼をするために、わざわざ秦野消防署までお出掛けいただきました由、何とお礼をいっていいのかわからず、唯々感謝を申し上げる次第です。誠にありがとうございました。

(2016.11.9 中村純二、あや)



## 第7回. 神奈川県立 秦野戸川公園

### 開園20周年記念特別講演会

2017年4月1日

主催 : 日本山岳文化学会 有志

共催 : 神奈川県立秦野戸川公園

場所 : 秦野戸川公園 パークセンター2階

日程 : 10:00~10:10

開園20周年記念に際して (秦野戸川公園=森 文夫・前園長)

10:15~11:15 < 講演—1 >

**登山と山岳スポーツのちがい** (日本山岳文化学会=田中 文夫)

11:20~11:50 < 講演—2 >

**スカイランニング世界選手権報告** (日本スカイランニング協会 &  
日本山岳文化学会=岩橋 岳一、岩橋 志帆)

11:50~13:45

昼食およびチューリップ鑑賞

13:45~15:45 < 講演—3 >

**第1次~3次南極観測と丹沢** (東京大学名誉教授、第1次~3次  
南極観測隊員、日本山岳文化学会=中村 純二)



秦野戸川公園パークセンター



森文夫さんの挨拶  
前日まで園長(定年退職)



4月1日当日は、  
葉状態のチューリップ畑

ソメイヨシノ & チューリップ  
2週間後に満開となった



中村先生講演 = 第1次～第3次南極観測と丹沢

講演—1

登山と山岳スポーツのちがい

講演者：田中文夫

- 要旨：① 登山と山岳スポーツは別もの（構成と構造は分類表）
- ② 登山には、行動の中に「死の意識」が潜在し、途中でリタイアできない場合が生じる（クライシス・マネジメント）
- ③ スポーツは、「安全確保」の規則と体制の下で競技で、反復可能なゲーム性を帯びている。（リスク・マネジメント）

# 登山と山岳スポーツのちがい



2017年4月1日

秦野戸川公園開園20周年記念 特別講演会

日本山岳文化学会 田中文夫

## 登山の概念

- ◆ 登山は、山を登ることを目的とした行為
- ◆ その登山は、身体的運動諸要素と、知的で理性的諸要素と、情緒的感性諸要素がおりなす → **自己統合行為**

## スポーツの概念

- ◆ 遊戯の性格を持ち、自己または他人との**競争**、あるいは自然の障害との対決を含む**運動**（国際スポーツ・体育協議会 = ICSPC）
- ◆ 日本における近代スポーツの特徴 → 国民体育とオリンピック
  - ① 教育的    ② 禁欲的    ③ 倫理的    ④ 知的・技術的
  - ⑤ 組織的    ⑥ 都市的    ⑦ 非暴力的

現代スポーツは**産業化**(プロ)、**ゲーム化**(ビジュアル)されてきた

## 登山内容の変化

- ◆ **宗教的行為**(修行) → **科学的行為**(探検・冒険) → **余暇消費的行為**(レジャー産業化) → **スポーツ産業化**(商業・情報化)
- ・ **第二次RCC** = 登山の情緒的要素を捨て去り、アルピニズムをスポーツ的見地から追及
- ・ **日本山岳文化学会・第二代会長(大森薫雄)** = 登山は賢者のスポーツ (出版)

## スポーツ内容の変化

- ◆ **遊戯**(身体的遊び) → **興行**(奴隸、見世物) → **個人競技**  
(古代・オリンピック) → **組織化競技**(旧・オリンピック) →  
**産業・情報・組織化競技**(現代オリンピック) → **ホモ・エコノミクス**

**スポーツクライミング・山岳スポーツ** → **登山と別分野**

# 考える上での基礎事項 - 1

## 量子物理学から

観測により、目に見え、数える、ことができる物質的存在は、  
宇宙総体のたった5%未満。(科学的証明の限界)  
95%以上はダークマター(暗黒物質でまだ分からない)

相対性理論から、観測者の視点の違いにより、空間的・時間的な結果は異なる。

客観的とは = いかなる観測者(見る)によっても、同じ結果を得ること  
(真実の普遍性)

主観的とは = 一人の観測者(見る)が得る結果で、必ずしも他の観測者が、  
同じ結果を得られるとは限らないこと (真実の断片性)ビッグデータ活用時代

認識とは = 人間の意識は、5感による入力信号により、脳内でイメージを形成し  
認識となる。その時間は最大で 0.5秒 遅れる。  
ベンジャミン・リベット 『マインド・タイム』(脳と意識の時間を発表)

複素的世界観 = 実数 + 虚数 = 実物世界(客観的) + 感性世界(主観的)

# 考える上での基礎事項 - 2

## 分子生物学から

生体を構成している分子は環境からやってきて、一時、「淀み」として  
私たちの体を作り出し、次の瞬間にはまた環境へと解き放たれる。  
環境は常に私たちの身体を通り抜けている「流れ」そのものであり、  
その「流れ」自体が「生きている」ということになる。

「生命」とは、「動的な平衡状態にあるシステム」である。

シェーン・ハイマーが提唱 → 「動的な平衡」: 福岡伸一

動的平衡理論から、分子によって作られる物質は、絶えず空間的・時間的な流れの中で、  
代謝を繰り返し変容している。だから人間は、次世代への引継ぎ(代謝)が大切!!

生命とは = 環境の中で、代謝を続けながら継続を保つ状態

生きるとは = 環境変化の流れの中で、淀みの個体として運動すること



# 生物界における人間の特徴

## 1) ホモ・サピエンス = 賢い(考える)人間(考える人)

- ◆ 人間は考える葦である・・・フランスの思想家パスカルの言葉(パンセー)
- ◆ 幸福感、充足感、充実感 ~ 価値観

## 2) ホモ・ファールベル = 物を作る人間(文明人)

- ◆ 道具を作り、生活を豊かにさせる(衣・食・住 → 都市生活) = 日常
- ◆ 山岳施設整備 → 非日常的環境(自然)を日常性の中に組み込む

## 3) ホモ・ルーデンス = 遊戯(遊ぶ)人間(文化人)

- ◆ オランダの歴史家・・・ヨハン・ホイジンガ、1938年発表(1971和訳版)
- ◆ 登山、山岳スポーツ、ハイキング ~ 健康運動、運動競技、知的遊び

## 4) ホモ・エコノミクス = 経済合理主義的人間(経済人)

- ◆ 経済の本質 = 経世済民 → 資本独占(私利私欲) → トランプ現象  
経世済民 = 中国のことわざ → 世を経(おさめ)、民を済(すく)

登山をスポーツと考えることにより、死の意識が薄れる

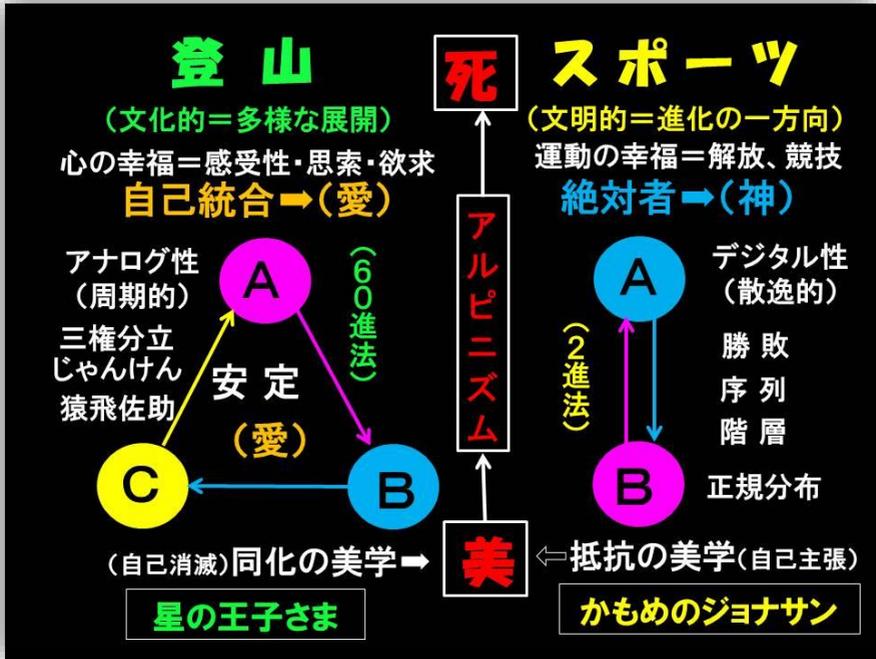
- ◆ 「安全確保」規則と体制の下で競技
- ◆ 途中リタイア、反復可能なゲーム性
- ◆ リスク・マネジメント(利害得失)が適用
- ◆ 自然の中で途中リタイアが困難
- ◆ クライシス・マネジメント(死)を要する
- ◆ 行動の中に「死の意識」が潜在する

### スポーツの特徴

### 登山の特徴

登山と山岳スポーツは別もの  
構成と構造を「分類表」に一覧

## 登山と山岳スポーツのちがい



## 登山とスポーツの文化的役割

### 登山 → 戦争欲求の抑止力

- ・ 自らの死に立ち向かうアルピニズムの**内向性**は他者への攻撃(戦争)に向かわず → 自己統合(神性)に向かう

### スポーツ → 戦争欲求のガス抜き

- ・ スポーツのフェアプレイ精神は闘争(戦争)に歯止めをかけ、全力を尽くす**身体はリビドー**(性的衝動、本能のエネルギー)を和らげる

※ 男性度が高い → 攻撃性が強い → 文明的社会(勝者生存)

↓ 男女の相補的結合 = 文明と文化の相補的補完 → 自立社会

※ 女性度が高い → 受容性が高い → 文化的社会(多様共存)



## 山岳スポーツの分類 (11類型)

山岳スポーツ	クライミング	ボルダリング	D-1	ロープなし	高さ 5m 以内	国体
		トップロープ・クライミング	D-2	トップロープ形	12m 以上のハング	
		リード・クライミング	D-3	スポーツ形	12m 以上のハング	国体
			D-4	トラッド形	ナチュラル・プロテクション	
	ランニング	トレイルランニング	E-1	山野を走る	自然の路面、高低	
		マウンテンランニング	E-2		登下降	
		スカイ・ランニング	E-3		標高 2,000m 以上	
		ウルトラランニング	E-4		42.195km 以上	
		ポッカランニング(駅伝)	E-5		荷を背負う	
	歩行	ウオーキング	F-1	山野を歩く	〇〇ウオーキング	
		ハイキング	F-2	山野を散策	〇〇ハイキング	

## トレッキングの分類 (2類型)

トレッキング	アルパイン・トレッキング	C-2	鑑賞自立形	自立形山岳巡行	
	ツーリズム・トレッキング	C-3	観光引率形	企画形山岳巡行	

## クライシス・マネジメント

戦争による国家崩壊への対処から研究が始ったもの

- ◎ トップリーダーの主たる役割(マネジメント)
- ◎ ある状態が崩壊し、元に戻らない事象への対処
  - ・ 生 → 死  
(生=個人、地域社会、国家、民族、……生物種)
  - ・ 原子力発電 → 炉心のメルトダウン  
(原子、分子、個体 …… 物質)
  - ・ 自然事象 (そこに人がいる場合は自然災害)
- ◎ 対処法
  - ・ 崩壊をくい止めるあらゆる手段を即時に尽す

## リスク・マネジメント

日常生活における一般的なマネジメント

- ◎ セカンドリーダー以下の役割(マネジメント)
- ◎ ある状態が変容・変形しても、復元・再利用可能な場合への対処
  - ・ 一般社会生活のほとんどの部分
- ◎ 対処法
  - ・ 利害得失を精査し、バランスシートを作成する
  - ・ 優先順位を判断し、適正化へ収斂させるつまり → 構想～計画～設計～実施～保全

## クライシス・マネジメント

意識喪失 → 死の可能性 → 救急車要請  
救急隊検査（心電図、血圧、脈拍、呼吸数）

## リスク・マネジメント

事実を確認 → 緊急性なし → 最適判断

- ① 救急隊の要望 → 病院へ搬送し再確認
- ② リーダーの意見 → 本人意思の尊重  
（予定通り講演会実施）

- ※ 講演会聴講者に医師、看護師がいる（学会有志）
- ※ 万一の時は再度救急出動します（救急隊）

## 登山は自己責任 → 現代は社会体制化

< 責任には…負える限界がある >

**負える責任（限界）** : **相対的限界**（復元可能）  
・リスク・マネジメント

**負えない責任（限界）** : **絶対的限界**（復元不可能）  
・死・破壊・喪失・etc  
・クライシス・マネジメント

**冒険・探検する時は責任の限界を意識し、  
出来る時、できる事の最善を尽くす** ← 出来ない事の方が多い

- もし失敗した時  
リーダーは**
- 適切な批判には耳を傾ける
  - ・ 不適切な批判は無視する
  - ・ 合理的・論理的に検証し次に生かす
  - ・ 時を得る（心の沈静）

# 人生はいつも山登り

- 山頂 = その時々 of 様々な目標
- 荷物 = その時々 to 背負っている責任
- 登山 = 自然に逆らって(不条理)目標を目指す  
だから当然、危険と背中合わせ! …… 逆説の美学

- ◆ 楽しみは後からやってくる ← だから最初は苦しい
- ◆ 一つの目標が終わると、次の目標が見える
- ◆ 究極の目標 → 実は「・・・何もない」

だれも人生の予知はできず、  
苦しくもあり、また楽しくもある

長時間のご静聴  
誠にありがとうございました

登山 と 山岳スポーツ のちがい

秦野戸川公園開設20周年記念 講演会

2017年4月1日

田 中 文 夫

講演者： 岩 楯 岳 一  
岩 楯 志 帆

講演内容： 2016年、スペインのピレネー山脈でおこなわれた世界選手権に、志帆さんは日本代表として出場。

垂直夫婦 

・岩楯 志帆 (いわだて しほ)

日本スカイランニング協会  
国際委員会委員長

趣味でマラソンを始める

2010年「おんたけスカイレース」の出  
場を機にスカイランニングの世界へ

2016年スカイランニング世界選手権で  
パーティカルキロメートルとウルトラ  
105kに出場

・岩楯 岳一 (いわだて たけひと)

日本スカイランニング協会  
スカイランニング普及委員

山に遊びに行けなくなりマラソンを始めた  
が、トレイルランニングを知り山に戻る

しかし「おんたけスカイレース」に出あい  
スカイランニングの世界へ





- ・ 2年ごとに行われる世界選手権
- ・ 2016年はスペイン・カタルーニャ州・バルエラが開催地  
国立公園を含むピレネー山脈稜線を駆け巡るコース
- ・ バーティカル、スカイマラソン、ウルTRASカイマラソンの  
3種目が世界戦対象レース
- ・ 出場資格は（18歳以上）であれば、誰でも出場できる
- ・ 日本チームは2015年度のジャパンシリーズランキングにより  
代表として11人選出された  
（VK男2女2、SM男3女1 US男3女3）\*複数種目出場可能  
岩楯出場種目はVKとUS  
他一般参加選手および代表サポート陣

- ・ 何故、世界選手権に出場したか？  
何に魅かれたか？
- ・ 代表に向けての経緯
- ・ 世界戦に向けての対策
  - ① トレーニング（日常・高地）
  - ② コース調査

## 憧れの海外 レース

- ・ 本場のスカイランニングの舞台に立ち本物のスカイランナーになりたい
- ・ 日本との違いは？共通点はあるのか知りたい
- ・ 動画で見ている世界のトップスカイランナーへの憧れ
- ・ 美しさとカッコよさ、自由さに魅かれる

## 代表への道

- ・ 2015年度ジャパンシリーズに出場、その成績で代表になるチャンスが！
- ・ 代表をつかむ意識よりJSAのメンバーとして、自分はスカイランナーであるからシリーズ戦全力走破、その結果でついてきたPRIZE

## HOW TO TRAIN

- ・代表になって世界戦本番までには2016年シリーズ戦が開幕、国内レースをいくつかこなしていかななくてはならない
- ・ケガと故障が一番の敵  
体のケア、メンテナンスに時間もお金もかかる
- ・できるだけ高標高の地でFAST AND LIGHT  
荷物を背負っての登山、ベース設置  
そこからのスカイランニングスタイル
- ・急登、岩場、繰り返されるアップダウン、ストックの活用
- ・ストレスフリーにするために

## Route Check

- ・現地の気候、宿舎、町の様子、物価などについてはサポートから情報入手
- ・コースの詳細はわからない、山地図が日本で入手困難
- ・中村先生のスペインの旅  
地図をお借りする
- ・HPに出ている情報・画像・Google mapでたどる

## ・バルエラってどんなところ？

スペイン>カタルーニャ地方>レリダ県>バルエラ  
現地の地理、地形、気候

- ・旅の始まり（団体行動）  
成田→バルセロナ→バルエラ（会場）
- ・受付、ブリーフィング、コース下見、  
他国チームメンバーとの挨拶

スペイン・カタルーニャ州・レリダ県・バルエラ（自治体内中心地）  
Vall de Boi(ポイ渓谷) 標高1,111m ピレネー山脈稜線の切り立った谷、ここがVKの  
コース ロマネスク様式の聖堂群 UNESCO世界遺産に登録  
聖堂は石造りの質素な鐘楼が特徴的、飾り気はないが山に囲まれ美しく存在感がある

中心自治区がバルエラ バルセロナからバスで5時間（飛行時間も含めると宿舎まで20  
時間以上、宿舎へは途中から徒歩）

渓谷北東部にAiguestortes i Estany de Sant Maurici

National Park(アイゲストルタス・イ・アスターニ・デ・サント・マウリシ国立公園) が  
ある ここをウルトラレースで通る

日差しが強い 日中は30度超える日も 滞在中宿舎周辺はそれほどでもない 乾燥して  
いるため日がないと肌寒い 7月下旬太陽が沈まない 夜9時を過ぎても明るい 朝日が  
昇るのも遅い 夜中に雷雨が来る 牛が多いためハエが部屋の中を飛び回る

昼12時頃から13時半頃レストランが閉まる 昼食が～

田舎町で普段は静か 大きなお店はない ラテン系の陽気な感じはなく、内気な雰囲気  
（中村先生が記しておられた通り）

町の石畳の路地を抜けただけでポイ渓谷への登山道が始まり目の前に壮大な山肌が見え  
るのに高揚

## Vall de Boi

- **バル・デ・ボイ** (Vall de Boi) **ボイ渓谷** は、[スペインのカタルーニャ州](#) [リエイダ県](#)にある狭く側面の切り立った谷である。[ピレネー山脈](#)の稜線に当たる[コマルカ・ダ・アルタ・リバゴルサ](#)の北東端に位置し、この地方の[自治体](#)としては最大のものである。自治体内の中心地区はバルエーラ (Barruera) 地区にある。
- この渓谷は9つの初期[ロマネスク様式](#)の[聖堂](#)群でよく知られており、ヨーロッパでも特にロマネスク建築が密集した地域を構成している。そのため、[2000年11月30日](#)に[ユネスコ](#)の[世界遺産](#)に登録された。
- また、[ピレネー山脈](#)で最も標高の高い[スキー・リゾート](#)がこの渓谷のボイ＝タウル (Boi-Taüll) にあり、渓谷北東部は[アイグエストルタス・イ・アスターニ・デ・サント・マウリシ国立公園](#) ([Aigüestortes i Estany de Sant Maurici National Park](#)) に隣接している。

## スペイン内 Vall de Boi の位置



レリダ県内  
Vall de Boi  
の位置



スペイン内 Vall de Boiの位置



レリダ県内 Vall de Boiの位置



海外でのスポーツ大会参加、観戦、アウトドアスポーツ専門ツアー会社 フィールズ・オン・アースのアテンド

代表選手とそのサポートはほぼ団体行動

到着後は受付とブリーフィング

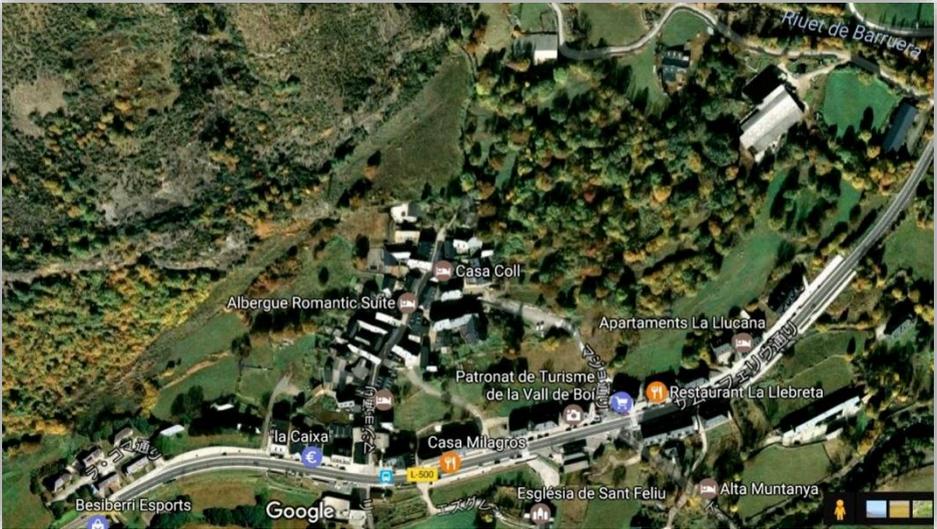
空いている時間にコースの一部だけ下見

☆サポートミーティング

サポート地点までの移動手段や配置など広大な山域での苦労 サポート陣は一番の功労者 (海外チームは手厚いサポート)

## VK (バーティカル・キロメートル)

- ・ コース図と現状の違い  
想定以上の斜度 2,8k+1033m
- ・ バーティカルレースに出場してみて  
(個人、他日本選手の結果)



# VK Barruera to Boi(Sadornal)



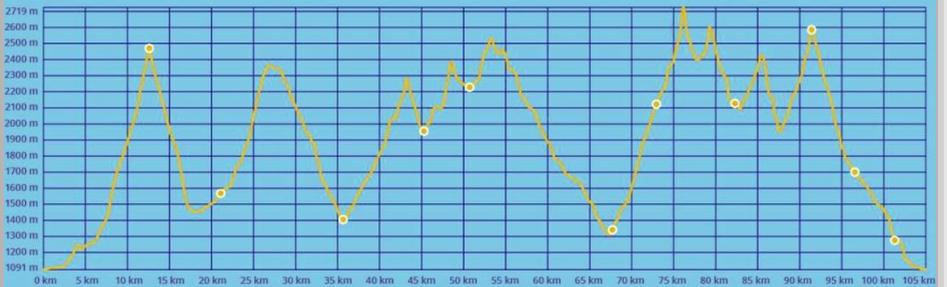






## ウルトラスカイマラソン

- ・ コース紹介105k 獲得標高7950m
- ・ 自然（山）の雄大さ、気象・気候
- ・ 100kmを走り終えて

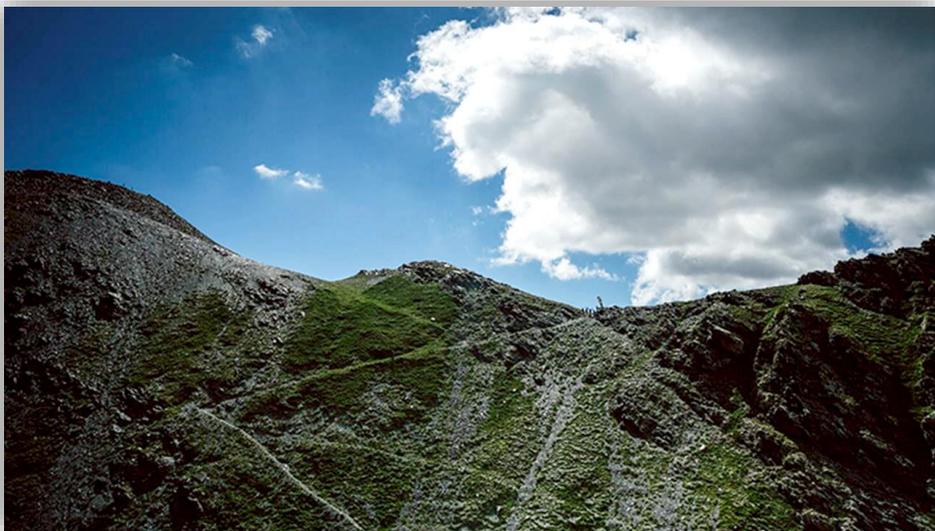


















志帆さんゴール

## 105 KM

105KM / 7950M+

SALIDA DE BARRUERA : 23/07 EN 05:59

### FINALIZADO

SABER +

#### RESULTADOS

- 1 - Luis Alberto HERNANDO
- 2 - Andy SYMONDS
- 3 - Javier DOMINGUEZ LEDO

#### RESULTADOS FEMENINOS

- 1 - Caroline CHAVEROT
- 2 - Eva Maria MOREDA GABALDÓN
- 3 - Jasmin PARIS

Todos los resultados

## 42 KM

42KM / 3200M+

SALIDA DE ESPOT : 23/07 EN 09:30

### FINALIZADO

SABER +

#### RESULTADOS

- 1 - Stian ANGERMUND-VIK
- 2 - Tom OWENS
- 3 - Ismail RAZGA

#### RESULTADOS FEMENINOS

- 1 - Maite MAIORA ELIZONDO
- 2 - Azara GARCIA DE LOS SALMONES
- 3 - Elisa DESCO

Todos los resultados

## VK RESULT

### 男子トップ5 & 日本選手(123人 2人DNF)

1. ANGERMUND-VIK Stian – 34:16.09
2. PADUA Saul Antonio – 34:42.63
3. PERKMANN Hannes – 34:44.01
4. TEIXIDO Ferran – 35:07.31
5. GONON François – 35:14.71

10. UEDA Ruy – 36:27.87
14. WATANABE Ryoji – 38:49.64
49. MACHIDA Tomohiro – 42:54.84
59. SATO Keisuke – 44:57.31
75. AIDA Sho – 47:53.48
97. TAKEHARA Naoya – 51:55.30

### 女子トップ5 & 日本選手(36人)

1. DEWALLE Christel – 39:35.28(FRA)
2. ORGUE Laura – 40:39.15(ESP)
3. MAIORA Maite – 41:59.41
4. CABRERIZO Paula – 42:42.17
5. ORTEGA Vanesa – 42:43.38

12. OGAWA Mina – 45:19.75
31. IWADATE Shiho – 1h01:19.27

←志帆さん

- ・ 個人結果  
レースに出場して感じたこと  
バルエラでの生活、文化に触れて
- ・ 団体結果  
国別ランキング3位  
(おまけ：ユース世界選手権)





**WORLD  
SKYRUNNING  
CHAMPS 2016**

## 2016 WORLD CHAMPIONSHIPS COMBINED

### MEN

STIAN	ANGERMUND-VIK	NOR	200 points
RUY	UEDA	JPN	112 points
PEDRO JOSE	HERNANDEZ	ESP	104 points

### WOMEN

MAITE	MAIORA	ESP	178 points
-------	--------	-----	------------



**WORLD  
SKYRUNNING  
CHAMPS 2016**

### NATIONAL RANKING

	VK	SKY	ULTRA	TOTAL
SPAIN	244	200	246	690
CZECH REPUBLIC	134	240	286	660
JAPAN	198	270	152	620
PORTUGAL	176	218	198	592
ITALY	168	66		234
AUSTRALIA	58	42	120	220
RUSSIA		156	64	220
NETHERLANDS	114	90		204
NEW ZEALAND			134	134
ROMANIA	64	44		108
BRASIL			100	100
SOUTH KOREA	54	36		90
ANDORRA	88			88
POLAND		66		66

### NATIONAL TEAM POINTS SYSTEM

A team ranking system will be adopted based on the individual points accrued by the first three men and the first woman of the same nation in each race



## これからのスカイランニング

- ・ 海外での経験値増
- ・ 国内でのアジア選手権開催  
(2017/9/9・10 蔵王スカイランニング開催決定)
- ・ 世界の流れ (エクストリーム?)

山のスケールが経験したことのない大きさと圧倒された  
水に囲まれた国立公園  
斜度も日本にはない、どう対処すればいいのか考える間もなかった  
レース会場の雰囲気  
樹林帯のない山  
変化する標高と足場  
自然のままのコース  
山小屋はない、スタッフやエイドは最小限  
トイレ事情  
静寂に飲み込まれる夜  
月明りで進む道なき道  
満天の星空  
時々会うハイカーの応援 (スペイン語、イタリア語、日本語?)  
羊、牛の放牧  
少しおとなしい? Barrueraの人々  
スペイン国内でも山間地域のスポーツであることに変わらない  
サッカー人気には負けるが、地域には根付いたスポーツ  
日本には日本の山の良さがある  
コンパクトだが地域密着のスポーツとして広めたい  
誰でも見てわかる、参加できる、子供から大人まで楽しめるスポーツ、その土地の自慢の山  
山の自然を守り、山に向き合うスカイランニング、人とのつながりを作るスカイランニングの  
世界



2017ユース世界選手権（アンドラ）も  
応援よろしくお願いします！

第1次～3次南極観測と丹沢

講演者：中村純二

講演内容：南極はすでに2015年4月、第3回「ほうおう座流星群観測余話」の中でお話しいただきました。今回は秦野戸川公園開園20周年記念講演と、日本の南極観測60周年記念を併せ、ふたたびお話しいただきました。

映画『南極物語』は人々に知られていますが、当事者である中村先生の貴重なお話とスライド写真映像は、それぞれの記念に最も相応しいものです。講演視聴者方々の記憶とともに、記録に残しておくことも、文化の大切な役割。映像に隠されている、文字で語れないメッセージを、それぞれに読み取っていただけたら幸いです。（田中・記）

# 第1次～第3次南極観測 と丹沢



中村純二

2017年4月1日

神奈川県立秦野戸川公園パークセンター

とうふつこ  
**涛沸湖訓練 組立ハウス 1956.02**



**樺太犬 (アンコとモク) 1956.02**



涛沸湖より知床半島の山々 1956.02

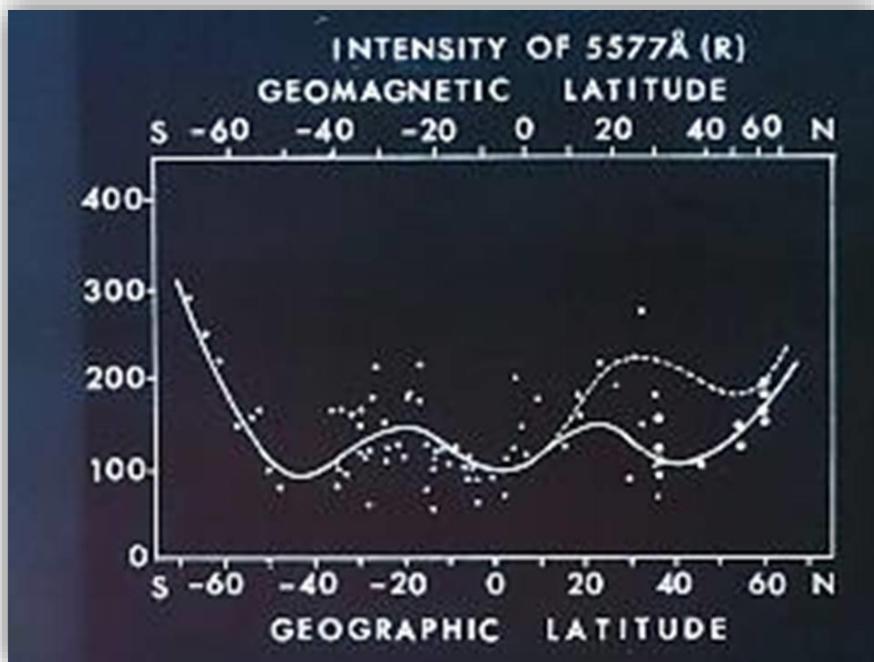
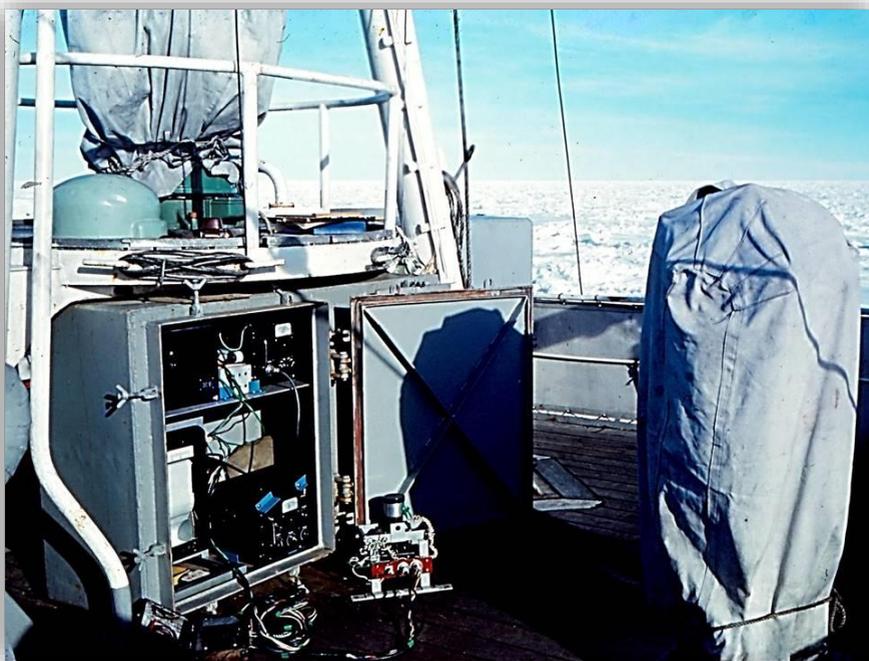


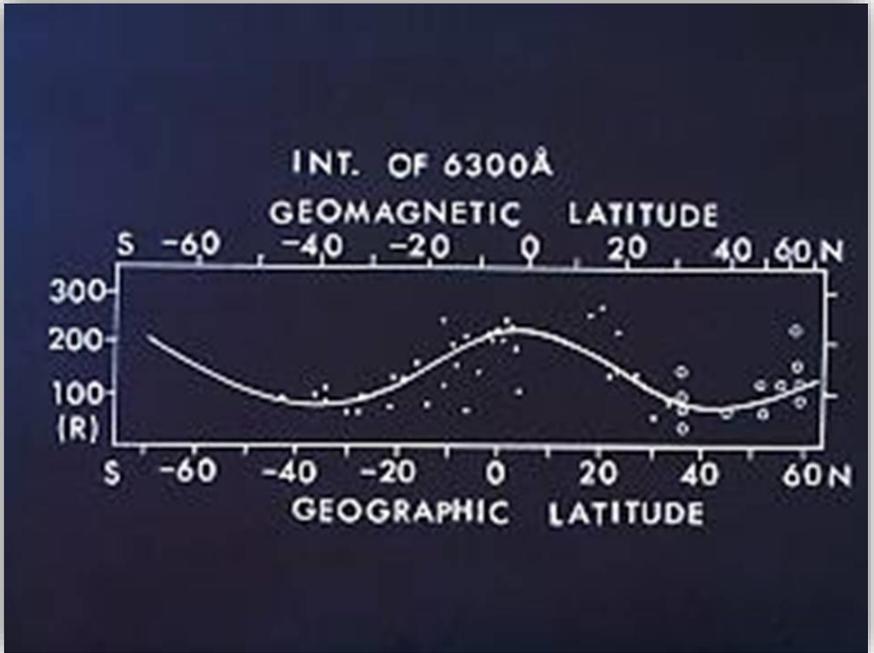
南極観測船 宗谷 甲板上



ローリング片舷69°、ピッチング30°







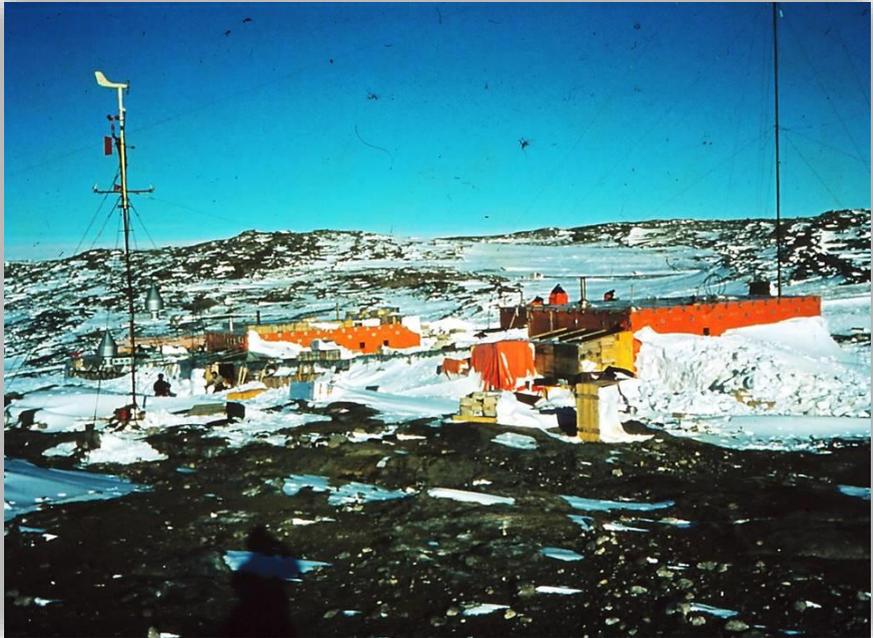
**(左)西堀 (中)中村 (右)田**



**第2次観測隊で収容できなかった犬たち**







## 屋上のオーロラ観測機



## 氷山の年輪





(手前) ジロ (奥) タロ



左 = ジロ (胸毛と足先が白い) 右 = タロ (真っ黒い)



幻 日



飲料用 氷取り作業 1959年











基地南方40kmのシェッケ岬まで1週間のそり旅行



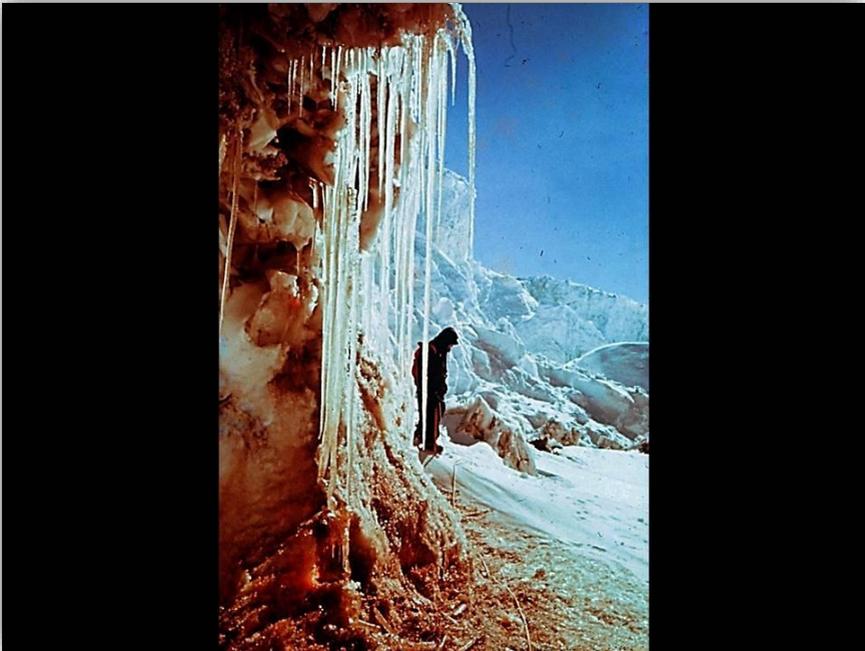
**人曳そり** (川口隊員、平山隊員)

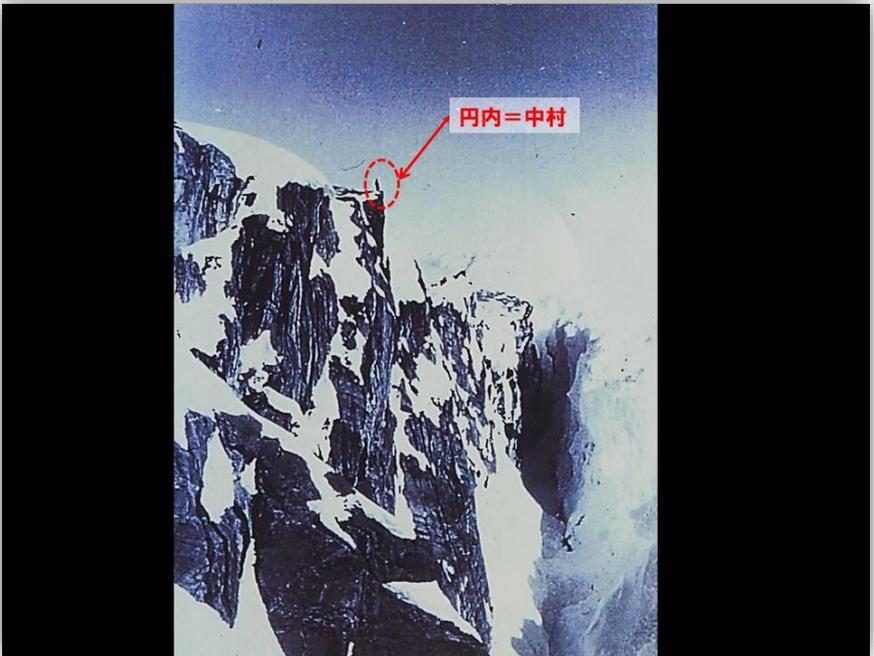
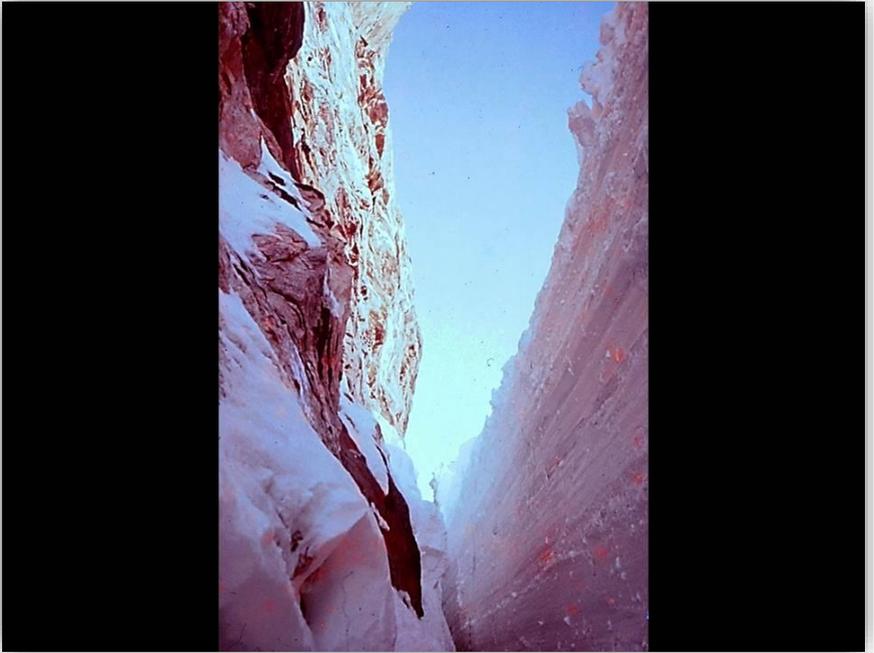


**犬そり旅行** (北村隊員とタロ、アク、ジロ)





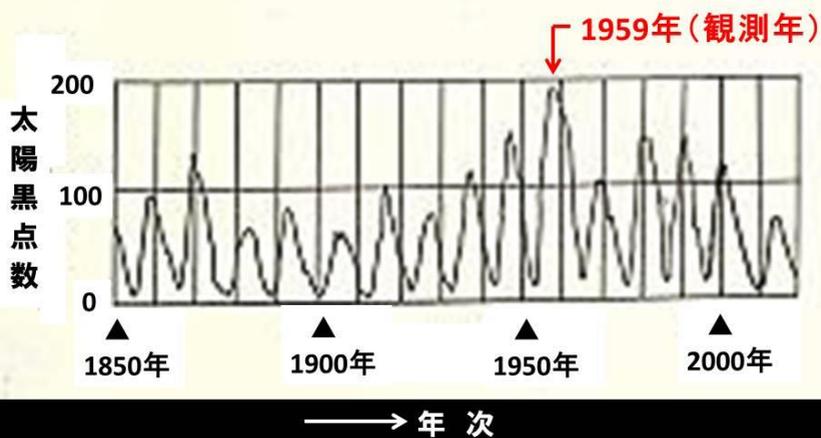




奥氷河岳 = (左) タロ (中) 中村 (右) ジロ

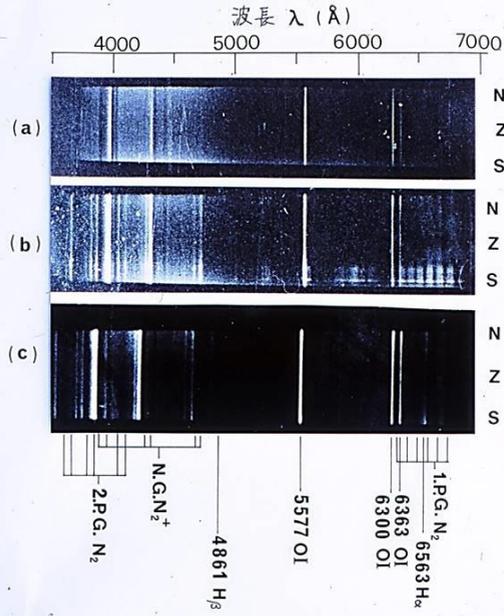


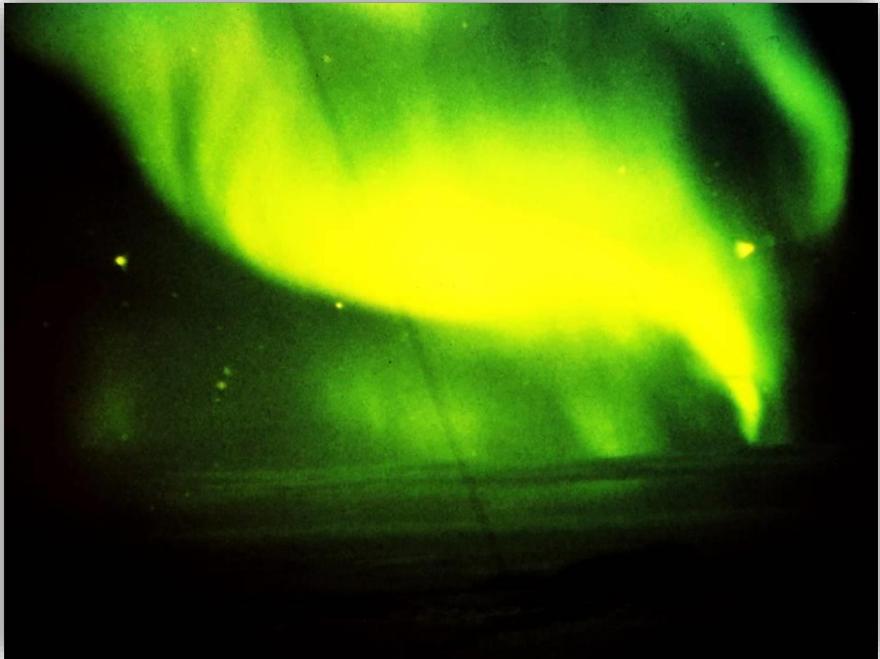
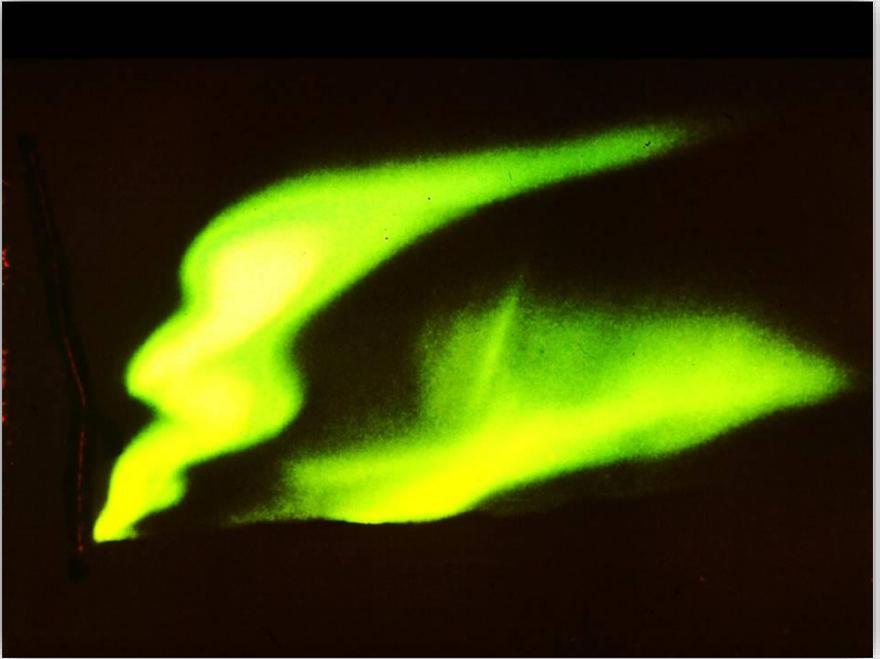
## 太陽黒点数の年変化



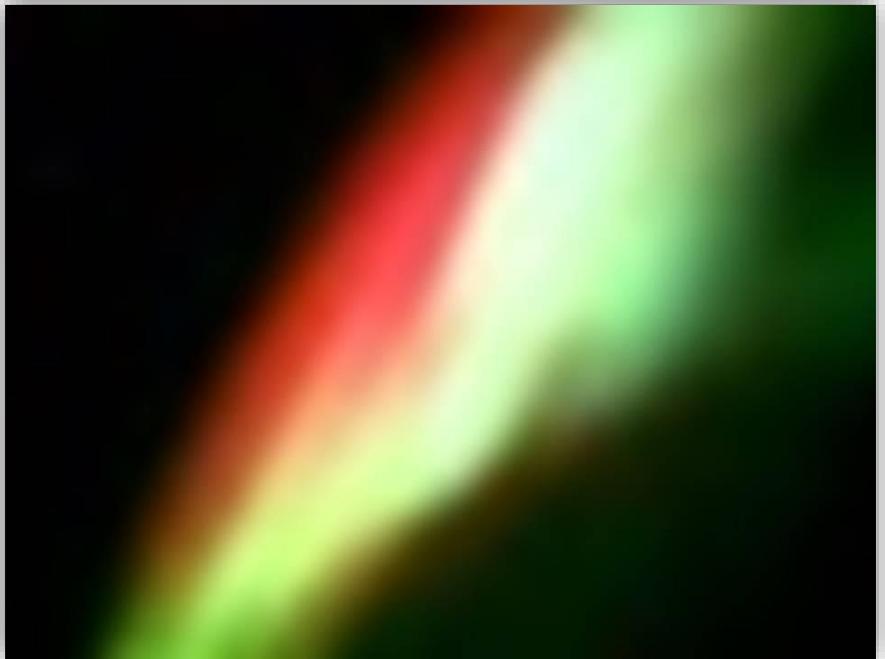


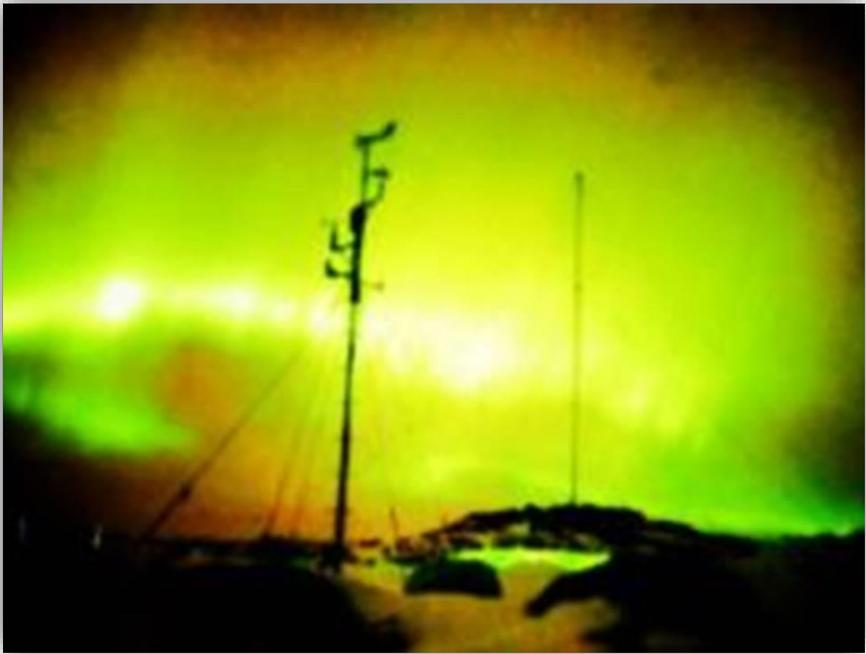
# オーロラスペクトル













# 丹 沢







**長時間のご静聴**

**誠にありがとうございました！**

**日本山岳文化学会 会員有志**

**2017.4.1**

## 第8回. 山岳文化講座と作治小屋の夜

2018年4月7～8日 田中文夫

LED照明の一夜をまたぐ、山岳文化講座と懇談会へのご参加をいただきまして、誠にありがとうございました。

突然の中村先生体調不良による講演辞退がありました。皆様のご理解で一人も欠けることなくご参加下さり、誠に感謝に堪えません。中村先生ご長男の透さんから講演辞退のお電話をいただいた時は、一部の方と電話協議し、皆様へはお知らせしないつもりでした。しかし冷静に考えると、中村先生を尊敬される方々の集まりですから、重要な内容変更となりますので、お知らせせずに隠蔽することは、主催者の信義にかかわることです。お知らせした結果に参加者が半減したとしても、それはその時に対応策を考え直せば良いと、割り切ることができました。ご参加者の皆さまへは誠意をもって事実を伝え、その結果の負える責任は素直に負えば良いと考えると、力みが抜けて自然体となります。

「田中流＝リスク・マネジメント」、おかげさまで前記の通り欠けることなくご参加下さり、嬉しいかぎりでした。参加できなかった中村先生には、解散後の夕刻に小泉義彦さんにより、お土産の「三色餅」を届けていただきました。その時の写真が右のものです。「知り合いがたくさんいるのに、出席できなくて残念!」、と先生はおっしゃっておられたという、小泉さんからのメールでした。

ご長男＝透さんからのストップが掛からなければ、先生お一人でも参加すると言っておられました。しかし長男としてストップをかけられた判断は、適切であったと理解できます。

参加数日前に家の中で転倒し、頭部 12 針を縫う負傷をされて不参加となった細坂さんへは、小泉さん奥様が「三色餅」を届けていただき、ホローの大切さを実践されています。細坂さんからは、「参加できなくて残念!」のメールをいただきました。なによりも、中村先生奥様のご回復が一番の良薬です。



2018. 4. 8 ご自宅にて中村先生(94歳)



**「山岳文化講座と作治小屋の夜」 2018年4月7～8日 主催＝日本山岳文化学会有志 ◆会費 5000円**

<p>山岳文化講座 山岳文化の歴史 山岳文化の発展 山岳文化の未来</p> <p>山岳文化の歴史 山岳文化の発展 山岳文化の未来</p> <p>山岳文化の歴史 山岳文化の発展 山岳文化の未来</p>	<p>山岳文化の歴史 山岳文化の発展 山岳文化の未来</p> <p>山岳文化の歴史 山岳文化の発展 山岳文化の未来</p> <p>山岳文化の歴史 山岳文化の発展 山岳文化の未来</p>						
---	--	--	--	--	--	--	--

8日朝の全員集合

< 山岳文化講座 >

- ① 講師 = 田中文夫 (日本山岳文化学会会員)
  - ・登山の分類と山岳スポーツのちがいがい
  - ・古代＝文化・文明の世界展開
  - ・太陽光発電と LED 照明～作治小屋実施
- ② 講師 = 岩楯 岳一、岩楯 志帆 (日本カインニング協会、日本山岳文化学会会員)
  - ・スカイランニングについて
- ③ 講師 = 中岡 久 (日本山岳文化学会事務局長)
  - ・今年2～3月のアンナプルナ・トレッキング
- ④ 講師 = 酒井 國光 (日本山岳文化学会会長)
  - ・昨年7月のチベット・トレッキング

講演者：田中文夫

講演内容：以下3題につき講演。

### (1) 【登山の分類と山岳スポーツのちがい】

第7回で発表の『登山と山岳スポーツのちがい』と同じ内容につき省略。

### (2) 【古代＝文化・文明の世界展開】

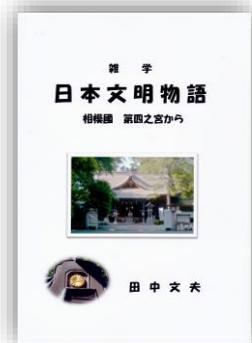
2018年6月7日、終稿の拙著＝『雑学

日本文明物語』（相模の国 第四之宮から）

国立国会図書館蔵書決定（2018年6月）

「古代＝文化・文明の世界展開」の図解を説明。併せて「天皇の系図一1」から「天皇の系図一3」までの概略説明。

現代文明が、中東の地＝ウバイド～シュメール～メソポタミアに発し、日本で習合し、「和を以て貴しと為す」聖徳太子の17条憲法に集約された、とする推考論を説明。



### (3) 【太陽光発電とLED照明～作治小屋実施】

2017年6月、それまでのエンジン発電機による照明電源及び配線を、太陽光発電装置電源へと切り替え、太陽光独立配線とする。特徴は以下。

- ① 環境に優しく、エンジン音がしないので静か、メンテナンスフリー
- ② LED照明は省エネルギー、虫が寄り付きにくい（虫が感知しにくい波長）
- ③ 常夜灯照明により、夜間トイレへ行くのにライトは不要
- ④ 夜間自動点灯する表示灯により、夜間、山中からの目印になる

＜ 主要機器仕様 ＞

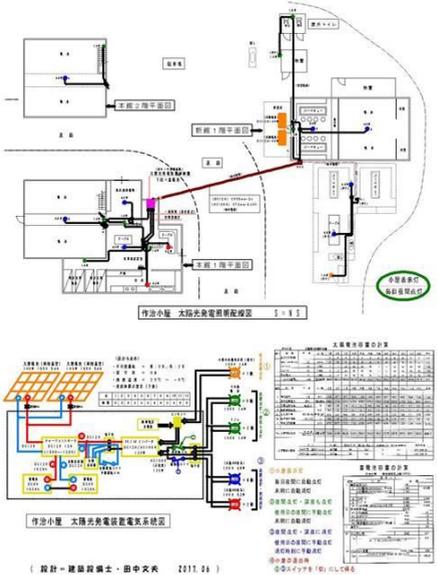
- ・ 太陽電池出力（DC12V）＝ 100W × 2 ＝ 200W
- ・ インバータ出力（DC12V⇒AC100Vへ変換）＝ 120W
- ・ 鉛蓄電池（メンテフリー）＝ DC12V 103AH（設計日数＝3日分容量）





2017年6月  
設置  
材料費  
≒15万円

作治小屋 太陽光発電照明の設計概要



作治小屋の太陽光発電と  
LED照明

作治小屋太陽光発電照明設置完工 2017.06.25



**太陽光発電照明設置完工**

完工年月 = 2017.6.25  
 作治小屋 = 荒木 英樹  
 津々木良助  
 松下 清  
 高橋八千代  
 協力者 = 岩橋 悠一  
 (岩橋賢治氏(代表取締役))  
 長坂 太郎  
 吉原 京子  
 設計製作者 = 田中 文夫  
 (建築設計士・LEED(LEED)第(認定))  
 材料費等 = 約15万円  
 施工形態 = ボランティア

## 講演—2

## スカイランニングについて

講演者：岩橋 岳一

岩橋 志帆

講演内容：第5回の「スカイランニングとは？」に重複する部分がありますが、スキル・アップしているので掲載します。

- ・ 講演者自己紹介
- ・ スカイランニングについて（概要）
- ・ レース（競技種目・内容）について
- ・ 競技団体（組織）と活動について
- ・ これからのスカイランニング



岩 楯 岳 一



岩 楯 志 帆





## What is Skyrunningg?

スカイランニング＝ランニング形式の快速登山

### Fast & Light

より軽い装備で  
より速く駆け登り・  
駆け下る

標高2000m以上の高所山岳

標高差のある急峻な登山道



ISF(国際スカイランニング連盟)の定義では、傾斜30%を超える部分を含み、登攀難易度II級(3点支持を要する)を超えない範囲とされている。

ストックやアイゼンの使用を認められているレースもあり、ヘルメットや手袋が必携装備とされることもある。

イギリスや香港など低標高の地域においてもISFの基準を満たしている場合はスカイランニング選手権が開催される。

山岳競技から都市型へと派生した超高層ビルやタワーの階段競争もスカイランニング競技種目ひとつ、バーティカルランニングと呼ばれている。

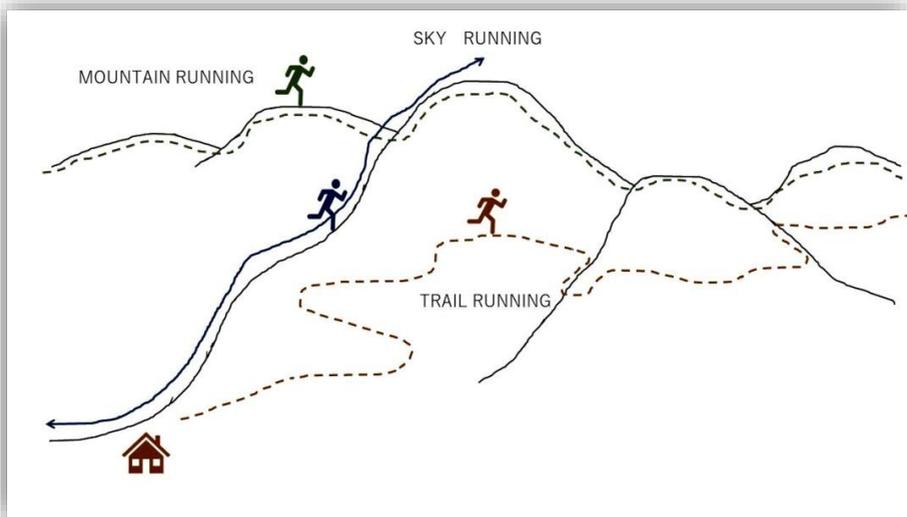
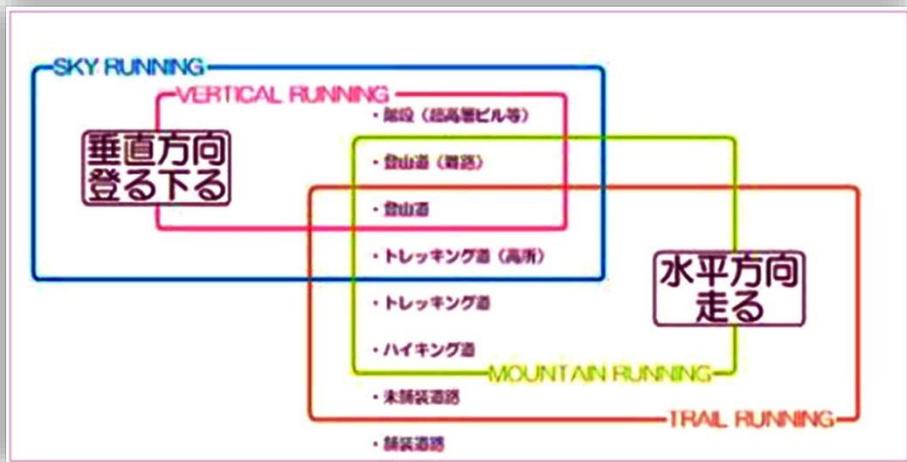
## ～最高峰の頂へ～

谷や海から、街や村から、どれだけ短い時間で登ることができるか？

1895年、イギリスのベン・ネビス山で記録会が行われた(世界最古)

日本においては1913年の富士登山競争(御殿場)が最初

スカイランニングというスポーツは快速登山者により始められた



## SKYRUNNING DISCIPLINES

主なスカイランニングの種目

- ★バーティカル
- ☆スカイレース
- ☆スカイマラソン
- ★ウルトラスカイマラソン

VERTICAL(バーティカル)

VERTICAL KILOMETER® (バーティカルキロメター)

SKYSPEED

SKYSCRAPER RACING(スカイスクレイパー(超高層ビル)レース)

VERTICAL RUNNING(バーティカル・ランニング)

## VERTICAL KILOMETER® (バー ティカルキロメター)

- 獲得標高差 1 0 0 0 m 以上
- 水平距離 5 k m 未満
- 平均斜度 2 5 % 以上の斜面  
を駆け登るレース



## SKYSPEED-100m 以上の獲得標高差 傾斜33%以上のレース





**SKYSCRAPER RACING(スカイスクレイパー(超高層ビル)レース)**  
**VERTICAL RUNNING(バーティカル・ランニング) -**  
45%を超える傾斜で 屋内外の階段を使ったバーティカル・レース



## SKY (スカイ)

### **SKYRACE® (スカイレース)**

### **SKYMARATHON®(スカイマラソン)**

- 50km未満
- 優勝者タイムが5時間未満
- コースは遊歩道、トレイル、堆石、岩や雪  
(アスファルト率が全体距離の15%未満)にまたがる
- 標高が2000mに達しない国々では、平均傾斜13%を  
保って最高標高地点に到達するコース

## SKYRACE® スカイレース

- 距離20km以上
- 累積標高差1300m以上  
(±5%)
- 優勝タイム者が3時間未満



## SKYMARATHON スカイマラソン

- 距離が30 km以上
- 累積標高差が2000 m以上
- 優勝タイム者が5時間未満



## ULTRA SKYMARATHON ウルトラスカイマラソン

- 距離50 km以上  
100 km未満
- 累積標高2500 m以上
- 優勝タイム者が5～12時間
- 制限時間16時間以内



# 競技団体（組織） と 活動について



（国際スカイランニング連盟）

- 1992年 イタリアの登山家**マリーノ・ジャコメッティ**が世界中で自然発生的に開催されていたこの種のスポーツを「スカイランニング」と定義づける
- 1995年 スカイランニングの競技団体である高地スポーツ連盟（FSA）を設立
- 1998年 第1回世界選手権がイタリアのチェルビニアで開催
- 2003年から**スカイランナー・ワールド・シリーズ（SWS）**がスタート
- 2008年 現在の**国際スカイランニング連盟（ISF）**へと組織を刷新
- 2016年1月には**国際山岳連盟（UIAA）**とパートナーシップ協定を結ぶ  
国際的なスポーツとしてより強気に普及するための環境が整う

現在、**44の国と地域**に**ISF加盟団体**が存在

世界各地で**200以上の公式戦**が開催

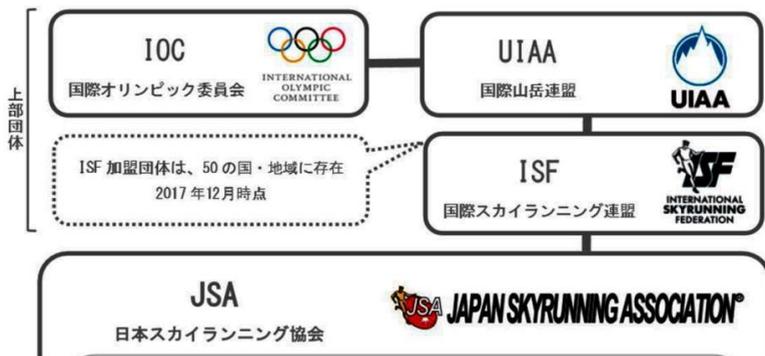
参加者は**65カ国**より**50000人**を数える



**（日本スカイランニング協会）**

**国際スカイランニング連盟（ISF）**に正式加盟している日本におけるスカイランニングの中央競技団体

## JSA 関連団体・組織図【2018年版】



- 2006年 **OSJおんたけスカイレース**がワールド・シリーズ戦として開催されスカイランニングという概念が広まる
- 2013年 **日本スカイランニング協会（JSA）**が設立  
協会設立の中心となったのは、欧州と同等のスポーツ環境を日本国内にもたらしたいという志をもったアスリートたちだった
- 2014年 ISFに正式加盟
- 2015年から**日本選手権**及び国内シリーズ戦である**スカイランナー・ジャパン・シリーズ（SJS）**がスタート

現在、**16の公認レース**が日本各地で開催されており参加者は**10000人**を数える

## JSAの目的とビジョン

### 山岳を駆けるスカイランニング

- 子どもたちが夢みる「**一流スポーツ**」へ育てること
- 子供からお年寄りまで誰もが楽しむことのできる「**生涯スポーツ**」へ育てる
- 山間部に位置する地方を活性化する「**地域スポーツ**」へ育てる

#### 一流スポーツ

各国の組織と協同してスカイランニング競技の普及とオリンピック競技化を目指す世界に挑戦する日本人アスリートを支援する

#### 生涯スポーツ

軽快登山のスタイルとして「スカイランニング」という概念を社会に広げていく他団体と連携しながら愛好者人口を増やしアウトドアスポーツ業界の振興に努める

#### 地域スポーツ

日本各地にクラブチームを結成する  
(サッカー界をモデルに、地域に密着したイベントや登山道整備や環境保全等の活動を行う仕組みをつくる)

## 団体組織について

- 上部団体はISF (国際スカイランニング連盟)  
UIAA (国際山岳連盟) を通じて、IOC (国際オリンピック委員会) にも通じる競技団体
- JSAの傘下には、地域連絡協議会や都道府県協会が組織されつつあり、個人からクラブチームへの移行も進み始めている
- 今後も段階的に組織づくりを進めていき、広く社会から認められるスポーツを目指していく

JSA

日本スカイランニング協会

JSA JAPAN SKYRUNNING ASSOCIATION®

正会員総会

監事

理事会

専門委員会

国際・強化・競技・安全環境・医科学・ユース・マーケティング

事務局

地域連絡協議会

北海道・東北・関東・北信越・東海・近畿・中四国・九州

都道府県協会

個人

クラブ

## 組織の活動（専門委員会）について

### 国際委員会

- ・ 海外関係機関・関係者との渉外活動
- ・ 日本選手団の派遣と支援

### 競技委員会

- ・ 日本選手権の企画運営
- ・ スカイランニング競技規則の指導及び普及

### 普及強化委員会

- ・ アスリートへの技術指導
- ・ 登山力強化と快速登山の普及

### 安全環境委員会

- ・ 山岳に関する知識やマナーの指導
- ・ 山岳関係者との情報交換

### 医科学委員会

- ・ コンディショニングの指導
- ・ アンチドーピングの指導

### ユース委員会

- ・ ユース選手権の規則や日程の策定
- ・ ユース合宿等の企画運営

### マーケティング委員会

- ・ スポンサー契約に関する事項の検討・立案
- ・ 権利ビジネスに関する事項の検討・立案

## JSA OFFICIAL RACE 大会



### Skyrunner@ Japan Series (スカイランナージャパンシリーズ/通称：SJS)

日本国内におけるスカイランニングの最高峰シリーズ戦  
ISF（国際スカイランニング連盟）に加盟する各国競技団体が主管するSNS（スカイランナーショナルシリーズ）のひとつであり、世界ランキングの対象となる国際公認レースとなる



### 日本選手権

SKY、ULTRA、VK、SPEEDの4種目において毎年開催される、国内最高レベルの競技会となる  
世界選手権やアジア選手権の日本代表選手の選考会も兼ねている



### 地域選手権

JSA傘下の地域協会が主管する当該地域の在住者を対象とした選手権となる  
2018年はSKY/ULTRA種目のうちの1レースが地域選手権として位置付けられている



### ジュニアシリーズ

山岳を駆け抜ける爽快感や楽しさを体験することができ、なおかつ、ジュニア世代の育成に重点をおいて開催されている山岳レースをまとめたもの  
対象となるのは小学生と中学生



### JSA公認レース

日本国内に数ある山岳ランニングレースのうち、JSAが定める競技規則を満たしている"正真正銘"のスカイランニング競技会  
※2018年3月より公認化を進めていく

## JSA登録者（会員）への義務付け（ルール）

- ・ **安全登山を第一に心がける（山岳アスリートは絶対に遭難してはいけない）**  
体力・経験に見合った登山計画を立てる  
無謀な装備で入山しない  
事前に登山計画を他者に知らせておく
- ・ **自然を破壊しない・人としての常識**  
ゴミは必ず持ち帰る  
ルートを外れない、動植物を傷つけない
- ・ **他者への思いやり**  
「山の新参者」という謙虚な姿勢をもつ  
声を掛け合う、道を譲り合う、むやみやたらに騒がない
- ・ **各山域ごとのルール・規制を守る。**  
地図やインターネットなどで事前に情報をチェックしておく

※悪質なマナー違反や登山者等とのトラブルなどがあった場合、その当事者はJSA会員の資格を失う

## 練習会やイベントの企画・参加にあたって

- ・参加資格者は、小学生以上の健康な男女（未成年は保護者の承諾、小学生は保護者の同伴が必要）
- ・原則として参加者はJSA登録アスリートのみ
- ・練習会の詳細はfacebookグループやJSA事務局からのメールにて情報共有
- ・企画者は練習会安全ガイドラインに基づいて練習会を企画しなければならない
- ・参加者は安全チェックリストの提出が義務付けられる
- ・参加者は山岳保険への加入が義務付けられる場合がある

## これからのスカイランニング

地域密着型のクラブ創設

競技力の向上、海外進出

### 地域(山域)密着型のスカイランニングクラブの創設

- 登山者との共生・共動
- 環境保全
- ジュニアの育成

## JSA加盟チーム（公認クラブ）

- **BukkaSkyClub**（神奈川県愛川町）

## J S A 準加盟チーム

- **KIRYU SKY CLUB 481**（群馬県桐生市）
- **SKY NINJA**（長野県上田市・群馬県・吾妻町）
- **富士空界**
- **S C 丹沢秦野**



## **BukkaSkyClub**（神奈川県）

ホームタウン：神奈川県愛川町

ホームマウンテン：仏果山

ホームページ：

<http://bukkaskyclub.wixsite.com/bukkaskyclub>

2017年6月加盟：001号：[紹介ページ](#)



#### SKY NINJA

2017年7月7日

##### ■概要

上信国境に跨る真田精（信州上田・上野吾妻）を拠点とするスカイランニングのクラブチームです。スカイランニングを地域に根差したスポーツにするための活動を実施していきます。

##### ■ホームタウン

- ・（本城：上田城）長野県上田市
- ・（支城：岩櫃城）群馬県吾妻町

##### ■ホームマウンテン

- ・上信国境の高山（荒間山・四阿山・草津白根山など）
- ・北八ヶ岳の高山（美ヶ原・黒山・御料山など）
- ・上田市周辺の里山（水殿山・独鈿山など）
- ・吾妻郡周辺の里山（岩櫃山・王城山など）

##### ■活動の詳細

###### ①スカイランニングに関する行事

- ・講習会：月に1～2度程度、当該地域の山岳での体力や技術の向上のための練習登山を行います
- ・競技会：ジュニア世代からシニア世代まで参加できる数十人～数百人規模の競技会の運営に携わります

###### ②環境整備活動

練習会や競技会の前後に使用する登山ルートでの整備・清掃を行います。また、里山を中心に誘導看板の設置やルート整備を実施して安全な登山ができる環境を整えます。

###### ・各団体と連携した環境保全活動

環境省のレンジャーや各種団体と連携して、レングツツの保全活動など活動エリアの山域における環境保全活動や登山道整備活動へ参加します

###### ③研修会の企画・運営

・安全やマナーに関する研修、自然保護に関する研修

※JSA安全環境委員と共同して、安全・マナー、自然環境保護に関する研修会を当該エリアで実施します

###### ④その他

・避難対策協議会への参加

スカイランナーの並外れた機動力や体力・技術力を生かして、警察や消防などの機関と連携して遭難者の捜索や救助活動へ参加します

・学校教育との連携

登山遠足への随行など当該地域における登山文化を子供たちに伝える活動を行います

## 2018年3月11日（日）群馬県桐生市において 「2018 JSA クラブチームミーティング in 桐生」を実施

この研修会は各地のクラブチームが参加  
相互の情報や意見交換によって**将来へのビジョン**を共有  
クラブ運営に欠かせない**リスクマネジメント**についても学習



- 富士山の魅力を発信します。  
景色・登山情報・新たな発見をたくさんの方々と共有します。
- 美しい富士山を後世に残すため文化や環境を学び、大切にします。
- 登山マナーを守り、見本となります。  
挨拶・登り優先・相互の安全確保・情報共有を積極的に行います。
- 安全登山を行います。  
体力・環境条件(天候・季節・時間帯)・ルートを考慮し必ず無事に下山します。
- 環境美化に努めます。  
登山時はゴミを落とさず、登山道を乱したり、植生を荒らしたりしません。
- 地域へ貢献します。  
活動を通して地域の活性化、子どもの成長を支援します。
- 感謝します。  
特別な場を与えてくれるレースやイベント。  
主催者やスタッフ・応援者、山を始めとする自然への感謝を忘れず、  
競技規定やルール・マナーを守り、運営への協力を惜しみません。

## これからのスカイランニング (競技面)

- ・ 国内・外共競技性の特化  
バーティカル(垂直方向)&テクニカル(登攀力)  
オリンピック種目を目指す
- ・ 日本選手の海外での経験値増

～富士より高く、飛騨山脈よりも厚い、世界の壁に挑む～

2018年も日本のスカイランナーたちが  
世界最高峰の舞台に挑戦！

**2018ユース世界選手権**は8月3-5日に**イタリア・グランサツン**にて開催

**2018世界選手権**は9月13-15日に**イギリス・スコットランド**で開催  
(2年に1度のスカイ王者決定戦)





## 丹沢山麓の声

- ◎ 最近の丹沢は日帰りが多かったので、今回の勉強+懇談で静かな夜を過ごし、翌朝の陽射しも感じられ、若い頃に山へのめり込むきっかけとなったこの地が、さらに好きになりました。

講座では、田中さんの多岐にわたるお話を聞いて、いろいろ知識を深めたい気持ちになり、岩楯さんからは「スカイランニング」の将来に向けて、真摯に取り組んでいらっしゃる方々のことを学び、中岡さん、酒井さんのお話や画像から、彼の地への夢をふくらませることができました。

懇親会でもご参加の皆様方から面白く、かつす暖に富むお話を聞かせていただき、感謝しております。

翌朝の餅つきは20年振りぐらいの体験でしたが、毎年暮れとお盆に郷里の土間で、家族みんなでついた情景や、味噌などを仕込んだ記憶なども、懐かしく蘇ってまいりました。

勤務先の神田神保町へ通うのも、今年いっぱいなので、毎日昼休みには古書店の悠久堂へ通い、まだ手元のない山の本を少しずつ買いそろえることが、最近の楽しみとなっています。今日はさっそく、丹沢関係の歴史の本などを購入してきました。

今後とも、よろしくお願い申し上げます。 (K・K)

- ◎ 山岳文化講座と作治小屋の夜、お疲れさまでした。

登山の幅広さ、奥深さを感じることができ、ありがとうございました。またご一緒の時は、よろしくお願いします。 (T・Y)

- ◎ 今回参加させていただいたきっかけは、仕事および野遊び仲間であるKさんからの誘いだったのですが、いつも彼の行動力に引き付けられながら、新しい体験をしています。

この正月、元旦から青森の八戸～久慈まで「みちのく潮風トレイル」と呼ばれる、環境省がすすめる三陸復興事業の一環であるトレッキングコース（八戸～相馬）

歩いていたら、同時期に丹沢を登っているKさんより、以下のショートメールが突然入りました。「・・・13日丹沢山小屋一泊、シロコロホルモン焼き新年会予定しています。楽しい出会いがありましたので・・・」よほど気に入ったらしいことが、そのメールから読み取れましたが、今回同行して、すっかり作治小屋に馴染んでいる彼に、驚いてしまいました。彼の好奇心と、人のつながり方の上手さに、改めて感心してしまいました。

あまりにも専門的な方々の集まりで、私のような素人が参加してもいいものだろうかと不安だったのですが、皆さまフレンドリーな方々ばかりで、何の心配もなく楽しいひとときを過ごすことができました。

しかしながら、講座を拝聴するに至っては、案の定なんとも凄い方々ばかりで、そのスケールの大きさに圧倒されっぱなしというのが、偽らざる感想です。場違いをひしひしと感じながらも魅力的な方々に直に接することができて、本当に倅せな時間でした。山や自然に向き合うスタイルはとても真似のできるものでありませんが、皆様のポリシーや自然に対する姿勢を参考に、自分なりに自然との関わり方を探っていけたらと思います。

野歩きとともに、先々で見かける神社にも多少興味があり、田中さんの雑学をはるかに超えた資料を拝見し、私には大変な驚きとともにまた一度、神社のお話を聴けたらと願っております。本当にありがとうございました。 (K・S)

- ◎ 今回の「山岳文化講座と作治小屋の夜」では、楽しい時間を過ごすことができました。また集合写真の送付、ありがとうございました。このような会を催すに当たって企画のきめ細かい準備、また終了後の参加者、欠席者へのホローもすばらしく、感服しました。

中村先生ご夫妻の一日も早い完治を願い、できますれば継続して会が開催されることを願っております。 (S・K)

- ◎ 皆さまの献身的なサポートのおかげで、私は何もすること無く、ただただ心地よい時間を過ごすことに専念できました。申しわけない気持ちと、感謝の気持ちで一杯です。 (O・M)

田中さんの講演を聴き、「生活」という言葉が気になり、Wikipediaで検索してみ

ました。　　～～　略　～～

「衣・食・住」の基本は、人が生活していく上で必要な、衣（衣服）、食（食事）、住（住居、雨風をしのげる寝場所）の確保である。　　～～　略　～～

「衣・食・住」という普段何気なく使っている言葉の奥深さ、重さ、を再認識しました。　（O・M）

- ◎ おかげさまで久しぶりに「山小屋」の雰囲気を楽しんだ一夜となりました。普段は人気の少ない山に単独で入ることが多いのですが、こんな「ヒュッテン・レーベン」も、乙おつですね。シシ鍋やお餅など、大変美味しくいただきました（勿論、お酒も）。集まった皆様や小屋の方々のお人柄が、このような雰囲気をもたらせているものと思います。

中村先生ご夫妻のご復帰を、心より願う次第です。

解散後しばらく、河原（丹沢の上高地！？）でボーッと過ごし、その後道草を食いながら戸川公園まで下りました。トウゴクミツバツツジは風でだいぶ散ってしまったようですが、ヤブツバキやモミジイチゴ、マムシグサの仲間等を見てきました。あとはスギ、ヒノキの生木の香り。

戸川公園、それはもう半端ない人出でしたね。そこで昼食。角煮入りちまきとピーナツ（秦野産）入りのコッペパンは、安くて美味しかった。渋沢駅まで歩くことも考えましたが、出ようとする頃にバスが2台到着。バス停はもう、長蛇の列。続行する臨時便に乗車できました。

渋沢駅北口のデッキから、富士山が見えるのですね。少し雲は多めでしたが……。これからは、山行の方も少しずつ復帰したいと思います。　（N・C）

- ◎ 多くの方々に来ていただき、楽しい時間、有意義な時間を皆様と共有することができました。朝日新聞の記者は、このような文化的な知の探究をしている人々に目を向けて、取材すべきではないでしょうか。

小泉さんが写された中村先生のお写真を拝見すると、笑顔でお元気にされているご様子が伺えました。また秋になると、「チューリップの球根を植えたい！」と、おっしゃるかもしれませんね。それぐらいお元気になっていただけると良いのですが！！

解散後に歩いた政次郎尾根～塔ノ岳～天神尾根下降は荒れていました。Sさんは何度か転ばれて怪我をしましたが、大事に至らなくて良かったです。作治小屋下山までに時間がかかり、チューリップ畑が見られないか心配でしたが、間に合いました。今年のチューリップは、綺麗でした！

作治小屋の方々にも大変お世話になりました。最後までお手伝いできなかったのも、また伺いたいと思っています。本当にありがとうございました。（T・H）

- ◎ 今回はご準備の皆さまのおかげで、至れり尽くせり、楽しいことが盛りだくさんで、素晴らしい週末でした。ありがとうございました。中村先生のお話は聞けませんでした。私にとっては100点満点以上の（銀河点のような）勿体ないほどありがたい内容でした。また是非、アンコールしたいです！

Iさんという、優しくゆかしい素適な方とお友達になることができ、小屋でも両隣で就寝させていただき、とても嬉しかったです。今度は、山もご一緒したいですね。次回を楽しみに、日々の仕事頑張ろう、という気持ちになりました。

（F・Y）

- ◎ 皆も驚く一つ一つに行き届いたご準備と、素晴らしい人々との出会いに、充実した2日間でした。先に過去の資料を送って下さる事前情報や、車でお迎えの手配など、人見知りでも対人関係が苦手な私には、同乗者の方々と共に接する機会を持って、話もしやすい環境づくりでした。

中村先生のご自宅での表情は穏やかな笑顔で、素適ですね。奥様のご自宅お戻りになることで、先生も回復されることを願っております。このような現実、私の周りでも起こっているので、きっと・・・と信じております。（I・K）

- ◎ 中村先生ご夫妻が不参加になられても、皆さん大勢集まれたのは、準備での誠実な対応が良かったからだと思います。

また、作治小屋愛好会の皆さんにも、頭が下がります。

田中さんの天皇系図や文明の流れの研究は、興味がありました。さらなる深化を期待します。天気が良く、解散後は5人で楽しく山歩きができました。塔ノ岳は21回目、12年振りでしたが、変貌ぶりに驚きました。（S・S）

◎ 作治小屋では楽しく、有意義な2日間をありがとうございました。感謝いたします。高島車での帰り、中村先生宅にお寄りしようとしたのですが連絡つかず、4時過ぎに連絡できました。昼間は病院に、透さんと行かれました。

5時過ぎにお伺いし、三色餅と出席者名簿、集合写真をお渡しできました。名簿をご覧になり、「知り合いがたくさんいるのに出席できなくて残念」、とおっしゃっていました。「次回はぜひ出たい」、とのことでした。お餅の1袋は明日、病院に持って行くそうです。

家内が細坂さんを訪ね、三色餅を渡しました。目の上と顎を怪我し、病院以外への外出禁止とのことでした。 (小泉・記)



赤線枠のチューリップは、昨秋中村先生ご夫妻が植えられたもの。(4/1 撮影=田中)

※ 4/6 朝日新聞横浜総局=K記者さんから取材の電話がありました。今回の企画は、秦野市教育委員会及び観光課、朝日新聞横浜総局の3か所へ、過去のとりまとめ資料と今回の案内概要を郵送していたからです。K記者へは、①中村先生が体調不良で講演を取り止められること、②その他は予定通り実施する旨を伝えます。K記者がウン・…とうなっているの、「ご高名な中村先生だけが取材対象ならば、取材は辞退します。真摯に登山に取り組んでいる講座ですから、そのことを通して取材されるなら、どうぞお越してください」と云い、作治小屋までのルートを説明します。

「上司と相談してみます」とK記者の弁。ということは、「取材に来ない」と、……語られぬ言葉を私は理解します。案の定、K記者は来ませんでした。 (田中・記)

## 第9回. 山岳文化講座と仲尾根登山

2018年10月20～21日 田中文夫

今年4月の山岳文化講座では、中村先生と奥様の体調不良により、講演予定だった「ムスタンの旅」は急遽中止となりました。代わりに、日本山岳文化学会＝酒井國光会長の「チベット・トレッキング」と、中岡久事務局長の「アンナプルナ・トレッキング」のご講演をいただき、参加者はヒマラヤの山々を堪能することができました。

それから毎月一度は“茶飲み話”をと、中村先生のご自宅を訪問し、今回の講演につながる「日本文明」の話を続けてきました。その中で、4月にできなかった「ムスタンの旅をふたたびお話ししたい」・・・となり、9月に入ってから急な案内となりました。

10月は、体育、行楽、文化のオン・シーズンであり、皆さまの多くがすでに予定をお持ちでした。少人数でも良いから実施する決断は簡単なのですが、中村先生と奥様の体調が整うか、心配は尽きません。それでも直ぐに、15名ほどの参加返信をいただきます。しかし実施すべきか、中止すべきか、大いなる悩みは尽きません。10月の初旬、先生のご自宅を訪問し「講演会を中止しましょうか！」と、ふたたび問いかけました。しかし先生のご意思は固く、“実施する”ことで、腹を決めます。

9月18日は中村先生の95歳の誕生日で、小泉義彦さんが中心となって沼津の山小屋に宿泊されたことから、・・・10月ならば大丈夫だろう・・・と、察することができました。今回は倉金徹夫さんの乗り心地良い車がリザーブでき、倉金さんも張り切っていたことから、作治小屋での宿泊を無事乗り切ることが、最大な課題と受け止めます。行楽シーズンで東名高速は低速道路。30分遅れて「おおすみ山居」で昼食。圓山さんの仕出弁当は奮発された豪華版。村上社長のお母様は93歳。昨春は中村先生の南極講演会に参加され、「感激と元気をいただいたから！」と。すでに過去2度、中村先生ご夫妻は作治小屋にお泊りになっていたため、小屋の津々木さんも要領を心得ています。布団の配置、ポータブルトイレ、お手拭き、個室状仕切り、等々。加えて今回は、フェイスタオル、マスクを用意しましたが、眠れぬ夜を過ごします・・・。歓談中に強い雨が降ったものの、深夜の空にはオリオン座が見事に輝き、晴天を約束してくれます。

21日朝、06:30頃、快晴の塔ノ岳を見上げる屋外テーブル付近に先生のお姿を見かけたとき・・・、ホット安堵!!!



今回も多くの方々にご協力いただきました。中村先生ご夫妻を送迎された**倉金さん**。**岩楯さんご夫妻**には、PP映像装置のセットや渋沢駅への送迎、食材調達から調理までの全てを。「皆さんが喜んで食べていただけるのが、とっても嬉しい」と岩楯夫人。スカイランニング大会で、50食以上をサット用意している実力は～恐るべし！走るだけでなく、“プラス・アルファの余力こそが文化の力”効果といえます。

写真撮影が大好きな**小泉さん**は、一人黙々と、知らぬ間のスナップ撮影。極め付きは、以前に中村先生が意識を失われた時、知らぬ間に撮影されていました。集合写真撮影時に、タイマーをセットしてから三脚を蹴飛ばさないか・・・、いつもヒヤヒヤしています。

**藤原ゆり子さん**には受付・集金をお願いしました。16年前に発足した日本山岳文化学会、設立当初から理事の一角で受付や庶務・雑務をこなされた実力が、最近ではスカイランニングに向けられ、今年ではスコットランドの世界選手権に個人でオープン参加された行動力。かつては南米のアコンカグアや北米のマッキンリー、フランスのモンブランなどを登り、本講座の翌日はトランポリン大会競技委員長長代理を務めるなど、小柄な身体はどこに、そのエネルギーが蓄えられているのでしょうか？

スカイランニングの技術指導をされている**岡島さん**は、元＝山学同志会の一員。「同志会」と略称され、小西政継氏を中心に戦後の優れたクライマーを輩出しています。その小西氏も、最後はマナスルで遭難死されましたが、「山学」の“学”は、同会設立代表だった齊藤一男さんが、日本山岳協会会長職の後に立ち上げた「日本山岳文化学会」で、初代会長になられて実践されます。このような背景にあって岡島さんは、「仲尾根エデンの園でギター演奏をしてみたい!」と、ギター教室も主宰されています。作治小屋でギター教室生徒さんたちとのバーベキュー計画が、台風25号到来で中止。かとするところ・・・数日後にはインドからのメールが届きました。

秋田県出身の**川浪さん**は、お小遣いをためてヨーロッパ・アルプス登攀に度々出掛けています。今夏も出掛ける計画が、台風で飛行機が飛ばず、あえなく断念！日頃は丹沢

を歩き廻り、作治小屋で、布団干しや薪割の手伝い。今回は小屋のスタッフが津々木さん一人だったため、皆様が気づかないところで働いていました。

同様に小学校教諭の**佐藤幸子**さんも、布団敷きや雑用で、小屋のスタッフの代役を努めて下さいました。今夏は一人で穂高へ出かけ、涸沢～奥穂～前穂～岳沢を踏破、南アルプスも一人で踏破した飛躍の年になったようです！

**荒井隆之**君は私と高校同級生。富士通で携帯電話等の移動体通信の技術開発に携わり、今では圧倒的多数が所持する携帯電話・スマホ等、影の立役者です。荒井君は高校で山岳部、私は高校でサッカー部、その二人が 28 年後の 1992 年、エベレスト・トレッキングに出掛けました。エベレストが正面に見えるホテル・エベレストビュー、このホテル設計は高校山岳部先輩である熊谷義信さん。熊谷さんは当時(株)国設計の所員。今回参加の**小林茂**さんは、現在も国設計で構造設計を担当しています。私も国設計の電気設備設計を、30 年余にわたっておこなってきました。代表作品は、神奈川県立歴史博物館復元です。この建物外壁は重要文化財ですが、明治維新で外国取引決済を一手におこなっていた“**横浜正金銀行**”を神奈川県が買収し、博物館へ転用した積石造建築です。

21 日朝から参加した**鈴木盛彦**君、平塚市内で外科・内科の開業医をしています。20 日は医師会のイベントがあって参加できませんでした。私と中学校同期（違うクラスで学級委員）、東京医大山岳部 OB です。1975～76 年にわたり、エベレスト山麓のペリチェにあった東京医大高山医学研究所に勤務した経験もあります。東京医大は上高地にも診療所を持ち、鈴木君は岳沢ヒュッテにも通っています。20 日の夜、もし彼が同宿してくれたら心強いので、宿泊要請したいと念じていましたが、それぞれにはそれぞれの事情があることから、ぐっところえます。

**下野さん**、**豊田さん**、**江部さん**とはまだお話が足らず、コメントできない失礼をお許し下さい！

作治小屋＝**津々木さん**は孤軍奮闘となりましたが、後日の電話で「**80 歳まで小屋を護る**と言っていたけど、中村先生に接して前言撤回し、もう年のことは言わないようにする！！」と、中村先生ご夫妻からパワーをいただいた様子。津々木さんは私よりも 4 歳年上の 76 歳。今回は参加できなかった小屋の松下さん、荒木さんは私と同年の 72 歳、安瀬さん、八千代さんは 2 歳年上、会長の下坂さんは 80 歳（？）・・・と、全員高

齡者。小屋は存続の危機にあります。が、“**作治小屋は丹沢の上高地**”、登山者が佇む淀みの中にこそ、**人生の英知**を見出すことができます。**出来る人が、出来る時に、出来る事を、出来る範囲で、・・・やる**（しかし、出来ないことの方が多い）・・・そしてちょっとだけ無理をする・・・！！ そんな意識をもっておこなった、「**山岳文化講座 in 作治小屋**」でした。

前記のよう、参加者全員のご協力、ご助力により、楽しいひとときを分かち合うことができました。

帰り際、中村先生奥様のお言葉＝「**まだ帰りたくない・・・！！**」の一言に、全てが凝縮されていました。

----- **皆さま、ありがとうございました！！** -----

**烏尾山仲尾根登山**の参加希望者は、**小林茂さん**だけでした。

21日（日）は雲一つない快晴の丹沢に、行かない手はありません！

今年の丹沢週末は曇り～雨が多かったのです。私の仲尾根登山は**47**回目。週末テニスで運動している小林さんも調子良く、三ノ塔尾根を下山してから「**おおすみ山居**」でクールダウン。公園まつりで賑わっていましたが、抹茶と生菓子、最後はおまけのアイス・コーヒー。「**おおすみ山居職員の方々**」にも、大変お世話になりました。ありがとうございました。



「山岳文化講座と仲尾根登山」 2018年10月20～21日 主催＝日本山岳文化学会有志

◆写真撮影＝小泉義彦

山岳文化講座「山岳文化」  
1. 講師＝中村純二、あや  
山岳文化  
2. 講師＝岩楯岳一、志帆  
山岳文化  
3. 講師＝田中文夫  
山岳文化

津久木良助

下野敦志

岩楯岳一

田中康生

倉本重夫

田中文夫

栗本重夫

中村純二

荒井隆之

中村あや

小林茂

藤原ゆり子

江部賢嗣

豊田茂

佐藤幸子

川島浩明

岡島正輝

小泉義彦

鈴木健彦



撮影

＜ 参加者集合写真 ＞

### 山岳文化講座 in 作治小屋（講演内容）

- ① 講師＝中村純二、あや
  - ・ムスタンの旅
  - ・父の思い出（金森徳次郎＝憲法担当国務大臣）
- ② 講師＝岩楯岳一、志帆
  - ・2018年スコットランド 世界選手権の結果と  
スカイランニングの紹介
- ③ 講師＝田中文夫
  - ・2018年著作『日本文明物語』の解説
  - 聖徳太子＝17条憲法（和の精神）
  - 金森徳次郎・憲法担当国務大臣＝日本国憲法  
（平和憲法）

講演者：中村純二

中村あや

講演内容：2018年4月の第8回でお話いただく予定でしたが、ご夫妻ともに体調を崩され、急遽中止となりました。その後体調も回復され、ふたたびお話しいただくことになりました。この経緯は、前文に記したとおりです。お話しが始まると（写真＝右下）すぐ、内容説明は奥様に移されました（写真＝左下）。以下、ムスタン～ネパールのお話しです。

（田中・記）



## ムスタンの旅

講演 = 中村純二 先生

2018年10月20日  
山岳文化講座 in 作治小屋

主催 = 日本山岳文化学会 有志

1



2



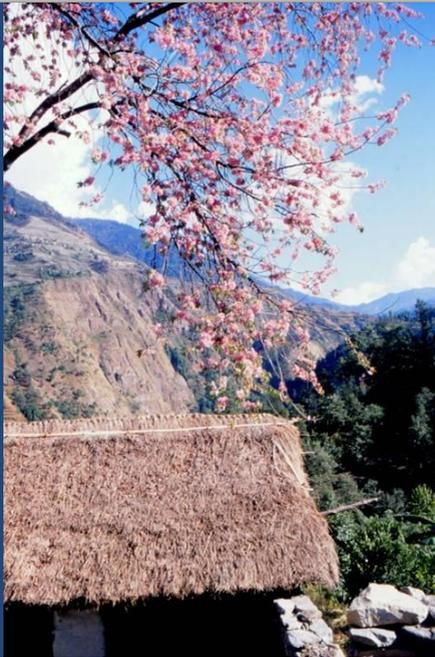
3



4



5



6



7



8



9



10



11



12



13



14



15



16



17



18



19



20



21



22



23



24



25



26



27



28



29



30



31



32



33



34



35



36



37



38



39



40



41



42



43



44



45



46



47



48



49



50



51



52



53



54



55



56



ご 静 聴

ありがとうございました！

中 村 純 二

日本山岳文化学会 有志  
2018. 10. 20

講演—1—2

父の思い出

講演者：中村あや

(父＝金森徳次郎＝昭和21年・第1次吉田内閣・憲法担当国務大臣) 次女

講演依頼経緯：皆様の前でお話したことがないので、大変渋られました。

現在の安倍総理大臣は、「戦後レジームからの脱却」をかかげ、「憲法改正」の信念をもって政治課題としています。

今日この後で講演する田中の、「日本文明物語の解説」の中で、世界文明が日本で習合し、その習合の成果は『聖徳太子＝17条憲法』と『日本国憲法』に表わされている・・・とする物語(仮説)を採り上げます。

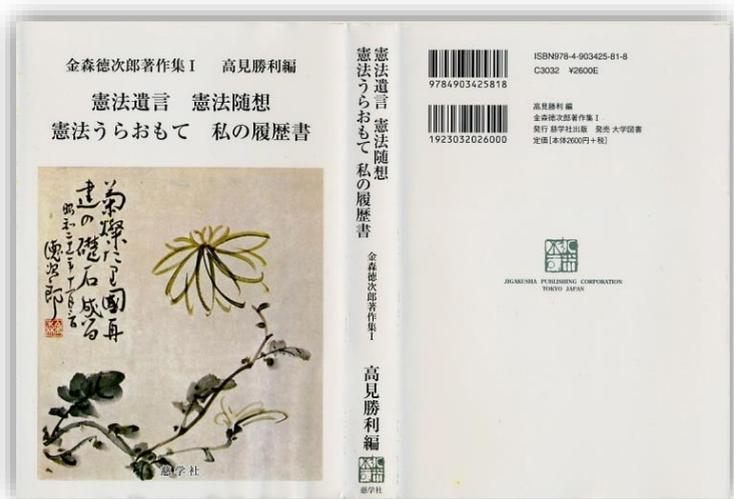
あや様の実父＝金森徳次郎・憲法担当国大臣は、昭和21年に制定された『日本国憲法』制定の産婆役を自認され、さまざま書き残されています。『金森徳次郎著作集Ⅰ』には、『憲法遺言、憲法随想、憲法うらおもて、私の履歴書』が整理編集されています。

この書を読んだ田中は、自身の物語(仮説)に符合する多くを発見していました。その詳細は別として、戦後教育の中で定着した憲法観は、

「**連合**国（アメリカ）の押しつけ**憲法**」と短絡されています。しかしながら、人類発祥、現生文明発祥、そして現代文明・文化へと至る物語を自ら学んでみると、日本で習合した人類の英知こそが、『**日本国憲法**』に集約されていることに気づきます。そのことへの示唆が、『**憲法遺言、憲法随想、憲法うらおもて、私の履歴書**』に散見されます。

つまり『**日本国憲法**』は、過去の世界大戦や革命を踏まえて、人類が理想をめざした『**人類憲法**』と理解できます。しかし独立国たる一国の憲法として適切であるか、否かは、別な論議を要するもので、憲法改正論議は、この次元まで遡らなければならないと考えるのです。その点へと論考を進めているのが拙著『**雑学 日本文明物語**』であり、『**日本国憲法**』制定思想に大きくリンクしています。

このような関係性にあるからこそ、実父としての金森徳次郎・憲法担当国大臣の素顔の一片をご紹介していただきたく、是非にと、お願いした次第です。（田中・記）



## 2018年スコットランド世界選手権の結果 と スカイランニングの紹介

講演者 : 岩 楯 志 帆

講演内容 : 2018年、スコットランドでおこなわれた世界選手権に、JAS国際委員会委員長及びサポートスタッフとして参加。以下、その報告。

### 岩楯 志帆 (いわだて しほ)プロフィール

- 三重県四日市市出身 スカイランナー8年生
- 子育てをしながらできるスポーツとしてロードランニングを始め、トレーニングの一つとして山に行き始めた頃「おんたけスカイレース」に巡り合い、最終的にスカイランニングに行きついた。
- 2016年 スカイランニング世界選手権日本代表。
- 現在 日本スカイランニング協会 国際委員会委員長(競技も続けてます)。
- 2017、2018年 ユース世界選手権サポートスタッフも務める。
- 雪上のスカイランニングSki Mountaineering(SKIMO)にもハマっている。



## Scottish Skyrunning

2018 スカイランニング世界選手権

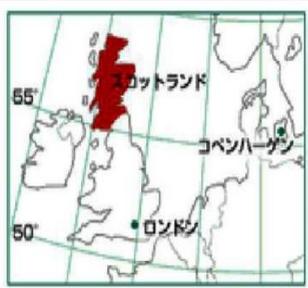
- スコットランド ハイランド地方について
- 2018スカイランニング世界選手権 Team Japan の挑戦
- イギリス諸島最高峰 スカイランニングレース発祥の地 Ben Nevis
- まとめ

### スコットランドの地理と気候

北海道やサハリンより遥か北。  
面積は北海道とほぼ同じ。  
全面積の3/4が沼やヒースと石ころの岩山でほとんど不毛。



ハイランド地方は氷河浸食を最も激しく受けた地域。数々の谷、湖、複雑に入り組んだ海岸、礫土に覆われた岩山、ビートに覆われた湿地など特有の景観。



「一日の中に全ての気候がある」  
朝から日が照ることは珍しく、雨、強風は日常的。たまに日が射すと蒸し暑く、midgeと呼ばれる小さなブヨがまわりつく。











## スカイランニング世界選手権2018 Skyline Scotoland

1998年初開催(イタリア チェルヴィニア ペンネアルプス)以来、2年ごとに開催される世界選手権は、各国代表で構成されるナショナルチームだけでなく、一般からも多数出場者が集まる。

これまでのイタリア、フランス、スペインに変わり、2018年はスコットランド ハイランド地方のキンロックリーベンが開催地となった。

9/13~15の3日間 3種目(世界戦)

+16日 Glen Coe Skyline(エクストリーム ワールドシリーズ戦)

【世界戦 3種目】

9/13 VK : 5km 1022meter Na Gruaigachean

14 ULTRA : 52km 4,000m Ben Nevis (47.5km 16420m Glen Nevis Trail)

15 SKY : 29km 2500m The Devil's Ridge, An Gearanach ridge

【エクストリーム ワールドシリーズ Glen Coe Skyline】

9/16 Extreme : 52km 4750m (32km 2700m)

Ben Nevis山頂



## リザルト

### MamorSalomones VK results (2018 Skyrunning World Champs - VK)

#### Men

1. Rémi Bonet (SUI) - 39'23"
2. Thorbjørn Ludvigsen (NOR) - 41'49"
3. Stian Angermund-Vik (NOR) - 41'50"
4. Alex Oberbacher (ITA) - 42'34"
5. Jan Margarit (ESP) - 42'58"
7. Toru Miyahara (JPN) - 44'02"
18. Takashi Shinushigome (JPN) - 45'48"
23. Goki Nagasato (JPN) - 46'51"
30. Shun Goroutani (JPN) - 47'32"

#### Women

1. Laura Orgué (ESP) - 51'35"
2. Lina El Kott Helander (SWE) - 52'34"
3. Hillary Gerardi (USA) - 52'53"
4. Elise Chabbey (SUI) - 53'59"
5. Gisela Carrión (ESP) - 54'40"
35. Mina Ogawa (JPN) - 1h04'02"
36. Yuri Yoshizumi (JPN) - 1h04'04"

## Salomon Ben Nevis Ultra results (2018 Skyrunning World Champs - ULTRA)

### Men

- Jonathan Albon (GBR) - 3h48'02"
- André Jonsson (SWE) - 4h00'35"
- Luis Alberto Hernando (ESP) - 4h01'21"
- Manuel Anguita (ESP) - 4h01'41"
- Andreu Simon (ESP) - 4h04'32"
- Yuichi Miura (JPN) - 4h14'55"
- Toru Higashi (JPN) - 4h19'31"
- Makoto Yajima (JPN) - 4h32'13"
- Kazufumi Ose (JPN) - 4h45'25"

### Women

- Ragna Debats (NED) - 4h36'20"
- Gemma Arenas (ESP) - 4h50'32"
- Maria Mercedes Pila (ECU) - 4h50'36"
- Natalia Tomasiak (POL) - 4h52'46"
- Henriette Albon (NOR) - 4h53'04"
- Yukari Hoshino (JPN) - 5h29'21"

## Salomon Ring of Steall SkyRace® results (2018 Skyrunning World Champs - SKY)

### Men

- Kilian Jornet (ESP) - 3h04'34"
- Nadir Maguet (ITA) - 3h06'05"
- Stian Angermund-Vik (NOR) - 3h'09'05"
- Alexis Sévenec (FRA) - 3h11'56"
- Pascal Fgji (SUI) - 3h12'24"
- Yoshihito Kondo (JPN) - 3h'49'58"
- Dai Matsumoto (JPN) - 3h50'50"
- Satoshi Kato (JPN) - 3h'54'51"

### Women

- Tove Alexandersson (SWE) - 3h48'28"
- Victoria Wilkinson (GBR) - 3h54'01"
- Holly Page (GBR) - 3h57'57"
- Sheila Avilés (ESP) - 4h01'20"
- Laura Orgué (ESP) - 4h03'56"
- Takako Takamura (JPN) - 4h10'17"

\*コンバインド：Remi and Laura



WORLD SKYRUNNING CHAMPS 2018

### Country ranking

	Vertical	Sky	Ultra	Total
<b>GOLD</b> SPAIN	204	264	304	772
<b>SILVER</b> UNITED KINGDOM	196	278	260	734
<b>BRONZE</b> USA	260	154	194	608
JAPAN	202	166	208	576
CZECH REPUBLIC	154	184	220	558
POLAND	252	142	144	538
NORWAY	264	198	68	530
NETHERLANDS	172	146	192	510
SWEDEN	166	164	100	430
PORTUGAL	116	106	208	430
ITALY	78	160	172	410
HUNGARY	150	96	118	364
AUSTRIA	120	92	124	336
FRANCE	64	162	64	290
RUSSIA	146	74	64	284
SWITZERLAND	56	222	0	278
ECUADOR	0	0	114	114
CHINA	60	0	16	76
AUSTRALIA	24	10	34	68
NEW ZEALAND	0	0	62	62
BRAZIL	14	46	0	60
BULGARIA	20	0	22	42
FINLAND	16	24	0	40
LITHUANIA	0	30	2	32
HONG KONG	0	0	30	30
PHILIPPINES	0	20	0	20



WORLD SKYRUNNING CHAMPS 2018

### Medal Count

	GOLD	SILVER	BRONZE	TOTAL
SPAIN	4	1	2	7
SWITZERLAND	2		1	3
SWEDEN	1	3		4
UNITED KINGDOM	1	2	1	4
NETHERLANDS	1			1
NORWAY		2	2	4
ITALY		1		1
USA			2	2
ECUADOR			1	1

\*チームポイント：上位4名(うち1名女子)のポイント



## 選手の体験談



- ・日本国内では体験したことのない斜度のキツさ。
- ・自力で下りられなかった。(VK)
- ・コースライン取りと変化する足場に対応する力不足を感じた。もっと山で練習しないといけない。
- ・スクランピング(ザイルを使わずに山頂を目指すスポーツ)の多いコースに驚いた。
- ・なんて悪天候なんだ。雨と強風の中、開催されることが信じられない。
- ・スタート時間が遅すぎる。(VK)
- ・寒すぎて身の危険を感じた。あんなに怖いと思ったのは初めて。(VK)
- ・必携品多いなあ。。。 (SKY)
- ・エイドがほとんどないことに不安や戸惑いがあった。
- ・コース変更が残念。(ULTRA)



日本と比較or  
現場対応力  
登山経験値の差



- ・世界の強豪が集まる大会に出場できる喜び、高揚感や緊張感はたまらない。
- ・ぬかるんで滑りやすい下りが楽しい。
- ・ジャブジャブと渡渉する区間やスクランピング、三点支持を必要とする区間、ガレ場は面白く、思いきり楽しめた。

- ・メダル獲得できなかったことが悔しい。3位がアメリカということに若干の驚き。彼らはこれからどこまで強くなるのか。

マウンテン  
ランニング

Toru Miyahara



Goki Nagasato



Takashi Shinushigome





Shun Gorotani



Mina Ogawa

Yuri Yoshizumi



Toru Higashi







Makoto Yajima



Kazufumi Ose



Satoshi Kato



Dai Matsumoto



Yoshihito Kondo



Takako Takamura



Kanako Hasegawa





Killian Jornet



**BEN NEVIS**

スコットランド ハイランド地方グランピア  
ン山 地 イギリス最高峰 標高1344m



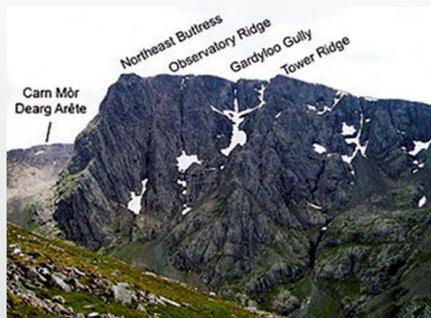
国内最大級の高さ700mを誇る北壁は多くのクライマーや登山家をひきつけており、幅広い難易度のスクランピングないしロッククライミングルートが用意されている。アイスクライミングにおいてもイギリスで重要な位置を占める。

2006年5月17日には山の大部分を所有する環境保護団体ジョン・ミア・トラストが最高点のケアンズの真下に埋もれていたピアノを掘り起こした。20年以上前に慈善事業で持ち込まれたと見られている。





山の南側



北壁の主なクライミングポイント

1979年⇒



## BEN NEVIS RACE

ベン・ネビス山初のヒルランニングは1895年



初めて登山タイムを残したのは理髪師ウィリアム・スワンで、同年9月27日ごろにフォート・ウィリアムの旧郵便局と山頂との間を2時間41分で往復した。スワンの記録は後年更新されていくが、1898年6月3日にはスコットランド・アマチュア体育協会のもと始めてレースが行われた。10名の参加者はフォート・ウィリアム近郊のパナビーにあるロチェル・アームズ・ホテルからスタートしたため、フォート・ウィリアム市街からスタートしたスワンよりは若干長いコースになった。優勝者は猟場管理人をしていた21歳のヒュー・ケネディで、記録はスワンと同じ2時間41分であった。

レースは山頂測候所が閉鎖される1904年まで、あと2回行われた。

その後、レースは1937年に再開され現在も続いている。日時は9月の第一土曜日で、定員は500名、フォートリウィアム近郊のクラガン・パークサッカー場と山頂とを往復する距離にして14km、標高差1340mのコースである。エントリーにはヒルレースに3度参加しなければならない。参加者には雨合羽、帽子、手袋、ホイッスルの携帯が義務付けられる。スタートから2時間で、山頂に到達していない者も途中で折り返す。

現在は定員600名、Hill runner、Fell runner と呼ばれる人たちが出場する賞金レース。2018年優勝者Finlay Wildの記録は1時間27分。

\*富士登山競争は1913年が最古 1925年以降は駅伝競技 1948年～個人種目 歴代最高記録2h27m(宮原 徹)

### 岩楯感想

「THE 山岳スポーツ」 「揺るがないScottish Mind」 「スカイランナーは登山者であれ」

#### 反省・課題

- ・基本的な身体の違い
- ・情報収集不足
- ・気象、山岳に合わせたプラン作りができていない。結果、対応できていなかった。
- ・計画的な事前準備の必要性。時間、金銭面に余裕のない現実











講演者：田中文夫

講演内容：山岳と文明は、直接的な関係性が疑問視されます。現代文明発祥の地とされるウバイド文明～シュメール文明～メソポタミ文明は、<sup>こんろん</sup>崑崙山脈の麓に居住していた<sup>こんろん</sup>崑崙族、後に<sup>こうめい</sup>閩蔑族がBC5,500年頃に彼の地へ移動して興した文明とされます。

民族移動にとり、山岳・山脈は障害となり、移動経路に大きな影響を与えます。また知性が、海よりも山岳において発達することは、山岳自然環境と人間文化との関わり方が、大きく作用するのではないかと考えられます。その研究は別としても、まずホモサピエンス発祥から日本文明形成へと至る大きな流れ（物語）を探索するのは、未踏の頂きや岩壁に挑むと同様、大変面白いフロンティアです！！



**山岳文化講座 in 作治小屋**

**雑学 日本文明物語の解説**

**Q1 = 何が見えてくるか → 世界文明日本習合 = 和の精神創出**

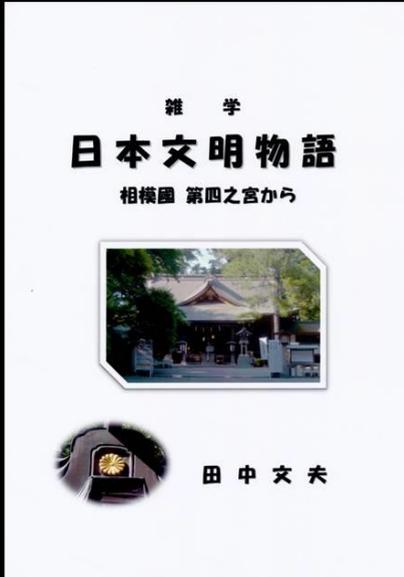
**Q2 = どうすれば良いか → 和の世界認識普及 = 複素(数)認識**

**田 中 文 夫**

日本山岳文化学会 正会員  
総合人間学会 正会員

2018年 10月 20日 (土)

## 国立国会図書館蔵書 詳細情報



日本文明物語：相模國第四之宮から：雑学  
田中文夫 著

### 詳細情報

#### 書誌作成中

タイトル：日本文明物語：相模國第四之宮から：雑学

著者：田中文夫 著

著者標目：田中\_文夫\_1946-

出版地(国名コード)：JP

出版地：[出版地不明]

出版社：[田中文夫]

出版年月日等：[2018]

大きさ、容量等：231p；21cm

注記：年表あり

注記：文献あり

注記：著作目録あり

価格：非売品

出版年(W3CDTF)：2018

対象利用者：一般

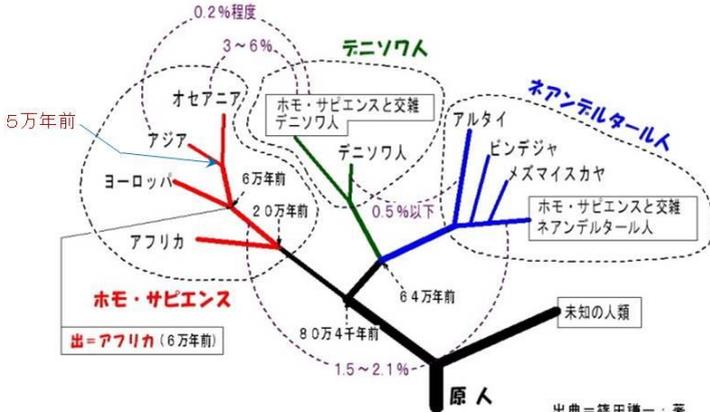
資料の種類：図書

言語(ISO639-2形式)：jpn；日本語

## 構想の動機

1. **中村純二先生**＝東京大学名誉教授の論文『三輪山と国の始まり』(日本山岳文化学会、2017年)で、「**天皇系図**」をPCで作成。各々の天皇につき、確認作業で内容に踏み込み興味を持つ。
  - ・ 奥様(**あや**)は、**金森徳次郎**＝憲法担当国务大臣の次女。
2. **自分探しの旅**
  - ・ 生誕地「**相模國 第四之宮**」神社の祭神＝ウジノワキイラツコ(15代応神天皇の第6皇子)と、神社の**15菊花紋章**(天皇家は16菊花紋)への疑問から、天皇への関心が広がる。(古代イスラエル)
  - ・ **集団に馴染まない性格**は、何に由来するのかの疑問。
  - ・ 幼少期から、いつも天から見透かされている感覚があり、**完全**(総合、統合)でないと**不安**にかられた。(救われたのが登山体験)
  - ・ **完全なイメージ**は、**球体**にありそうな感覚→高校の卒業文集に書く
3. **鈴木弥栄男氏との出会い**→上記、中村先生のホルトガル講演会
  - ・ **トインビー**『**図解 歴史の研究**』対訳書の「**文明整理**」を参照。

# ホモ・サピエンスの誕生 (約20万年前～アフリカ)

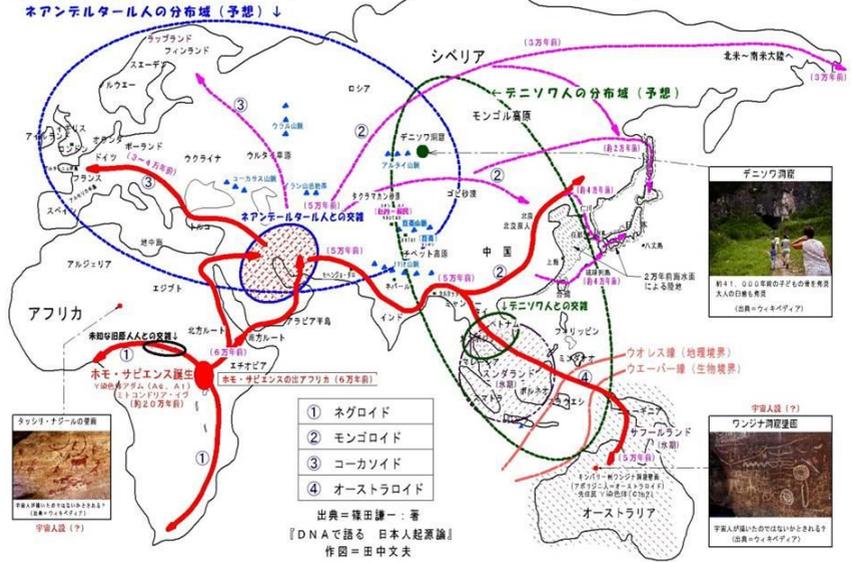


ホモ・サピエンスと他原人との交雑系統

出典 = 篠田謙一：著  
『DNAで語る 日本人起源論』  
作図 = 田中文夫

## 人類最初の拡散

### ホモ・サピエンスと他原人との交雑



宇野人説 (ア)



約41,000年前の子どもの歯をも携来した人の歯も発見 (出典=ウキペディア)



宇野人が聞いたのではないかとされる (出典=ウキペディア)

- ① ネグロイド
- ② モンゴロイド
- ③ コーカソイド
- ④ オーストラロイド

出典 = 篠田謙一：著  
『DNAで語る 日本人起源論』  
作図 = 田中文夫

# 【 第1段階 = ホモ・サピエンスの世界展開 】

## 1. ホモ・サピエンス（現生人類の祖）

- ・ 約 20 万年前にアフリカに誕生
- ・ 約 6 万年前にアフリカを出立～アラビア半島～中東へ
- ・ 途上でネアンデルタール人、デニソア人と交雑

（次頁参照 → 身体的な強さを補強）

- ・ **道具の発明** → ① 縫い針（毛皮）～シベリア踏破
- ② 丸木舟（渡航）～海洋渡航

## 2. 西側（ヨーロッパ）への展開 → コーカソイド（騎馬系）

## 3. 東側（アジア）への展開 → モンゴロイド（海・農系）

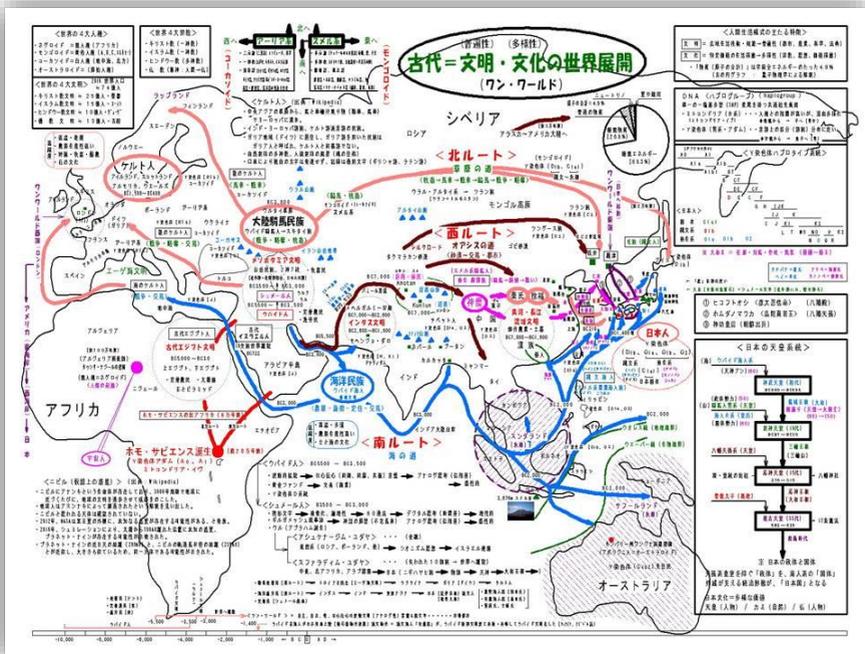
## 4. 東南側（オーストラリア）への展開 → オーストラロイド

## 5. 日本列島へ到達 → 縄文人となる（Y染色体D系統）

① 約4～2.5万年前 → 台湾～琉球列島～九州

② " → 朝鮮半島～九州

③ 約2万年前 → シベリア～サハリン～北海道（毛族）



## 【第2段階 古代文明の世界展開】

1. 古代文明は、ウバイド→シュメール→メソポタミアの地でBC5, 500~BC3, 000頃発祥し、BC3, 000頃からウラル山脈~コーカサス山脈はさんで、東 / 西 へ拡散
2. 西側（ヨーロッパ）への展開は → コーカソイド  
アーリア系が主体 → 自然分析（一神教徒、無神論者）  
特徴
  - ・ 屈折語（文法構造=インド・ヨーロッパ語族）
  - ・ 二元論（2進法=分析・科学）
  - ・ 戦争、略奪、交易、騎馬 ~ 移動
  - ・ 狩猟、牧畜、農耕（内陸） ~ 定住→城塞都市
3. 東側への展開は（アジア） → モンゴロイド  
スメル系が主体 → 自然崇拜（多神教、崇拜）  
特徴
  - ・ 膠着語（接頭語、接尾語で構造=日本・朝鮮・モンゴル等）
  - ・ 孤立語（一語一形態=シナ・チベット等）
  - ・ 多元論（60進法）、多神教、自然・人物崇拜
  - ・ 農耕（川沿平野）、漁労（海辺）、村落定住、交易

## 【文明の世界展開 - 1】

### 西側（ヨーロッパ）への展開 → コーカソイド（騎馬系）

1. 高緯度、低温・乾燥気候 = 農耕に適さない（北欧）  
中緯度、砂漠・乾燥気候 = 塩水濃度が高い（地中海）
  - ・ 石の文明 → 金属を素材とする無機物文明・文化
  - ・ 生存の文化 → いかにかに生き残るか（安心領域確保~城塞・鍵）
2. 狩猟、牧畜、酪農 = 肉食 = 騎馬民族
  - ・ 特徴 = 移住生活 → 略奪、殺戮、攻・守
  - ・ 狩猟技術・武器 = 罠、罠、騙し、殺す
3. 2元思考が発達 = 2原論、2進法 → デジタル思考
  - ・ プロトコル（定義）文化 = 理性で定義し尽くす
  - ・ デジタル思考 = 2元判断（敵/味方、正/反、YES/NO）  
曖昧さのない空間プロット（離散的） → 数値、序列
  - ・ 一神教、科学、コンピュータ等が発達
  - ・ 思想（論理思考=〇〇主義、倫理思考=モラル）

## 【 文明の世界展開－2 】

東側（アジア）への展開 → モンゴロイド（海・農系）

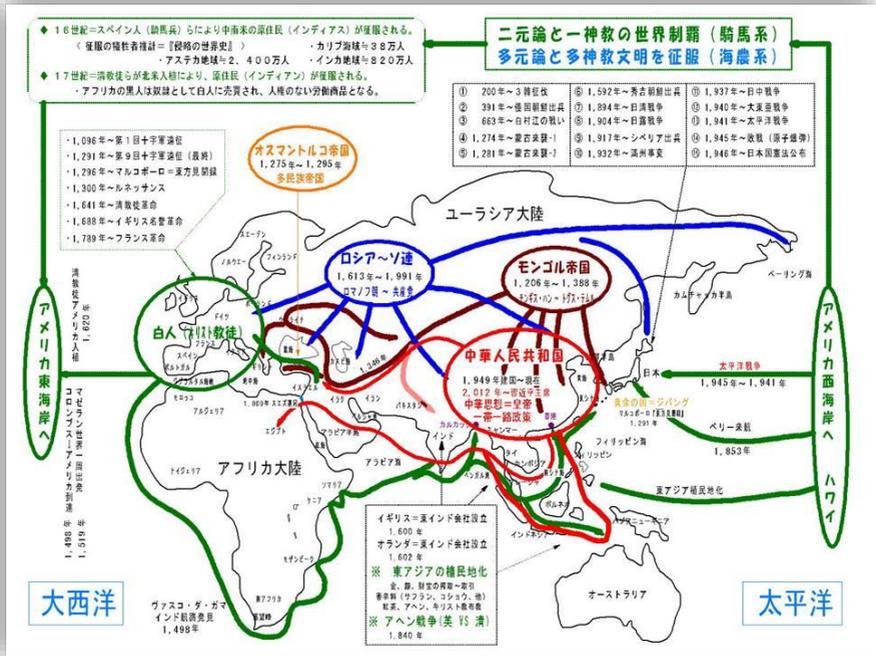
1. 中緯度、温暖・湿潤気候 = 農耕に適す（東アジア）  
低緯度、高温・多湿気候 = 農耕・漁労に適す（南アジア）
  - ・土の文明 → 土を素材とする有機物文明・文化
  - ・土の文化 → いかにな生活を楽しむか（共存共栄～鍵なし）
2. 漁労・農耕 = 魚貝・農作物生活 = 海人・農耕民族
  - ・特徴 = 集団定住生活 → 村落・地域 = 共助・扶助
  - ・農耕・漁労技術 = 灌漑、舟
3. 多元思考が発達 = 多原論、60進法 → アナログ思考
  - ・寛容な文化 = 連続的 → 集団化、均質化
  - ・多神（ヒンドゥー教、神道＝八百万神、自然崇拝神）
  - ・思想（思念瞑想的＝仏教、論理的＝儒教）
  - ・占星・祈祷、暦・時間（60進法）
  - ・ウバイド精神文明＝波動的拡散（以心伝心、共鳴、同調）

## 【 東アジア展開から → 日本列島で習合 】

1. 北ルート（シベリア～モンゴル～日本列島）約2万年前  
スメル系＝移住～狩猟、採取  
・ウラル・アルタイ系ツラン族
2. 西ルート（シルクロード～満州～朝鮮～日本列島）  
スメル系＝移住～狩猟、牧畜、騎馬、馬車、戦争・略奪  
（崑崙山脈～中国（神農）～日本）  
スメル系＝定住～農耕、土器、
  - ・特徴＝膠着語（接頭語、接尾語で文法構造＝日本・朝鮮・モンゴル等）
  - 孤立語（一語一形態＝シナ・チベット等）
  - ＝多元論（60進法）、多神教、自然・人物崇拝
  - ＝農耕、漁労、村落定住、交易
3. 南ルート（東南アジア沿岸～沖縄～日本列島）BC2,000頃  
スメル系閩蔑海人族＝定住～漁労、採取、
4. 習合の結果 → 天皇家を国体とした「和合国家」に収斂







- 二元論と一神教の世界制覇(騎馬系)**  
**多元論と多神教文明を征服(海農系)**
- ・ 1,096年~1,291年 **十字軍遠征** → **中東・アラビア**
  - ・ 16世紀 **スペイン** → **中南米原住民(インディオス)**
  - ・ 1,600年 **イギリス** → **東インド会社設立(インド~中国)**
  - ・ 1,602年 **オランダ** → **東インド会社設立(東南アジア)**
  - ・ 1,620年~1,890年 **清教徒、アメリカ入植** → **北米原住民(インディアン) → 西海岸へ至る**
  - ・ 1,840年 **アヘン戦争** → **イギリス VS 清(中国)**
  - ・ 1,853年 **ペリー(米)浦賀来航** → **日米和親条約**
  - ・ 1,941年~45年 **太平洋戦争** → **地球周回~日本終息**

## 二元論と一神教の世界制覇 太平洋戦争(ワンワールド)の見直し理解

### 日米戦争を起こしたのは誰か……

「フーヴァー大統領回顧録」「ヤルタ会談」「日米戦争を起こしたのは誰か」

- ① **ルースベルト** = アメリカ32代大統領の野望  
※ オレンジフラン = 海軍の対日作戦、ニューティール政策失敗の脱却
- ② **チャーチル** (英国) = バランス外交から逸脱、米国参戦促す
- ③ **スターリン** (ソ連) = 共産主義の世界覇権野望(漁夫の利)
- ④ **蒋介石** (中華民国) = 中華民国 VS 中華人民共和国 ← 内戦支援
- ⑤ **ワンワールド勢力** = 連合軍を形成(プロテスタント教国化)  
※ フリーメイソン = ルースベルト、トルーマン、マッカーサー、チャーチル
- ⑥ **追い詰められた日本外交** = 政府・軍部・天皇(天皇とワンワールド)

## 二元論と一神教の世界制覇 多元論と多神教文明 = 日本から世界へ再発信

- ・ 1941年～45年 **太平洋戦争** → 地球周回 ~ **日本終息**
- ・ 1946年 **日本国憲法公布** (人類の理想規範)
  - ① **アメリカの押し付け憲法** …… 戦後教育 (GHQ フレス・コード)
  - ② **フランス革命** (自由・平等・博愛) を参考とし、日本文明の英知を結集した成果 …… **金森徳次郎全集 & 私の理解**
  - ③ **日本を独立国として見れば** …… 憲法の**一部改正**を要す  
※ 二元論世界の一員たる立場からの理解
  - ④ **日本文明から世界思想の発信** …… 憲法趣意を世界へ波及  
※ **多元論世界の一員たる立場から世界へ発信(波動)**  
※ 多元論 → **複素思考** (現実 + 理想 = 多次元) への昇華が必要

# 世界の歴史-1 (BC5万年~BC490年)

紀元前	（ネアンデルタール人から現代人類まで）				紀元前	紀元前	紀元前
	アフリカ	ヨーロッパ	アジア	オセアニア			
200000	アフリカ大陸						
100000	アフリカ大陸						
50000	アフリカ大陸						
40000	アフリカ大陸						
30000	アフリカ大陸						
20000	アフリカ大陸						
10000	アフリカ大陸						
5000	アフリカ大陸						
4000	アフリカ大陸						
3000	アフリカ大陸						
2000	アフリカ大陸						
1000	アフリカ大陸						
500	アフリカ大陸						
400	アフリカ大陸						
300	アフリカ大陸						
200	アフリカ大陸						
100	アフリカ大陸						
50	アフリカ大陸						
0	アフリカ大陸						

# 世界の歴史-2 (BC490年~AD400年)

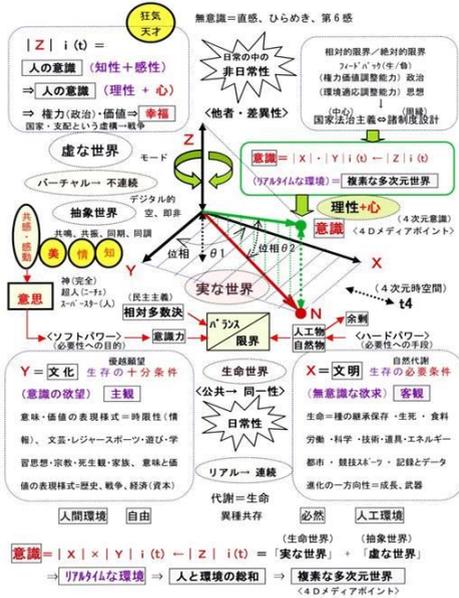
紀元前	（紀元前490年~紀元前400年）				紀元前	紀元前	紀元前
	アフリカ	ヨーロッパ	アジア	オセアニア			
490	アフリカ大陸						
480	アフリカ大陸						
470	アフリカ大陸						
460	アフリカ大陸						
450	アフリカ大陸						
440	アフリカ大陸						
430	アフリカ大陸						
420	アフリカ大陸						
410	アフリカ大陸						
400	アフリカ大陸						
390	アフリカ大陸						
380	アフリカ大陸						
370	アフリカ大陸						
360	アフリカ大陸						
350	アフリカ大陸						
340	アフリカ大陸						
330	アフリカ大陸						
320	アフリカ大陸						
310	アフリカ大陸						
300	アフリカ大陸						
290	アフリカ大陸						
280	アフリカ大陸						
270	アフリカ大陸						
260	アフリカ大陸						
250	アフリカ大陸						
240	アフリカ大陸						
230	アフリカ大陸						
220	アフリカ大陸						
210	アフリカ大陸						
200	アフリカ大陸						
190	アフリカ大陸						
180	アフリカ大陸						
170	アフリカ大陸						
160	アフリカ大陸						
150	アフリカ大陸						
140	アフリカ大陸						
130	アフリカ大陸						
120	アフリカ大陸						
110	アフリカ大陸						
100	アフリカ大陸						
90	アフリカ大陸						
80	アフリカ大陸						
70	アフリカ大陸						
60	アフリカ大陸						
50	アフリカ大陸						
40	アフリカ大陸						
30	アフリカ大陸						
20	アフリカ大陸						
10	アフリカ大陸						
0	アフリカ大陸						







【図-1】 人の意識・文明・文化＝環境の複素的な世界構造



信号脳  
↓  
複素的認識

||  
人工知能の認識

## 【文明と文化の解釈】

1. **文明とは** → **実な世界 (進み位相) = X**
  - ◆ 広域生活技術と規範
  - ◆ 普遍性 → 都市、産業、科学、法典
  - ◆ 可視的 → 物質性進化の一方方向性

( i = 虚数記号 )
2. **文化とは** → **実な世界 (遅れ位相) = (i) Y**
  - ◆ 特定価値の生活様態
  - ◆ 多様性 → 宗教、思想、様々な価値様態
  - ◆ 文明制御 → 文明より遅れて出現、価値のハイパス制御
3. **意識とは** → **虚な世界 = (i) Z**
  - ◆ 意識の結像 → ニューラルネットワーク上の信号形象 (虚像)
  - ◆ 脳機能 → 信号処理、保存・上書き、創発
  - ◆ **複素的認識統合** =  $\Sigma [ \text{文明} \times (i) \text{文化} + (i) \text{意識} ]$   
 $= \Sigma [ X \cdot (i) Y + (i) Z ]$

## 【複素(数)表現 = 和 = 総合 の例】

光	→ 粒子の性質	+	(i)	波動の性質
可視	→ 見える	+	(i)	見えない
信号	→ デジタル (離散)	+	(i)	アナログ (連続)
思考	→ 客観的思考	+	(i)	主観的思考
学問	→ 理系 (抽象→実証)	+	(i)	文系 (抽象→物語)
論理	→ 2進法 (欧米)	+	(i)	60進法 (アジア)
技術	→ ハードウェア	+	(i)	ソフトウェア
宗教	→ 一神教 (2元論)	+	(i)	多神教 (多元論)
社会	→ 文明 (広域普遍性)	+	(i)	文化 (特定域多様性)

## 考える上での基礎事項 - 1

### 量子物理学から

観測により、目に見え、数える、ことができる物質的存在は、  
宇宙総体のたった5%未満。(科学的証明の限界)  
95%以上はダークマター(暗黒物質でまだ分からない)

相対性理論から、観測者の視点の違いにより、空間的・時間的な結果は異なる。

客観的とは = いかなる観測者(見る)によっても、同じ結果を得ること  
(**真実の普遍性**)

主観的とは = 一人の観測者(見る)が得る結果で、必ずしも他の観測者が、  
同じ結果を得られるとは限らないこと (**真実の断片性**)ビッグデータ活用時代

認識とは = 人間の意識は、5感による入力信号により、脳内でイメージを形成し  
認識となる。その時間は最大で 0.5秒 遅れる。  
ベンジャミン・リベット 『マインド・タイム』(脳と意識の時間を発表)

**複素的世認識** = **実数 + 虚数** = **実物世界(客観的)** + **感性世界(主観的)**

# 考える上での基礎事項 -2

## 分子生物学から

生体を構成している分子は環境からやってきて、一時、「淀み」として私たちの体を作り出し、次の瞬間にはまた環境へと解き放たれる。環境は常に私たちの身体を通り抜けている「流れ」そのものであり、その「流れ」自体が「生きている」ということになる。

「生命」とは、「動的な平衡状態にあるシステム」である。

シェーン・ハイマーが提唱 → 「動的な平衡」: 福岡伸一

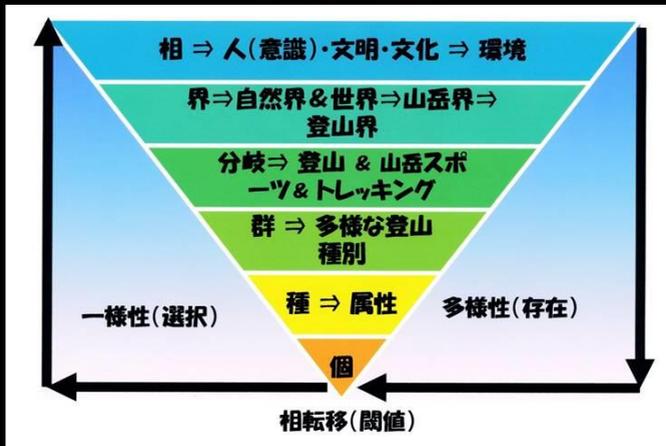
動的平衡理論から、分子によって作られる物質は、絶えず空間的・時間的な流れの中で、代謝を繰り返し変容している。だから人間は、次世代への引継ぎ（代謝）が大切！！

生命とは = 環境の中で、代謝を続けながら継続を保つ状態

生きるとは = 環境変化の流れの中で、淀みの個体として運動すること

## 複素的思考法からの相転移(例=登山)

形而上(抽象)



形而下(具象)

# 現生人類の段階的進化

## 1) ホモ・サピエンス = 賢い(考える)人間(考える人)

- ◆ 人間は考える葦である・・・フランスの思想家パスカルの言葉(パンセー)
- ◆ 幸福感、充足感、充実感 ~ 価値観

## 2) ホモ・ファール = 物を作る人間(文明人)

- ◆ 道具を作り、生活を豊かにさせる(衣・食・住 → 都市生活) = 日常
- ◆ 山岳施設整備 → 非日常的環境(自然)を日常性の中に組み込む

## 3) ホモ・ルーデンス = 遊戯(遊ぶ)人間(文化人)

- ◆ オランダの歴史家・・・ヨハン・ホイジンガ、1938年発表(1971和訳版)
- ◆ 登山、山岳スポーツ、ハイキング ~ 健康運動、運動競技、知的遊び

## 4) ホモ・エコノムクス = 経済合理主義的人間(経済人)

- ◆ 経済の本質 = 経世済民 → 資本独占(私利私欲) → トランプ現象  
 経世済民 = 中国のことわざ → 世を經(おさめ)、民を済(すく)

AI

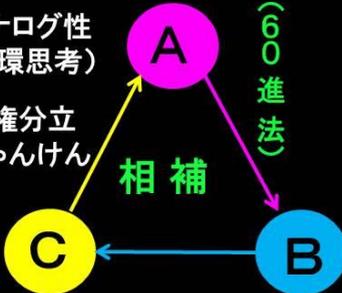
## 文化

(多様な享受・価値)

心の幸福 = 感受性・思索・欲求  
**調和** (幸福 → 希望)

アナログ性  
(循環思考)

三権分立  
じゃんけん



(自己消滅) 同化の美学 →

星の王子さま

## 死

## 文明

(進化の一方方向性)

優者の幸福 = 差別、優劣  
**絶対者** → (神)

デジタル性  
(散逸思考)

勝敗  
序列  
階層

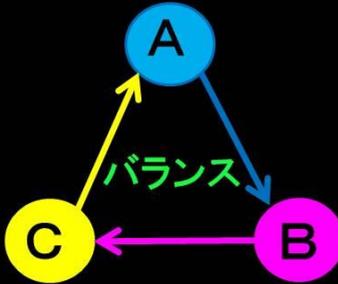


← 抵抗の美学(自己主張)

かもめのジョナサン

## パワーバランス

独立国の相互バランス  
戦力均衡を保持



多元均衡

## 戦争

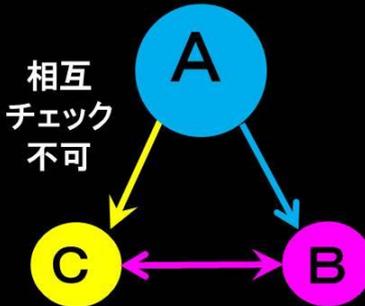
勝者は帝国を目指す  
敗者の歴史は改ざん



二元対立

## 三権分立の危機

権力のアンバランス  
村度の横行



権力の独走

## 権力独裁

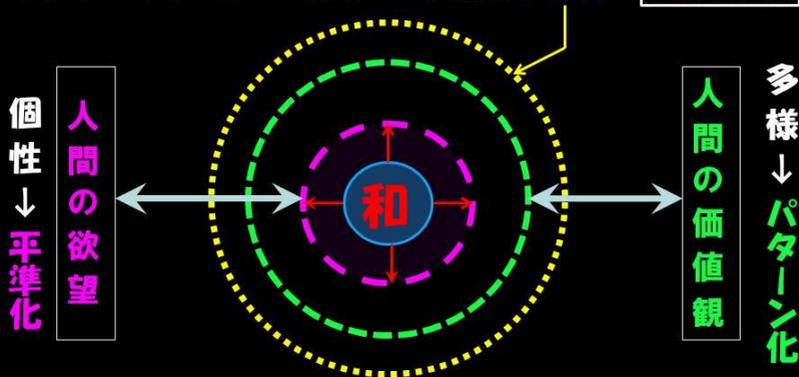
情報操作(ポピュリズム化)  
情報操作(帝国化)



少数切り捨て

# 和 (日本文明) の波動的拡大

インターネットとIT技術 → 人類を平準化 = **ロボット化**



感動～共鳴(イネ!)～共振～同期～調和

和の原理 = 同心円の波及(波動伝搬)

## 新・帝国主義時代をどう見るか ← 難しい

### 1. 帝国主義傾向化 (政治と宗教)

- ① アメリカ…トランプ大統領…アメリカン・ファースト…キリスト教
- ② ロシア…プーチン大統領…プーチン帝国…ロシア正教
- ③ 中国…習近平主席…習皇帝…一帯一路、軍拡…儒教
- ④ 北朝鮮…金正恩委員長…金王朝…独裁体制…儒教

### 2. 平和の条件

- ① 支配する平和 ……白人列強国(一神教普及)～IS国
- ② 支配される平和 ……人権を侵された望ましくない状況(奴隷)
- ③ 均衡による平和 ……核武装によるパワーバランス(軍事・経済)
- ④ 習合による平和 ……日本文明の特性(非軍事・経済)  
※ 人間性善説ならば可能! 性悪説に立つと無理!

## 世界のバランスを図る方法 ← 難しい

### 1. 力による均衡 (政治)

- ① 軍事力……核平衡……ミリタリーバランス
- ② 警察力……統合力……戦後のアメリカ軍事力

### 2. 思想による均衡 (理性)

- ① 総合……総合理論構築……例 = 複素世界観
- ② 統合……思想統合……例 = 儒教統合(習近平)

### 3. 宗教による均衡 (信仰)

- ① 統合……一神教化……例 = キリスト教の世界制覇
- ② 平衡……宗教を思想に昇華……無宗教化(共産主義)

### 4. 経済による均衡 (欲望)

- ① 統合……独占市場……寡占 ←
- ② 平衡……自由市場……グローバル化 →

## 日本の針路

### 1. 国際協調主義

- ① 自由、民主、法の支配……基本的人権尊重と奴隷不在
- ② 地球儀俯瞰外交……民族と文明移動の帰結 = 日本
- ③ 人類習合の英知……複素思考の普及(二元 + 多元 = 総合)

### 2. 積極的平和主義

- ① 国家の主張は、国際法にもとづいて成す
- ② 武力や威嚇は、自己主張のために用いない
- ③ 紛争の解決は、あくまでも平和的手段による

### 3. 日本の針路

- ① 先端科学技術大国……
- ② 先端医療技術大国……高度医療と高齢化社会体制確立
- ③ 文化・観光大国 ……四季折々の自然と和の精神
- ④ 平和主義を主張 ……日本国憲法の趣意を世界へ

**ご静聴  
ありがとうございました**

2018年10月20日

**田 中 文 夫**



おおすみ山居



中村先生講演Ⅱムスタンの旅





中村先生と奥様講演＝ムスタンの旅



田中講演＝日本文明物語の解説



中村先生乾杯の音頭と団樂会





**至福のモーニング・コーヒー**



医師のSさん



**丹沢の上高地風景**





団樂のーコマ



解散前の記念撮影



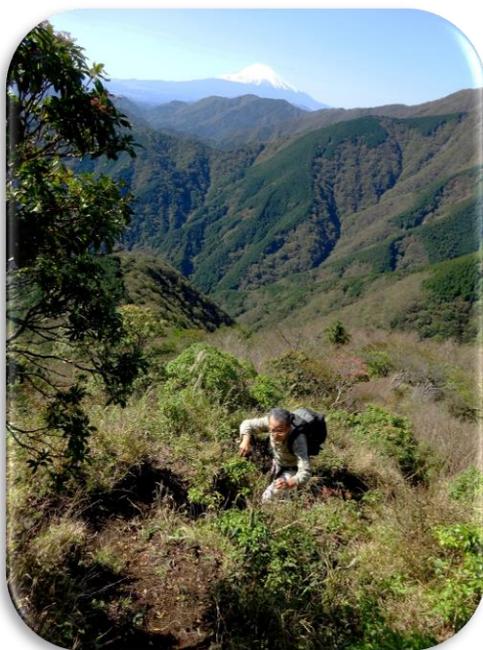
21日 10:52  
中村先生ご自宅無事到着

## 21日 = 快晴の烏尾山仲尾根を登る

(小林・田中)



エデンの園に立つ、後方は塔ノ岳



烏尾山山頂直下を登る  
富士山と一直線で気分爽快



エデンの園を過ぎ、背後に富士山



烏尾山山頂直下を登る

## 丹沢山麓の声

- ◎ 志帆さんはお話が上手で魅力的だなあと、前々から思っていました。今回のお話はインパクト大でした。細かい説明一つ一つに、志帆さんの並々ならぬ知識、力量、眼力などを感じて、素晴らしく圧倒され、引き込まれて時間を忘れてしまいました。

志帆さんが、山の険しさや厳しさ、その他も含め、変化に富んだ全てを丸ごと愛して取り組まれていることが豪快で、たまらなくいいなあ、と思います。

田中さま、こんな風に、講演者の方々のお人柄にふれたり、山小屋での時間までを皆様と共有できる、素適な交流の場をいつも取り持って下さり、本当にありがとうございます。翌日の予定があり、田中さまのスケールの大きなお話が聴けなかったのは残念でしたが、今回も充実した素晴らしいひとときでした。これからも作治小屋で、皆様と集い続けられることを楽しみにしております。

(F・Y)

- ◎ 作治小屋では、多くの方と歓談できて楽しかったです。

久しぶりの山歩きで、翌々日まで足が痛かったのですが、3日目の今日は、だいぶ落ち着きました。名前入りの集合写真までいただけるとは、思ってもいませんでした。(K・S)

- ◎ 皆様の興味深いお話をたくさん聞かせていただき、おかげさまで楽しいひと時を過ごすことができました。私は何もお手伝いできず、申しわけありませんでした。思いもよらず、田中様のご著書までいただき、大変感激しております。わたしの頭で理解できるかはなはだ疑問ではありますが、無にしないように拝読いたします。

仲尾根は、ぜひ一度登りたいと思っております。(今回初参加=E・K)

※ E・Kさんは、田中著『雑学 日本文明物語』を、国立国会図書館まで行き、検索して下さったとのこと。お礼として拙著を差し上げました。当初はジャンケンで勝った方に差し上げるつもりだったのですが！！(田中・追記)

- ◎ イベントの報告ありがとうございます。写真も多く、有意義に過ごされた様子がわかります。中村先生ご夫妻もお元気な様子で安心し、感激もしました。次回があっ

たら、ぜひ参加いたします。

私たちの地方講演会も80名を越す参加者で、盛会でした。

(日本山岳文化学会会長)

◎ 「山岳文化講座と仲尾根登山」の記録集をご恵送いただき、ありがたく拝読いたしました。中村純二先生、奥様の輝くような表情を、とてもうれしく拝見しました。講演会・講座ごとにキチンと報告書まとめられ、参加された方々に送っておられる姿勢の清さは、理科学系が根幹の田中先生ならではの、いつも感銘を受けております。私のように経済学系が、フィールドワークとしての山歩きを経て、地理屋になってしまった者にとりましては、隙間風の吹き荒れるまとめばかりで、恥ずかしいことばかりです。～～以降、省略～～ (山の自然科学フォーラム会員＝K・S)

◎ 報告書プリント、ありがとうございます。今、メール添付文章も読んでいます。山岳文化講座に参加できなくて残念でした。田中さんが山を愛し、作治小屋を愛している気持ちが伝わってきました。この頃は丹沢を歩く機会も少なくなってきましたが、田中さんの撮った写真を見せていただき、また歩きたくなくなってきました。

丹沢でお会いすることを楽しみにしています。(前回参加者＝T・H)

※T・Hさんご夫妻は、三ノ塔尾根下り口のお地藏さまの衣装を、季節ごとに交換されている方です。(田中・追記)

◎ 日本文明物語、壮大なロマンですね。なるほど・・・、と聞きほれました。狩猟派と農耕派、両方が文明の発展に必要なんですね。これからの数十年は、農耕派の良さを世界にアピールすることが、世界平和への道。2020年、東京オリンピックを良い機会として、私たち一人ひとりがその良さを自覚していくこと、なのです。それには田中理論が広く波及するよう、作治小屋の存続とともに、皆さんと協力していきたいと思います。これからも、よろしく願います。

(S・S)

◎ 食材の調達、食事の支度を要するイベントでは、参加者の年齢や嗜好などから大まかなメニューを決め、仕入れの段階でモノの良し悪し、予算を考慮しながら確定します。今回は、仕入れ材料1点1点の数量と予算が明示されており、その通りに買い物をし、献立通りに調理するという、非常に楽な賄いでした。

また作治小屋の調理場は、とても使いやすいと志帆が申しております。

中村先生のお話が聴けなくなるのは残念ですが、お歳からは無理もないことですね。今後どのような講演・講座の場になるのか、楽しみです。引き続き、微力ながらお手伝いさせていただきますので、どうぞよろしく願いいたします。

(岩楯岳一、志帆)

- ◎ 報告書データと、締めのご挨拶、ありがとうございました。中村先生ご夫妻も、いろいろ思い出を残すことができ、さぞお喜びと思います。

田中さんの益々のご活躍をお祈りしております。

(日本山岳文化学会監事)

- ◎ 作治小屋ではお世話になりました。楽しい集まりでした。

中村先生宅には、10:52 に着きました。

写真データは、分けて送ります。

よろしく願いいたします。(K・Y)

- ◎ この度はおおすみ山居での昼食と、作治小屋での夕食仕出弁当のご用命をいただきまして、誠にありがとうございました。

母(93歳)も以前に戸川公園で中村先生のご講演を拝聴し、元気なエネルギーを与えて下さったようで、大変に喜んでます。一度、作治小屋まで様子を見にいきました。大倉の景色と異なり、山に入った感覚と素晴らしい景色に感銘しました。しかし、荒れていた戸川林道に、母を車に乗せて行くのは大変で、講座イベントに参加できないことは残念でなりません。できましたら、おおすみ山居でのお話と、併せて日本庭園を眺めながら、食事と抹茶を賞味できたら素晴らしいと思わずにいられません。ぜひそのような機会をつくっていただけましたら、ありがたいものです。中村先生ご夫妻のご健康と、皆様のご活躍を祈念いたしております。(電話要旨=京の味 圓山 村上正利)

- ◎ 講座の報告と締めのご挨拶をありがとうございました。いつもながら田中さんの奮闘ぶりには、頭が下がります。またの時には、お声を掛けていただければありがたいです。

ありがとうございました。(前回参加者=T・K)

# SP-1. 作治小屋 太陽光発電 LED 照明記念

## 中村純二先生を囲む会

2017年7月22～23日 田中文夫

作治小屋愛好会の津々木さんは、メンバーの高齢化にともなって、発電機のエンジン始動が特定の人にしかできなくなったことを嘆き、つぶやいていました。私が職業としてきた建築電気設備設計では、太陽光発電が対象分野の一つでありました。現代の環境保全技術の一つとして、「太陽光発電と LED 照明」の組合せは必然事項であります。

日本山岳文化学会発足2年目、2004年11月の第2回大会において、当然ながら私は『太陽光・風力発電と LED 照明』を発表し、翌年発行の論集第2号（2005年11月発行）に論文掲載となっています。その論旨は次の二つに集約されます。

- ① 環境技術として最良であるが、太陽光発電電力を蓄える蓄電技術が未発達である。
- ② 太陽電池の発電効率がまだ途上で、水力、火力、原子力にとって代わる主力発電となり得ない。しかし山岳施設など特定場所では有効であること。

大会発表では、山小屋の一例とした太陽光発電と LED 照明設計例を示しましたが、圧倒的な高コストのため、実現は困難とします。

それから13年が過ぎ、青色発光ダイオードの裁判が終わって開発が進み、安価な中国製品が出回ります。改めて作治小屋の設計をしてみると、機器+配線材料≒15万円となります。組み立て・配線を自前とすれば、ボランティアで手が届きます。また電気工事会社を営む岩楯さんの応援を受け、週末工事1カ月で完工となりました。そのお祝いを兼ねた7月末、中村先生ご夫妻を囲んだ体験記念会で、宿泊しました。

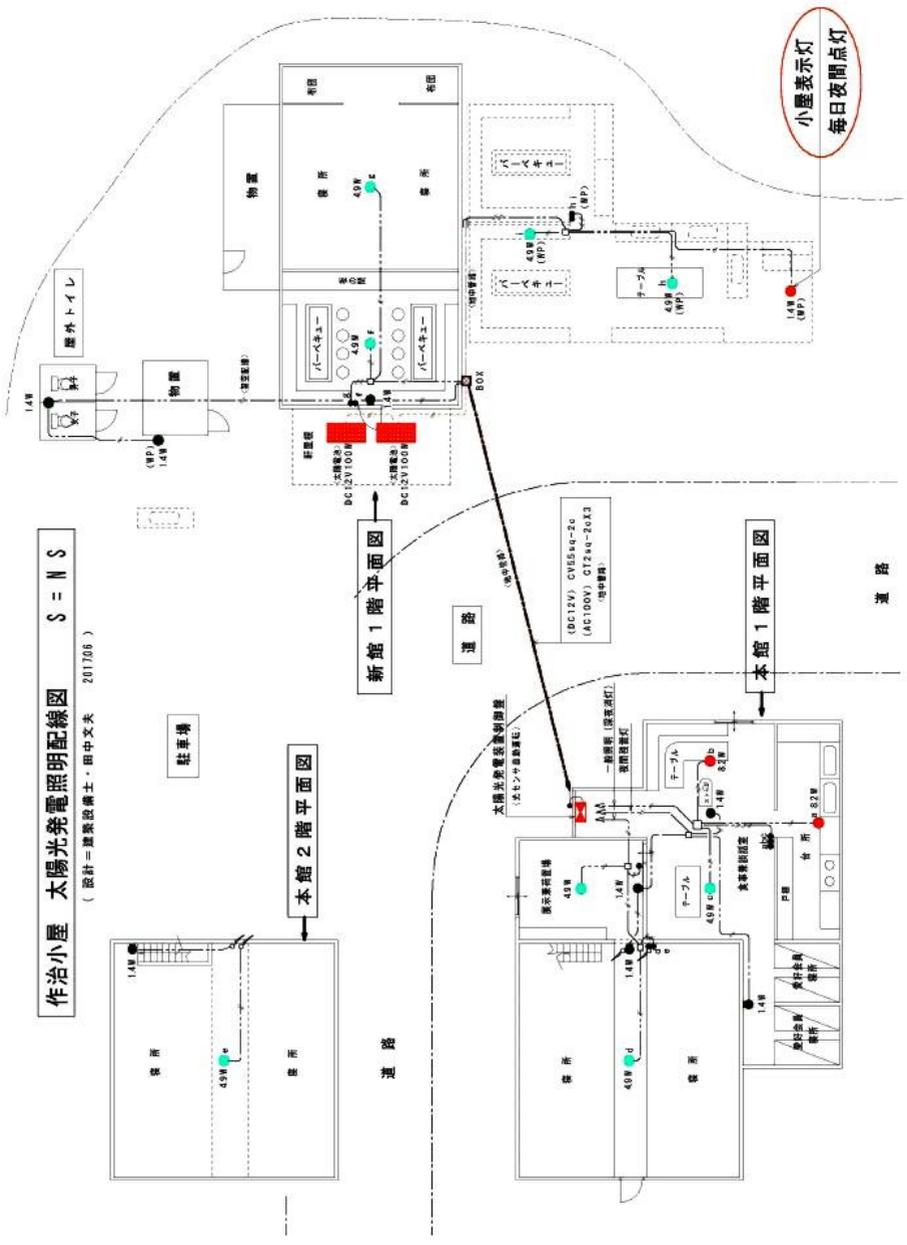


新館軒先屋根上の太陽電池  
出力=100w×2=200w



# 作治小屋 太陽光発電照明配線図 S = N S

( 設計 = 建築設備士・田中文夫 201700 )





23日朝の集合写真



(上) 照明制御装置

(下) 蓄電池 (容量=3日分)



私が組み立てた照明制御装置  
光センサで自動運転



本館：台所はいつでも明るい



本館：ストーブのくつろぎコーナー



屋外：バーベキューコーナー



本館：展示コーナー



本館：1階の宿泊コーナー



本館：くつろぎコーナー



屋外：バーベキューコーナー



1個9kgの大玉スイカ



大玉スイカはとても美味しい



戸沢を散策



## SP-2. 作治小屋 携帯電話用アンテナ設置

2018年11月10日 田中文夫

水無川の谷奥にある作治小屋では、携帯電話の電波が微弱で、新館の屋根上に上がれば、何とか通話できる状態にあります。

2014年11月、中村先生が突然意識を失われた時、下流の新茅山荘付近まで車で降り、119番通報をしました。

何とかしなくては・・・と思いつつ、無線通信は電波法で縛られ、無線機器も汎用的ではありません。良案が思いつかぬまま、時間が過ぎます。フツと思いつき、インターネット検索で微弱電波無線ブースタを探してみると・・・、あった！！

中国製ですが、日本国内携帯電話会社、ドコモ、au、ソフトバンクに対応すると書いてあります。さっそく取り寄せましたが、仕様が不明瞭で、実際にやってみなければ分からない状態でした。

アンテナ設置の専門家、岩楯さんに協力願い、新館屋根上に設置。ブースタ電源を太陽光発電照明からとるため、24時間送受信はできません。昼間は光センサで照明電源は切られているから、必要時にスイッチを入ると、強制的に使用できます。緊急時対応として、必要最小限な装置です。



新館入口にブースタとアンテナを設置



アンテナ取付け中の岩楯さん

## エピローグ

田 中 文 夫

2018年10月20～21日、作治小屋にて「山岳文化講座」をおこないました。急な企画にもかかわらず、19名が参加して下さいました。作治小屋宿泊イベントのため、95歳になられた中村先生と、90歳になられた奥様の体調維持が大変気掛かりだったのですが、大過なく乗り越えることができました。夜は10時過ぎまで皆様と懇談いただき、翌日の解散間際に奥さまは、「まだ帰りたくない！」ともおっしゃって下さいました。

ご高名な大先生であっても例外になく、確実に心身の衰えは忍び寄り、傍目からも分かるようになってきました。しかし中村先生ご夫妻の偉大な点は、自らの衰えを隠すことなく皆様の前に晒し、“今できることの最善”を望まれる前向きな姿をお示し下さることにあります。後塵を拝する私たちにとりまして、これほど心強い先達を感じる機会はめったにありません。

といいましてもこの度、「ムスタンの旅」のお話の多くを奥様にゆだねられた現実からは、中村先生ご夫妻を囲んでおこなってきた、「丹沢山麓文化講座」の限界を実感するものとなりました。これからは講演や講座ではない、別な形を模索できたらと思います。作治小屋から望む塔ノ岳は、「丹沢の上高地」。時節の良いときに、パッと集まり、ふたたび中村先生ご夫妻を囲んだ懇談の機会がもてたら、これまた素晴らしいことのように思われてなりません！！

竹が節を結ぶよう、今回をもって節目とし、また新たな成長に向かっていきたいとの思いから、本書をまとめてみました。電子情報化時代の中、「紙ベース」を意識した「記録」を残すことには、過去～現在～未来という歴史の継続性、つまり「アナログ思考」の併用を意図しています。講演・講座は、コンピュータを用いたパワーポイント画面で視聴してきました。コンピュータ・プロトコルの二進法による「デジタル思考」は、解析・思考・判断・説明・説得、等に優れた能力を発揮しますが、全体を統合した「総合性」に欠ける特性があります。「総合性」とは、あらゆる事象に結節点をもつ「連続思考＝アナログ思考」にほかなりません。この両者を組み合わせることにより、総合における部分的明瞭さが理解できるものであると、本書を編纂した次第です。山岳文化講座における記念記録として、皆様の記憶に残されたなら、発表者の幸せとなります。



中村あや、純二  
(2018.10.20 おおすみ山居)



岩楯志帆、岳一  
(2018.10.21 作治小屋)



← 田中文夫  
(2018.10.21 作治小屋)

## 丹沢山麓 山岳文化集

### < 中村純二先生講演記念特集 >

- ◇ 共同著者 : 中村純二、あや  
田中文夫  
岩楯岳一、志帆
- ◇ 編集者 : 田中文夫
- ◇ 発行者 : 日本山岳文化学会有志  
(代表幹事=田中文夫)
- ◇ 発行場所 : 横浜市旭区東希望が丘 23-1 (田中・方)  
TEL = 045-361-4627
- ◇ 発行日 : 2018年12月3日
- ◇ 頒布 : 非売品
- ◇ 印刷・製本 : 冊子印刷社 (千葉市稲毛区六方町 114-3)
- ◇ 第1刷発行 : 2021年4月26日 (実費頒布)



## 〈 中村純二先生講演記念特集 〉

国立国会図書館・蔵書 < 2018年12月5日 >

書誌 I D (3分冊) : 029361640、029361651、029361661

請求記号 : FS41-M2、FS41-M3、FS41-M4